ピーター・イベットスン

ジョージ・デュ・モリエイ

2020.8.1 初版公開

2022.3.7 最終改訂

目　次

ピーター・イベットスン　ジョージ・デュ・モリエイ……3

解説に代えて（ダフニ・デュ・モリエイによる序文）……568

ピーター・イベットスン

彼のいとこレディ・＊＊＊＊＊による序文付き

（マッジ・プランケット）

本文中の＊は、作中人物（マッジ）または翻訳者による注があることを示す。前者は本文中に文字下げで、後者は見開きの左ページ端に置いた。

O toi qui m'apparus dans ce désert du monde
Habitante du ciel, passagère en ces lieux!

*おお、この世の砂漠の中で、私の前に現れた君よ、
この場所を通り過ぎていく、天上の住人よ！

ラマルティーヌ

第一部

序文

ほかに類のないこの自叙伝の筆者は、私のいとこです。彼は死にました。彼が三年間収容されていた――犯罪者用精神病院で。

彼は、（幸運にも深刻な結果に至らなかった）殺人狂の突然の激しい発作の後、そこに移転しました。彼の親類である――――殺人の廉（かど）で終身刑を宣告され、二十五年を過ごしていた――刑務所から、です。

当初、彼は死刑を宣告されていたのです。

彼がこの回想を書いたのは、――精神病院でした。私はその原稿を、彼の死後すぐに受け取りました。私たちの昔の友情に訴えるような、この上なく感動的な手紙と共に。そこには彼の文学的な遺言の執行者として、私を指名してありました。

＊おお、この世の砂漠の……ラマルティーヌの詩『祈り』冒頭。

自分の生涯の物語を書き上げたらすぐに公表されることが、彼の望みでした。

私は、そうするのは不得策であることに気づきました。それは、長いこと埋もれ、忘れられた古いスキャンダルを無益に甦らせ、それによってまだ生きている人々に苦痛や苛立ちを与えかねないからです。

彼の記憶は、彼を知っている人々、あるいは多少は知っているという人々――本当に気にかけていた人たちだけですが――の、いずれの中でも名誉回復を必要としないのです。彼の忌むべき行為は、彼が受けた挑発と、彼を挑発した人間の性格を知っている人全員（そういう人は大勢います）に、長い間大目に見られてきました。

熟慮の結果、そして助言を得て、私は（彼の死に際の望みが完全に挫かれないためにも）、若干の改変と修正を施して、この自叙伝を発表することに決めました。

人や場所の名前は、ほぼすべての箇所で変えてあります。まだ存命中の人々の身元確認と迷惑にあまりにも容易に繋がってしまうことがないように、特定の詳細を伏せ、彼の人生経路のいくつかを省きましたが（例えば、学生時代の逸話や、近衛騎兵連隊の兵卒としての短い経歴などのほとんど）、それは、彼が時にかなり個人攻撃的になり、またおそらく彼が必ずしも公明正大であるとは限らないからです。そして、その他いくつかの出来事（特にオ*ールド・ベイリーでの裁判）では慎重に言い換えをしました

が、真実性をあまり大きく損うことがないように、できる限り注意深く相当語句を選んでおきました。

こうした改変があることを考慮に入れれば、彼自身が書いた彼の**自然な方の**生活すべての出来事が、私が確認できたとおりに、いちばん小さな細部に至るまで完全に真実であると、今すぐに明言しても差し支えありません。

その初期の部分――彼があれほどの愛情を込めて書いたパッシーでの生活――については、私は個人的に保証することができます。彼が一、二度触れているいとこの「マッジ」とは、私のことなのです。

私は、彼が両親（私の親愛なるおじとおば）と一緒に住んでいた穏やかな住居をよく覚えています。それに、すてきな「セラスキア夫人」とご主人と娘さん、その家「パルワ・セド・アプタ」、それに「デュケノワ少佐」などなど。

彼は十二歳のときに両親を亡くしてロンドンへ行き、それ以来私は（人生の大半を外国で過ごしたこともあって）彼と会っていなかったのですが、手紙は時々受け取っていました。

彼についての情報は、ほかの人たち、とりわけ彼をよく知っていた故「リントット

＊オールド・ベイリー……中央刑事裁判所。

夫妻」の親戚の一人や、彼を覚えていた連隊の将校たちからも、たくさん得ることができました。彼が「レディ・クレイ」の家で会った「教区牧師の娘」からも得られました。彼女は、ディナーのときに彼と交わした会話や、彼が急に気分が悪くなったことや、翌朝トネリコの木の下で「タワーズ公爵夫人」と彼との長い会談があったことなどを、完璧に思い出してくれました。彼女はクロッケーをプレイしていたうちの一人だったのです。

彼は、私が見てきた中で最も美しい少年で、とても魅力的で明るくて気立ての優しい子でしたから、誰もが彼を好きになりました。彼は残酷なこと、特に（その年齢の少年としてはかなり珍しく）動物に対する虐待が大嫌いで、たいへん誠実で勇敢でした。

誰に聞いても（私が所蔵する写真で見ても）、彼はこの上なくハンサムに成長したのですけれど、自分の容姿が恵まれたことについては少しも評価していないようでした。他人のそれについてはかなりよく気にかけていたというのに。しかし、彼はまた、並外れて内気で態度が控えめで、過度に遠慮がちで自己不信にもなりました。憂鬱な気質で、孤独を愛し、ずっと一人で暮らし、誰にも心を開きませんでした。それなのに、愛情と敬意の両方の念を喚起するのです。それは彼が、言葉、挙動、作法、表情において、常に徹底的に紳士的であるように見えたためです。

彼はそうは言いませんでしたが、まず入隊し、次にやや不運な状況下で職に就いたために、生まれながらに属していた社会階級（というほどのものではありませんが）から自分が脱落したと感じた可能性はあります。また、同僚たちとは気が合わないことに気づいたのかもしれません。

彼の私への古い手紙は、素晴らしく率直で感情剝き出しです。

私が「タワーズ公爵夫人」と呼んだ女性（爵位はそのままで、名前は変えてあります）については、お話しするのが難しいと感じています。二人が二回だけ、彼が書いているような状況で会ったことは、疑う余地のない事実です。

死刑判決を受けた翌朝、菫と、彼が言うところの奇妙なメッセージとが入った封筒を、彼が*ニューゲートで受け取ったこともまた確かなことです。手紙も菫も私が持っており、書かれたものは彼女の手書きです。それについては間違いありません。

さらには、いとこの裁判と有罪判決のほぼ直後に彼女が自分の夫から離れ、かなり世間と距離を置いた生活をしたことも確実ですし、二十五年後、彼が突然発狂したことも確かです――刑務所で、彼女の悲劇的な死の数時間後、ことによると通常の伝達経路でそれを聞くことができたのよりも前に。彼が移動させられたのも本当です――

*ニューゲート……ロンドンにあった有名な牢獄。一九〇二年に取り壊された。

精神病院に。そこでの彼は、狂乱が鎮まってから何日も自殺傾向のある鬱状態が続きましたが、それも、ある朝元気いっぱいに起きたかと思うと、深刻なあらゆる精神病的症状が治ってしまったように見え、周囲の誰もが驚いた、そのときまでのことでした。彼は死ぬまでその状態のままでした。彼がフランス語と英語で自伝を書いたのは、その人生最後の年の間でした。

あらゆる状況を考慮すれば、素晴らしい女性、女王や女帝の友人で、高い称号と高名の持ち主で、美と魅力（と無限の慈善心）で当然のように世に知られ、非の打ち所のない評判を持ち、英国社会で最も人気のある女性の一人が、私の哀れないとこに対し、この上ない温情をなおも抱いていたとしても、何も驚くことはありません。実際、彼女がそうしていたことは、「クレイ卿」の家では公然の秘密でした。彼らがいなければ、彼女は全世界に対して胸襟（きょうきん）を開いてしまっていたことでしょう。

死後、彼女は父親から自分に入っていた全財産を彼に残しました。彼はそれを慈善目的のために使うよう処理しました。彼女は、膨大な量の暗号手稿も残していました——彼が、長期間の監禁の間に描くことを許された無数のスケッチの、その下の方に書かれた注解で使っていたのと、どうやら同一の暗号です。その監禁は、（彼女の彼への関心のため、そしておそらく彼自身の善行のために）彼ができるだけ耐えやす

いような状態にされたのです。（かなり異様な）そのスケッチと、公爵夫人の手稿は、今は私の所有となっています。

それらは、私が詮索する勇気を持てなかった謎となっています。

両者の所持した書類から、私は、二人の血筋が間違いなく共通のフランス人女性の祖先から来ているという事実を確証することができました（かなり奇妙なやり方で発見されたことです）。私はその人の名前をほんのわずかに変えましたが、彼女の伝承は「サルト県」にまだ残っています。一世紀前、彼女はそこで有名人でした。彼女のヴァイオリンは高価なラマティですが、今は私の所有となっています。

彼の物語の自然ではない部分については、私は多くは語らないつもりです。

もちろん、彼が自伝を書く前、完全に、どう見ても救いがたい狂気に囚われていたことは事実です。

長くは続かなかったけれどもかなり激しい短い発作が終わった後、彼が狂っていたのかどうかに関して、精神病院当局者の間では意見の相違と言いますか、むしろ疑惑があったようです。

どちらの場合であっても、私には少なくとも確信があります。彼は空想家ではなく、自分が打ち明けた異様な精神的経験をすっかり信じていた、という確信です。

彼の狂気を私も共有していると思われることの危険を覚悟の上で――もし彼が狂っていたのなら、ですが――、私は、彼が正気であったこと、そして徹頭徹尾真実を語っていたことを、個人的には信じている、と申し上げることで、この序文を結びたいと思います。

マッジ・プランケット。

私はものを書く才に乏しく、たぶん教養ある読者（いつかそういう人がたまたま読んでくれたとして）ならたちまち気づくように、言葉や言い回しを巧みに用いる技能にはほとんど通じていない。

私を気にかけてくれたすべての人にとって、私は長いこと憐れみと軽蔑の対象だった――たった**一人**を除いては！　それでも、最後まで我慢して読んでくれれば読者も知ることになるように、この地上に生きたあらゆる存在の中で、私はおそらく最も幸福で最も恵まれていただろう。

私の外面的生活と内面的生活は、まさに北極と南極――それくらいかけ離れていた。もし私が人生のぎりぎりの時期に自分の物語を世界に伝えると決めたにしても、それは、私の仲間の目の前で自分の名誉を回復したい、という理由からではない。彼らも、彼らの良い意見も、私は深く尊重している。私はいつも彼らを愛し、幸福を願ってきたし、できることならば、自分の好意を喜んで表し、彼らのそれを得たいとも思う。

これを書くのは、私が最上の幸福を見いだした領域が誰でも到達可能で、私が手が

かりを与えさえすれば、多くの、さらに訓練を積んだ人やより才能に恵まれた人が、私よりもずっと良い目的のため、また人類のさらなる栄光と利益のために、そこを探検するようになるだろうからだ。それをする前提として、私がその手がかりをいかにして手に入れたかを示すために、浮沈に富んだ自分の経歴の話をしなければならない、というかさせてほしい。さらに、その話の中で、私は、最も些細（ささい）な望みが私の法であった人の最後の要請に従う。

もし私が必要以上に冗長に書いているならば、それは私の文学的作文術の経験不足――自分が思っているよりも良くも悪くもない自分を見せなければならないという自然な望みに対しての――に帰せられるはずである。それに、魅力、言葉ではとても言い表せない魅力のせいでもある。私が授かっていない才能や長所を使わないことには、どんなにそうしたいと痛切に感じても他人に知らせることが望めない、いちばんの関係者に対する個人的な追憶の魅力のせいなのだ。

そして、このことは、この回想録の自己中心性に対する謝罪へと繋がる。これは、私が後に発表したいと望んでいる別の、もっと長いそれの紹介でしかない。人類にとって最も重要な物語（これは事実だ）で、それでいて人の表面的な自己と内面的な自己について何もかも書くためには、しかも少しも利己的に見えることなくそれを行うた

めには、天賦の才と言えそうなものが必要となる――そして、私は微力な物書きにすぎないのである。

・　・　・　・　・　・

"Combien j'ai douce souvenance
Du joli lieu de ma naissance!"

「*どんなに甘美に記憶に留めていることだろう
自分が生まれた場所の美しさを！」

この古風な趣のある詩は、私の外面的生活のほぼすべてにわたって、折あるごとに私の頭の中をよぎってきた。果てしないバラードの中で何度も繰り返される折り返しのように――ああ！　悲しげで単調なバラード、そのバラードは私のものだ。折り返し句が甘美な単調さで繰り返される方はシャトーブリアンのものである。

＊どんなに甘美に……シャトーブリアン『フランス各地の思い出』より。三二ページも同じ。

私は時々、このリフレインの意味を十分に感じ取れる人は、それが書かれた場所、陽光に溢れたフランスで子供時代を、残りの生活をただのロンドン――あるいはただのロンドンよりさらに悪い場所――で過ごしたに違いないと思うことがある。私がそうであったように。もし私が幼時から後年に及ぶ全生涯をブルームズベリー、クラーケンウェル、ホワイトチャペルなどで過ごしていたら、私の幼少期は、後年それを振り返ったときに追憶する魅惑のほとんどが奪われてしまったことだろう。

"Combien j'ai douce souvenance!"

「どんなに甘美に記憶に留めていることだろう！」

六月の美しい朝、暖かく甘美な空気がライラックとバイカウツギの香りで満ち、蝶やトンボやマルハナバチで鮮やかに彩られた魅力的なフランスの庭園、自分の外面的生活すべての中でも最も幸福なその日から、私は自分の存在を意識し始めた。

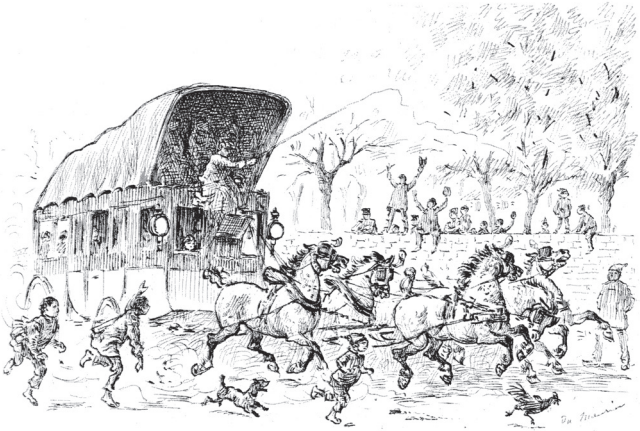
私には、ロンドンの中心部にある薄汚れた家についての曖昧な記憶（間に多くの空白を伴う）があることも事実である。陰気な広場と自宅に通じるもの寂しいまっすぐ

な長い通りがあり、それは私にとってはほかのどこにも通じていなかった。それから、昼と夜がごちゃ混ぜになったような気がした、騒がしくてわくわくするような旅の記憶。とてもおとなしく控え目で行儀のよい、四頭のひょろりと痩せた茶色の馬たちが引く、青い駅馬車を思い出すことができる。赤いコートを着た車掌と彼の角笛。赤い顔の御者と彼のかすれ声、それに何枚もの肩マント。次に、きらきらとデッキが輝く汽船。美しく白いので、その上を歩くのは完全に冒瀆のように思われた——その純白清浄さはあまり長くは続かなかったが。それから、それぞれに灯台がある二つの木の桟橋、岸壁、青い仕事着を着た労働者たち、赤いズボンの口ひげを生やした小さな兵士たちや、素足の女性漁師たち。皆、私が離れてきたもっと一般的な別の言語と同じくらいよく知っている言語を話していた。しかし、私はその言語を、甘い秘密の交換のためと、部外者を困惑させるために使う、父と母と私の占有的な所有物であると常に見なしていた。ところが、ここでは通りにいる小さな少年少女たちのようなまったく普通の子供たちが、私と同じように、私よりも上手に、それを話していたのである。

この後、奇妙で、巨大で、上部が大きい馬車の夢が来る。それは三台の黄色い馬車がくっついたように見え、てっぺんの荷物の山がすごく大きな黒いタール塗りの防水シートで覆われて、そのシートは端が幌になっていた。その幌の下には、コンサー

ティーナのような変わった帽子をかぶり、口ひげを生やし、青い仕事着を着た一人の男が座っていた。彼は、悲鳴を上げている気難しくて喧嘩っ早い白とグレーの五頭の馬の上に大きな鞭を振り下ろし、鋭い音を立てていた。馬の首には鈴が、額にはふさふさした狐の尾が付けられており、彼ら自身の尾は慎重に後ろに折り上げられていた。

彼らが両側に果てしない林檎やポプラの木々が並ぶほこりっぽい道を通って我々を導く間、父母と一緒に座っていた後部特別室から、私は彼らをよく見ることができた。裸足の小さなわんぱく少年たち（彼らのパパたちとママたちは木靴とおかしな白のナイトキャップをかぶっ



「奇妙で、巨大で、上部が大きい馬車」

ていた）が、フランスの半ペニーのために私たちを追って走ってきた！　それはイギリスの硬貨よりも大きく、持ち歩きが楽だった。我々は丘を上って下った。音を立てる木の橋を渡り、きれいな町の大ざっぱに舗装された通りを通って大きな中庭へ。そこでは五頭の別の喧嘩好きなグレーと白の馬が、それまでの馬たちと交代するために待機していた――古い方の馬たちときたら、疲れ果てているというのに、まだ喧嘩をしている！

そして私は一晩中、眠りを求めて親しんだ膝から膝へと落ち着かず移動しながら、鈴と蹄（ひづめ）の音と、車輪が転がる音と、絶え間ない鞭打ち音とが織りなす元気な音楽を聞くことができた。うたた寝から目を覚ますと、全力疾走している五頭の馬の白とグレーの背中の上に、赤いランプのまぶしい光を見ることができた。その光は、夏の闇夜の間じゅう、とても勇敢に我々を引っ張ってくれた。

その後、我々が翌日の夕暮れに広い川の岸壁にたどり着くまでには、すべてがかなり見飽きたものになり、また時々光が途切れるようになって、見分けにくくなっていた。岸壁に沿ってよく茂った木々の下を進みながら、我々はまた別の、赤と青と緑のランプを付けた五頭立ての乗合馬車に出くわした。我々の旅の終わりが来ると同時に、その馬車は長い旅が始まるのだ。

そのとき私は、自分たちがフランスの首都に入ったことを知った（なぜなら、私は教育水準の高い少年で、父が「ついにパリだ！」と叫んだのを聞いたからである）——私に非常に強い印象を与えた事実である——あまりにも印象深かったためだろう、私は三十六時間ぶっ続けで眠り続け、目を覚ますと、自分が先に書いた庭にいることに気づき、現在まで（再び眠りに落ちたときを除いて）休止も断絶もなく連続してその自己を保ち続けている。

・　・　・　・　・

私の全外面的生活の中で、いちばん幸せな日が来た！

というのは、庭の端、空っぽの家禽（かきん）小屋と使われていない家畜小屋（それぞれがそれ自体楽園だった）の間にある、道具や木材でいっぱいの古い小屋で、小さなおもちゃの手押し車を見つけたからである——それまでの自分の短い全生涯の間に遭遇した中では、本当に、最も異様で、まったく前代未聞で、予測不能で、ユーモラスで、優美で、絶妙に魅力的な物体だったのだ。

私は、家畜小屋から家禽小屋へとレンガの破片を運ぶのに何時間もかけ——魅惑的

な時間――、それ全部をもう一度戻すのにさらに魅惑的な時間をかけた。その間、我々が住むことになる家の内外で忙しくしている愛想のよいフランス人労働者たちが、時々「p'tit Anglais［小さなイギリス人］」に気さくな質問をするために手を止め、自分たちの言葉についての知識や手押し車の取り扱いについてのすぐれた手腕を褒めてくれた。私は、新たに芽生えた自意識とともに、自分の喜びの激しさ、鋭さ、極端

LE P'TIT ANGRAIS［小さなイギリス人］

さを不思議に思ったこと、また将来もそのような時間が果てしなく続くことを幸福な確信とともに期待していたことを、よく覚えている。

しかし、翌朝、天気は晴れで、手押し車とレンガの破片と愛想のよい労働者たちはちゃんと存在し、香りも風景も音もすべて同じだったというのに、最初の素晴らしい能天気な有頂天さが再び得られることはなく、輝かしさと新鮮さは失われてしまっていた。

こうして私は、まさに人生の夜明けに、たった一度押し寄せたこの世の喜びの潮流の最高水準点に達してしまい——象牙*の門のこちら側では二度とそこに達することはなかった——、人間の幸福の極致を持続させるためには、甘やかなフランスの庭園や、小さなフランスの手押し車や、フランス語を上手に話し、称賛されることを愛していた魅力的で小さなイギリス少年以上の何かがなければならないと悟ったのである——第四の次元が必要なのだ。

私はそれをやがて発見する。

しかし、最初のような魅惑的な時間はもうなくなったにしても、私がそれを振り返るときにうっとりするような特質を持つ幸福な七年間が、その後に続くことになった。

おお、美しい庭！　薔薇、キンレンカにサンシキヒルガオ、アラセイトウ、スイートピーにカーネーション、キンセンカに向日葵、ダリアにパンジーにタチアオイにポピー、ほかに何があるのかは神のみぞ知る！　私の甘美な思い出の中では、それらはすべて時間や季節に関係なく一斉に咲くのである。

五歳という多感な年齢で、このすべてを初めて見て、嗅いで、摘んだこと！　ガワー・ストリートとベッドフォード・スクエアでの五年間の後に、このような王国を継承したこと！　私がこれらに魅了されたのは、すべてのものは相対的で、あらゆることは視点によって変わるからである。*チャッツワースの所有者（とその庭師たち）にとっては、私の美しいフランス庭園も小さなものに見えたことだろう。

そして、昆虫の世界――チャッツワースも**それら**にはかなわなかった（実際のところは、残念ながらたぶん虫はいないのだろう）――は、何と美しく、面白く、滑稽で、グロテスクで、恐ろしいことだろう。誇らしげなマルハナバチから、ハサミムシとそ

＊象牙の門……ギリシャ神話で、夢の国に通じる門のこと。この門からは逆夢が出るという。

＊チャッツワース……イングランドの大邸宅。デヴォンシャー公爵の屋敷。

のいとこのアクマサビイロハネカクシに至るまで。それに大きく平らな石の下の湿った暗闇に繁殖する、うじゃうじゃとたくさんの脚があるすべての連中も。それらすべてと友達になったことを思うと――薔薇もムカデもすべて――、そしてその後の私の外面的生活のほとんどが、蚤や蜘蛛とさえ二度と友達になることなく、剝き出しの白塗りの壁の間で費やされたことを思うと、何と幸福だったことか！

私たちの家（ちなみに私が五年前に生まれた場所である）は、緑の鎧戸とスレートのマンサード屋根のある古い黄色の家で、この庭と通り――長く曲がりくねった通りで、無造作に板石が敷かれ、互いに長い間隔で吊られた石油ランプがあった――の間に建っていた。このランプは、月光が弱い夜、夕暮れ時に滑車で下ろされ、油が補充されて点灯され、その後の数時間、暗闇でもものが見えるようにするために再び引き上げられた。

家の向かいには男子校があった――「Maison d'Éducation, Dirigée par M. Jules Saindou, Bachelier et Maître ès Lettres et ès Sciences,［寄宿制教育施設、文学と科学のバカロレア取得者であり教師であるジュール・サンドー氏の経営による］」。サンドー氏はある地質学論文の著者であり、そこには原始時代の軟泥における太古の爬虫類の闘争を描いた、脳裏に焼き付いて離れないような恐ろしい絵があったため、私はそれを忘れること

ができないでいる。科学好きの父が、私の六歳の誕生日にそれをプレゼントしたのだ。それで私はたくさんの悪夢を見る羽目になった。

家の窓からは、遊んでいる少年たちの姿を見たり声を聞いたりすることができ――ほどよい距離では、フランス少年たちの声はイギリス少年たちとまったく同じように響くが、青いブラウスと黒っぽい刈り込み頭のため、見た目はそうは見えない――、また運動場にはサンドー氏の誇る体育用器具を見ることができた。「Le portique! la poutre!! le cheval!!! et les barres parallèles!!!［吊り輪用横木！　平均台!!　鞍馬!!!　それに平行棒!!!］」。サンドー氏の学校案内にはこのように書かれていたのだ。

通り（「ポンプ通り」と呼ばれていた）の両側には、西には目が届く限り、適度な違いはあれど私たちの家と変わらない住宅があった。マロニエや篠懸の木やアカシアやライムの葉がその上に茂るのが見える庭壁。あちこちの、石の柱で守られた巨大なポータルと鉄の門は、多くが鎧戸を備え、陽の当たる緑樹に囲まれて、神秘的なレンガと漆喰と花崗岩の住居に入る手段を与えていた。

東を見ると、近い距離には、たくさんのガラスが付いた古風な窓のある素朴な店が見えた――リヤールという食料雑貨店、コーバンという家禽商、その他いろいろな店々。そして、この楽しい通りは、ベッドフォード・スクエアや新しいユニバーシティ

カレッジ病院ではなく、一方は凱旋門を通ってパリへと至り、もう一方はセーヌ川へと至る。あるいは、右に曲がればフランス王ルイ＝フィリップ一世のブローニュの森を通ってサン＝クルーへ――駅馬車と急行列車が違うのと同じくらい、今日のパリやブローニュの森とは違ってしまっているが。

美しい庭の片側にはもう一つ美しい庭があって、桃、西洋梨、プラム、杏の木々で覆われた高い壁によって私たちの庭と分離されていた。別の側にはジャスミン、クレマチス、サンシキヒルガオ、キンレンカをまとったもう一つの低い壁があり、私たちはその小さなドアを通ることで、アーモンドの木、アカシア、キングサリ、ライラック、サンザシなどのある長くてまっすぐな大通りに出ることができたが、それらの木々があまりにもみっしりと植えられていたせいで、蔦の絡んだ両側の壁はほとんど見えなかった。日が照るときにそれらが地面に作る斑点の美しいことと言ったら！　その通りの一端は「ポンプ通り」に接しており、そこからストーン・ポータルの間の精巧な彫刻が施された高い鉄の門で仕切られ、側面にはフランソワおじさんとおばさん、すなわち老管理人とその老いた妻に守衛された「porte bâtarde［中型の門］」があった。彼らの霊よ安らかに、天国があの優しく穏やかな魂に安息を与えられんことを！

大通りの反対側の端は、そちらにも鉄の門があり、所有者が誰もいないと思われる

大きな私有公園に通じていて、そこは自由に出入りできた――まさに歓喜の荒れ地で、天国だった。絡み合った恐怖の茂み、あまり危険ではない白亜の崖、使用されていない古い採石場と暗い洞窟、緑豊かな草地、菅の茂った池、蕪畑、松林、マロニエの木立と並木道、夏の正午には暗くなる胡桃の木とサンザシの湿っぽい狭間。そこから遠くを偵察できる、草木の生えていない吹きさらしの山岳地帯。獰猛な野獣や野生動物が隠れたり、小さな少年が危険の多い探検を求めて完全に安全に歩き回ったりするための、あらゆる種類の荒れた恐ろしい場所。

この広大な囲い地（耳慣れない歌のような音、ブーンという音、ヒューヒュー鳴る音、ブンブンいう音、チ、チという音、低いうなりの音、ゲロゲロいう音、見慣れない飛ぶもの、這うもの、跳ねるもの、よじ登るもの、穴を掘るもの、水をはね散らすもの、水に飛び込むもの、等々でいっぱいの）はすべて、何年も放置されていた――恐れることなく知恵の木の果実を集めて食べ、純真さを失うことなく生き方を優しく学べそうな楽園。自力で新しい処女性を作り直して、再び原始的になった森。美しい自然が自分自身の甘美な意志を再び主張し、まるで美が百年近くも何からも乱されずに眠っていたかのように、あらゆるものを集結させ、絡み合わせ、おとぎ話の魅惑の王子をただ待っていた場所――あるいは、ああ！　数年後に判明したように、投機的

不動産開発業者や鉄道技師を――それら現代の王子たちを待っていた場所。

私の独りよがりな記憶はこの領域がほぼ無限であることを私に告げたものだが、私はその境界線も覚えている。特にこのパリ郊外に割り当てられた自然地理学についての私の知識が、この地上の楽園に控え目な境界を与えるよう指示する。そこは、これもまた容易に乗り越えられるフェンスによって、ルイ＝フィリップのブローニュの森から分離されていた。その森については、その名前の由来となっているかなり古い町と、そこにあるサン＝クルーの川、橋、宮殿、庭園、山、森などの魔法のような組み合わせへと通じる主要通りを除いて、何に対しても境界を与える気にはなれない。

ブルームズベリーのちょうど中心から来たばかりの小さな少年に（そんな新鮮さがあるのなら）、これ以上の何が必要だろう？

その小さな少年の至福でいっぱいのカップに欠いてはならない一滴として、パッシーからサン＝クルーに行く途中の池があった――オートゥイユの池と呼ばれる忘れられない池で、ルイ＝フィリップのブローニュの森が誇ることができる唯一の水の宝物である。というのは、あの純真な時代には、人工流路によって水が供給される人工湖が存在しなかったからである。プレ＝カトランも、アクリマタシオン庭園もまだない。森はただの森であり、それ以上のものではなかった――何百エーカーにも及び、何千

もの野生の生き物を守り、木々が密集した自然のままの森だったのだ。真ん中は謎のように深いものの、この有名な池（何世紀も前から存在したかもしれず、まだ存在する）は大きくなかった。どこから石を投げてもほぼ対岸まで届くだろう。

森（今は刈り取られている）に隣接する三辺は、木々の外縁部によってほこりっぽい道路からちょうど隠されていた。恋に悩む少数のパリジャンがその存在を思い出し、その素晴らしさの中で悩みを忘れる日曜午後と木曜午後を除き、そのすべてを楽しむことができた。

そこにいるだけで幸福になった。あらゆる居住可能な天体の中でも最も隔離され、最も絵のようで、最も美しい池――池の中の池、**唯一無二の**池――であるだけでなく、世界中にあるほかのどんな池よりもはるかに多くの数および種類の、素晴

LA MARE D'AUTEUIL［オートゥイユの池］

らしい昆虫や爬虫類で満ち溢れてもいた。少なくとも、私はそれが事実に違いないと信じていた。生き物たちは無尽蔵だったからだ。

その生き物たちを見て、彼らの方法を学び、彼らを捕まえ（時々これをした）、家に持ち帰り、優しく接し、飼い慣らそうと努め、**我々の**方法を彼らに教えること（これが変わらず不成功だったのは事実だが、おお、でもすごく愉快な仲間だった！）は、七年間断続的に続いた趣味になった。

オートゥイユの池！　まさにその名前に魔法がある。あの当時その周りに集まったすべての関連物から、永遠にその名前が離れないような。

私はどんなにそれを愛したことだろう！　夜、温かいベッドでうたた寝をしながら、私はそれを畏敬の念をもって思い、一、二時間前、夕暮れにしぶしぶ離れたとき、それがどんなに荘厳に見えたかを思ったものだった。それからもっと後のそれを想像する。星々の下、暗い茂みの中で、深く、冷たく、静かに横たわり、淀んだ表面の下で泡立っている異様で不気味な生命があるだけのそれを。

それから徐々に水が下がり、無防備だった葦が不吉に動き、音を立て始め、覆いのないぬかるみの中の根の間から、生きているすべてものが中央に向かって急ぐ——跳ねたり、滑空したり、必死にもがいたりしながら……。

水が減って下がると、すぐにぬるぬるした泥の底が現れ、数ヤード下のそこには、特大サイズのずんぐりした山椒魚（さんしょううお）、鼠（ねずみ）ほどの大きさの、長らく行方不明だった忘れられたオタマジャクシ、巨大な蟇蛙（ひきがえる）、大きくて平たい甲虫、それに毛むくじゃらのもの、鱗（うろこ）のあるもの、棘（とげ）だらけのもの、とろんとした目つきのもの、丸く膨らんだもの、不格好なもの、そのようなありとあらゆる名も知れない怪物たち、何百年もそこで眠り続けてきた泥の色をした泥沼の子孫が目を覚まし、出たり入ったり這い回り、のたうち、身をくねらせ、互いを食い合うのだ。私の『Manuel de Géologie Élémentaire［基礎地質学の手引き］』に載る大きな蜥蜴（とかげ）や両生類のように。この本は、子供用のイラスト付きの版で、文学と科学のバカロレア取得者であり教師であるジュール・サンドーの著作である。

それから私ははっとして目を覚ましたものだった。冷たい汗をかき、肌を荒らし、髪の根元をかき回し、体を突き抜ける氷のような寒さの中で。そして私は明日の朝を熱望する。

数年後、遠く離れたクラーケンウェルの冷たい霧の中で、「自分が生まれた美しい場所」を再訪したいという思慕の念にたびたび駆られたものだが、それは私が最も思い焦がれたオートゥイユの池に向けてのものだった。**それ**こそが北極星のような道し

るべの星であり、まさに郷愁を誘う切望の的なのだった。私の絶望的な空想の翼は常にそこへと私を連れていった。それは、おお！　あの太陽に照らされた草深い水辺をもう一度踏み、陽気なオタマジャクシが群がり、緑色の蛙が小人のように真っ逆さまに飛び込み、ウォーターラットが柳の根元の巣穴まで泳ぎ、ウマビルが睡蓮の茎の間をうねって這うのを見るためだ。そして、私と私のものがいつでもいちばん幸福だったあのすべての場所の、快い、もう戻れない過去の優しい夢を見るためなのだ！

"…Qu'ils étaient beaux, les jours
De France!"

「……何と美しかったことか、
あのフランスの日々は！」

・　・　・　・　・　・

私が書いた大通り（**その**大通り（avenue）という呼び方は、私にとってはいまだにそのままで、

これからもずっとそうだろう）には、道の半ばくらいの地点の右側に、ペレ夫人という人に管理されていたmaison de santé［私立療養所］あるいは宿泊施設があった。私たちが着いてからしばらくして、フランスを侵略しようとした四、五人の紳士が、見た目が怖い王位要求者を先頭に、集結のための帝国のシンボルのような飼い慣らされた鷲を連れ、ほかの者に交じって賄い付き下宿にやって来たことがあった。

その遠征は失敗していた。王位要求者は要塞に引き渡された。鷲の方は、ブローニュ・シュル・メールの公立食肉処理場に安息の場所を見いだし、長年の間そこに彩りを添え、たぶんそれ以前には食べたことのないような餌を食べていた。忠実な従者であるヴォワジール大佐、デュケノワ少佐、オドニ大尉、ロンバル博士（および名前を忘れた者が一、二名）らは、ペレ夫人の家の仮釈放中の囚人たちで、あまり厳しい監禁状態には見えなかった。

私は、彼ら全員を知り、愛するようになったが、特にニューカム大佐*のフランス語へのほぼ直訳であるデュケノワ少佐は好きだった。彼は私のことを、イギリス人であるのにすぐに気に入ってくれ、私に軍事訓練をしたり、ヴィエイユ庭園で行われていた体操を教えたり、新しいおとぎ話を話してくれたりした。七年の間、午後毎日だっ

＊ニューカム大佐……サッカレーの小説『ニューカム家の人々』の主人公。

"PRÉSENTEZ.....ARRRMES!"「［捧げ……銃（つつ）！］」

たのは確かだと思う。シェヘラザードは絞殺用の綱から自分の首を守るために、ある王様にそれ以上のことはしなかった！

Cher et bien aimé "Vieux de la Vieille!"［親愛なる、最愛の「老兵」よ！］大きな鉄灰色のロひげ、黒いサテンのストックタイ、染み一つないリンネル、ほとんどスカートみたいな、かなりだぶだぶの長い緑色のフロック・コート、ボタンホールには粋な赤リボン！　彼の記憶が、その敵国人であることを世襲した敵国人や、小さなイギリス人専制君主とその仲間の心の中で、どんなに温かく愛情深い好意とともに永遠に生き生きと甘美に保たれることになるか、彼はほとんど予見しなかった。

・　・　・　・　・　・

ペレ夫人の家の向かい、その大通りで彼女と私たちの家以外の唯一の住居は、ギリシャ風ポーチのある魅力的な小さな白い邸宅で、そこには金色の文字で「Parva sed Apta*パルワ・セド・アプタ」と刻まれていた。しかし、私たちが到着してから二、三年は居住者がいなかった。

＊パルワ・セド・アプタ……「小さいながらも調和の取れた」の意のラテン語。

当時のフランスの温和な流儀で、私たちはすぐに彼らやその他の隣人たちと親密な間柄になり、一日中互いに何度も会っていた。

長身で美しく若い母（la belle Madame Pasquier［美しいパスキエ夫人］、と優雅に呼ばれていたような）は、パリで生まれ、一時期そこで育ったイギリス人女性だった。陽気で愉快な父（le beau Pasquier［美男子パスキエ］、と呼ばれたが、彼もまた背が高く、見た目がよかったからだ）は、ロンドンで生まれ、一時期そこで育ったイギリス国民だったが、フランス人だった。恐怖政治時代の、フランスからの émigrés［移民］の子供だったからだ。

彼は、壮麗で目を見張るような声――バリトンとテノールを合わせたようで、驚異的な豊かさ、甘美さ、柔軟性、力強さがあった――に恵まれており、オペラで歌いたいと思っていた。実際、パリ・コンセルヴァトワールで三年間そのための勉強をしており、そこでは向かうところ敵なしで、この上ない期待を寄せられていた。ところが、彼の家族は最も黒いカトリックかつ最も白く染まった正統主義者で――また極貧でもあり、そのような不敬で軽蔑的な職業に反対していたのである。そういうわけで、世界は一人の偉大な歌手を失い、その偉大な歌手は富と名誉の源を失ったのであった。

しかし、彼は生活できれば十分で、持てるものがだいたい同じくらい多くて少ない

妻（異端者！）をもらったのであった。彼は、時間および自分と妻の両方のお金を、科学的な発明に費やした――ほとんど成果はなかったが、それは彼が、歌唱法は学んだものの、それと同じように発明法を教えてくれるコンセルヴァトワールには行かなかったからなのであった。

それで、「自分の船が戻ってくる」のを待つ間、彼は妻を楽しませるためだけに歌った。ナイチンゲールが歌う、などとよく言われるように。自分の余分なエネルギーを軽減するためと、使用人たち、フランソワおじさんとおばさん、ナポレオンの五人の追随者、聴きたがるあらゆる者たち、そして最後に、持てるものがいちばん少ない（また多い！）私を魅了するために。

というのは、このひどく軽視され、本人がほとんど重きを置かなかった才能は、すでに私にとってこの世で最も美しく神秘的なものだったからだ。これに次ぐのは、母のハープとピアノの快い演奏だった。彼女は称賛に値する音楽家だったからである。

夜に演奏するのが彼女の習慣で、私の寝室のドアを少し開いたままにし、応接間のドアも同じようにしたため、私は眠りに就くまで彼女の演奏を聴くことができた。

在宅中、父は時々、新しい発明を追って部屋の中を行ったり来たりしながら、気の向くままに鼻歌を歌ったり、母が演奏している曲のメロディを歌ったりしていたもの

「私が死んで静かに横たわるとき
おお、私の愛する女性に私の心臓を届けてください！
それは微笑みとワインのおかげで生きていたと告げてください
ここに残っていた間、いちばん明るい色合いの！」
【訳注】トマス・ムーア『遺産』の一節。

だった。

彼は「ゆっくり小声（ピアーノ）」で歌ったりハミングしたりしているだけなのに、その甘く鋭く雄々しい声音はあらゆる空間を満たしてしまうように思われた。

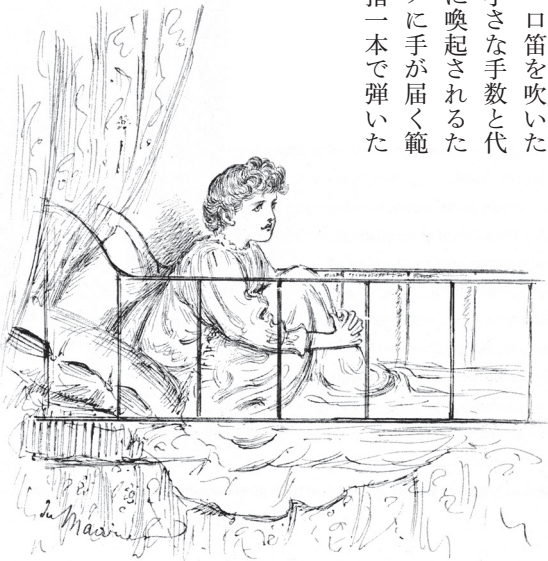
静まった家が共鳴板となり、ハープは補助的なチリチリ音にすぎなくなり、私の小さく感じやすい体の骨格は、影響を及ぼすことなど自覚していない父の声の波を受け、ぞくっとしたりわくわくしたりして震えたものだった。それに、おお、彼が歌う魅力的なメロディ！

彼のレパートリーは無尽蔵で、彼女のそれも同じだった。素晴らしいメロディの無限の連続が、あの幸福な時代の間じゅう鳴り響き続けた。

人が溺れたり高所から落ちたりするときに、過去の人生全体が一度の閃光のように心の視覚の前に精密に展開されると言われているが、甘美でお金で買えないような家庭の愛の七年間もまさにそうなのだ――質素で活気ある帝国前のフランスの四季の変化が七回、素晴らしい家具、形、色などすべてを備えた理想的な家、木々と花々でいっぱいの庭、大きな公園とそこに棲息（せいそく）するすべての野生動物たち、町とその住民、歴史的な川の一、二マイル、凱旋門からサン＝クルー（とそこにある池の中の池）に届くほど大きな木、季節の変化がもたらし得るあらゆる風と天候――このすべてが、少な

くとも百の異なる曲のすべての小節に埋め込まれ、防腐処理をされていた。口笛を吹いたりハミングしたりする程度の小さな手数と代償を払うだけで気の向くままに喚起されるために、あるいは――私がピアノに手が届く範囲にいた場合は――ピアノを指一本で弾いたりするためにさえ。

私にとって生涯ずっと続けるのに十分なほどで――もちろん、適度に倹約した生涯だが――、過ぎ去ったものの精髄と、もうなくなった日々を保存するためのメロディックな小節の不思議な力を使い尽くすことは、頻繁すぎる実験をもってしてもないだろう。



「おお、ナイチンゲールよ！」

おお、ナイチンゲールよ！　そなたが自分で歌うにせよ、さらに良いことに、そなたの喉の声ではなく燃え立つような心と巧妙な脳で発声するにせよ、またそなたがほかの多くの者が歌うための歌を作るにせよ、そなたの名前に祝福を！　その響きはまさに、どこの国と言葉でも甘美なものだ。ナイチンゲール、ロシニョール*、ウジニョーロ、ブルブル！　ナハティガルでさえ、ドイツのハノーバー州の人を家庭教師にしていた金髪のイギリス人少女の口では聞き苦しく響かない！　そして、実際、その最高の音楽が作られるのは、ナハティガルの国なのだ！

そして、おお、ナイチンゲールよ！　そなたの歌を愛する者に、決して、決して出し惜しみをせぬように――そして、それを好まぬ者に歌って浪費することのないように……。

こんなふうにセレナーデを聴きながら、私は目を閉じ、暗闇と温かさと天国的な音に包まれて、眠りに誘われたものだった――おそらく夢を見るだろう！

というのは、私は幼少期、よく夢に付きまとわれたからである。最初、私はそれを現実だと思い込んだ――忍耐強い読者がやがて認めることになるように、人類にとってある程度の興趣と重要性を持つ超越的な夢。だが、それを解明したり説明したりで

＊ロシニョール、ウジニョーロ、ブルブル……順にフランス語、イタリア語、ペルシャ語。

きるようになる前に、私の人生は何年も過ぎ去った。

壁に顔を向けさえすれば、すぐに自分が、白い髪で若い顔をした女性と一緒にいることに気づいた――とても美しく若い顔だ。

私は時に彼女と手を繋いで歩き――私が完全に小さな子供なので――、水車場(すいしゃば)まで続く曲がりくねった小川の近くの塔に棲(す)む数え切れない鳩たちに、一緒に餌をやった。その夢があまりにも美しくて、よく目が覚めてしまったものだった。

私たちは時に暗い場所に入った。そこにはたくさんの穴が開いた火の入った炉があり、多くの人が働き、動き回っていた――彼らの中に、白い髪と女性のような若い顔を持つ男がいて、靴には美しく赤いヒールが付いていた。そして、彼の指導で、私は炉で色付きガラスの小さくてかわいいコックドハットをうまく作ることができた――宝物だ！　そして、その純粋な喜びが私を目覚めさせたものだった。

白い髪の女性と私は、時に四角い箱に向かって一緒に座った。彼女はそれからすてきな音楽を作り、私のお気に入りの歌を歌った――大好きな歌である。ところが、この歌の終わりが来る前にいつも目が覚めてしまうのだった。それを聴きながら、耐えがたいほど強烈な至福を感じたからである。目覚めたときに覚えていられたのは、「triste — comment — sale［悲しき――どうして――汚い］」という言葉だけだった。

夢の中ではよく知っていたそのメロディも思い出せなかった。

まるで私という存在のいちばん深い所にある核のようなもの、子供らしい聖域のようなものが、極度に繊細な回想の源泉を分泌しているように思われた。それは、睡眠中、ある刺激のもとで時々活発になり、この奇妙な夢の中に自身を吐き出す――影のように淡くてかすかなものだが、いつも変わらずあまりにも限りなくあまりにも沁みるような至福感を伴うため、私は常に恍惚状態の神秘的な混乱の中で目を覚ましたものだった。そのわずかな記憶は、それに続く多くの時間を祝福し、幸福なものにするのに十分であった。

・　・　・　・　・　・

この三人の幸福な家族のほか、近所（タワー通り）にはビダルフ夫人と、私のおばプランケットがいた。おばは未亡人で、アルフレッドとチャーリーという二人の息子と、マッジという娘と一緒に住んでいた。彼女たちもまた見た目が――それはもう――美しく、金髪と白い肌の育ちのよいアングロ・サクソンというタイプで、ざっくばらんで開放的、快い物腰を持ち、忌々しいイギリス的プライドなどは持ち合わせていなかっ

た。

そういうわけで、私たちは、少なくとも身体的には、ちょうどその頃、ワーテルローが忘れられていなかったパッシー・レ・パリでは評判が芳しくなかったイギリスの名前に、大いに名声をもたらしたのである。また一方で、やがて私たちの国籍は、見た目がよいという理由で大目に見られた――サンドー氏が、（自分の学校の入学案内を持って）訪ねてきて、芝生の大きな林檎の木の下に私たち全員が集まっているのを見つけたとき、喜んで派手に叫んだように。「non Angli sed angeli! ［*イギリス人ではない、天使だ！］」

しかし、パッシーのイギリスの美貌は、セラスキア夫人という人の、その列への記憶に残る追加をすぐに受けることになった。病弱な小さな娘と一緒に、金文字で「パルワ・セド・アプタ」と非常に控え目に書かれている家に引っ越してきたのだ。

彼女はイギリス人、というかアイルランド人で、ハンガリー愛国者で科学者のセラスキア医師（有名なヴァイオリニストの息子でもある）の妻であった。医師はたいへんな長身で痩せた男性で、ほとんど巨人のようであった。真面目で優しそうな顔と、預言者のような頭を持っていた。私の父同様、自分の家族からはかなり離れて生活していた――たぶん協力し合ってそうしていたか――あるいはたぶん（私の父のように）

ただ発明をし、「自分の船が戻ってくる」のを見張っていたのかもしれない。

この美しい女性の出現は大事件だった――私にとって、飽きたり風化したりすることのない大事件である。時代はもう「la belle Madame Pasquier［美しいパスキエ夫人］」ではなく、「la divine Madame Seraskier［神々しいセラスキア夫人］」なのであった――美しいものに見境のないフランス人がそうなりがちなように。

彼女は私の背の高い母を、頭半分ほども超えていた――比喩が全部キッチンと応接間からのものであるペレ夫人が、「あの人は、あなたのお母さんの頭の上の小さなパテを食べられそうね！」と言ったように。その高さは、連続する各インチの等比数列*――二、四、八、十六、三十二――の尺度の見苦しさに気品を与え、美しさを拡大する。私は、五フィート五インチと、そう、五フィート十ないし十一インチ（かそこら）の間が、セラスキア夫人の身長であったと見なしている。

彼女は、黒い髪、――小説の中で菫色と書かれそうな類いの――青い目、美しく白

＊イギリス人ではない、天使だ！……「アングリではない、アンゲリだ！」という有名な洒落。

＊等比数列……ヤード・ポンド法定規の目盛りは、メートル法定規のように1/10づとではなく、1/2、1/4、1/8、1/16……というふうに刻む。セラスキア夫人はほぼ一七〇センチ台。

い肌、きれいな手足、完璧な容姿、彫刻され、仕上げ塗りをされ、艶を出されたような顔立ちを持っていた。極めて稀で、神々しく、神聖な美を持つ何かを見つめる権利を持つほかの誰かに、心が奇妙な嫉妬の怒りでいっぱいになるまで見つめに見つめられるような、それほどの並外れた適切さで装われた顔立ちである。

とはいえ、女性なら、セラスキア夫人でなくてもこのすべてを手に入れることはできる——彼女はさらに多くのものを持っていたのである。

というのは、彼女の性質の温かさと優しさが、その目を通して輝き、声の中に響いていたのである。このすべてが彼女と一致していた——純真さ、優雅さ、飾らなさ、虚栄心のなさ。また礼儀正しさ、同情心、陽気さ。

「彼女は私の長身の母を超えていた」

いちばん人を惹(ひ)きつけるのはどれなのか、私には分からない。彼女は、英語を話すときにはわずかにアイルランド訛(なま)りがあり、フランス語を話すときはそれほど英語訛りはなかった！

私は、自ら進んでその両方を獲得しようとした。

実際、彼女は、心と脳と肉体において、数十億の我が先見の明のない同胞によってなされた、ここ数百年の間の（適切な指導下で身に付けるべき）わずかな公共心と自制心の欠乏がなかったとしたら、私たち**全員が**そうなっていたはずのものであった。

不注意や誤りによってそこに飛び込まれるような美しい魂のための利用可能な醜い枠などあるはずがなく、ヤドカリのように、それを対象としていない美しい殻に這い込むことを許されるような醜い魂もあるはずがない。外面的で目に見える形は、内面的で精神的な美点を示すはずなのだ。が、めったにそうなっていないということは、否定できない事実である。ああ！　そのような美しさは、その所有者が、王族の王子のように、まさに揺り籠から甘やかされ性根を腐らされ、善良で寛大で利他的なあらゆる衝動が、むやみな称賛――あまりにあっさり得られ、あまりに素早く与えられ、当然のものとしてあまりに堂々と受け取られる、自然発生的な賛辞――によって蝕(むしば)まれることの、例外なのである。

だから、天の恵みによって美が善でもあるときだけが、私たちがひざまずいて、感謝と崇拝の中で祈りを捧げるべきときなのだ。神は、一時的に、私たち哀れな人類の腐敗しやすい似姿として現れることを許されてきたからである。

美しい顔！　美しい曲！　地上はこれらや、それに類するものを凌駕(りょうが)するものを何も持たず、さらに良い材料が欲しくて、私たちは天の王国を自分たちのために築き上げたのだ。

"Plus oblige, et peut davantage
　Un beau visage
Qu'un homme armé—
　Et rien n'est meilleur que d'entendre
Air doux et tendre
　Jadis aimé!"

「*より多くの恩恵を与えてくれ、そうすればできることも多くなる
　美しい顔の方が

武装した男よりも――
　そして、これを聴くことほど良いものはない
かつて愛した
　甘く柔らかい旋律を！」

・　・　・　・　・　・

母はすぐに、神々しいセラスキア夫人に熱烈に忠誠を誓う友となった。そして私はといえば、こんな具合だった。あの人のためなら何だってする――危険にだって直面する――死んだっていい！

まあ死にはしなかったのだが、私は五十年近くも彼女の新教徒として生きた。五十年近くもの間、歓喜と苦痛として思い出すこと、それは彼女を見ることなのだった。不可解な憧憬（しょうけい）の疼（うず）き、無口で、美味で、複雑で、無邪気な苦痛。それは最も偉大な詩人たち以外には表現できなかったものだ。またおそらく、七、八、九、十、十一、十二歳という多感な年頃では、彼ら、その口達者で才能ある人々でも、**私**が感じた半分もそ

＊より多くの恩恵を……ミュッセの『歌』第二連（ミュッセに同題の詩はほかにもある）。

の苦痛を敏感に感じることはなかったことだろう。

彼女には、私と同性の別の奴隷がいた。五人のナポレオン時代の英雄は、それぞれが自分流の敬意を捧げていた。善良なる少佐は、見守るときの、感動的な、甘い父親の優しさのようなものをもって。ほかの者は、おそらくあまり無私というわけでもない崇拝をもって。特に勇敢なのはオドニ大尉であった。彼は、蝋(ろう)で固めた明るい色の口ひげ、巨大な胸に金ボタンでかなりしっかりと留められた美しい茶色の燕尾服(えんびふく)、先端を光らせた真珠色のボタン付き女性用布製ブーツに非常にきつく閉じ込められていた、目に見えないほどの小さな足を持っていた。彼の趣味は、思うに、別の方向でのより成功した試みによって、戦争の不幸を自ら補償しようとし、することだったのだろう。とにかく彼は、私の小さな胸を地獄(ゲヘナ)にしたような熱情を露わにしたのだ。それも、彼女が笑い、つれなくして、彼をして正当な作法と恥じ入った控え目な態度にさせるまでのことだったが。

彼女が、この小さな男性世界全体の中では、少なくとも二人に好意を持っていたことがすぐに明らかになった——少佐と私である。それに、私たちが作る奇妙なトリオ。

彼女の気の毒な小さな娘は、彼女の情熱的な心配の対象で、非常に聡明で早熟な子供であり、赤くまつげのないまぶたを別にすればきれいと言えそうな目を持っていた

けれど、美しいどころかその反対であった。濃い髪を少年のように短く刈り込んだ状態にし、顔色は生気のない青白さで、頬はこけ、どんよりした顔つきで、ひょろっとして、長く痩せた手足と、かなり哀れを催すような長さと細さの腕と脚を持っていた。無口で陰気な小さな少女で、しょっちゅう親指をしゃぶっており、考えていることを人に言わなかった。彼女はよく何日も続けてベッドで横にならねばならなくなり、上半身を起こせるほど軽快したときに、私は（母親の方を喜ばせるために）彼女に本*を読んでやったものだった。『スイスのロビンソン』、『サンドフォードとマートン』、『くつろぎの夕べ』、『ペロー夫人のお話』、『ドン・ジュアン』から難破の部分。これらに私たちは飽きることがなかった。そして『邪宗徒』、『海賊』、『マゼッパ』。大事なものを言い忘れていたが、『ピーター・パーレーの博物史』。私はこれを暗記するほどよく知るようになった。

この最後の本から、私は彼女のため、私にとって常にこの世でいちばん美しい詩で

＊本……『スイスのロビンソン』はヨハン・ダビット・ウィース、『サンドフォードとマートン』はトーマス・デイ、『くつろぎの夕べ』はジョン・エイキンの著作。『ドン・ジュアン』『邪宗徒』『海賊』『マゼッパ』はバイロンの作品。『ピーター・パーレーの博物史』はグッドリッチの著作（ピーター・パーレーはペンネーム）。

あったものを、よく誇張して朗読したものだった。おそらく、自力で読んだ最初の詩だったという理由から、あるいはあの幸福な時代とかなり密接に関係していたという理由からだったのだろう。野生の鴨（かも）の版画（ビューイックによるものだったと思う）の下に、W・C・ブライアントの『水鳥へ』という詩が引用されていた。そのときそれらは私を魅了し、そこまですっかり魅了するものがほかになかったがために、今も私を魅了している。そのことを考えると、私は再び子供に戻る。子供の知覚の敏感さや、永遠なる神の漠然とした暗示への魔法のような感受性とともに。

か弱く小さなミムジー・セラスキアは、腫（は）れぼったい目と素早い理解力をもって聴いていたものだった。彼女は、「妖精タラパタポウム*」と「シャルマン王子」（両者とも少佐殿お気に入りのキャラクター）のペアが私たち――彼女と私――にいつでも付き添っていて、二人を等しく好いてくれているという奇妙な空想を持っていた。つまり、「妖精タラパタポウム」は私を好み、「シャルマン王子」は彼女を好み――、私たちを見守り、一生守ってくれるというのであった。

「O! ils sont joliment bien ensemble, tous les deux — ils sont inséparables!"［おお！　すごく仲がいいのよ、二人とも――離れられないのね！］」彼女は、この空想の存在**について（適切にも）**大声でよくこう言っていた。そして、水鳥に**ついては（適切にも）**こ

う――。

「Il aime beaucoup cet oiseau-là, le Prince Charmant! dis encore, quand il vole si haut, et qu'il fait froid, et qu'il est fatigué, et que la nuit vient, mais qu'il ne veut pas descendre!［この鳥が本当に好きよね、シャルマン王子は！　もう一度読んでよ、すごく高く飛んで、冷たくて、疲れて、夜が来たのに、下に降りたがらなかったところを！］」

そこで私は、滔々と再朗読したものだ。

「一日中、そなたの翼は羽ばたく、
はるかな高み、冷たく薄い大気の中を、
それでも降りることはない、疲れていても、歓迎の地に着くまでは、
暗い夜が近づいていたとしても！」

＊**「妖精タラパタポウム」と「シャルマン王子」**……妖精タラパタポウムは、どうやら『ピーター・イベットスン』（の少佐）のオリジナル・キャラクターらしい。それに対し、シャルマン王子の方は、二七ページに「魅惑の王子」とあったのと同じく、おとぎ話に登場する、姫君を救う類型的な王子のこと。英語の「プリンス・チャーミング」。

すると、か弱く、病気で、早熟で、興奮しきったミムジーの目は満たされ、瞑想(めいそう)に耽(ふけ)りながら親指をしゃぶり、名状しがたいものを考えるのだった。

それから私は、彼女のためにビューイックの木版画を模写したりもしたが、そのとき彼女は、私の椅子の肘掛(ひじか)けに座って根気よく見つめていた。そして、「La fée Tarapatapoum trouve que tu dessines dans la perfection!［妖精タラパタポウムが、あなたが完璧に描いているのに気づいたわ！］」、この小さな傑作をどうか大切にしておいてほしい――「pour l'album de la fée Tarapatapoum!［妖精タラパタポウムのアルバムのために！］」と言うのだった。

彼女がほかの何よりも重んじた一つの線画があった――バイロンの本の鋼板印画で、美しい男女二人が手を繋いで暗い洞窟を歩いている場面を描いたものだ。男性は船乗りの身なりだった。女性は裸足でひらひらしたぼろをまとい、たいまつを持って歩いていた。その下にはこう書かれていた――。

「*そしてヌーハはトーキルの手を取って導いた、
すると彼女の燃えるたいまつが丸天井に沿って揺れた」

私は、彼女のためにそれを模写するのに何時間も費やし、彼女はオリジナルよりもその模写の方を好んだ。そして私は、その二人の姿が彼女の王子と妖精の優れた肖像画なのだ、と述べたものである。

時々、こうして芝生の林檎の木の下で読んだりスケッチしたりしている間に、眠っているメドール（巨大でこれといった特徴がなく、フランスのあらゆる品種が掛け合わされ、そのすべての美点はあるが欠陥はないといった犬である）が、その三インチの尾を振り、夢

＊そしてヌーハは……バイロンの詩『島』の一節。

「林檎の木の下で、王子と妖精と共に」

の中での歓迎の弱い鼻音を発することがあった。すると彼女は言うのだ――。

「C'est le Prince Charmant qui lui dit; 'Médor donne la patte!'［シャルマン王子が言ったのよ。『メドール、お手！』］」

あるいは、年寄りの雄猫がうたた寝から起きて尻尾を上げ、架空のスカートに身をこする。すると、こう――。

「Regarde Mistigris! La fée Tarapatapoum est en train de lui frotter les oreilles!［猫を見て！妖精タラパタポウムが猫を殴ってとっちめているところよ！］」

私たちは、英語を完全に忘れてしまうことをひどく心配していた両者の両親からの厳しい禁止令にもかかわらず、ほとんどフランス語を話していた。

やがて、私たちは狡猾な妥協案のようなものを作った。術策に富んでいたのはミムジーの方だったが、彼女が新しい言語を一つ、というか二つ発明したのだ。それぞれ、二人がフランキングルとイングルフランクと呼んだものである。それは、フランス語の名詞と動詞を英語風にし、それからそれらを英語風に活用させたり発音したり、あるいはその逆にしたりすることで作られていた。

例*えば、すごく寒くて、勉強部屋の窓が開いていると、彼女はフランキングルでこんなふうに言ったものだ――。「Dispeach yourself to ferm the feneeter, Gogo. It geals to pier-

fend! we shall be inrhumed!［急いで窓を閉めて、ゴーゴー。石も割れちゃいそうな寒さだわ！　風邪引いちゃう！］」あるいは、私がすぐには理解できなかった場合は――「Gogo, il frise a splitter les stonnes — maque aste et chute le vindeau; mais chute — le donc vite! Je snize déjà!［ゴーゴー、石も割れそうな寒さよ――急いで窓を閉めて。ねえ閉めて――だから急いで！　私、もうくしゃみが出そう！］」こちらはイングルフランクであった。

＊例えば、すごく寒くて……ここのフランキングル（フランス語風英語）とイングルフランク（英語風フランス語）は、英語とフランス語をかなり恣意的にちゃんぽんにしているため、ご覧のとおりなかなか厄介である。右の訳文は、訳者の次の推測に基づく。

◆フランキングル

○Dispeach yourself to……Dépêche-toi de「急いで～せよ」

○ferm the feneeter……fermer la fenêtr「窓を閉める」

○It geals to pier-fend……Il gèle à pierre fendre「石も割れそうな寒さだ」

○inrhumed……enrhumé「風邪を引いた」

◆イングルフランク

○maque aste……make haste「急いで」

○chute le vindeau……shut the window「窓を閉める」

○Je snize déjà……I sneeze already「もうくしゃみが出そう」

この発明で私たちは、英語もフランス語も同じように、この発明を知らない者を当惑させ、煙に巻くことに成功した。このすべてを紙上で見ている知的な読者は、簡単にはだまされないだろうが。

ミムジーが十分元気なときは、私と私のいとこと一緒に公園に行き、楽しい時間を過ごした――インディアンを待ち伏せしたり、卑劣な騎士からマッジ・プランケットを救出したりし、あるいは蛇や野ネズミや蜥蜴を狩ったり、蜥蜴の卵を掘り出して家で孵したりした。公園は、種々雑多な獣にとっての幸福な避難所であったが、それは小さな少年少女にとっても同じだった。リス、ハリネズミ、テンジクネズミもいたし、梟、ワタリガラス、猿、白ネズミもいたし、飛べるようになる前に母親の巣から外れてしまった小鳥たち（彼らは常に死んでしまった！）、犬のメドール、選ばれたほかの犬などもいたからである。リアルなぬいぐるみポニーで作られた巨大な揺り木馬は言うまでもない――かつて存在した中で最も小さいポニーだ！

多くの場合、私たちが共同で発生させた元気潑剌さは、ミムジーにとってはにぎやかすぎた。ひどい頭痛が起こり、そのため彼女は隅に座って、片方の手でハリネズミの世話をし、もう片方の手の親指を口に持っていく、というようなことになりがちだった。私と二人きりになったときだけ、彼女は幸せそうだった。それから、moult

tristement［かなり悲しそうだった！］

夏の夜には、大人から子供まで仲間全員で、公園を通ってブローニュの森からオートゥイユの池まで歩いた。私たちは、メドールが水の匂いを嗅ぐのに十分なほど池に近づき、彼は吠えたり歯を剝いたりぐるぐる回ったりし、興奮して狂ったようになった。というのは、彼は石を追って飛び込み、それを見せびらかす才能を持っていたからだ。

そこで私たちは、オリーブ色で下部が黄色の巨大な水生甲虫や、腹の赤いイモリや、美しい斑点と素晴らしい放射線状の跳躍を見せる緑の蛙や、紫がかった茶色のまだら模様のある金と銀の魚などを捕まえたものだ。私はこれらを魅力的な順に書いている。魚は、あまりにもおとなしくて簡単に捕まえられ、その美しさがあまりにも上品すぎる種族だったということだ。珍しくて平べったくて御しにくいゲンゴロウモドキが「ケーキをもらった」わけである。

私たちは時々、ブローニュを通ってサン＝クルーまで歩くことさえあった。新しい鉄道と列車――驚異と歓喜が尽きることのない対象――を見るためである。それから「テト・ノワール」（有名な事件になった恐ろしい殺人の現場のホテル）でアイスを食べ、芳香漂う夜を通って帰ってきたものだが、その間、草地ではツチボタルが光り、遠くオートゥイユの池では蛙が鳴いていた。驚いた雄ノロジカが小道を横切って茂みから

茂みへと短い跳躍で走っていくこともあった。メドールは再び狂ったようになり、まだ建設中だった新しいパリの城壁に谺を響かせるのだった。

彼に雄ノロジカを捕まえる才能はなかった！

父が一行にいる場合、彼はチロルのメロディをヨーデルで歌い、ボワルデューやエロルドやグレトリの美しい歌を歌った。あるいはまた、愛する夫が離れるたびに愛する国への郷愁を抱いていたセラスキア夫人のために、『君が目にて酒を酌めよ』や『ダブリン湾の歌』を歌った。

あるいはまた、私たちは陽気なにわか合唱団を結成し、歌に合わせて行進するのだった——

"Marie, trempe ton pain,
Marie, trempe ton pain,
Marie, trempe ton pain dans la soupe;
Marie, trempe ton pain,
Marie, trempe ton pain,
Marie, trempe ton pain dans le vin!"

「マリー、パンを浸して、
　マリー、パンを浸して、
マリー、スープにパンを浸して、
　マリー、パンを浸して、
　マリー、パンを浸して、
マリー、ワインにパンを浸して！」

あるいはまた――

"La — soupe aux choux — se fait dans la marmite;
Dans — la marmite — se fait la soupe aux choux."

「キャベツのスープは――お鍋の中で作られる
お鍋の中では――キャベツのスープが作られる」

この歌は、私たち全員に夕食への郷愁をもたらしたものだ。

あるいはまたさらに、歌うには暑すぎたり、疲れすぎたりした場合は、少佐殿が、妖精の王国を捨て、歩きながらはげた頭頂部から帽子を取り、ブリエンヌやマレンゴやアウステルリッツの偉大な指導者のことを、私たちに厳かに恭しく語るのだった――フォンテーヌブローの別れ、百日天下のことも――セント・ヘレナは語られなかった。彼は、それを私たちに話す自信がなかったのだ！　そしておもむろにワーテルローへとこぎ着けると、彼は帽子をかぶり、イ

"LA BATAILLE DE VATERLO"「［ワーテルローの戦い］」

ギリスが事実上どんなふうに敗北したのか、なぜ、どんな理由でそうなったのかをA（数学的に）＋Bで論証してみせるのだった。それを聞くと、この小さな一行全員に、厳粛な、畏敬の念に打たれたような沈黙が訪れ、さらにベッドの甘美な郷愁が訪れた者もいたのであった！

おお、古き良き時代！

夕闇の中、セラスキア夫人のそばを歩くとき、私にとってその夜は、彼女のガウンの光・香り・衣擦（きぬず）れの音によって神聖なものになった――黄色か薄青か白の光――白檀（びゃくだん）の香り――疲れにくい、丈夫で細くて土踏まずの高い足が、軽く元気な足取りで歩いていることを語りかける音。それは、このような長い遠征に耐えられるほど頑強ではなかったミムジーのもとに戻りたいという、母親らしい心からの願望を語ってもいた。

短い遠征の場合、時々私は帰り道のほとんどでミムジーを背負って歩いたものだ（彼女の母親を喜ばせるためである）――もろく壊れやすそうな荷物で、彼女の貧弱で長くて細い腕が私の首に巻かれ、その青白くて冷たい頬が私の耳に当たっていた――彼女には体重を感じなかった！　私が疲れていたときは少佐殿が交代してくれたが、長くは続かなかった。彼女はいつでもゴーゴーに運ばれることを望んだのだ（私の名前

のピーターで呼ばれる場合を除けば、私は何の理由もなくそう呼ばれていた）。

彼女は暗がりに対して青白く輝く樺の木に怯えたり、大枝が彼女の体をこすると震えたりしたものだが、妖精魔王エールキングについてのすべてを私に教えてくれた――「mais comme ils sont là tous les deux［でも、いつも二人一緒にいるから］」（王子と妖精が、という意味だ）「il n'y a absolument rien à craindre.［何も怖がることはないのよ］」

そしてミムジーは、si bonne camarade［とても良い仲間］であった。その厳粛さと貧弱な健康状態と多くの苦痛にもかかわらず、小さな親切にとても感謝し、小さな才能をきちんと認め、小さな虚栄心（彼女は母親同様それを持ってはいないようだった）にとても寛容で、その無限の生真面目さにもかかわらずとにかくユーモラスで――彼女は本質的には紛れもなくお転婆娘だった――、私は、母親のみならず彼女自身も喜ばせるためにすぐに彼女を運んだし、彼女のために何でもしたものだった。

少佐殿はといえば、ミムジーが半分は殉教者で、半分は聖人で、この世のありとあらゆる美徳を持っていることに徐々に気づいていた。

「Ah, vous ne la comprenez pas, cette enfant; vous verrez un jour quand ça ira mieux! vous verrez! elle est comme sa mère … elle a toutes les intelligences de la tête et du cœur!［ああ、あなたはこの子のことが分かっていませんね！　いつか健康になる日が来ます！　見ててご

らんなさい！　この子は私の母のようです……頭も心もすっかり知性でいっぱいです！」」そして彼は、天国では自分が彼女の祖父――母方の祖父だ――になる喜びがありますようにと願うのだった。

L'art d'être grandpère!［祖父たるべき方法！］この風雪に鍛えられ、戦争に負けた老兵は、本当の息子や娘を持ったこともなくそれを学んでいたのだ！　彼は**先天的な**祖父であった！

そのうえ、ミムジーと私は共通の多くの趣味と熱愛の対象を持っていた――例えば音楽、それと同じくらいにビューイックの木版画やバイロンの詩、また焼き栗や家庭用ペット。そして何よりも、オートゥイユの池。彼女は秋のその場所が好きだった。茶色や黄色の葉が、渦を巻いたり、池の縁を回って駆け巡ったり、互いを追いかけ合ったり、あるいは乱れた水面を漂流したりしていた。そして冷たく湿った風が、鉛（なまり）色の空の下、森のぼさぼさの大枝を通ってヒューヒュー音を立てていた。

彼女は、そんなときにそこにいて、家や暖炉のことを考えるのがいいのだと言っていた。もっといいのは、やっと家に着いたとき、残されたもの寂しい池のことを考えることだ、とも。実際、蝙蝠（こうもり）が飛び始めたときに、アルフレッド、チャーリー、ミムジー、マッジ、それにメドールと一緒に、夕暮れ時に森と公園と大通りを通ってとぼ

とぼ帰っていくのは楽しいことだった。私たちは、青葉や枯れた葉を押し分けてがさがさ音を立てたり、割れたクリーム色の殻から美しく熟したマロニエを撒き散らしたり、あちこちでドングリやブナの実を拾ったりしながら進んだ。

そして、家に帰れば、蝋燭が灯される前にしゃがんでおしゃべりをし、勉強部屋の薪の火で栗の実を焼きながら、独りぼっちになったはずの mare［池］がどんなに暗く、寂しく、寒々しているかを考えるのは楽しい、とても楽しいことだった――entre chien et loup、*フランス語で言うところの黄昏時に――テレーズが茶道具を用意し、情報を伝え、パンとバターを切る間に。母は上の応接間でハープを弾いた。揺れる木々のてっぺんの背後、西側からの濡れたような最後の赤い光が消え、カーテンが引かれ、灯りがつき、食欲が解き放たれるまで。

私は、囚われの身でたった一人、ここに座って、あの甘美な時代のあらゆる出来事を回想するのが好きだ――幸福な記憶の疼きに苛まれるために。偉大な詩人たちは、私のような者にとって、それ以上に大きな悲しみはないということを私たちに教えてくれる。この悲しみの中の悲しみの極致は、私の喜びおよび慰めであり、これまでずっとそうだった。そして、私はそれを若さや健康や富や名誉や自由と交換する気はなかった。至福の子供時代そのものを何度も繰り返すためならば、その場合にのみ私はこの

至福の思い出を引き渡すことにするだろう。

・　・　・　・　・　・

私たちも気楽で楽しいことばかりというわけにはいかず、いとこたちと私はかなり懸命に務めを果たさねばならなかったが、そのためうんざりすることがよくあった。私の親愛なる母君は、最初の段階から私を学問の神童にすべく全力を尽くしていたのだ。彼女は私にイタリア語を教えようとした。彼女は英語やフランス語と同じくらい流暢（りゅうちょう）にその言語を話した（イタリアで人生の大半を過ごしたからだろう）。私は『エルサレム解放』*をその両言語に翻訳しなければならず――未完成のままになっている課題だが――、また『快活な人』と『沈思の人』をミルトン風のフランス語に、『ル・

＊フランス語で言うところの黄昏時……entre chien et loup は、直訳すると「犬と狼（おおかみ）の間」。これで「夕暮れに、日暮れに」の意となる。

＊『エルサレム解放』……『エルサレム解放』はタッソの叙事詩。『快活な人』『沈思の人』はミルトンの詩。『ル・シッド』はコルネイユの悲喜劇。ピノックは、おそらく教育者のウィリアム・ピノックであろう。いずれも、十歳前後の子供にはなかなか厳しい課題である。

シッド』をコルネイユ風英語に翻訳する必要があった。それからマスターすべきものとしてピノックのギリシャ・ローマ史があり、もちろん聖書もあった。毎週日曜日には集禱文、福音書、使徒書簡を暗記する必要があった。そう、これはすべて楽しいことではなかった。

教えることは彼女の喜びだったが、ああ！　学ぶことは私の喜びではなかったのだ。私たちはお互いにたくさんのため息を相手に負担させることになったが、おそらくそれだけにいっそうお互いを愛してもいた。

それから私たち、いとこたちと私は、朝、向かいのサンドー氏の所へ行った。フランス語文法、ラテン語フランス語翻訳、ギリシャ語フランス語翻訳を習うためである。しかし、週六日中午後三回、パリのケンブリッジ給費生であるスレイド氏が、私たちが朝学んでいたラテン語とギリシャ語を英語化（および無効化）するため、フランス人がそれらとその音量*をどんなに残念なものにしていたのかを示すためにやって来た。

おそらくギリシャ語とラテン語の音量は、英国産の贅沢品——上流社会テストにすぎない——で、文字hのように、軽率な詐称者の揚げ足を取るための、我々自身の発明になる小さな落とし穴であろう。でなければ、当時、フランスの教育はそれはもう悲しいほどに安価で、学校教員たちはそのような奇抜な余分品を考慮に入れる余裕が

なかったのである。それは、その価格では考慮されるべきものではなかったのだ。

フランスでは、覚えておいてほしいが、王と八百屋が自分たちの息子を同じ学校に通わせていたのである(その学校はたまたまサンドー氏のものではなく、またサンドー氏の学校はほとんどが八百屋で、王はいなかった)。パブリック・スクールは皆一様に、ベッド代、食事代、授業料で年三十ポンド程度だった。

その結果、ラテン語は、排他性に起因する区別がなく、貴族的な趣が完全に欠乏して、学者にも無学者にもたいへん心地よく慰めとなるようなものになった。お金のかかるイギリスのパブリック・スクールのシステム（とイギリスのアクセント）だけが、ラテン語という死語を伝えることが可能なのである。フランス語が死語になったとき、私たちはそれ以前にはなかったような洗練をそれに添えることだろう。すでにそのようにしている人もいるくらいである。

これが（おそらく）、最高のフランス人作家たちが、私たちがしているような、ホラティウスやウェルギリウスからの、美しく、人口に膾炙（かいしゃ）し、その場面にふさわしいようなよくある詩行を用いて、教訓を与えたり、自分の物語を装飾したりということを、ほとんどしない理由であろう。そしてまた、ラテン語がフランス語会話にほとん

＊音量……ここでは母音の長短のこと。

ど引用されない理由でもあろう。あちこちのため息をついているくたびれた売り場主任を除いて、だが――

売れ残りの絹を巻き上げながら「Varium et mutabile semper femina!［いつだって気まぐれで移り気なのだ、女って奴は！］」と言ってみたり、春の最初の晴れた日曜日の朝、アニエール行きの鉄道切符を取りながら「O rus! quando te aspiciam!［おお田舎よ！いつになれば私は君を見るのだろうか！］」と声高（こわだか）に言ってみたり。

しかしまあこれは脱線で、スレイド氏からだいぶ離れた所をさまよってしまった。

古き良きスレイド！

私たちは、大通り門外の石柱に座って、曲がりくねった通りの、遠くのとある角に彼が現れるのをよく

「古き良きスレイド」

見張ったものだった。

緑の燕尾服、固いシャツのカラー、ナンキン木綿のチョッキの袖ぐりに突っ込まれた平らな親指、内側を向いた長い扁平足、赤みがかったマトンチョップひげ、頭の後方に載った帽子、きれいで清潔で若々しく実直そうなイギリス人顔――ついに彼が現れたとき、その様子は同情を感じるようなものではなかった。

時折、彼にとっては残念だっただろうが、その教授期間中、病気や家事が彼を拘留し、我々の中心で教鞭を執ることがかなわない日があった。彼がやって来るのを見張っても無駄なことが徐々に分かってきて、それを確信したときに、我々が経験した無上の幸福ときたら、あまりにも深すぎて、言葉やら行動やら外に向かってする何らかの表明やらのいずれでも表現できないほどであった。その幸福を味わうには、石柱に座ってそれが次第に心を覆っていくままにすれば十分であった。

そうした無上の幸福の機会は、ほとんどないごく稀なものであった。たいそう立派な英語教師のたまの欠勤と天使の訪問とを比較することはたぶん不適切だろうが、私たちはそれをそう感じていたのだ。

＊いつだって気まぐれで……「いつだって気まぐれで……」はウェルギリウス『アエネーイス』から、「おお田舎よ！……」はホラティウス『談話集』からの引用。

欠勤の後、彼は翌日の午後にその埋め合わせをした。良心的なイギリス人だ。そのことは、親たちにとっては十分に公正なことであったが、私たちにとってはそうではなかった。そのとき支払われる、午後の半分のわずかな貸し付けの利子としては、何と余計な厳しさだったことか！　忌まわしく、硬く、角が取れ、磨かれて艶があり、重い木製で、実務的なイギリス製定規で、インクの染みが付いた指関節をどれだけ叩かれたことだろう！

英語は何もかも忌まわしい――親たちが、私たちがあまりに好んで使いすぎると思っていた表現である――、そう考えることが、当時の私たちの癖だった。

しかし、私たちには、この聞き捨てならない感情に対する言い訳がないわけではなかった。パッシーに**別の**イギリス人一家がいて――プレンダーガスト家、私たちよりも古い家系だった――、その家は、親たち（とおじおばたち）は中年、祖母は故人、子供たちは成人していた。私たちはその一家とお近づきになる栄誉を得られなかった。しかし、それが彼らの不幸だったのか、私たちの落ち度だったのか（またはその逆だったのか）は分からない。前者であることを期待しよう。

彼らは私たちとは逆のタイプで、私が言うべきではないのかもしれないが、そのタイプはあまりにも魅力に乏しいものであった。おそらくそれは、フランスの漫画家た

ちがワーテルローの復讐をしようと目論んだ、我が同胞のカリカチュアの元になったものかもしれない。堅苦しく、傲慢そうで、軽蔑的。出っ歯、高い鼻、長い上唇、引っ込んだ顎。鈍く、冷たく、無感覚な、利己的そうな、緑色の目。その目は、カワカマスみたいに右にも左にも向かないけれども、彼らが罪など犯したこともないとでもいうようなイギリスの独善の誇りに包まれつつ闊歩するときに、高い位置から静かに見下ろすのであった。

そういったものが急に目に入ると（特に日曜日）、あらゆる枢要徳は直ちに憎むべきものとなり、尊敬の念は逃げるべきものになった。その滑らかにひげをきれいに剃った清潔さも、あまりに清教徒的に攻撃的だったため、石鹸を考えることさえ強い嫌悪感を催させることになった。

（店で）フランス語を話すときのアクセントは、セラスキア夫人のように音楽的で甘美で同情的ではなく、それどころか野蛮でグロテスクで、嫌らしく「ongs」「angs」「ows」「ays」を伴うのだった。態度は威圧的で疑り深そうで軽蔑的だった。そのときそばにいる私たちは、大声の横柄な英語を聞くことができた。長身で姿勢がよく、外見上は崩れていないのに雰囲気をぶち壊す人間のように、不吉で陰気で空虚なカーニバルの仮面のように、退屈で陰鬱で面白くない笑い者のように見え、ワーテルローはいつか

パッシーにおいてさえ許される日が来るのだろうが、プレンダーガストにはそんな日は**決して**来ないだろうと感じられた！

私は世間からあまりにも遠く離れて生きてきたのでよく知らないのだが、こういう古いイギリス人のタイプ、この「険悪*で、見苦しく、恐ろしく、不気味で、不吉な昔の鳥」みたいなタイプは、別の、もう少し魅力がある鳥――ドードー――と同じように、絶滅しているのかもしれない。そうなれば、我が国はもっと優雅になっているだろう。

しかし、当時は若者がしがちなようにやや性急に推論したため、私たちは、イギリスはプレンダーガストでいっぱいに違いなく、そこには行きたくないと考えるようになった。

この一般的なイギリスの

「不吉な昔の鳥たち」

忌々しい物事には、私たちがわずかに例外としたものがあったことも事実だが、そのリストは長いものではなかった。お茶、マスタード、ピクルス、ジンジャー入りクッキー、そして何よりも、素晴らしい御馳走として、また善行の報酬として週に一度私たちに出された、パッシーのバターと非常によく調和するおなじみのイギリス・パンの塊。これはとにかくおいしかった！　だが、常に困難とジレンマがあった――バターを塗っただけにするか、「カソナード」（フランスのブラウン・シュガー）を加えて食べるか、である。

ミムジーは考えがはっきりしていて、フランスのブラウン・シュガーを付けるのが好きだった。彼女がそこにいなければ、私は自分のスライスの半分を彼女のために取っておき、カソナードを注意深く塗ってやったものだった。

一方で私たちは、フランスのあらゆるものを忌々しさとは逆のものだと思っていた――私たちが知っていた全フランス少年を除いては。サンドー氏の学校にいた二百人ほどと、それからパッシーにいた全少年（同じような者はほかにも大勢いて、彼らはサンドー氏の所に通って**いなかった**）とで、私たちはパッシーの少年を全員知っていた。そのため私たちは、善良で、古風で、無愛想で、愛国的な、イギリス的偏見のた

＊険悪で、見苦しく……ポーの詩『大鴉』からの引用。

めの素材を完全に奪われたわけではなかった。

フランス少年たちは、お返しに、私たちを忌々しいと考えたり、時々どう考えているのかを表現したりしないわけではなかった。特に、通りを遊び場にしていた小さな品のない少年たち――voyous de Passy「パッシーの不良たち」――がそうだった。彼らは、私たちの白いシルクハットと大きなカラーとイートンジャケットを嫌い、私たちを「ご立派な畜生めら」と呼んだ。彼らの先祖がジャンヌ・ダルクの時代に我々イギリス人をそう呼んでいたように。彼らは時々石を投げた。それから衝突があり、不作法なフランス少年の鼻が血を流し、卑劣なフランス少年の脚が逃走し、イギリス少年たちに追いつかれると、「おいおい、うわわわ――ママン！」というひどい哀哭（あいこく）が上がった。

時には勝てなくて、ある鍛冶屋（かじや）によって**私たちの**鼻の方が出血させられることもなかったとは言わないが――いつも同じ若い鍛冶屋だ――ボワタールである！

こういうことをするのは若い鍛冶屋と相場は決まっている――あるいは若い肉屋だ。もちろん、最終的には、グレート・ブリテンの名誉のため、私たちのうちの一人が、その後相手が決して胸を張れなくなるほどひどくぶん殴ってけりをつけた。それは一匹の猫をめぐってのことだった。それは、あるクリスマス・イヴの黄昏時、パッシーとグルネルの間にある「白鳥の島」で起こった（猫を救うには遅すぎた）。

私はこの戦いの英雄だった。「今やらなくてどうする」。私はそう思い、激怒し、狂人のように敵に襲いかかった。アルフレッドとチャーリーによって保持された戦いのリングは、実に奇妙なことに、プレンダーガスト家の二人の男性に手伝われたのだった。彼らは、その一連の経過につい関心を寄せてしまうほど、そうとう我を忘れていた。マッジとミムジーはといえば、傍観

「積年の恨みを晴らす」

し、怯え、そして魅了されていた。

それは長い時間はかからず、ホメーロスあるいは『ベルズ・ライフ』紙にさえ書かれるに値するほどのものであった。それが、私がそのことを書かない理由の一つである。二人のプレンダーガストは、それが続いている間はずいぶん楽しんでいるように見えた。終わったとき、彼らは再び我に返り、何も言わずにつかつかと歩き去った。

・　・　・　・　・

年齢を重ね、賢くなればなるほど、私たちはムードン、ヴェルサイユ、サン＝ジェルマン、その他の楽しい場所に探索場所を広げることが許された。デュフォ通りにある有名な「乗馬学校」で乗馬を正式に習った後、借りた馬に乗ってそこへ行く。

セーヌ川の楽しい夏の水浴び場で泳ぐこともあった。それは「水泳学校」という堂々とした名前で呼ばれていて、私たちは「la coupe［抜き手］」（私たち以外のイギリス人が、それまであまり扱うことができなかった泳法）の名人になり、逆さ飛び込みの繊細な全「nuances［ニュアンス］」――「la coulante［滑らかに］」「la hussarde［粗野に］」「la tête-bêche［互い違いに］」「la tout ce que vous voudrez［あなたがしたいように］」――に

おいてもそうなった。

また、私たちはパリでくつろいだりもした。特に古いパリで。

例えば、セントルイス島があった。中庭と庭園の間に荘厳な古い邸があり、厳格な石の門と高い壁の背後では、著名な判事や弁護士たちが威厳ある隠遁生活を送っていた――法服の貴族たちだが、かつて、いにしえの時代には、さらに偉大な剣の貴族たち、十字軍や、おそらくブリアン・ド・ボワ・ギルベール*のようなテンプル騎士団が住んでいた。

それに、あのさらに有名な別の島、シテ島。パリ発祥の地であり、ノートルダム大聖堂が、オテル・デューの憂鬱で灰色で癩病状の壁と汚れた茶色の屋根の上に、その二つの塔をそびえさせていた。

調和や遠近法から完全に外れた痛ましく荒れ果てた古い家々が、大聖堂の控え壁の間の古い蜘蛛の巣のように巣を作っていた。正面の小さな広場（ノートルダム大聖堂前の広場）の両側には、高いスレート屋根と精巧に細工された鉄のバルコニーのある古い石の住居が建っていた。ロマンティックな歴史があるように見えたので、私は飽きもせずそれらを見つめ、どんな歴史があるのだろうとあれこれ思いを巡らした。今

*ブリアン・ド・ボワ・ギルベール……ウォルター・スコットの『アイヴァンホー』登場人物。

考えてみると、まさにその住居の一つはオテル・ド・ゴンドロリエであったに違いない。これまでで最も考証が正確だった歴史家*によれば、かつて哀れなエスメラルダが、踊ったりタンバリンを鳴らしたりして、美しい少女フルール＝ド＝リス・ド・ゴンドロリエやその貴族の友人たちを楽しませた家である。エスメラルダはその誰よりも、美しさ、純粋さ、善良さ、行儀作法においてずっと上だった（ただし、彼女は無学で、流浪のジプシー少女であり、卑賤の出であった）。そこで、その貴族の娘たち全員と身持ちの悪い射手隊員の前で、自分の山羊によって裏切られ、それが最終的な破滅の元となった。彼女は軽率にも、「フェビュス」という最愛の名の綴り方を山羊に教えてしまっていたのだ。

すぐ近くにモルグ*があり、この陰惨な建物は、偉大なる銅版画家メリヨンが、当時の私にとってそれが帯びていたのと同種の――今、思い出という魅力的な目でそれを見ているのと同じような――、何かこの世ならぬ恐ろしげな魅力を帯びさせるよう工夫したものである。

モルグ！　その名前にはまさに、何と破滅的な鼻声的響きがあることか！

（健全な心のイギリス少年になったみたいに）中で恐ろしいものをさんざん見つめた後、ポンヌフのアンリ四世の騎馬像までは目と鼻の先だった（ちなみに、ポンヌフと

はパリで最も古い橋である）。彼、女たらしの王様は、長い尾の軍馬にまたがって微笑みを浮かべていたが、そこは歴史的な川の両岸のちょうど真ん中、最も歴史的な場所だった。そして彼は、*梨型の顔とマトンチョップひげを持つブルジョワ王のパリには背を向けていた。

そして、二つのオート麦袋の間の*ビュリダンのロバのように、優柔不断に、呪文で縛られたかのごとく立ち尽くしてしまうこともあった。ポンヌフの南北のどちらの側にも、魅惑的な貧民窟が見つかるからである。よそのそれよりも何もかもが魅力的で、それらはバルザックの『風流滑稽譚』（言わせてもらうなら、私は何年も後まで見た

＊歴史家……オテル・ド・ゴンドロリエ、エスメラルダ、フルール＝ド＝リス・ド・ゴンドロリエ、フェビュスなど、このあたりの名称はすべてユゴーの『ノートルダム・ド・パリ』に出てくるものである。「歴史家」というのはピーターのジョークであろう。

＊モルグ……当時、ノートルダム大聖堂の裏にモルグ（死体公示所）があって、本物の死体を一般公開していた。

＊梨形の顔とマトンチョップひげを持つブルジョワ王……ルイ＝フィリップ一世のこと。在位一八三〇～四八年。顔が梨型だと言われ、そういうカリカチュアもあった。

＊ビュリダンのロバ……ビュリダンは十四世紀のフランスの哲学者。等距離に同じ量の餌袋を置かれたロバは、どちらも選べず餓死してしまう、という例え。

ことも読んだこともなかった）へのギュスターヴ・ドレによる忘れがたい挿絵のように、曲がりくねって坂を上がったり下がったり、回り込んだり、見えたり隠れたりしていた。

暗く、狭く、静かで、寂れた通りは、後に悪夢となって現れることになるだろう――その中央には溝が、両側に沿ってずっと小塔（しょうとう）と石柱がある。てっぺんに小さな古い頂銃眼を備えた高い幻想的な壁（défendre d'afficher［貼り紙禁止］であった）があり、そこには篠懸の木とライムの大きな枝が張り出し、その背後にはルイ十世喧嘩王の時代とその前にまで遡（さかのぼ）る灰色の古い庭があった！　それに、街角には古い錆（さ）びた鉄の文字で刻まれた暗示的な名前*――「ヴィドグセ通り」「クープ＝ゴルジュ通り」「ヴィエイユ・トリュアンドリ通り」「ネールの塔袋小路」等々。これらはユーゴーやデュマの一章のように、想像力に訴えかけるものだ。

そして、これらに行くには、長く、曲がりくねった、にぎやかな道々を通るのだが、その道は、この上なく不規則に旗が立てられ、青いブラウス、茶色いウーステッドの上着、木製の靴、赤と白のコットン製ナイトキャップ、ぼろと当て布などを身に着けた、奇妙で愉快な人々でいっぱいだった。かわいらしく誇らしい足、きらめく目、かぶり物のない自分の髪だけの、優雅極まりない少女たち。派手で太った醜女（しゅうじょ）たちは、

皆微笑んでいた。痩せた醜女たちは、ぞっとするような邪悪さあるいは悲惨さを顔に浮かべていた。早熟で機知に富む、貧民窟の小さな男女の悪童たち。そして、こんな身障者たちも！　陽気なせむし、元気いっぱいの盲目の物乞い、愉快な四つん這いの麻痺患者、自分の腫れ物についての冗談や洒落を飛ばす気の毒な瘰癧患い。屈託なく、愛想のよい、腕や脚のない物乞いの奇形人たち。彼らは腹ばいでぬかるみを這うようにして、あるアングラのワイン店から別のそれへと移動していた。青い顎の聖職者たち、裸足の茶色い修道士たち、それに、物静かな慈善会のシスターたち。爪竿を持ち、籠を背負って、あちこちに姿を見せる陽気なくず物商。あるいは、胴鎧を着けた騎兵、巨人のような騎銃兵、快活で小さな「アフリカの狩人」、高くそびえる黒いbonnets à poil［近衛兵帽］をかぶって並んで馬を歩ませる勇敢な憲兵の二人。あるいは、哀れを催すような、赤いズボンを穿いた二人の兵士。彼らは田舎から出てきたばかりの新米の徴集兵で、無垢で明るい目と麦藁色の髪とそばかすのある茶色い顔をして、手を繋いで、全部の豚肉屋の店を見つめながら歩いていた――たまに豚肉屋の奥さんのこ

＊暗示的な名前……「ヴィドグセ」は「すり、泥棒」、「クープ＝ゴルジュ」は「危険な場所、賭博場」、「ヴィエイユ・トリュアンドリ」は「年寄り乞食たち」の意。「ネールの塔」はアレクサンドル・デュマの戯曲『ネールの塔』でも知られる。

とも見つめていた！

それから、無産階級者の結婚の行列――不格好な晴れ着に身を包んだ花嫁と花婿を先頭にした――では、全員一緒に騒々しく歌を歌っていた。また、貧者の葬列、あるいは布に覆われた担架には、オテル・デューへ至る道中、同情的なまなざしが後に続いた。また、鈴と蝋燭を伴う臨終の聖餐（せいさん）の一行は、最期の瞬間に苦しむ低階級者の枕元へと向かうのだった――それが通り過ぎていくとき、私たちは皆帽子を脱いだ。

そして、連続的な音の伴奏。金属音を立てるチャイム、行商人の路上での呼び売り声、marchand de coco［*ココ売り］の鈴音、太鼓、狩猟ホルン、バレル・オルガン、どこにでもいるペットのオウム、ナイフ研ぎ、フライドポテト屋の売り声、そしていちばん楽しいのがプードルの毛刈り人とその息子で、*ストロペーとアンティストロペーよろしく、小さな男の子が甲高い金切り声で一分ごとに「父は三十スーでプードルの毛をカットして、手に負えない雄猫の扱いを引き受けることもできる」と叫び声を上げると、父親は厳かなバスの声で「息子は本当のことを言っている――L'enfant dit vrai!」とうなるのだった。

そして、雑多な不協和音を突き抜けて、ピシッピシッという絶え間ない鞭の音、平らでない石の上を揺れながら進む重い車輪の音、元気のよい小さなフランスの馬車馬

の足音といななき、その馬のたくさんの鈴と、その御者の罵りと毒づきと「hue! dia! [右だ！　左だ！]」という声が奏でる音楽！　これらは皆、心を奪われるほど魅惑的だった。

・　・　・　・　・　・

そこから家――静かで無邪気で郊外のパッシー――までは、岸壁伝いに、何も見逃さないように（憲兵が見えるまで）、道中ずっと石の防御壁のてっぺんか、さもなくばリヴォリ通り、シャンゼリゼ、サン＝クルー大通り、ミュエット通りなどの大通りを歩いた。何と美しい散歩だったことだろう！　この使い古された古い世紀のうちの快い四〇年代前半の、この非力な筆記者が十代に届く前の、その当時のあのような場所がほかにあっただろうか？

ああ！　パッシーの高台から見ると、足元に横たわるようなパリよ。たくさんの小尖塔、尖頂、ゴージャスな金色のドームがありながら、また凱旋門、シャンゼリゼ、シャ

＊ココ売り……「ココ」は、ココナッツミルクに似た、レモン入り甘草水。

＊ストロペーとアンティストロペー……ギリシャの頌歌における合唱の掛け合い。

ン＝ド＝マルス、ノートルダムの鐘楼（しょうろう）、はるか彼方の七月革命記念柱、廃兵院、ヴァル＝ド＝グラース、マドレーヌ寺院、いつまでも記憶に残るような美しい噴水たちのそばに、オベリスクのエキゾチックな先端がそびえるコンコルド広場などを有するパリよ。

たくさんの橋が架けられた曲がりくねった川が流れており、その川はいつも同じような状態で、満ち干のある我がテムズ川とは違って、常に満水状態であった。そのすぐ向こうには荘厳で閉鎖的な郊外が、新たに裕福に、最近高貴になった人々の絶望が広がり、ほぼ一軒おきの家にフランスの歴史の一ページのように読める名前が記入されていた。さらに遠くには、愉快で邪悪なカルチェラタン、厳粛なソルボンヌ、パンテオン、植物園。こちら側の中間の距離にはルーヴル宮殿があり、そこにはフランス王たちが何世紀もの間住んでいた。チュイルリー宮殿には当時の「フランス王」が住んでおり、さらにもう少しの間住み続けた。

私はこのすべてを知っていて、愛していた。そして、太陽が私の背後に沈んでいき、遠くの無数の窓が血のように赤い西の光彩を反映するときのそれらが、いちばん好きだった。

親愛なるパリよ！

そう、小さな少年のときにそれを歩き回った、ということが重要なのだ――好奇心が強く、何でも知りたがり、疲れを知らない、小さなイギリス少年（すなわち、母親も子守も付き添わない小さな少年）のときに。想像力いっぱいで、その鋭い感覚は、人生の朝のものである鋭敏さを伴う。鷹の視覚や、蝙蝠の聴覚や、ほとんど猟犬の嗅覚のような感覚を。

実際のところは、あのパリを理解し、真価を認め、完全に楽しむためには、敏感さと公正さの両方を備えた鼻が必要であった――ガスや電気で明るくされ、現代科学による下水排水を備えたオ*スマン男爵のパリ、ではなくて、バルザックやウージェーヌ・シューや『パリの秘密』の「古き良きパリ」――（かつて貴族たちが絞首刑にされた）鉄の絞首台に吊り下げられたほの暗いオイル・ランタンのパリ、手押し車の水を売り、バケツ一杯一ペニー――飲用、洗濯用、調理用などあらゆる用途に使う――で、（au cinquième［六階の］）家のドアにそれを配達した水運搬人のパリ、である。

たくさんの通りがあった――それらは少しも魅惑的でもロマンティックでもなかった――そこではどの家も、書かれることのなかったその家の記録が家の外側の空気中に漂っていた――記録全部が味わいのある快いものではなかったが、常に興味と魅力

＊オスマン男爵……十九世紀後半にパリの都市改造計画に取り組んだ。

で満ちていた！

その家の馬車門を通過する際に、その背後や階上にはどんな人が住んでいるのかを嗅ぎ分けることができた。その人たちが何を食べ、何を飲み、何を生業（なりわい）にしていたか。家で洗濯をするのか、獣脂や蝋を燃やすのか、コーヒーにチコリを混ぜるのか、グリュイエールチーズを過度に好むのか――これは、世界でいちばん大きく、安く、質素で、手ごわいチーズである。オイルやバターで揚げるのか、焼きすぎのオムレツとガーリックをサラダに入れるのを好むのか、カシスを漬けたブランデーやアニゼットをリキュールとしてちびちび飲むのか。鼠が走り回っているのか、その駆除のために猫や鼠捕りを使っているのか、どちらも使っていないのか。季節の菫や撫子（なでしこ）やアラセイトウを買ったのか、それらを長く保存しすぎたのか。金曜日に赤インゲンや白インゲンやヒラマメだけで絶食したのか、教皇から特免をいただいたのか――あるいはひょっとしたら、教皇の特免さえなしで済ませたのか。

それというのも、こういう内情を暴露してしまうようなものとは、複雑に混ざり合った悪臭を放つ音の倍音だったからだ。

私には、その臭気の根音をはっきり定義することはできない――いつも存在し、いつも同じもの。たくさんの世帯に差し迫っている災いへの警告で満ち満ちたもの。彼

らはその波を気に留めない。ノートルダムの大鐘（おおがね）（パリのビッグ・ベン）から重要な行事のときに響きわたった音のように、ゆっくりと、だが確実に迫ってくる、不吉なもの。華やかな街中を、昼夜を問わず押し寄せるもの――隅々まで浸透し、最も人目につかないくぼみにまで氾濫（はんらん）し、祭台をまさにその香で浸すもの。

"Le pauvre en sa cabane où le chaume le couvre
　Est sujet à ses lois;
Et la garde qui veille aux barrières du Louvre
　N'en défend point nos rois."

「藁葺（ぶ）*き小屋の貧しい人は
　それの支配を受けている。
そしてルーヴルの門番は
　我らが王をそれから少しも守らない。」

＊藁葺き小屋の……マレルブの詩『娘さんの死についてデュ・ペリエ氏への慰め』の一節。

そしてここで、私はこれを書きながら、かすかで、ほとんど知覚できない幽霊のような香りの感じ――ただのノスタルジックな幻想、混ぜ合わされた、一般的な、合成的な、包括的な香りの幻想にすぎないが――、五十年前の「Tout Paris［パリ全体］」の抽象的な嗅覚的象徴が、過去から私のもとに再び訪れてきているのを感じる。私は、その素朴な豊かさと生気のすべてを、喜んで肺の奥まで吸い込むだろう。香りは、楽音と同じく、記憶の本質を純化する類い稀なるものであり（これは驚くほど素晴らしいフレーズだ――私はこれが何らかの意味を持つことを願っている）、過ぎ去った場面や日々の魅力を思い出すためには、香りはそれ自体が魅力的である必要はないのである。

ああでも！　香りは自由に甦らせることはできないのだ、この詩のようには。

「かつて愛した
　甘く柔らかい旋律を！」

おお、古いフランスの匂いをハミングしたり口笛で吹いたりできれば！　そうすれば、パリのあらゆるものを、甘美な帝*政前のパリを、一吹きで呼び起こすことができ

るのに！

・　・　・　・　・　・

こんなやり方で、（当時その偉業の名声がフランス全土を埋め尽くしていた）三銃士のような私たち三人の小さな少年は、後年、遠く離れ、ばらばらになったときにそれについて反芻（はんすう）するため、甘美な思い出をかき集め、積み重ねた。

あのbande joyeuse［愉快な一団］全体――老いも若きも中年も、少佐殿からミムジー・セラスキアに至るまで――は、私以外は全員――我が親愛なるマッジも除く全員――、もう死んでしまった。マッジはとてもかわいくて屈託のない人だったが、私はあれ以来彼女とは会っていない。

・　・　・　・　・　・

＊帝政前……八五ページに「四〇年代前半」とあったので、このピーターの少年時代は一八四〇年代前半のことであり、よって「帝政前」とは「第二帝政前」のことである。

以上、私は自分が操れる限りの速さであの幸せな時代を素描しようと試みた。その時代は、私が十二歳のとき、唐突に、極めて悲劇的に終わりを迎えた。

我が親愛なる愉快で楽天的な父は、自分の発明した安全ランプの爆発で、一瞬にして死んでしまった。そのランプはサー*・ハンフリー・デービーのものに取って代わり、一財産作ることになるはずのものだったのに！　何という冷酷な運命の皮肉だろう。

彼は自分の成功を信じており、最後にはお金が入ると確信していたため、アンジュにあるマリエールという名の魅力的な小さくて古い領地（お似合いの魅力的で小さくて古い大邸宅がある）を得ようと交渉中だった。それは彼の先祖の所有だったもので、我が家は名前をそこから取った（私たちはパスキエ・ド・ラ・マリエールで、完全に古き良き家系だったのだ）。私たちは田舎貴族として、永久にフランス人として、私たちをフランスの伯爵や男爵や貴族にしてくれそうなアンリ五世シャンボール伯が再び自分の地位に戻るまでの一時しのぎの、父権的で梨顔のブルジョワ王のもとで、自分の土地に住む予定だった――何のためかは誰にも分からない！

悲しみのあまり気が転倒していた母は、この悲惨な事故が起きたロンドンに向かい、やっとそこに着くと死産児を出産し、ほぼすぐに死んだ。こうして私は、一週間足らずで孤児になり、無一文になった。というのも、父はこのときまでに自分のお金と母

の資産を全部使ってしまっていて、さらには借金でひどく苦しんでいたことが判明したからだ。私は若すぎ、悲しみに打ちひしがれすぎて、悲惨な死別であるということ以外の何も感じられなかったが、自分の生活様式に莫大な変化がもたらされることがすぐに明らかになった。

母方の親戚であるイベットスン大佐（裕福な人だった）がパッシーにやって来て、私のために最善を尽くし、近隣で生じていた負債を支払い、私の悲惨な状況を解決してくれた。

しばらくして、彼およびほかの家族によって、私は彼と共にロンドンに戻り、彼の価値基準に従って、そこで最良の身の振り方を決めるべきだということが決定された。

かくて、私の幸福な幼年時代は、それが始まったのと同じように、ライラックとバイカウツギが強く香り、トンボや蝶やマルハナバチで鮮やかに彩られた美しい六月の朝に、終わりを迎えた。私の別れの言葉は（私にとって）胸の張り裂けるようなものだったが、愛情を呼び起こすこともそれを感じることもでき、それが私の悲哀の埋め合わせであったことを示した。

「Adieu, cher Monsieur Gogo. Bonne chance, et le Bon Dieu vous bénisse,（さようなら、ゴー

＊サー・ハンフリー・デービーのもの……デービー灯は一八一五年に発明されていた。

ゴーさん。お幸せに、神があなたを祝福されますように)」とフランソワおじさんとおばさんが言った。涙が少佐の鷲鼻から口ひげの上に滴り、今やほとんど白くなっていた。

セラスキア夫人はその優しい胸に私をしっかりと抱き締め、何度も何度も祝福してキスをし、私の顔に温かい涙を降らせた。ロンドンへと向かう過程で、私たちの馬車がトゥール通りに入ったときに見た最後の人影は、彼女のものだった。イベットスン大佐は大声でこう言った――

「何とまあ！　おい小僧、おまえのことをかなり気に入っていたような、あの美人の若い大女は誰なんだ？

「バッシーよ、さらば」

いやはや！　なあ若造ドン・ジョヴァンニ、俺がおまえの立場ならいろいろしてやったところなんだがな！　それと、長い緑のコートと赤いリボンを着けた見目のいい爺さんは誰だ？　老兵だと思うが、ほとんど紳士みたいだった。あんなふうになれるのはごく少数のフランス人だけだ！」

イベットスン大佐とはこういう人だった。

そして、彼が話すと同時に即座に、私の守護者と恩人への不機嫌で冷たい嫌悪の小さな滴が、彼の声、顔つき、顔の表情、ものの言い方から、突然私の意識の中に滴ってきた――決して拭き取られることのない滴が！

とてもか弱いミムジーはどうしていたかというと、彼女はあまりにも悲しみに打ちのめされていたため、外に出てくることも、ほかの人たちのように私にさよならを言うこともできなかった。これは後で聞いたことだが、このことが彼女を、それまでにないほどひどく長い病を患わせることになった。彼女が回復したとき、その美しい母親はもういないことを知ることになった。

セラスキア夫人はコレラで亡くなり、フランソワおじさんとおばさん、ペレ夫人、そしてナポレオン時代の囚人の一人（少佐殿ではない）、私たちが知っていたほかの何人かの人々、我が家の使用人テレーズも同じ病気で死んだ。献身的なテレーズには、

そのお返しに私たちは全力で看病した。私がノートルダムの大鐘と比較したあの悪臭の警鐘が、警告し、また警告し、さらに警告したが、無駄だった。

私立療養所は解散となった。少佐殿とその友人たちは仮釈放され、失われた指導者が戻ってきて――まずフランス共和国の大統領として、後に彼らフランス人自身の皇帝として――留まる、彼らにとってよい時期が到来するまでの間、どこかよそへ行ってねぐらを得た。その後は、さらなる仮釈放は必要なかった。

私の祖母とプランケットおばとその子供たちは怖がってトゥールへと避難し、ミムジーは父親と一緒にロシアへ行った。

こうして幸福すぎた七年間は悲惨な終焉を迎えたため、

"Le joli lieu de ma naissance!"

「自分が生まれた美しい場所！」

は、今はもうないのである。

第二部

私の外面的生活の次の十年間は、自分自身にとってさえあまりにも面白くないので、できるだけ素早く済ませてしまうつもりである。私としては、読んでも退屈であることが判明するだけで終わるのではないかと懸念している。

イベットスンおじ（当時私は彼をそう呼んだ）は私を気に入り、教育と、社会人としての出発と、私を「紳士」――「イギリス紳士」――にするための手配をした。その一方で、私は自分の名前を変え、彼のそれを取り入れなければならなかった。理由は知らなかったが、彼は私の父のあの名前を嫌っていたようだったからだ。おそらく、彼は私の父を長年、生涯にわたって傷つけ、父の方は常に彼を許していたからであろう。まことにもっともな理由だ！　またおそらく、彼は私の母が少女だった頃に三回プロポーズして、三回拒まれたからであろう！（三度目の後、彼は七年間インドに行ったが、その

出発の直前に父と母は結婚し、一年後に私が生まれたのだった）

そういうわけで、ムッシュー・ゴーゴーことピエール・パスキエ・ド・ラ・マリエールはピーター・イベットスン氏となり、グレーの上着の学校であるブルーフライアーズに行って六年間――特にあの時代、人生で最も重要な一部――を過ごした。

私はその服装を嫌い、環境を嫌った――背後に大きな病院、牛市場の残酷な臭い、酔っぱらい、汚物――ほかの建物といえば食肉解体場、安酒場、あるいは質屋などで、時々月曜日の朝に公開絞首刑を行った陰鬱な向かいの刑務所が何よりも嫌だった。この陰気な監獄は、夢でパッシーの親愛なる父と母とセラスキア夫人を見たいときにしょっちゅう出てきて、私を悩ませた。

最初の一、二学期の間、彼らは私の思考の中にずっと存在し続け、私はいつも彼らの横顔を机や石版や書き方帳に描こうと試みていた。描いたものから類似点がとうとう消えてなくなったように思われるまで。次に私は少佐殿を描いた。彼の横顔が完全に困惑させられるものになり、描くのが不可能になり、生きたもののようではなくなるまで。それから私はほかのものに頼った。フランソワおじさんと、そのいつも変わらぬ bonnet de coton［綿の縁なし帽］と藁を詰めた木靴。犬のメドール、揺り木馬、その他の動物たち。パリから私を引き離した乗合馬車。重いジャックブーツを履

き、輝く帽子をかぶったお下げ髪の伝書使。彼らは、白い乗馬用ズボン、銀のボタンで覆われた尾の短い青いコートを着て、チュイルリーとサン＝クルーの間を行き来する途中のパッシーを、首の周りに鈴を付けられ、尾を折り上げられ、いななきを上げている、エルギン・マーブルズの馬の頭のように美しい頭をしたグレーの小さな雄馬に乗って通り抜けていた。

私のスケッチでは、彼らはいつも同じように見て、歩いて、駆けていた。左向き、あるいは地図上で言うなら西向きに。少佐殿、セラスキア夫人、メドール、乗合馬車、伝書使たちは皆、満場一致で西を目指していた――どうやら、全員がロンドンへ行こうとしているようだ。彼らを熱愛している私の面倒を見るために。

少年たちの中には、このスケッチを褒め、保存した者もいた――大きい少年の何人かは、私が理想化した（！）セラスキア夫人の横顔を評価してくれたものだった。まつげがたっぷり一インチもの長さがあり、目は口の寸法の三倍もあった。こうして、私はしばらくの間芸術家として名を成した。しかし、それは長くは続かなかった。私の手法は限定的だったからである。間もなく別の少年が学校にやって来て、彼は多様性と対象への利益において私を凌駕した。彼はどちら向きでも同じように簡単に横顔を描くことができた。現在彼は著名な学士院会員で、昔の腕前をほぼ維持しているよ

うである。（＊）

＊注――私はここで、いとこの「ブルーフライアーズでの」生活の詳細な説明を含む数ページを省略しました。そこには彼が先生方や少年たちについて書いた人物描写（実物よりも良く書いているとは限りません）も含まれています。その人たちの多くはまだ存命中で、有名になった人もいます。とはいえ、それらのスケッチは、名前も一緒に出すのでなければ特に興味を引くものにはならないでしょうし、それをするのは多くの理由から得策ではないでしょう。さらに言えば、私が除外した中には、彼のその後の人生や人格の発達に影響があったものは多くありません。

マッジ・プランケット。

・　・　・　・　・　・

こういう具合で、私の学歴は全体として幸福でも不幸でもなく、また何らかの形で頭角を現すことも、（どちらかと言えば好かれた方だと思うが）素晴らしかったり長続きしたりする友情を育むこともなかった。一方、恥ずべき振る舞いをしたこともな

いし、知っている者の中に誰一人として敵を作ることもなかった。珍しいくらい背が高く、非常に頑強に成長したことを除けば、（芸術的な手法が枯渇した後の）私は、周囲に見えていたに違いない少年像よりは平凡な少年で、パブリック・スクールには決して行かなかった。ブルーフライアーズでの私の外面的生活についてはこれくらいにしておく。

しかし、私は自分の内なる世界を持っていた。その首都はパッシーであり、その動物相と植物相はリージェンツ・パークやロンドン動物園に劣るものではなかった。**私はまだ夢を見る方法を学んでいなかったのだが**、昼間はそれを考え、夜はそれを夢見るのはすてきなことだった。

しかしながら、すぐに別の、あまり排他的でない領域ができて、私はそれをあの過ぎし日の別の少年たちと共有した。自由と歓喜の領域、そこでは鹿猟師のライフルの不吉な射撃音が聞こえ、私は*チンガッチグックと彼の気高い息子――ああ！　モヒカン族の最後の一人だ――の友人だった。ロビン・フッドとフライヤー・タックが陽気

＊チンガッチグックと彼の気高い息子……ジェームズ・フェニモア・クーパーの五編の連作小説『革脚絆物語』の登場人物。「気高い息子」はアンカス。とすると、その前の「鹿猟師」は、この連作の共通主人公ナティ・バンポであろう。

に騒ぎ、緑に茂る森の中でリチャード獅子心王と拳を交えた。真夜中に、絞首台があってジプシーが出没するトゥレーヌの森を、貴婦人の幸せな従者であるクウェンティン・ダーウォード*の横に並んで馬で駆けていく……ああ！　私は騎士の夢を見ていたのだ！

幸福な時間と国々！　その懐かしさを知るためには、霧深いロンドンの中心でグレーの上着を着た男子生徒である必要がある。

実際のところは、ロンドンにメリットがないわけではない。サム・ウェラー*がそこに住んでいたし、チャーリー・ベイツや魅力的なアー

騎士の夢

トフル・ドジャーもいた――ディック・スウィヴェラー、彼の愛らしい侯爵夫人もいた。彼女は*レベッカ・オブ・ヨークや魅力的なダイアナ・ヴァーノンとともに、私の忠誠を分け合った人である。

あの当時にイギリス少年であること、そしてこのような友人たちを愛することは素晴らしいことだった！　だがまた、フランス少年であることも素晴らしかった。パリのことを知っていること、真にフランス的な感じ方――それに言語――を持つこと。実際、バイリンガルの少年――生まれつき二か国語を話す少年（特にフランス語と英語）――は、ある稀な特権を享受している。もし二つの母国出身で、二つの母国のうち彼がたまたまいない方の国への望郷の甘い思いに時々耽ることができるとしたら、それは男子生徒（彼は男子生徒になるはずなので）にとって悪いことではない。そしてブルーフライアーズの回廊で『三銃士』を、あるいはフランスの、非常に多くのリ

＊クウェンティン・ダーウォード……ウォルター・スコットの同名小説の主人公。

＊サム・ウェラーが……このあたりはディケンズの作品の登場人物。サム・ウェラーは『ピクウィック・ペーパーズ』、チャーリー・ベイツとアートフル・ドジャーは『オリヴァー・ツイスト』、ディック・スウィヴェラーと侯爵夫人は『骨董屋』。

＊レベッカ・オブ・ヨークや……レベッカ・オブ・ヨークとダイアナ・ヴァーノンは再びスコットの作品のヒロイン。前者は『アイヴァンホー』、後者は『ロブ・ロイ』。

セの運動場の代用となる、どんよりとほこりっぽい刑務所の運動場で『アイヴァンホー』を読むことも！

傾聴しなくても、彼は毎日の退屈な言語を自分のあらゆる周囲で耳にし、学友たちの、嫌というほどほどよく知っている声のやかましい叫びを耳にする――彼らの甲高いソプラノ、声変わりしたバリトン、蛙みたいなバス！　彼らは学校へ行き、泣きそうな声、元気のない声、わめき声を発する。ディック、トム、ハリー、あるいはジュール、エクトル、アルフォンス！　その声はどれほど漠然として、些細で、陳腐であることか――あまりにも耳慣れた音である。それでも、言語的にはまったく異なるけれども、同じように慣れた言葉の流れであるがゆえに、そのうっとりした目を通じて静かに意識に流れ込んでくる本の言葉に、その音たちは何と付加的な魅力を与えてくれることだろう！　贅沢な精神的排他性と自己隠遁の感覚が、その対照によって二培完全なものにされるのだ！

そして、この不思議な魅惑が申し分なくすっかり感じられるためには、両言語がともに母国語でなければならない。どんなに完璧でも、後天的に身に付けたのではだめなのだ。すべての単語が、あまりにも遠い昔であるためほとんど記憶されていないような個人的過去に、深く根ざしている必要がある。それぞれの音や印刷されたときの

様相が、子供っぽい家庭の記憶を豊富に含んでいなければならない。それを甘美なものに、新鮮なものに、強力なものに、土の香りのするものにする、数え切れない、言いようのない、金で買えない連想性に富んでいなければならないのだ。

おお！　ポルトス、アトス、ダルタニャン――私がどんなにあなたたちを愛したことか、そして不滅の従者たち、プランシェ、グリモー、ムースクトン！　あなたたちは、私が深く愛した言語を、何と上手に、才気煥発に話すのだろう――ブルーフライアーズの優れたフランス語教師、ラルマン先生をさえしのぐほどに。先生は、いちばん不規則な仮定法の動詞を、まるで羽のように――空気みたいに軽いもののように――軽やかに使いこなしていたのだ。

次にモンテ・クリスト伯がやって来た。彼は私に、憎しみと復讐という恐ろしい教訓を（教えすぎるくらい）教えてくれた。それに、『*パリの秘密』『さまよえるユダヤ人』など。

しかし、私の初恋の人、哀れなエスメラルダの静かに紡がれる忘れられない物語が、私の涙でかすんだ目とかき乱された魂の深奥を初めて通り過ぎたときに、私が感じた

＊『パリの秘密』『さまよえるユダヤ人』……前者は八七ページに既出。いずれもウージェーヌ・シューの小説。

ものを表現できると考えられる言葉は、いずれの母語の中にもない。（＊）彼女の残酷な運命は、私の学校での生活の最後の学期を、同情と悲哀と憤慨でいっぱいにした。それは、私の学校生活中で最も重要で、最も厳粛で、最も画期的な出来事だった。私はそれを読み、読み直し、さらにもう一度読んだ。あれ以来、私はこの作品を読むことができていない。かなり長いのだ！　それでも、我ながら何とよく覚えていることか、当時はどれほど短く感じられたことか！　そして、おお！　有意義に使われた時間は、何と短いことだろう！

＊『ノートルダム・ド・パリ』ヴィクトル・ユゴーによる。

あの謎めいた言葉「Ἀνάγκη！［アナンケー！（＝必然、宿命）］」を、私は自分の全部の本の遊び紙に書いた。机の上にそれを彫った。反響する回廊でそれを詠唱した！いつの日かノートルダムに巡礼に行くことを誓い、すべての穴や隅にそれを探し、自分の目でそれを読み、自分の人差し指でそれを感じられるようにと思った。

それから、鬼婆（おにばば）のような老女が暗い貧民街で歌っているあの恐ろしい予言の歌――私はこれにもどれほど取り憑かれたことだろう！　何か月もの間、不安に苛まれた自分の意識からそれを振り払うことができなかったのだ。

"Grouille, Grève, grève, grouille,
File, File, ma quenouille:
File sa corde au bourreau
Qui siffle dans le préau.

「動け、悲しませよ、悲しませよ、動け、
紡げ、紡げ、我が糸巻き棒よ。
中庭で口笛を吹く
死刑執行人の縄を紡げ。」

・　・　・　・　・　・

"Ἀνάγκη! Ἀνάγκη! Ἀνάγκη!"

「アナンケー！　アナンケー！　アナンケー！」

・　・　・　・　・

そう。フランス少年であったのはほんの数年間だけだったが、その価値はあった。

特にブルーフライアーズで定常的に過ごしたときの休暇の間に、私はそのことに気づいた。というのも、近くのホルボーンにはフランスの貸本図書館があって――楽園だったからだ。それは昔は裕福だった感じのよいフランスの老婦人によって維持され、彼女は私にとても親切で、私が求めた本をすべて貸してくれるとは限らなかった！

こうして私は、堕落した時代のこれらの光の魔法使いたちに

"NOTRE DAME DE PARIS"「[ノートルダム・ド・パリ]」

抗しがたく魅せられて、学校生活のほとんどを夢見がちに過ごした。さらに年長の妖術使いたち――ホメーロス、ホラティウス、ウェルギリウス――の声には、まったく耳を貸すことなく。この人たちと親しくなるために私は学校に送られたというのに、ほかの劣等生たち同様、彼らに耳を塞いだことに結果的に後悔したときには、もはや遅すぎた。

・　・　・　・　・　・

そして、私が夢を見るのは昼だけではなかった――夜も夢を見たのだ。私の眠りは夢に満ちていた――恐ろしい悪夢、絶妙に美しい光景、不可解な回想に満ちた奇妙な場面。従来の人間の夢全部がそうであったように、何もかもが曖昧で支離滅裂だった。**というのは、私はまだ夢を見る方法を学んでいなかったからである。**

広大な世界、恐ろしく美しい混沌（こんとん）、絶え間なく変化する人生の万華鏡、これらはあまりにも影がちでぼんやりしているため、多忙な、覚醒した心には永続的な印象を残すことができない。あちこちで恐怖や歓喜のより鮮明なイメージを伴い、人はそれを、奇妙な驚きと疑問とともに、数時間は覚えている。コールリッジが、ダルシマー*を奏

でるアビシニア人の乙女（魅力的で最も独創的な組み合わせだ）を覚えていたように。

全宇宙が人間の脳の中にある――少なくとも人間の脳が保持できる限り。おそらくそれはほかのどこにもない。睡眠が意志を弛緩させ、注意をそらすための世俗的な諸状況がない場合――義務も、苦痛も、それを人に強要する喜びもない場合――、人が乗っていない幻想という馬がはみを噛んで制御を振り切り、全宇宙が狂気に走り、その野性の意のままに私たちを振り回す。

言葉では言い表せない偽の喜び、言葉では言い表せない偽の恐怖と苦悩、ぼんやりと、ガラスの中に見えるようにしか見えない奇妙な幻影たちが、わけも分からずお互いを追いかけ合い、薄明かりの領域を横切り、私たちの曇って不完全な意識の暗いくぼみを通ってかくれんぼする。

そして、偽の恐怖と苦悩は、言葉で言い表せないとしても、覚醒している人間全員にあまりにも頻繁にあるような、あるいはもっと悪いケースもあるような、本物の恐怖や苦悩ほどには悪いものではないのである。しかし、言葉で言い表せない偽の喜びの方は、それらが続いているほんのわずかの間、考え得るあらゆる人間の至福を超越するのだ！　私たちは目覚め、訝しみ、そのような超人間的な無上の歓喜が基づいたように思われる、かすかなよりどころを思い起こす。もし無上の歓喜が存在しないの

なら、そして脳がそれを感じる神経を持っていないのなら、そのよりどころなど何になるだろう？

激しい苦痛の神経には実に豊かに恵まれていて、苦痛と悲嘆のためには実に見事に組織されている哀れな人間の性質は、喜びへの備えの方は貧弱なものにすぎない。

私たちは、来世のためには、どんな地獄も発明してこなかった！　結局、実際のところはどんな地獄も、自分と他人の両方のために、本当に実に小さな創意工夫のみを費やして、こちらの世界を頻繁にそれに変えてきたのだ！

おそらく、最も大物かつ最も無知蒙昧な愚か者たちが、最高の地獄製造者だったのだろう。

私たちの天国のうち最高のものがお粗末でいいかげんな概念でしかないというのに、それでも私たちのうち最も崇高で最も賢い者が、それを飾って美しくしたり、そこでの生活を送る価値があるように思えるものにしたりするのに最善を尽くしてきた。私たちの経験の範囲を超えて想像したり発明したりすることは、まず不可能である。

さて、偽物だが言葉で言い表せない喜びを伴う私の（多くの人に共通する）これらの夢は、人間の脳内の隠れた能力、これまで思いもよらなかった、無上の喜びという

＊ダルシマーを奏でるアビシニア人の乙女……コールリッジの詩『クーブラ・カーン』に登場。

活動していない潜在能力が存在し、おそらくいつか開発され、覚醒者も睡眠者も等しく全員の手が届く範囲内に置かれる日が来る、ということの証拠ではないだろうか？

思いのままに到達でき、強度や持続時間において（例えば）坐骨神経痛の発作に相当するような、言葉では言い表せない喜びの感覚は、私たちがその条件下で生きている悲惨で一方的な状況を、均一なものにするのに役立つことだろう。

・　・　・　・　・　・

だが、男子生徒だったとき、私が夢見ることがなかったことが一つある――すなわち、私と、たいまつを持っているもう一人とが、ある日、申し合わせにより、脳の神秘的な洞窟を探検することで幸福を見いだし、以前は無秩序でしかなかった場所に秩序の基礎を作り、その非現実的で荒廃した儚（はかな）い幻想の全領域を、そこに駆け込もうとする全員が到達できそうな、現実的で安定した居住できる世界へと進展させるであろうこと、である。

・　・　・　・　・　・

ついに学校を永遠に去る日が来て、ホプシャーのイベットスンおじを訪ねた。そこで彼は、自分の土地に新しく快楽的な豪邸を建てているところだった。一、二年前に相続した古い家は、もはや彼には十分ではなかったからである。

北海沿いの面白みのない海岸で、岩も崖も桟橋も木もなかった。波が打ち寄せるための冷たい灰色の石さえなかった――砂以外は何もない！――ブルジョワ的な海とでも言おうか、最高の気分のときでも魅力がなく、激怒しているときでもたいして怖くはない。そのブルジョワの海が雇い、あまり気前よく報酬を与えているとは思えない、たまに見つかるわずかな漁師に対して以外では。

内陸も、事情はほぼ同じだった。その田舎はずっと灰色だと思っていた。見て、緑であることに気づくまでは。あのとき、もし老いて賢くなっていたのなら、それについてはもう考えず、視線を己の内面に向けたところである。そのうえ、雨が絶え間なく降っているようだった。

しかし、それは田舎と海だった。ブルーフライアーズとその回廊に続く――ニューゲート、セントバーソロミュー、スミスフィールドに続く。

結局、魚を釣ったり、海水浴をしたり、田舎を馬で走ったりすることはでき、少し

後には猟犬を追うことさえできた。そのことは、私がフランスの仕立て屋のように乗馬していると思い、私にそう言って、完璧に乗馬している魅力的な若い女性たちの面前で、ふざけて私のまねをしたおじの恩恵を受けていなければ、比べものにならないほどの喜びになったところである。

実際、以前のものと比べるとそれ自体は天国だった。私を紳士――イギリス紳士――にするためのイベットスン大佐の努力がなかったら、もっとずっと長くそのままだっただろう。

紳士とは何か？　それは威厳ある古い名称である。しかし、どういう意味なのか？　あるときは、ある男性について、彼は紳士だ、と言うことは、私たちが考え得る最高の名誉称号を彼に授けることである。たとえ私たちが王子のことを話しているとしても。

またあるときは、ある男性について、彼は紳士ではない、と言うことは、彼がいるような人間集団にはふさわしくない、社会的のけ者という烙印（らくいん）を押すことであると言ってよかろう――たとえ雑貨小間物商が、別の同業者について話しているだけだとしても。

紳士とは**誰**なのか、そして誰が**そうではない**のか？

魔王もそうだったし、ジョン*・ハリファックスもそうだった。彼らを最もよく知る人々を信じるならば。それに、故サー・エドワード・ブルワー、リットン伯爵等によれば、「ペラム*」という人もそうである。そして確かに、まるで**彼**は当然そのことを知っているかのように思われた。

そして、私は別の人間になることになっていた。イベットスン館の、――を引退した大佐、ロジャー・イベットスン殿に従って。そして、彼もまたあたかも知っていて当然であるかのように確かに思われた！　その語は、（「私」に話しかけるとき）絶えず彼の唇にあった。女王陛下の任務を負う代わりに、まるで働かなくても暮らせるだけの財産を得たばかりの、美容師の助手になったかのように。

この授業講座は、私がロンドンを離れる前に、彼が私を自分の仕立て屋に送ってくれたことにより、十分快適に始まった。彼らは美しいスーツを何着か仕立ててくれた。特にイヴニング・スーツは、ああ、私にとって一生ものだった。グレーの上着の学校の制服の後に続くそれらは、自由と成年男性の輝く世界への入門のようだった。

イベットスン大佐――私の普段の呼び方ではイベットスンおじ――は、私の母のい

＊ジョン・ハリファックス……ダイナ・クレイクの『紳士ジョン・ハリファックス』の主人公。

＊ペラム……エドワード・ブルワー＝リットンの『ペラム、あるいはある紳士の冒険』の主人公。

とこであった。私の祖母のビダルフ夫人は、彼の父親、故イベットスン助祭長の姉妹である。非常に敬虔で学のある模範的な聖職者で、良家の出であった。

しかし、彼の母親（助祭長の二番目の妻）は、メンドーサという名のたいへん裕福な質屋の一人っ子で、女子相続人であった。ポルトガル系ユダヤ人と言われ、さらに静脈にわずかに色の付いた血が流れていると言われていた。実際、この遠いアフリカの家系は、イベットスンおじの厚い唇、大きく開いた鼻孔、黄色い白目と大きな黒目——特に、ロンドン最高の靴屋と彼自身の両方に多大な苦労をかけた彼の長くて広くて肉厚のかかと——などに、依然として顕現していた。

その他の点では、その醜い顔にもかかわらず、彼は非常に背が高くて頑健な体格をしていたため、兵士のような特徴的な雰囲気がないわけではなかった。彼はコルセット、それに若はげだったため素晴らしいウィッグを着用していた。帽子を片側にかぶっていて、それは（私の無教養な目には）かなり**「洒落者」**のようには見えたが、あまり**紳士**のようには見えなかった。

帽子をかぶって片目の上で粋に傾けても、まだ「紳士みたいに見える！」

何とかなる、と言われる。かつてそれをして、今もまだやっている！　たぶんそれは、たいして高尚な達成ではない——だが、その程度のものでも、着用者には社会的

才能と肉体的才能との何かしら稀な組み合わせが必要となる。そして、ユダヤ人ないしアフリカ人の血を持つことは、その一つであるようには思われない。

イベットスン大佐は、何でも少しだけすることができた――スケッチしたり（とりわけ穏やかな海に浮かぶ蒸気船と、その美しく濃い煙が水に反映している様子を）、ギターを奏でたり、フランスやイタリアの小唄を歌ったり、上流社会向けの娯楽詩を書いたり、ド・ミュッセを引用したり――。

"Avez-vous vu dans Barcelone
Une Andalouse au sein bruni?"

「*バルセロナで見ましたか？
褐色のアンダルシア人を」

彼は、可能な場合はフランス語を話した。イギリス人馬丁に話しかけるときでさえそうしてしまうことがあり、そんなときは急に気づいて自分の軽率さを謝罪した。英

＊バルセロナで……ミュッセの『アンダルシアの女』冒頭。

語を話すときも、彼はそれをごく安っぽいフランス語の常套句や慣用句で刺繍したものだった。「Pour tout potage［全部ひっくるめて］」「Nous avons changé tout cela［我々はそういうこと全部を変えてしまった］」「Que diable allait-il faire dans cette galère?［一体全体何だってそんなガレー船に乗り込んでしまったのだ？］」等。あるいはイタリア語の「Chi lo sa?［誰が知っている？］」「Pazienza!［仕方ない！　我慢しろ！］」「Ahimè!［ああひどいな！］」、またラテン語の「Eheu fugaces［ああ、つかの間だ］」「Vidi tantum!［私は見た！］」等。こういうことができるのも、彼はイートン校の生徒だったからである。私でも全部理

"PORTRAIT CHARMANT, PORTRAIT DE MON AMIE..."
「［魅力的な肖像、我が友の肖像……］」
【訳注】マリー・アントワネットの詩

解できたことから考えれば、かなり安っぽいラテン語だったに違いない！　彼は、ドイツ語とギリシャ語には一線を引いて踏み込まなかった。幸いなことに、私もそうだ。彼は独身で、家の中の整頓状況は乱れていたが、そのことに立ち入るつもりはない。だが彼の家は、あの時点では良いものになる見込みがあるように思われた。

彼の建築家リントット氏は、並外れて小柄な人で、非凡な才能に溢れ、完全に自分の力だけで地位を築くのに成功していた。彼は私の友人になり、タバコの吸い方やジンの水割りの飲み方を教えてくれた。

彼は自分の仕事をうまくやった。しかし、夕方になると、彼は自分にとっての適量よりも多く酒を飲み、彼の唯一無二の詩人であるシェリーを激賞するのが常だった。

＊ごく安っぽいフランス語の常套句や慣用句……「Pour tout potage」は、直訳すると「ポタージュ全部で」。「Nous avons changé tout cela」は、モリエールの『いやいやながら医者にされ』の第二幕第四景スガナレルのセリフ。「Que diable allait-il faire dans cette galère?」は、エドモン・ロスタンの『シラノ・ド・ベルジュラック』第五幕第六景のシラノ、あるいはモリエールの『スカパンの悪だくみ』第二幕第十景のスカパンのセリフ。「一体全体何だってそんな危ないことにかかわりあってしまったのだ?」の意で使われる。

＊またラテン語の……「Eheu fugaces」はホラティウスの『歌集』から、「Vidi tantum」はオウィディウス『悲しみの歌』から。

彼は『ひばり』（彼の唯一無二の詩）を、h*をあやふやにした、ややロンドン訛り（コックニー）の発音でよく暗唱していた――

"Ail to thee blythe sperrit!
Bird thou never wert,
That from 'eaven, or near it
Po'rest thy full 'eart
In profuse strains of hunpremeditated hart."

「ようこそ、陽気な精霊よ！
そなたは鳥とは思えない、
天国かその近くからやって来て、
いっぱいの心を注ぐ
即興技法の豊かな歌声に乗せて。」

夜がゆっくり更けていくにつれ、彼の朗読は「低俗喜劇風」になり、アクセントと

ユーモアはまったく称賛すべきものになった。彼はロンドンの全俳優（私が見たことのある人は一人もいなかったが）をまねることができ、それがあまりにも上手なので、私は喜びと驚きで夢中になった。私たちが「イベットスン・アームズ」の彼の部屋で、一緒に座ってタバコを吸ったり酒を飲んだりしていたとき、彼が繰り広げるこのすべてを見る観客は、私以外にはいなかった。

私は愛情に感謝した。

さらにその後、彼は再び感傷的になったものだった。結婚生活の喜びや、リントット夫人の並外れた知性と美貌を、私に長々と話してくれた。初め、彼は彼女の心の美しさを私に説明し、「L・E・L」*やフェリシア・ヘマンズと彼女を比較した。次に彼は後退して、彼女の肉体的な完璧さを拠点とした。その点において彼女と比較できる者は誰もいなかった――が、述べるのは差し控えておく。

＊hをあやふやにした、ややロンドン訛りの発音……シェリーの詩は英語だが、ここでは小説の原文を載せた。『ひばり』原作の綴りは「Hail to thee blithe spirit! ／Bird thou never wert, ／That from heaven, or near it, ／Pourest thy full heart ／In profuse strains of unpremeditated art.」。比較すると、hが落ちたり加わったりしているのが分かる。

＊L・E・L……女流詩人レティシア・エリザベス・ランドンのこと。

彼はとてもうぬぼれが強かった。自分がすること、好きなこと、自分に属することは何であれ、世界のほかの何よりも優れていると思っていた。彼はほかの誰よりも賢かったが、リントット夫人は除いて、なのだった。彼は夫人の方が上であることを認めていた。その後は元気になり、また愉快な人になった。

実際のところ、彼の自己満足はまったく異常なものだった。そして、さらに異常だったのは、それが少しも不快なものではなかったことだ——少なくとも、私にとっては。おそらく、彼がとても小柄な人だったためだろう。あるいは、彼のその虚栄心のほとんどが、

「私は愛情に感謝した」

あまり強固な基盤を持たないように思われたためなのかもしれない。彼の虚栄心の強さは、私が彼について最も称賛していた才能ではなかった。またあるいは、虚栄心が顔を出すのは彼がいちばん酔っぱらったときで、愛想のよいほろ酔い状態がその欠点をかなり相殺したため、ということもありそうだ。さもなくば、彼が最も誇ったものが私が私自身について決して誇りそうもないことだったため、ということもあり得るだろう。他人においていちばん容赦できない虚栄心とは、自分がそれを意識しているか否かにかかわらず、自分自身が内心抱いているそれなのだ。

そのうえ、彼は私がそれまでで初めて会った道化者だった。何という贈り物！　彼は、人が自分と一緒に笑っているか自分のことを笑っているかを問わず、そうあろうとしたときにはいつでも道化者だったし、私はそのために彼を愛していた。この世で、まだ道化であろうとし、もうそれがうまくいかなくなることほど、痛ましいまでに哀れなものはない。

リントット鉱脈が掘り尽くされた瞬間、彼は話をやめて泣き始めるという判断力を持っていたが、それはそれで面白いものだった。それから私は彼が階上の自室に行くのを手伝い、彼は自分の服から飛び出して自分のベッドに入り、あっという間に眠ってしまったものだった。まだ小さな鼻から涙が滴り落ちている状態で――それさえも

面白かった！

だというのに、翌朝になると、まるでジンや詩や夫婦間の愛などなかったかのように、また戯れなどは死に値する罪ででもあるかのように、彼は厳格で、油断なく、疲れ知らずになるのだった。

イベットスンおじは、彼を建築家としては高く評価していたが、それ以外はそうではなかった。彼のことは単に活用しただけである。

「もちろん、あいつはひどい俗物だ。頭に**h**を付けないしな」（まるで**それ**が死に値する罪みたいだ）「だが、実に独創的だ――あの鐘楼を見てみろ――それにな、あいつは安いんだよ、なあボーイ、安上がりなんだ」

イベットスン・ホールからさほど離れていない美しい公園に、素晴らしい家が何軒か建っていた。しかしイベットスンおじは、名前や富や社会的地位においてその所有者たちと同等であるように見えたのに、私が知る限り、彼はその誰とも親密な仲にはならず、知人ですらなかった。彼はその人たちを軽蔑して、野蛮人だと言っていた――彼とは何の共通点もなかった人々を。たぶんその人たちも、この合いそうにない人間を知り得なかっただろう。特に女性たちは。というのは、男子生徒みたいな私でも、別の性別の人間に対する彼の態度が、必ずしもその人たちやその夫や父親や兄弟

たちを喜ばせるようなものではないということを発見するのに、長くはかからなかったからだ。彼の異性の見方は、まずまず十分なものだった。実際彼は、その女性の友人と知り合いの大半が、生涯*を通じて corps de ballet［コール・ド・バレ］や the demi-monde［ドゥミモンド］など――この世の礼儀作法を学ぶには最良の学校ではないと思う――に所属していたのだ。

一方で、彼は町に非常に親しくしている家族があった。医者、教会主管者、自分の代理人（体を壊した戦友で親友だった人で、給料を受け取ってからは彼を愛することをやめてしまっていた）らのそれである。彼はリントット氏と私をそれらのパーティによく連れていった。そして、彼はそのパーティの中心人物だった。

彼はフランス語の小曲を歌い、音楽的な声は出ないけれども、かなり上手なフランス語のアクセントを付けていた。またたいした急所もないような小さな逸話を話したが、フランス語とイタリア語だった（そのためその急所が外れることはなかった）。私たちは皆、わけも分からず笑い、称賛した。分かっていたのは、彼が領主であるということだけだった。

＊生涯を通じて……「コール・ド・バレ」は群舞の踊り子たちのことだが、この当時のバレエ界には売春も多く、暗にそれを指している。「ドゥミモンド」は高級娼婦界。

これらの楽しい機会において、気の毒なリントットの人を面白がらせる自信と能力は、完全に彼から去ってしまったようだった。彼はむっつりとして隅に座っていた。急進的で懐疑的で、また絶対平和主義の人であるというのに、彼は軍隊と教会の社会的地位にはひどく感銘を受けていた。

医者については、非常に怜悧で教養ある人物で、数マイル四方で最も学識高い人であったのだが、彼はほとんど何とも思わなかった。しかし、教会主管者、大佐、今はただの地所管理人である哀れな船長らは、敬意のこもった畏怖の念で彼を満たしたようだった。彼は、骨を折った甲斐もなく、船長夫人や教会主管者夫人、それにその特に美しくもない娘たちには、無慈悲に冷たく待遇された。彼女たちは、彼がどんな才能を隠し持っているのかなどほとんど考えもせず、彼を平凡な小男としか思っていなかった。彼は、彼女たちの音楽の譜めくり役にはまったくふさわしくないのだった。

間もなく、イベットスンが、ビール醸造者の未亡人であるディーン夫人にこの上なく熱を上げていることが、すっかり明らかになった。その人は実際、自他共に認めるたいへんな美人で、私もそう評価していたのだが、リントット氏だけは別だった。彼は言っていた。「へん、俺の妻を見てみろってんだ！」

彼女の母親のグリン夫人は、イベットスン大佐への称賛にかけては私たちの誰より

も上だった。

例えば、ディーン夫人が箸にも棒にもかからないようなよくある安っぽい小ワルツを演奏すると、グリン夫人は叫んだものだった。

「**いい曲じゃない？**」

するとイベットスンは言うのだ。「いいです！　いいです！　誰の曲ですか？　ロッシーニ？　モーツァルト？」

「あらまあ、違いますよ、大佐ったら。覚えていらっしゃらないの？　**あなたの曲ですよ！**」

「ああ、そうでした！　すっかり忘れていましたよ！」かくて、我らが偉大な人物によってなされたそのような天然の誤りに対し、ありきたりの笑い声と拍手とがどっと起こるのである。

「イベットスンおじのワルツの一曲」

まあ、私は演奏も歌もできなかったし、この頃にはもうフランス語よりも英語を話す方がずっと楽だと、特に自分たちの言語以外を知らない英語話者に対しては英語の方が楽だと感じるようになっていた。それでも、イベットスン大佐は時々、私のことをかなり誇りに思っているように見えたものだった。

「Deux mètres, bien sonnés!［二メートルは優に超えています！］」彼は私の身長をほのめかして言った。「et le profil d'Antinoüs!［それに、アンティヌスの横顔です！］」彼はu*の上の二つの点を外して発音するのだった。

その後は、もし彼が自分の夜会を心地よいものと感じたなら、また彼が知っているものを全部歌ったなら、あるいはまたディーン夫人が普段よりも愛情深く献身的な態度を示してくれたなら、さらには彼女の母親がピアノを弾くときに私が巧妙な譜めくりによって勲功（くんこう）を立てたなら、私たちが徒歩で家に帰るとき、彼は私に言ったものだ。「おまえは俺の評判を高めてくれた。おまえがdécrassé［洗練］を身に付けたら、たちまちこの世で最も優れた人物になることだろう。おまえは俺の仕立て屋でもう一着ドレススーツを作る必要がある。後ろの尾の部分を八分の一インチだけ長くしてな。おまえは俺の昔の連隊（第十一近衛ならず者隊）で任務を得るのがいいだろう。ものすごく優秀な騎兵連隊だ。そして世界を見て、心が張り裂けるような思いを味わうがい

い（我々の友人たちにきれいな妻と姉妹がいるのは理由がないことではない）。そして最後に、若く美しい爵位相続人の誰かと結婚する。俺が哀れな孤独老人になったとき、俺のための家を作ってくれ。俺のためには最小限のことをしてくれればいい。パンの耳、ワインと水のグラス、きれいなナプキン。部屋は二つで、古いピアノとわずかな良書があればいい。もちろん、イベットスン・ホールはおまえのものだ。あの家が俺がこの世で持っている全財産だ」

このすべては内緒のフランス語で――雲さえ私たちの話を聞かないように――、また血縁者どうしの親しいおまえ・俺呼びで語られた。私の方はそれで応じたいとは思わなかったが。

これはディーン夫人へのかなり真剣な結婚の意思を予示するものではないように思われ、彼女の母親を喜ばせることはありそうになかった。

あるいは、もし何かが彼を苛立たせたならば、あるいはもしディーン夫人がほかの誰かとやたらといちゃついたならば、はたまたもし彼が歌うよう頼まれなかった（か、

＊uの上の二つの点を外して発音する……Antinoüsは、フランス語の発音だと「アンティノユス」、üのトレマを外すと「アンティヌス」のようであろうか。アンティノウスは、古代ギリシャの美少年。ローマ皇帝ハドリアヌスの寵愛を受けたが、ナイル川で溺死した。

ほかの誰かが頼まれた）ならば、彼は、おまえはいつも客間を汚したり人の財産を食い潰したりする最悪の無骨者で、俺はおまえにうんざりだし恥ずかしく思っている、と、かなりきつい英語で私に断言したものだった。「なぜ歌えないんだ？　おまえはフランスの腰抜けクソ野郎か？　おまえの親父のクソ・ルラード屋は、ほかには何にもできなかったにしても、歌だけはそうとう速く歌えたもんだ、あのド畜生でも！　どうしておまえはフランス語で話せない？　イギリスのクソ野郎。何で茶とマフィンを配れない？　こん畜生！　グリン夫人は何だって二度ハンカチを落として自分で拾わなければならなかったんだ！　なあ、おまえは『部屋の反対側に』いたんだろう？　なら、おまえは部屋を跳ぶように**横切って**、そいつを拾い、紳士のようにきれいな言葉とともに彼女に渡してやるべきだった！　俺がおまえの歳だった頃は、女性のハンカチが落ちるのを**いつでもずっと**見張っていた――あるいは扇が落ちるのを！　俺は**一つも**見逃したことはない！」

それから彼は、私を銃の狩猟に連れ出した（イギリス紳士はスポーツマンであることが必要不可欠だったからである）――私たち両者にとって恐ろしい試練であった。

私が少しも殺したいと思わなかった鳴は、時々稲妻のように上昇して左右に飛んだものだった。それで私は撃ち損ねる――いつもそうだ。彼は、しょうもないフランス

人ミ*コーバーの息子だと言って私を罵り、次に自分が撃ち損じると烈火のごとく怒り出し、自分の犬を打ちのめした。私はそのポインター犬が大好きだった。一度、彼があまりにもひどく彼女を打ったため、私は激怒し、彼の広い背中に自分の二連銃の銃身両方の中身を叩き込んでやりたいという衝動にもう少しで屈してしまいそうになったことがあった。もし私が本当にそうしていたなら、結局は単なる事故と受け取られ、未来のたくさんのいざこざを取り除くことになっただろうに。

ある日、彼は野原で何かをつついている小鳥に私の注意を向けさせた――すごくきれいな鳥だった――私はそれをひばりだと思った――そして、この上なく嫌味なやり方で私に囁いた。

「そこを見てみろ、うすのろピーター。おまえがひざまずいて、音を立てずにこの門におまえの銃を楽な感じで載せて、注意深く狙いを定めれば、**止まっている**あの鳥を何とか撃てると思うんだが？　フランス人には**それが**できる奴がいるという噂だ！」

＊ルラード屋……「ルラード」は、一音節の中で素早く歌われる一連の装飾音。「ルラード屋」で技巧的な歌手のこと。

＊ミコーバー……ディケンズの『デイヴィッド・コパフィールド』に登場する楽天主義者。

私はやってみると言って、彼が言うように銃を載せ、二、三ヤード離れてその鳥の頭を注意深く狙い、心の中で出し抜けにこう言った。

「ようこそ、陽気な精霊よ！」

私は両方の銃身から発砲し（イベットスン

「ようこそ、陽気な精霊よ！」

への不慮の事故を恐れたためである)、鳥は当然飛び去った。

その後、彼は二度と再び私を狩りに連れ出すことはなかった。そして私は、自分が実は血を見ることに耐えられない人間であることに気づいて困惑した――特に自分によって流された血と、自分の娯楽のために流された血はだめだった。私、鹿撃ち名人ナティ・バンポの友人兼称賛者兼自称競争者で、モヒカン族の最後の一人と、頭の皮を剝ぐ彼の父親の親友である、その私が。

イベットスンおじと狩りに行っていた間に私の銃撃に倒れた獣は若い兎(うさぎ)だけで、まぐれ当たりもいいところだったが、イベットスンおじにはそうは言わないでおいた。

それを地面から拾い上げ、貧弱で小さくて温かくてほっそりした胸と、弱々しい肋(ろっ)骨の下にある心臓の最後の鼓動を感じ、毛皮の上に付いた血を見たとき、私は憐憫(れんびん)と恥辱と自責の念に苛まれ、心が壊れそうになった。そして、英国紳士になるためには、生きる価値が十二分にあると思われる幸福な生を送る、罪もない野生動物を殺害すること以外の道を見いだそうと、自分の中で話を付けた。

私は彼らを食べなければならないとは思うが、自分ではこれ以上彼らを撃つことはない。少なくとも自分の手は、今後は血とは無縁の状態にするべきだ。

だが、ああ、運命とは皮肉なものだった！

これらすべての結論として、彼は自分の青二才の甥を一人前にする仕事をディーン夫人に託すことにした。彼女は望ましい善意をもって引き受け、まずはダンスの方法を私に教えてくれた。次の狩猟家舞踏会で私が彼女と踊れるように、である。本番で、私はほぼ一晩中そのようにして無限の喜びと勝利感を味わい、私よりもはるかに上手に踊れるイベットスン大佐の反感を買った——それどころか、赤や黒のコートの多くの洗練された男性の反感も買うことになった。彼女はその晩の最高の美女と見なされていたからである。

ダンス・レッスン

当然のことながら、私は彼女に恋した、あるいは恋したような気になった。彼女の母親はひどく心配していたが、彼女は、一つには面白半分に、一つにはどうやら彼女が嫌悪するようになりつつあったイベットスン大佐を苛立たせるために、私をいちいち激励してくれるのだった。実際、彼がしばしば彼女のことを（あの英国紳士どもの訓練者、と）私に話す口ぶりからすると、彼は彼女に嫌われるという罰を受けるにふさわしかった。彼には彼女と結婚する意思は少しもなかった――それは確かだ。それでも彼は、彼女のことをこの辺りの噂の種にしていたのである。

ここで、イベットスンは、女性に対して致命的に抵抗できない熱狂に悩まされる人生を歩む、あの奇人たちの一人なのだ、と明言することもできるだろう。

彼は彼女たちを追いかけることに決して飽きることがなかった――思うに、それは色事それ自体への特別な愛のためではなく、ただ単に他人の目にドン・ジョヴァンニとして映りたいという願望からなのであろう。その部屋の中でいちばん美しい女性と隅で意味ありげに囁いているのを見られることほど、彼を幸せな気分にするものはなかったのだ。彼は、彼の馬鹿げたしつこさを喜ぶほど愚かでうぬぼれが強くて下品な一人の女性のために、十数人がまさに彼のその姿をひどく嫌悪し、それを十分はっきりと表明していたことに気づかないようだった。

この虚栄心は年とともに増加し、非常に危険な様相を帯びていた。彼は無分別になり、さらにいっそう悲惨なことには、彼は嘘をついたのだ！　死者――名誉ある、非難の余地のない死者――は、墓の中でさえ安全ではなかった。それは忘れられない侮辱への彼の復讐なのだった。

懇ろになってからその秘密を暴露する彼、懇ろになってもいないのに暴露する彼――彼のためには何を言うことができ、彼に対しては何がなされるべきだろう？

イベットスンはある日、この下劣な熱中を身をもって償ったのだが、それを彼にもたらした人間――意図的というよりも運の力であったことは事実だ――は、自分の心のどこを探しても、それに対する良心の呵責（かしゃく）や後悔を感じる気持ちが見当たらないままなのである。

・　・　・　・　・

そうこうしているうち、イベットスンと私の間でひどい口論が起こった。彼はあらゆる方法で私を呪い、困惑させ、口汚く罵った。そして、私の面前で父を罵り、最後には私を殴ったのである。私の方は、彼を殴り返さないよう十分に自制していたのだ

が、自分がかき集められるだけの威厳を保ちつつ、その場ですぐに彼のもとを去った。

こうして、私の短いイギリス田舎生活の経験は失敗に終わった――わずかな狐狩りと猟銃狩りと釣り、わずかなダンスと異性との戯れ。私にはこのすべてが合わないことを示すのに、どれも十分だった。

恥だらけのほろ苦い思い出だが、魅力がまったくないというわけではなかった。海と広々とした空と変化する田舎の天候の美しさがあった。それに、ディーン夫人の美しさも。彼女はイベットスン大佐が自分を笑い者にしようとしたことへの復讐として人前で私のことを笑い者にして、それにより、大佐は少なくとも九日間は近隣のお笑いぐさになった。

そして、私は両者に復讐した――考えたとおり、英雄的に。どこに英雄的行為があって、どこに復讐があるのか、あまりはっきりとは見えないのだが。

というのも、私はロンドンに逃れ、英国近衛騎兵団に入隊したからだ。私はそこに十二か月留まり、十分に幸せな思いをし、害悪よりもずっと良いことを学んだのである。

その後、私はお金を積まれて除隊となり、建築家で不動産鑑定人のリントット氏の徒弟になった。私の親族会議は、私に年九十ポンドを三年間与えることに同意した。その後は、全員が私と完全に縁を切ることになっていた。（＊）

＊注――いとこの兵卒としての短い経歴の説明は、全部省いた方がよいと思いました。それは主として、まったく偏見がないというわけでもない個人の記述を内容としています。彼は、学校でも軍隊でも、自分より上の権威に位置する人たちをまったく好まなかったようです。

とはいえ、私の夫の親友の一人である将軍が――私の哀れないとこが近衛騎兵団にいたとき第一連隊の旗手だった人ですが、その人が私への手紙にこう書いています。「彼のことはよく覚えています。連隊全体でも群を抜いて長身かつハンサムな若者で、限界知らずの体力の持ち主で、素行は良好で非の打ちどころがなく、頭のてっぺんから足のつま先まで完全に紳士でした」

マッジ・プランケット。

・　・　・　・　・　・

それで私は、リントット氏宅の近く、ペントンヴィルに小さな下宿を借りて、三年間新しい職業に懸命に取り組んだ。その間、私の外面的生活に何も重要なことは起こらなかった。その後、リントット氏は私を定額従業員として雇った。彼に私のことで

ペントンヴィル

不平を言うべき根拠があったとは思わないし、彼が文句を言ったこともなかった。自分には報酬分の価値があり、それ以上のものもあったと思うが、その分は得たことも要求したこともなかった。

私の方も彼に不満はなかった。虚栄心や短気さや利己主義やある種のけちくささといった小さな欠点はあるにしても、彼は善意の人であり、非常に賢い人だったからである。

彼の、妻の鑑（かがみ）だという人は、決して彼が言っていたような美人ではなく、そう思っているらしい彼以外は、誰もそうは言わなかった。

彼女は彼よりも少し年長だった。かなり大きい人で、どっしりして、厳格そうだが乱れた顔立ちではなく、かなり広い額を持っていた。幾分薄毛の傾向があり、色のない髪が顔の両側の飾り気のない巻き毛へと伸びている。威嚇（いかく）的な小さな髷（まげ）が後頭部にある。以前の彼女はユニテリアン派信者で、女教師だった。*ジョンソン博士のように

*ジョンソン博士……サミュエル・ジョンソンのことか？

かなり長い言葉遣いを好み、非常に批判的だった。

彼女の夫の、文法やアクセントの問題についての時折の怠慢は、そうとう彼女の気に障っていたに違いない！

彼女は、お日様の下のあらゆるものについて自分なりの考えを持っており、他人もそれを知っていて、自分と同じ考えを持つことを期待していた。それでも、彼女は思い上がってはいなかった。それどころか、気性の激しい謙虚な女性といったような人で、損なわれた柔和さを闘争的な美徳というレベルにまで引き上げていたという印象である。そして、自分の家でどうすれば女主人として実権を握れるかをよく知っていた。

しかし、このすべてをもって、彼女はリントット氏の優れた妻であり、素直で控え目な子供たち（父親を尊敬していた）に対しては献身的な母親であった。そういうわけで、妻のことをヴィーナスとディアナとミネルヴァが一体になった存在と思っていたリントットは、ペントンヴィルでいちばん幸せな男なのだった。

そして、彼女はおおむね私には親切で思いやりがあり、私はいつも彼女を喜ばせるために最善を尽くした。

そのうえ、彼女は私に古いスクエア*・ピアノをプレゼントしてくれた（いくら感謝しても、し足りないくらいの贈り物だ）。それは彼女の母親の元所有で、彼女の勉強

部屋で任務を果たしていたものである。リントットが彼女に新しいものを与えるまでは（彼女は最も厳格なクラシック・タイプの、高度に訓練された音楽家だったからである）。それは私の小さな居間の主たる装飾品になったが、部屋はそれでほとんどいっぱいになってしまった。私はその鍵盤で音符を学ぼうとし、母のハープ伴奏で父がよく歌っていた古い最愛のメロディの音を指一本で拾ったものだった。

自分で歌うことは、どうやら問題外のようだった。私の声（ただ話すだけで満足していたときは、それほど不愉快なものではなかったと信じているが）は、歌で自分を表現しようと努力したときはいつでも、毛布の下のウシガエルみたいな声になった。私の喉頭（こうとう）は、心の中でかなり正確に保っていた音を実際に出すことを拒絶し、結果は大惨事であった。

その一方で、私は心の中でなら極めて美しく歌うことができた。ある雨の日には、イズリントンのバスの中で、心中『*アデライダ』をシムズ・リーヴス氏の声で歌った——言語道断なことを言わせていただければ。それに、私が言うべきではないのだが、

＊スクエア・ピアノ……十八世紀から十九世紀前半に多く用いられたコンパクトなピアノ。

＊『アデライダ』をシムズ・リーヴス氏の……『Adelaida アデライダ』は不詳。ベートーヴェンの『Adelaide アデライーデ』か？　シムズ・リーヴスは十九世紀のテノール歌手。

私は彼よりも上手に歌うことさえあったのだ。自分自身に涙を流させたし――反対側に座っていた老紳士風の人が、私にいたく同情していたように見えたくらいだし。

私はまた、一度聴いた曲を覚えてしまう才能も持っていた。そしてその後ずっとその曲を正確に口笛で吹いたものだった――イベットスンおじのワルツの一曲でさえ！

このことで思い出すに値する例としては、こんなことがあった。ある夜、ギルフォード・ストリートで、（道の反対側でたった一人）遅れて付いてくる別の人と同じ方向に歩いていることに気づいた。その人は、ちょうど月が雲から現れるときに、口笛を吹く気になった。

彼は絶妙に口笛を吹き、さらに重要なことには、私が聴いたことのあるうちで最も美しい曲を完全に吹いたのだ。私は、まるでフル・バンドが伴奏するためにそこにいたかのように、その曲の転調も抑揚も、長調も短調もすべて感じ取ることができた。それほどまでに熟練した表現力ある口笛吹き、それが彼なのだった。

あまりにも魅せられたため、私は道を渡ってそれが何という曲かを彼に尋ねようと決心した――「命が惜しくば曲名を言え！」しかし、彼は四十八番で急に立ち止まると、私が謙虚な要求を申し出るよりも前に、自分の鍵で中に入ってしまった。

まあそれで、私は次の日の一日中、またその後何日にもわたって、曲名を調べもせ

ずにその曲を口笛で吹き続けた。ある晩、リントット家にたまたまお邪魔するまでは。私は（たまたまピアノに向かっていた）リントット夫人に、この曲を知っているかと尋ね、もう一度それを口笛で吹き始めた。私が喜び、驚いたことには、彼女はそれに最初から最後まで即座に伴奏を付けてみせたのだ（厳格な純粋主義者の驚くべき気さくさだ）。私の方も一音も間違えなかった。

「そう」リントット夫人は言った。「きれいだし、覚えやすい小品よね――すぐに人気が出るような」

ここで私は、この脱線話を読者に心から謝罪したい。だが、もし読者が音楽好きなら、私を許してくれるだろう。というのは、その曲はシューベルトの『セレナーデ』だったからだ。私はシューベルトの名前さえ聞いたことがなかったのである！

こうして正式に謝罪したことでもあるし、私はあらためて罪を犯して脇道に逸れ、ここでメロディの病気とでも言おうか、私が罹りやすい、無意識的音楽大脳作用と呼べそうな、おかしな強迫観念について触れておこうと思う。

私は、頭の中で何かしら旋律が鳴っていないということがないのである――一瞬も。それにいつも気づいているわけではない。もしそうなら、私はその存在に耐えられないだろう。私の脳のどの部分がそれを歌っているのか、というより脳のどの部分でそ

れがそれ自身を歌っているのか、想像もできない――たぶん、このほかにぴったりなことが何もない、蜘蛛の巣や材木でいっぱいの無用な片隅なのだろう。

それでも、これは決して止まらない。あるときはある曲が鳴っていて、またあるときは別の曲になる。あるときは歌詞の「ない」歌が、またあるときは歌詞の「ある」歌になる。それは時には、いわば表面近くにあって、ものを読んだり仕事をしたり、話したり考えたりしながら、私はそれを漠然と意識することがある。また時には、それが存在することを確認するため、私は自分の中に深く潜らなければならないこともある。その場合、少し時間をかければ、それを見つけ出して表面に持ち上げることに失敗したことはない。*それは例えば『ヴェニスの謝肉祭』である。それから私は再びそれを沈ませる。すると知らないうちに別の曲に変化する。こういう具合で、次の潜水を行うと、『ヴェニスの謝肉祭』が『Il Mio Tesoro［私の宝］』になったり『ラ・マルセイエーズ』になったり『プリティ・ポリー・パーキンス・オブ・パディントン・グリーン』になったりするのである。その間、聞こえることも気づかれることもない、この体内バレル・オルガンが鳴らしていた曲が何なのかは、神のみぞ知る。

時々それは、あんまりしつこく押し付けられて迷惑なものになるのだが、そうなると取り除く唯一の方法は、口笛で吹くか自分で歌うか、なのである。私は、例えば自*

分の慰めと快楽のために、『水鳥』や『涙よ、無益な涙よ』や『砕けよ、砕けよ、砕けよ』のようなお気に入りの詩を心の中で暗唱するかもしれない。すると、その間じゅう、行と行の間で、この大脳下の歌手の悪魔は、遠くの広場にいるさすらいのミンストレルのように、『チア！　ボーイズ！　チア！』や『トミー、メイク・ルーム・フォー・ユア・アンクル』（これらの曲には私は我慢できない）を歌詞やら伴奏やらもろもろ全部付きで、それでいて私が望むほどには十分に洗練されていないアクセントで、歌うことを主張する。そうすると私は暗唱をやめて、それを払いのけるために、口笛で『J'ai du Bon Tabac［僕は良いタバコを持っている］』を、まったく異なる調で吹かなければならないのだ。

しかし、ここで私は、この決して静まることのない自分の小さな声を、一応は弁護

＊それは例えば……『ヴェニスの謝肉祭』はイタリア民謡。『私の宝』は、たぶんモーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ』第一幕の、ドン・オッターヴィオのアリアであろう。『プリティ・ポリー・パーキンス・オブ・パディントン・グリーン』は、ハリー・クリフトンが作った流行歌。

＊自分の慰めと快楽のために……『水鳥』は五二ページに出ていた『水鳥へ』と同一か。『涙よ、無益な涙よ』『砕けよ、砕けよ、砕けよ』はテニスンの詩。ミンストレルの二曲は詳細不明だが、実在の曲であろう。『僕は良いタバコを持っている』はフランス民謡。

しておこうと思うのである。調音は常に完璧だ。それは理想的な時間を保ち、その特質は、ややか細くいくらか鼻にかかっており、そうとう独特なものなのだが、共感できないわけではない。それどころか、時には（イズリントンのバスでのように）、私はそれに、私が最近耳にした歌手の声をà s'y méprendre［それと取り違えるほど］そっくりまねするよう強要し、嫌悪されることのない影のような音楽を自分のために作り出すことができる。

また時には、それはまったく強要されることもなく、私が作った曲の心の中にあるメロディを、小さな即興を付けて声を震わせて歌う。それらは私には、しばしばとてつもなく美しく古風で趣あるものに思われる。だが、自分は自分で作ったものの公平な審査員にはならない。とりわけインスピレーションの熱気がある間は。それに、音符の書き方を学んだことがなかったため、私にはそれらを記録する手段もなかった。何という世界の損失！

ところで、この小さな声の主を見つけるまで、私はその後何年もかかった。**それは私の声ではなかったからである！**

•

•

•

•

•

•

このような私の中の珍しい特技と資産にもかかわらず、私は幸福な若者でも満足した若者でもなかった。が、そこにある人間の霊的なものに不満があるわけでもなかった。

私は自分の職業が嫌いだった。特別な才能を感じていなかったからで、進んで別のものに従事したかった――詩、科学、文学、音楽、絵画、彫刻。これ全部、生得の才能から見ればもっと自分にふさわしいと、私が甚だ恥知らずにも自任していたものである。

ペントンヴィルも嫌いだった。清潔だし道徳的だし上品だし、形、色、ロマンティックな伝統、地域的な魅力などの点で望ましいものがたくさん残っていたというのに。私はすぐにでもどこかほかの場所に住みたかった。例えばシャンゼリゼ――そう、実際、凱旋門を離れるときに左手に見える三番目の木の五番目の枝さえ、アンリ・ミュルジェールの『ボヘミアンの生活』の、あの古典的な主人公たちの一人のようだった。

私は自分の兄弟弟子たちも嫌いで、彼らとはうまくやれていなかった。特にジャドキンスと呼ばれる、非常に賢いけれども意地悪で醜い若者は、最初から私に嫌悪の情を抱いていたようだった。彼は現在、英国美術院の準会員である。彼らは、私が彼らの遊興に付き合わなかったため、私が気取っていると思っていたのだ。私が受け入れ

る余裕があるような遊興は、実際は安かろう悪かろう程度のものだったのだが。

ところが、そのような卑俗な遊興は彼らを満足させるように見えた。彼らはそれを好んだだけでなく、誇りにも思っていたからである。

彼らは偏頭痛にさえ誇りを持ち、それを好んだ。それが前夜の道楽の結果であるならば。また彼らは、アーガイル・ルームズでつまらない喧嘩に加わり、その結果片目にできた痣(あざ)について、尊大な見せかけの謙遜といった態度で誇った。あたかもそれがヴィクトリア十字勲章であるかのように。留置場で夜を過ごすというのはたいへんな栄光だったので、それが真実ではなかった場合でも、それをしたふりをするのには価値があった。

彼らは私を不器用者、意気地なし、物知りぶった奴と見なし、最大級の軽蔑を感じていた。彼らがもしそれを大っぴらに見せないとしたら、それはただ彼らが作ったような目の痣を、彼らがあまり好まなかったということであろう。

それで私は、費用のかからない歓楽は彼らに任せ、自分は自分自身の追求、とりわけ近衛騎兵第一連隊で学んだ方法にならって肉体強化に専念した。私は体操とフェンシングとボクシングのクラブに所属し、その中ではそうとう勤勉に顔を出すメンバーとなった。私以上に辛抱強くダンベル挙げや体操用棍棒挙げをする人はなく、私はや

がて万能スポーツ選手になった。グレーハウンドと同じくらい屈強で贅肉のない体躯で、十*五ストーン弱、身長は六フィート四インチ、これは三十年前だとかなりの長身だと思われていた高さだ。特にペントンヴィルでは、この特異性が尊敬よりも侮辱を私にもたらした。

総じて、極めて威嚇的な人間に見えたのだ。ところが私は臆病な性格で、傷つくことを恐れていたし、この世で最も平和を好む生き物なのであった。

貧民街に対する昔の愛が復活し、私はロンドンで最下層の場所を見つけ出して、そこをしばしば訪れた。そこはとても良い貧民街だったが、パリの貧民街ではなかった――フランスではこういうものをもっと上手に管理しているのだ。

カウクロスでさえそうである（今はメトロポリタン鉄道がキングス・クロス駅とファリンドン・ストリート駅の間を走っている、その辺り）――カウクロスは、昔は屠殺場やジン・ショップや泥棒のねぐらの迷宮で、有名なフリート川がその地下を流れ続けており、中世のロマンスの魅惑や神秘に欠けていた。そこには乞食の王様やグラン

＊十五ストーン弱……十五ストーンは九五キログラムほど。六フィート四インチは一九三センチくらいである。一二八ページに「二メートルは優に超えています！」とあったが、ピーターの身長はそこまで高くはなかったようだ。

ゴワールやエスメラルダのような魅力的な人々の記憶はないのであった。人はため息をついて、*フェイギンやビル・サイクスやナンシーの空想に頼らなければならなかったのだ。

Quelle dégringolade!［何という下落！］

そして、実際の住人についてはどうか！　人は、ぼんやりした、驚いたような同情をもって、哀れな、青白い、よろよろした子供たちを見つめる。まず笑うことのない（飲んだときは除く）だらしなく下品な女たち。元気のない、気難しそうな、貧弱な男たち。彼らには、フランス人の奇形にある優雅さが、フランス人の堕落にある安楽と陽気さが、フランス人のグロテスクさにある同情的な特質が、どれほど不足していることだろう。音のない、陰湿なナイフよりも拳の方を好んだ彼らは、何と怖さがないのだろう！　彼らは、足も使わず手だけで戦うのだ。実に義理堅く。底に鋲釘（びょうくぎ）を打ったブーツでのキックは、彼らの言うことを聞かない妻たちのために取っておかれるのだ。

そのうえ、モルグもなかった。モルグがないのはとても寂しかった。

そして、スミスフィールド！（少佐殿がよく言っていたように）特定の日に、食肉解体場へ行く途中であの忌まわしい牛市場に短い滞在をしに来る哀れな獣を見ることは、本当に私の心を引き裂いたものだった。

田舎の陽光を防ぐためにまつげで分厚く縁取られた目、当惑して呆然としたその美しく従順な目に、またはるか彼方の野原の香気とひどく不快な悪臭で混乱させられた鼻孔、柔らかく湿って敏感なその鼻孔に、どんな棍棒が振り下ろされるのを私は見たことか！　愚かな羊たちと、温和に冷笑する豚たちへの、何という拷問！

犬たちでさえ堕落しているように、またその主人と同じくらい残酷に見えた。ある日、私は冒険して、殴り合いでの下劣な勝負をやってみた。結末は私にとって最大級に屈辱的で、騎士的な人物が若くて大きくて強くて殴打を学んでいるときでさえ、騎士道とは、美徳のように、しばしばそれ自身が報酬なのだということを示した。

粗野な若い家畜商人が理不尽に羊を蹴ったのだ。すると、私が思ったとおり、羊は後ろ脚を骨折した。私は憤り、彼の耳をつかんで振り回し、泥と汚物の山の上に投げつけた。彼は立ち上がり、極めて気骨のあるやり方で私に対してファイティング・ポーズを取った。彼はほとんど私の顎にも届かず、それで私は彼と戦うことを拒否した。群衆が私たちの周囲に集まり、私が喧嘩の原因を野次馬に説明しようとすると、彼はひどく冴えないパンチで私の顔をどうにか打った。

「ブラヴォー、ちっこいの！」群衆は叫び、彼は再びファイティング・ポーズを取っ

＊フェイギンや……三人とも『オリヴァー・ツイスト』登場人物。

た。私は情けないくらい恥ずかしいと感じ、彼のすべての攻撃をかわしながら、あんたのことは殴れない、殴ったら殺してしまう、と告げた。

「ようよう！」また群衆が叫んだ。「やっちまえ、ちっこいの！　ぶん殴れ！　でっかいのは臆病風に吹かれてやがる！」等々。最終的に、私は彼に軽い逆手打ちを入れ、それで彼は鼻血を出し、士気が完全に挫かれたように見えた。「ようよう！」群衆が叫ぶ。「同じ大きさの奴とやりやがれ！」

私は絶望と激怒を感じて周囲を見回し、見えた中で最大の男を選び、言った。「**あなた**なら十分大きいですよね？」群衆は爆笑した。

「そうさなあ、旦那（だんな）、まあいざとなったらやってもいいぜ」。彼は答えた。それで私は彼の顔に平手打ちをしようとしたのだが失敗し、耳にあまりにもすごいパンチを食らったために一、二秒の間目が回っていた。立ち直ったとき、彼が相変わらず私に向かってにやにやしているのが分かった。私は彼を何度も打とうとしたが、全然だめだった。最終的に、彼は私に特にダメージを与えることもなく、さっき私が家畜商人を投げつけたあの汚物の山の上に三回連続で私を倒し、群衆は熱狂的に拍手をした。呆然として、帽子が脱げ、息切れし、汚物にまみれた私は、絶望的な無力さを感じながら彼を見つめていた。彼は手を差し伸べて言った。「大丈夫かい、旦那？　俺ぁあんた

を傷つけたくはねえ！　俺の名前は*トム・セイヤーズ。もしあんたが俺を打っていたなら、俺はナインピンみてえにぶっ倒れたはずで、そうなったらもう一度起き上がれたとは思えねえよ」

彼はこの後、イギリスで最も有名な格闘家になるのだ！

私は彼の手を握り締め、感謝し、ソヴリン金貨を差し出したが、それは拒否された。それから彼は私を近くのパブの一室に導き、そこで私を洗ってブラシをかけ、グラス一杯の水割りブランデーをおごってやると言い張った。

それ以来、私は格闘家に好意を寄せるようになり、以前には感じたことがなかったボクシングに対しての敬意を抱いている。彼は私よりも何インチも背が低く、とてもヘラクレスのようには見えなかった。

彼は、「脚がかなりひょろ長い」ことを除けば、私を、若者の割には、それまで見たうちでいちばんがっちりした体格の男だと言った。彼が本当のことを言ったのかどうかは分からないが、それ以上に私をうれしがらせることができる賛辞はなかった。

＊トム・セイヤーズ……実在のボクサー（素手のボクシングである）。ただ、今は一八五〇年代の半ばだと思われるが、実際のトム・セイヤーズはその頃にはもうかなり有名になっていた。このように、この小説には実在の人物がよくセリフ付きで登場してくる。

若者の虚栄心とはそういうものだ。

そしてここでは、いくらか自慢気味ではあるものの、私は同種の、しかし自分がもっと大きな強みを見せた別の冒険を物語る誘惑に抵抗できないのである。

それは（まことに奇妙なことに）ボクシング・デーのことだった。私はリントットと彼の息子の一人と、ハイゲート・フィールズでの散歩から帰るところだった。カレドニアン・ロードを通って、家路へのぬかるんだ道をとぼとぼ歩いていると、あるパブの外側で群衆によって足止めされた。巨人の荷馬車引き（彼らはいつでも実際よりも大きく見える）が、彼の大きさの半分もない哀れなぐずの酔っぱらい作業員に喧嘩をふっかけていたのである。酔っぱらいは戦う意志を見せていたが、自己防衛のためにすらそれを試みることがまるでできなかった。彼はほとんど腕を上げられなかった。最初、私はそれをただの馬鹿騒ぎだと思った。小さなジョー・リントットが見たがったので肩車してやったちょうどそのとき、ほとんど悪魔みたいに残忍な顔の、飲んではいたが酔ってはいなかった荷馬車引きが、哀れな千鳥足男の目の間を力いっぱい殴って、（去勢牛を斧（おの）で倒すように）倒したのだ。群衆を喜ばせるために。

とても優しくて敏感な少年であるリトル・ジョーは泣き出した。ブル・テリアのような勇気を持つ彼の父親は、その小さな身長にもかかわらず介入したがった。私も憤（ふん）

怒で我を忘れ、コートと帽子を脱いでリントットに渡し、荷馬車引きの前に出た。彼は群衆の中の誰か三人の男と戦いたいと提案していたが、誰も応じていなかった。

「おいこら、この卑怯なスカンク野郎！」私はシャツの袖を捲り上げながら言った。「かかってこい。歯を全部叩き折ってその醜い喉に沈めてやる」

彼の顔はまだらのスティルトン・チーズ色になり、どんな手出しをするつもりなのかと尋ねた。リングが自然と形

大きな馬車引き

成され、群衆の共感が、今回は私の**方にある**ことが感じられた――実に快い感覚だ！

「さあ、腕を上げてみろ！　おまえをぶちのめしてやる！」

「**俺**はあんたと戦うつもりはねえよ、ミスター。**誰とも**やるつもりはねえんだ。放っといてくれ！」

「それはそれは。おまえは戦うか、でなきゃひざまずいて、残忍で臆病なスカンク野郎であることを詫びるか、だ」。そして私は彼の顔に平手打ちを食らわしたが、それはピストルの発砲音のように響いた――今回のは、ほぼ申し分のない、満足のいく、好結果の平手打ちであった。私の指先は、このことを思い出すだけでうずうずする。

彼は逃げようとしたが、私の反対側で拘束された。彼はめそめそと泣き声を出し始め、自分は私に手出しをしていないと言い、私が彼にどんな手出しをするつもりなのかとまた尋ねた。

「では、ひざまずけ――すぐに――今すぐだ！」私は、直ちに、確実に、深刻な作業を始めようとしているかのように振る舞った。

彼は膝をガクンと折り、過剰な情動のせいだけで、その場で本当に気を失った。

コートを着るのを手伝われている間、私は一生に一度の大衆受けという甘美さを味わい、群衆のアイドルになることがどんなものなのかを知った。

小さな*ジョーイ・リントットと彼の兄弟姉妹たちは、それ以前には私に特別な敬意を抱くことはなかったそうだが、その日以後は私を崇拝するようになった。

そして、かつてのこの出来事のときに私が自分自身にかなり満足していたことを告白しないとしたら、本音を隠しているとのそしりを免れまいが、あの巨大で不格好でビールを飲み過ぎたけだもの（遠目には恐ろしく手ごわそうに見えた）に対峙したあの瞬間、私は、快い安堵感とともに、彼にはチャンスがないことを感じ取ったのだ。彼はただ大きいだけだったし、その点でも私は彼をしのいでいたのである。

あの日の真の栄光はリントットのもので、私は確信しているのだが、あのゴリアテに対するダヴィデを演じる心づもりが彼にはあった。彼は戦いに対する真の欲望を持っていた。そうとう背が高い人間はしばしばそうだと言われるように、それは私には欠けているものだった。

そして、おそらくそれが、私があの出来事をあまり素晴らしい武勇伝とは思えない気持ちが強い理由である。確かに、私は肉体的には臆病者ではない――少なくとも、そうは思わない。もし自分がそうだと思ったら、我々すべてを臆病者にする脆弱な消化器官や虚弱な心臓を持っていることを公言する以上の恥を感じることもなく、私は

*ジョーイ……ジョーの別称。

そのことを率直に認めているところである。

私は、口論や、暴力や、流血――鼻からのものでさえ、自分の鼻だろうと隣人の鼻だろうと――が、大嫌いだということだ。

・　・　・　・　・　・

ロンドンの東端に、もうこのときには上流社会の多くの人々に多少は様子を知られるようになっていた貧民街があった。私はそれを暗記するほど知るようになった。そこにはただの貧民街の魅力に加えて、船乗りの要素という永遠の魅力があったのだ。陸（おか）に上がった船乗り――その独特なファッションで着飾るもの以外には心を動かすことのない、愛すべき存在だ。

私はしょっちゅうドックを訪れた。タールの臭いとロープやマストの光景が、海への――遠い国々への――私が宿命的に行かざるを得ない場所以外のどこかへの――言いようのない憧れで私を満たした。

私は船長や航海士や水夫たちと話をし、読者も十分想像できるように、多くの驚くような話を聞いた。雲一つない空、サファイア色の海、珊瑚礁（さんごしょう）、香辛料の木立、彩

色された羽を付けたさまよう浅黒い若者たち、そして半裸で裸足の美しいヌーハがたいまつを振って、私、トーキルの手を引いて至福の洞窟を導いてくれる、友好的な島！

私は特にロンドン・ブリッジの波止場に足繁く通った。そこからは二つの汽船――セーヌ号とドルフィン号だと思う――が、ブローニュシュルメールへと隔日で出発していた。

ブローニュの汽船

私はよくフランスへ向かう幸福な乗客たちを見つめたものだった。彼らの中には、休日気分で、すでに陽の当たるデッキで互いに親交を結んでいる者たちがいて、折り畳み椅子や雑誌や小説やビター・ビールのボトルについてごちゃごちゃと言い合ったり、和睦(わぼく)のしるしであるパイプを吸うために煙突の前へと退いたりしていた。

蒸気を上げるボイラーの音――それは何と耳においしい音楽であったことか！　いつか私のために蒸気を上げてくれるだろうか？　船室のあの匂いや、真鍮(しんちゅう)の通路や、枠を真鍮で補強されオイルクロスを張られた階段のあの感触は心地よい。階下の、雪のように白いクロスの上には、コールドビーフとハム、美しく新鮮なマスタード、ペールエールとスタウトビールのボトルが置いてあった。おお、幸福な旅行者たちよ！これ全部を買う余裕があって、おまけにフランスに行けるなんて。

すぐに大きくて白い天幕が後部甲板を楽園にし、そこから間もなくテムズ川の素早く滑りゆくパノラマを眺めることができるだろう。私のような、乗客でない者が上陸するためのベルが鳴る――「Que diable allait-il faire dans cette galère!［一体全体何だってそんなガレー船に乗り込んでしまったのだ？］」とイベットスンおじが言っていたように。汽船は、男らしい喉から発せられる快活なヨーホーというかけ声と、外輪のゆっくりした断続的な水音とともに波止場から自らを引き離し、明るく日が照る東方への

道を、川に浮かぶ小さな船舶の間で注意深く選んでいった。その間、わずかなハンカチが、友情のこもったさよなら芝居の中で振られていた――アウフ・ヴィーダーゼーエン！

おお、外輪の所の、時を得ない暴風雨帽をかぶった男のそばに立って、セント・ポール大聖堂とロンドン・ブリッジとロンドン塔が視界から消えていくのを見ること――それらを二度と再び見ることはない。私にはそんなアウフ・ヴィーダーゼーエンはないのである！

私は時々西に歩みを向け、ハイドパークの楽しげな夏の行列の光景を自分の飢えた羨(うらや)みのまなざしに注いでそれを満たしたり、ケンジントン・ガーデンズでバンドを聴いたり、美しく身なりのよい女性を見たり、彼女たちの甘く洗練された声や幸せそうな笑い声を聞いたりした。すると、海やフランスや遠い国々への憧れよりもさらに熱烈な、完全に言語に絶するほどの憧れが、私の心に入り込んできたものだった。すると私は、ヌーハとそのたいまつさえ忘れてしまう。

その後、独りぼっちで十ペンスの食事を取りに行き、ペントンヴィルの一人暮らしの下宿で一冊の本で締めくくるのは、まことにわびしい急転落だった。その本が、自らが読まれるよう仕向けることに成功したことはなかった。それはふてくされ、放棄

されなければならなかった。私と印刷されたページの間に、「美しい女性！　美しい少女！」が自ら自身を綴ったためである。これらの語句をフランス語に翻訳してほしい、おお、シェイクスピアをフランス語のアレクサンドランにさえ直せる汝らよ——「Belle femme ?· Belle fille ?·」ハ！ハ！

それにできるだけ近づけたければ、こう書く必要があるだろう。「Belle Anglaise（美しいイギリス女性）」または「Belle Américaine（アメリカ女性）」。こうして初めてフランスでも理解されるだろう！

ああ！· elle était bien belle［素晴らしく美し

「ハムステッドは私のパッシー」

かった」、セラスキア夫人は！

またあるときには、もっと幸福な霊感のようなものに動かされて、田舎への長距離の散歩で自然への渇望を満たしたものだった。ハムステッドは私のパッシーだった――レグ・オブ・マトン池は私のオートゥイユの池。リッチモンドは私のサン＝クルー、そこのキュー植物園はブローニュの森の代わり。ハンプトン・コート宮殿は非常に美しいヴェルサイユ宮殿のようだった――ヴェルサイユがそれよりどんなに比較にならないほど美しいかは、リントットの弟子でさえ知っていたであろうが。

そして、そのような健康的な疲労と香り高い印象の後では、十ペンスのディナーはよりおいしくなり、ペントンヴィルの小さな客間兼居間はいっそう我が家のようになり、本はさらに友人のようになった。

入手できる英語かフランス語の本なら何でも読んだということもある。小説、旅行記、歴史、詩、科学書――あらゆる書物がひどく憂鬱な私の心の糧になった。

私は文字を書いてみた。絵を描いてみた。むさ苦しくて平凡で見苦しい外面的生活から離れた内面的生活を、自ら作ろうとした――自分自身の私的なオアシスを。そして、心の中だけでも、運命の女神が私を置こうと思った環境から、自らをわずかでも引き上げようとしたのである。（＊）

＊注――ここで、私のいとこが、生涯のあの期間、人の心を奪うことができる最も重要な問題について抱いていた嘆かわしい見解を説明している部分に達しましたが、この部分の紹介には本当に気が進みません。

私は**多く**を省きました。しかし、これは完全に隠蔽し、道徳的趣旨の全部を彼の悲しい物語から剝奪すべきだと感じます。というのは、彼の不幸の大半は幼少期の不完全な宗教的しつけのせいであることは疑うべくもないからです。彼の両親（その他の点では私がかつて知り合った中では最も善良で親切な人々です）は、心が

「*受け入れるには蝋、保持するには大理石」

であった敏感で多感な年齢において、彼を、彼曰く「先入観がない」ままにしようと決めたとき、重大な責任を背負い込んだのでした。

マッジ・プランケット。

・　・　・　・　・　・

言うまでもなく、憂鬱気質で、金がなく、自分の運命に不満を抱き、（空きっ腹で）

頻繁に強いタバコを吸ってしまうような、物思いに沈んだ多くの若者と同じように、私は存在の問題に絶えず悩まされていた――自由意志と決定論、人間はどこから来て何のために存在しどこへ行くのか、悪の起源、魂の不滅、生命の無益さ等。私はそのような問題に対して非常に惨めな気持ちになった。

好奇心旺盛な通行人が、夜遅く、ペントンヴィルのウォールトン・ストリート〇〇番のブラインドからのぞき見たとしたら、多くの場合、巨大で痩せこけた元近衛騎兵第一連隊兵士の憐れむべき光景によって、その好奇心は報われたことだろう。彼は、スクエア・ピアノ（彼はピアノを弾けないが）の黒と黄色の鍵盤の上に頭を突っ伏して、孤独と厭世とが結びついた苦い涙を落としている。

教会の懐に安らぎを求めることは、私には一度も浮かばなかった。

人の類型の中には、生まれつきのもので、作られたのではないものがある。私は「不信心」に生まれついた。先天的な不可知論者がいたとして、生まれたその瞬間から不可知論的な性分の持ち主だとしたら、それが私だった。私は不可知論といったような表現は聞いたことがなかった。それは近年の発明なのである……。

＊受け入れるには蝋……バイロンの詩『ベッポ』の一節。「受け入れるときは蝋のように柔らかく、保つときは大理石のように堅固に」くらいの意。

「厭世」

"J'avais fait de la prose toute ma vie sans le savoir!"

「私*は、それを知らずに生まれてからずっと散文を作ってきたのです！」

不可知論はともかく、私が思い出すことができるほぼ初めての嫌悪の意識は、聖職者の黒い人影に対してのものであり、パッシーにはそういう人影は数体あった。

少佐殿は彼らを maîtres corbeaux［カラスの親方］と呼び、多少は尊敬の念を抱いていたようだった。セラスキア医師は彼らを嫌っていた。彼の優しいカトリックの妻も彼らに不信感を抱くようになった。私の愛する異教徒の母も彼らを好きではなかった。私の父はカトリックとして生まれ育ったというのに、やはり同じような嫌悪の情を持っていた。あの者たちは、父にとっての神々――思想家、哲学者、科学上の発見者たち――ガリレオ、ブルーノ、コペルニクスら――を迫害してきたし、宗教裁判やサン・バルテルミの虐殺の残酷さを彼に思い起こさせたのだ。私は常に彼らのことを、

＊私は、それを知らずに……「あることを自分でも知らないうちにやってしまう」の意。モリエールの『町人貴族』第二幕第四景のジュールダンのセリフが元になっている。

その気になれば小さな異教徒たちを火あぶりにする者として想像していた――イートン・ジャケットと白いシルクハットの全員を！

実際はあの人たちが極めて善良で親切な人間であったことを、私は少しも疑っていない。

牧師（牧師はペントンヴィルでは不足していなかった）は、青い頬と青い顎のパッシーの聖職者ほどは、知らないうちに不快感を与えることはなかった。しかし、彼は私には決して絵になるような、あるいは共感を覚える幻影ではなかった。妻帯であること、頬ひげ、黒いズボン、フロックコート、山高帽、小さな白いタイ、職業柄「紳士」であるという意識。いちばん魅力に乏しいのは、ここでもまた、安っぽくて真新しい教会で、その中で退屈そうにしている日曜日用の服を着た信者たちに、彼が神の言葉を聞かせることであった。その中には、彼の妻と一緒にディナーのテーブルに着く者はほとんどいなかっただろう――特に彼女が彼らの中から選ばれ

ペントンヴィルの日曜日

ていた場合には。

日曜日の朝・昼・晩、鐘の召喚で押し寄せ、長い礼拝と陳腐で熱の入っていない説教の後に再びどっと出てくるその群れを見ると、憂鬱になった。ペントンヴィルでは、平日も憂鬱になるに十分だった。だが、日曜日は言語に絶するほどの憂鬱さなのだ。それなのに、私以外の誰もそうは思っていないようだった。幼い頃からの訓練が、彼らを順応させたのだ。

私は、若造の頃のそうした身体的な嫌悪感は乗り越えている。それどころか、英国国教会の主教の様子さえ、私にはもう不快ではない。枢機卿の美しさを無条件に祝福することもできる。

実際、私は現在、牧師と司祭の両方と友人になっており、二人のどちらの方が好きでより尊敬しているかは自分でも分からない。彼らは私を憎悪するべきなのだが、そんなことはしない。彼らは私をものすごく憐れんでいるのだと思う。私があまりにも消極的なので、どちらも神学的な深い憎悪がかき立てられないのだ。そして、愛と慈愛の実践が彼らの優しい心に残した小さな憎悪のすべてが、互いのために蓄え置かれる——彼らが喜びを感じているようにも見える、消せない憎悪である。そしてそれは、隠されねばならないことでいっそう荒れ狂う。私が彼らの間の争いの種であると考え

ると、悲しくなる。

とはいえ、不信仰にもかかわらず、聖書は私のお気に入りの本であり、詩篇は私の崇拝の的だった。私の精神的姿勢がずっと崇敬と謙遜を中身とするものであったことは、かなり真実であると断言できる。

しかし、かつてキリスト教に対して進められてきたあらゆる議論（私は、今はもうそのすべてを知っていると思っている）が、私の中で自然発生的に湧き上がり、それらはいずれも私には答えられないように思われ、今までのところ実際にまだ答えられていない。かつて聞いたことがある宗教的教義は、私には信用できるとも魅力があるとも道理にかなっているとも思われなかった。神格的存在の中心人物――いかなる場合も自分のものにできなかった、ある神――を除いては。

私が意図したかどうかはともかく、私の自覚に向かって徐々に形成された、畏敬の念を起こさせるような不変の概念は、人類の天才がそれ自身のイメージを追って、また人類自身の心の必要性から発展させたものよりも、どこまでも抽象的で、よそよそしく、近づきにくい、絶対的存在のそれであった――不可解で、想像することも言い表すこともできないような、人間のあらゆる情感を超越し、人間の訴求が届く範囲の外にいて、その特質を推測しても無駄な――その呼称が It であって、He ではない、

そういう存在の概念である。

すべてのものは滅びるというという考え方は性に合わなかったが、恐怖を抱いたことはなかった。

私は、子供の頃でさえ、地獄などわんぱくな少年少女向けの俗っぽい脅しにすぎず、天国など人を抱き込むための俗っぽい説得手段にすぎないと、狡猾に疑っていた。いずれも、私の振るまい方に応じて、召使いやそのような人たちによってあり得る運命として私に与えられたものだが、その行き当たりばったりなやり方からそう思ったのだ。そんなことは、父や母、あるいは少佐殿やセラスキア家の人々――私が信頼していたのはこの人たちだけだ――からは言われたことがなかった。

聖職者に対する偏見を別にすれば、私は敏感で多感な年齢においては先入観がないままにされた。私は、自分の教理問答書を学び、自分の聖書を読み、寝るときには主の祈りを唱え、「パパとママにお恵みがありますように」などという言葉を言ったけれども、習慣的でおざなりなやり方だった。

私が子供時代に信頼を置いていた少数の人々は、宗教に逆らうような言葉を、私に聞こえるように言ったことはなかった。その一方で、誠実さ、勇気、寛容さ、無私無欲さ、礼儀正しさ、それにとりわけ、社会的地位も問わないし人間か動物かも問わな

いような他者への思いやり、といった諸美徳には与えられていた重要性が、宗教に対してはどうやら与えられていないようだったのだ。

私は、両親がそれらの間の問題に折り合いをつけ、私が自分で考えられる年齢になったとき、存在についての重大な問題すべてを自力で何とか解決するべきだと決定したに違いないと想像している。自分自身の善悪の判断力や、私が獲得しそうな人生の知識や、もし彼らが生きていたなら、自分たちなりに間違いなく私に与えたであろう助力などを材料にして。

私はそのようにして、従うべき道徳規範を自分で作った。その中では、宗教はほんの小さな部分しか占めなかった。

私にとっては罪は一つしかなく、それは残酷さだった。私がそれを憎んだからだ。自然の女神は、彼女自身の不可解な目的のために、それをほとんど美徳であるかのように教えているけれども。残酷さを含まない罪はすべて、単に健康や味覚や常識や公共の便宜に対する罪でしかなかった。

自由意志などあり得なかった。私たちは自由に意志を働かせる**ように見える**だけで、それは小さな三角形の範囲内でのみ、その各辺とは遺伝、教育、そして環境であった——私自身のやや幾何学的な配置には少なからず誇りを持っていたが、それは四つ足

で歩いたりはしない――たぶん、三角形にすぎないからだろう。

つまり、私たちは十分に堅固な状態を望むことができた――変わらな**すぎる**くらい。だが、それを望むための**方法**を望むことはできなかった――幸い、私たちは今までのところまだ、そしてこれからの長い間も、信頼されるにふさわしいとは言えないので、今のままの状態だろう！

小説の登場人物でさえ、彼らの創造主である小説家が彼らに与えた性質、教育、動機に従って行動しなければならない。そうでなければ、私たちはその小説を置いて、何か別のものを読むに違いない。人間の性質は、物語であっても現実と同じくらいそれ自身に矛盾があってはならないからだ。狂気においてさえ筋道があるべきで、それでどうして意志が自由でいられるというのだろう？

個人的な恩恵や悪の赦免（しゃめん）のための祈り――遺産、好機、自分の成功した努力などを経験し、自分に訪れた世俗的な幸福への祈りや感謝のためにひざまずいたり声を張り上げたりすること――は、私の目にはまったく無用なものに映った。無用さはともかくとしても、それは来たるべき恩恵への強い期待に疑念を持たないわけでもない、奴隷的な思い込みの行為、あるいはおべっか的で無礼な発語行為であった。

私には、それはまるでユダヤ人――迷信的で実務的で、自分が欲しいものを知って

いて、それを手に入れる方法には無頓着な人々――が、そのように祈ることを私たちに教えたに違いないように思われた。

それは、明日は休暇で晴れますようにとか、サンタクロースが気前よくありますようにとかを無邪気に懇願するような、かわいくて単純な子供ではなかった。それは、過剰でごますり的な礼賛とともに、へつらい、お世辞を言い、ご機嫌を取り、贈賄する、狡猾な商人（侮辱そのものだが）であって、その時点と今後の自身の成功と敵の狼狽のために機能する、焼かれた生贄でもあった。

それは犬の卑屈な伏せであり、そこには犬の二心のない愛情などはなく、犬の恐怖や利己心よりも強いものでさえあった。

神がご自分のイメージに倣って造られた人間にしては、何という態度だろうか！――自分の創造主に向かってさえこのありさまだ！

・　・　・　・　・　・

許される唯一の祈りは、勇気または忍従のための祈りであった。それは内へ向かう祈りであり、私たち自身の中にある最高のもの――正直さ、禁欲、自尊心――への訴

求であったからだ。

そして、細かいことを言えば、食前食後の感謝の祈りは、祈りを唱えるための食事がほとんどない人が大勢いたことを考えると、私には特に自己満足的で不正であるように思われた。唯一のまともで適切な態度は、自分の食事の半分を分配することだった——実際には、私にそんなことをする習慣はなかった！　だが少なくとも私は、慈善心の欠如のために潔く自分を責めるくらいのことはしており、それが私の唯一の祈りであった。

・　・　・　・　・　・

幸運にも、私たちには自身の自由意志がなかったので、私たちを駆り立てる傾向は火花のように上向きで、それが否応なく私たちを導いた——善と悪、最悪と最善。

これをはっきりと理解して、心にしっかりと留めておくことにより、その上昇傾向の促進においてできることをすべてするための動機が私たちに与えられた——pour aider le bon Dieu［神様のお役に立つため］——もし神がおわすのなら、より速く上昇し、より早く神に到達してもよい！　そして、人間の意志がひとたびロケッ

トや時計や蒸気エンジンのように始動させられ、正しい方向を取りさえすれば、達成できないことなどあるだろうか？

私たちは、やがては環境を制御すべきである。それに制御されるのではなく。教育は、一つの一貫した目的に、日々より適応するようになるだろう。そして最終的に、気が咎(とが)めつつも、遺伝を、まったくの偶然のままにしておくのではなく、自分の手で導くべきである。実際は、十分な指導を受けた温情主義の政府が賢明に政治を行い、不適応者の正当で注意深い排除の後、互いにすっかり恋に落ちている人々の結合だけを認可する、というのでない限り。

かくして、少なくとも残酷さは馬具で繋がれるべきであり、その貴重なエネルギーを、自然の女神によるような無慈悲な実験に浪費する必要はない。

またかくして、少年が人の父親になるように、人類はいつか父親になるべきである——何の父親に？

ここがまさに、私の思索が決まって阻まれてしまった箇所である。それは三数法[*]の合計Xであり、ペントンヴィル、ウォールトン・ストリート、建築家兼測量士のピーター・イベットスンによって解かれることはなかったのである。

オランウータンがシェイクスピアに対応するとき、シェイクスピアが対応するXと

は……？

雌のチンパンジーがミロのヴィーナスに対応するとき、ミロのヴィーナスが対応するXとは……？

最後に、これら二つのXを互いに掛け合わせて、結果を想像してみてほしい！

・　・　・　・　・

こうしたものは、私が当時、未熟にも抱いた単純な信条であった。まあこの程度のものだったわけだが、私は外部からの助けなしで、自力でこのすべてを何とか解決した――貧弱なものではあるけれども、自分自身の解決法だ。あるいは、私がド・ミュッセの次の言葉で表現したような。「Mon verre n'est pas grand — mais je bois dans mon verre.［私*のグラスは大きくはない――それでも私はそのグラスで飲むのである］」

そのようなアイディアは有益な雲のように空気中にあったのだが、それらはまだ大衆のために印刷された文字に凝縮されていなかったからである。人々は、大衆小説や

＊三数法……比例式の解法。a:b = c:d で、d が分からないとき、bc ÷ a で出すことができる。

＊私のグラスは……ミュッセの戯曲『盃と唇』冒頭の献辞の中に見える。

安っぽい雑誌――そこに駆け込む誰もが読み、自分自身について少しだけ考えることを学び、聖職者や俗人からの罵倒の怒号を恐れる必要もなく考えていることを正直に言うことができる――で現在書いているようには、こういうことについてあえて書いたりはしなかった。

そしてこのことは、そのように考え、それ以外は考えることができなかった、というだけではなかった。そのように感じ、それ以外は感じることができなかった、ということでもあったのだ。私は、個人的に人生にどんなに絶望していても、自分が考えたり感じたりした以外を考えたり感じたりすることを少しでも**望んだ**りしたら、自分を邪悪で弱くて下等なものと思ったはずである――自分の最上の天稟（てんぴん）として厳重に守ってきたことへの反逆だと。

それでも、私にとっての他人の信仰は、非攻撃的で控え目で誠実である場合に限り、しばしばいじらしく哀れを誘うもののように思われ、時には美しいとさえ思われることがあった。子供っぽい物事は時に美しく見えるようなものだが、もう子供ではなく、そのような物事は放棄すべき人々においてさえそう見えることがある。それはたくさんの英雄的生涯をもたらし、たくさんのどんよりした曖昧な生涯を潔白で幸福なものにした。その場合の熱意と情熱は、永遠の炎を上げて燃えているように思われた。

私が気づいていたように、時々、短い期間、とりわけ若者の間では、不信仰は、信仰と同じくらい熱烈で情熱的で、同時に狭量で不合理なものであり得る。しかし、ああ！　その炎は断続的で、その光は優しい光ではなかった。

それは、赤ん坊のための食べ物を持たなかった。病人や不運な人を癒やすこともできず、魂の内なる不和を従順な和合へと変化させることもできなかった。私たちの失敗や欠点を補償することも、私たちと同じように考えることを選ばなかったほかの人々の成功や繁栄を、私たちに対して何らかの形で埋め合わせることもできなかった。

そこには、傷ついたプライドのための鎮痛剤もなく、弱気な落胆のための支えも、死別に対する慰めもなかった。その険しく起伏の多い道が至福の約束の地へと導いてくれることもなく、その途中には快い休息場所もなかった。

唯一の武器は不変不動。唯一の盾は忍耐力。現世で望むのは共通の福利。現世での報酬は知識に通じるあらゆる道の開放、それに恐怖という臆病な遺産からの解放。最終的な褒賞は――睡眠か？　誰か知っているだろうか？

睡眠は悪くはなかった。

だから、私のような、単純で正直で控え目で献身的で真面目で熱心で情熱があって良心的にすぎる若い不信心者たちは、非常にたくましく勇敢で独立独歩の気性が必要

で（私はそうではなかったが）、自分たちが紛れもない真実であると想像しているもの（一見疑わしい美貌を象ったもの）に強く心を寄せ、信仰者が自分の特別で特異な役得として主張している不変の快活さ、自信、沈着さを自分も持って人生の道程を歩まなければならなかった。

私の不信心の告白についてはこれくらいにしておく。それは、私よりもはるかに年長で賢明で善良な多くの人々によって共有され（もし私がそれを知ってさえいたならば……）、またその人たちによって、長年抱いてきた幻想という大きな犠牲と、魂の問いかけという恐ろしい苦しみ――私が小さな男の子だったとき、優しい両親の思慮深さのおかげで免れた苦闘と苦痛――を経て、初めて到達されたものであった。

・　・　・　・　・　・

こうして、私はこの人生を最大限に利用する必要に迫られた。私が知り、信じ、逆に望んでさえいたとしても、私たちは将来死なければならないからである。

実際私は、食べて飲んで陽気になれるというわけではなかった。遺伝と教育が私をそういう人間にはしなかったと思うし、環境がそれを許さなかった。しかし私は、自

分の良心と人類の過去の教えから案出できる最上の理想を試み、それに沿って生きることは可能だった。そして、造物主や神の概念をかなり不十分にしか持たない人間は、私たちのうちの最高の者が離れて付いていくことしか望めないような人間の例（古今の、ヘブライ人、異教徒、仏教徒、キリスト教徒、不可知論者等々）を私たちに提供してきた。

私は時々、朝の仕事に行き、自分の心が高邁（こうまい）な希望と高い決意で意気が上がるのを感じたものだ。

そのときもその先も、恐れや非難や利己心や私的な報酬へのあさましい願望なしで人生を送るのは、どれほど簡単で単純だと思われたことか！――禁欲的な忍耐、無敵の根気と素直さ、不屈の快活さと無私の人生！

結局のところ、それはあとせいぜい四、五十年くらいだったし、その程度の歳月が何だというのか？　そしてその後は――que sçais-je?［我*、何をか知る？］

その考え方は確かに精神を高揚させた！

その考え方は確かに精神を高揚させた！

が、昼食時（昼食は、アバネシー・ビスケットとコップ一杯の水、それに刻みタバコを巻いたもの数本で構成されており、タバコは安物で匂いがきつかった）までには、

＊我、何をか知る？……モンテーニュの『エセー』より。反語で「何も知らない」の意。

微妙な変化が私の夢の精神に訪れた。

ほかの者たちは高い志を持っていなかった。中にはひどく短気な者もいて、あまりにもひどいやり方で人を不機嫌にした……。

ペントンヴィルは生活を奴隷化してしまう、何と恐ろしい場所だったことか……！

ロサマン・ストリートの新しい小さな店のデザインを延々と作り続けることになって、それがうまくいきそうにないと思われたのは、何と単調でつらい仕事だったことか……！

やぶにらみであばた顔でがに股でせむしでちびのジャドキンス（その異様な姿を見れば、徴兵係の下士官だってぞっとする）は、兵卒として入隊した経験があることを理由に、一体何だって延々と人のことを嘲るのか……？

そのとき私は、我慢しきれないほど挑発されたため、彼のズボンのたるみをつかんで静かにズボンから彼を振り落とした。彼は床の上にどさりと落ちた。彼は怯えたが、まったく無傷だった。それなのに、ただそれだけの理由で、一体何だって、冷笑とともに「殴るならおまえと同じ大きさの奴を殴れ」などと言われなければならないのか……？

その他もろもろ。不断の小さな意地悪、卑劣な辱（はずかし）め、醜悪さ、下品さ、中傷。これ

らは、抵抗する際に、自分の中に最低最小レベルでしか称賛に値しないもの全部を呼び起こした。

人は、決死的行動へと導くものに自分の神経を同調させてきた。すると、ブヨや小さな燃えかすの塵が目に入り、それがそこにくっつく。結局のところ、決死的行動への導きという可能性はまるでなく、今後もそうだろう。**それは**、想像の中にしかなかった。それは常に、ブヨや燃えかすの塵、ブヨや燃えかすの塵、の繰り返しなのだ。

夕方までには、私は不名誉にも神経が消耗し、深すぎて涙さえ出てこないような苛立たしい悲観論の深淵にはまり込み、自分は人類中最も卑劣で最も惨めな人間だが、それでもほかの者たちの方が、例外なく自分よりもさらにずっと卑劣で惨めなのだ、などと思ったものだった。

彼らはまだ食べて飲んで陽気になることができた。私にはできなかったし、したいとさえ思わなかった。

・　・　・　・　・　・

等々のことが、毎日、毎週、何か月も何年も続き……。

こうして私は、飽き飽きしている自分の特性、このずっと変わらない制御不能な気分の変動に、やがて倦み疲れてしまった。

おお、精神の交互の満ち引きよ！　それは病気なのであり、甚だ悩ましいことには、それは本当の変化ではないである。それは絶対的な沈滞そのものよりも、さらにうんざりするほど単調なものなのだ。その退屈で面白みのないシーソーから私は決して逃れることができない。夢のない眠り、人生の死の門を通ること以外には。というのは、夢の中でさえ、私たちは依然として私たち自身であるからだ。そこに休息はなかった！

私は、通りがかりのショーウィンドウに映る自分の姿をひどく嫌った。それでも私はそこでいつもそれを探していた。悪い方向でもいいから、少なくとも何らかの変化を見いだす空しい望みを抱きつつ。私はほかの誰かになることに激しく憧れた。とはいえ、私は一瞬でもその人になるのに耐えられるようなほかの誰かに会うことはなかった。

そして、私たちの孤独！

私たち無力な種のそれぞれの独立単位は、その者自身の心の周縁の内表面によって容赦なく境界を定められている。それは継ぎ目のない甲冑で、弱点がなく、欠陥もなく、自分たちの出口用の割れ目も、仲間単位の中で最も近くて最も親愛なもののため

の進入用の割れ目も、一つもない。五つのポイントでのみ私たちは互いに触れあうことができ、それはすべて――私たちの貧弱な感覚の機能によるだけのもので――外部からのものである。私たちは、最愛の、いちばん盲目的に信用している人にわずかに近づけるよう、それらを無駄にこき使う。無駄に、揺り籠から墓場まで、ずっと。

そんな空想的な考えが、なぜ私をそんなに残酷に悩ませたのか？　このような魂の輸血をわずかでも我慢できると自分が感じられる人を、私は誰も知らなかったのだ。私には見分けられない！　しかし、そのことは、肉体を疲れさせるよう私を追い立てる虻（あぶ）のようなものだった。昼は健康な肉体疲労から来る無感動な心の安らぎを得、夜は夢のない眠り――生の中の死！――を眠るような、私の肉体を。

「*そのような素材から惨めな人間が造られる！」特に惨めな若者はそう。惨めな者ほどたくさんタバコを吸う。タバコを吸えば吸うほど、悲惨な者になる――悪循環だ！

私の場合はそうだった。私は（自分だけに哀愁に満ちた表現で語ったように）解放の時間を待ち焦がれるようになり、自殺の考えを愛撫した。私はフランス語で、韻を踏んだ碑文体の短詩を自分のために作りさえした。自分ではけっこう整ったものができたと思っている――

＊そのような素材から……バイロンの詩『タッソーの嘆き』より。

Je n'étais point. Je fus.
Je ne suis plus.

私はいなかった。私はいた。
私はもういない。

・　・　・　・　・　・

おお、何らかの高貴な理由で死ぬこと――身を挺して他者の命を救うこと。価値のない命だっていい。彼はそれにしがみついた！

ある月明かりの夜、ソーホーのフリス・ストリートを歩いていたときに、私はこの望みを大真面目に考案したのを思い出す。私は、店の上に建てられた家の下に集まって興奮している人々の小さな集団に出くわした。三階の割れた窓ガラスから、不吉な煙の雲が風のない空に円柱のように立ち上っていた。その家には普通の梯子（はしご）がかけられており、そこには人が密集して住んでいるとのことだった。それなのに、消防車や

避難用梯子はまだ到着しておらず、ドアを蹴ったり叩いたりすることで開けてみようとしたり居住者を起こしたりすることは、もはや意味がないように思われた。

勇敢な人間が求められていた――非常に勇敢な人間、梯子を上り、割れた窓からその家に侵入するような者が。ここにはついに導かれるべき決死的行動があった！

そのような人間が見つかった。が、私はずっと消えない不面目と悔恨を持ち続けることになったのだが、それは私ではなかったのだ。

彼は背が低くてずんぐりとした体格で、中年で、かなり陽気そうな赤ら顔と巨大な頬ひげを持っていた――どこにでもいそうなごく普通の男で、全然人生に疲れたようには見えなかった。

これはたまたまだったのだが、彼のヒロイズムは無駄になった。その家には誰もいなかったからだ。彼が炎を押し分けて燃えている部屋に何とかして侵入するよりも前に、そこにいた全員が聞いて、心底安心したように。彼の頬ひげの先端さえ焼けることはなかったのだ！

それにもかかわらず、私は家にそそくさと帰ると、自己破壊の考えをすべて諦めた――高貴な理由によるそれでさえ。贖罪（しょくざい）として、私はいくらか急いで何夜もの真夜中にこつこつと進める労苦の炎を燃やすことに専心した――レーテルの不朽の木版画

『Der Tod als Freund［友としての死］』を、線の一本一本まで忠実に、ペンとインクで入念に写すこと。リントット夫人はそれを私に貸してくれるくらいに親切だった――そして、私はその下に、美しい黒のゴシック体と赤の大文字で、（ほんのわずかなユーモア感覚も不敬さの感覚もなく）次のような詩を書いた。それは私に無限の痛みをもたらした。

I

終、わ、終――わ、り、り！
おお父よ、私は終えました……
私の悲しい人生の間に、
　私が犯したことのない
たくさんの恐ろしい大罪のために、
あんなにも私を罰したあなた、
安らかに噛みしめさせてください
　この最期のときを！

II

あなたの計らいによる恩恵を、
私は指を折って数えます。
私の全身は動かなくなるでしょう、
　たちまちのうちにそうなります！
どうか辛抱して、数えてください
私のあらゆる悪行を――それから見積もってください
あなたの厳格な処置のすべてを――
　私がそれを果たしたものと見なしてください！

III

苦しむために生まれ、そして苦しんで――
下劣、嫌悪、軽挙、無知、

II.

Les faveurs que je Vous dois,
Je les compte sur mes doigts:
Tout infirme que je sois,
　Ça se fait bien vite!
Prenez patience, et comptez
Tous mes maux — puis computez
Toutes Vos sévérités —
　Vous me tiendrez quitte!

I.

　F, i, fi—n, i, ni!
Bon dieu Père, j'ai fini…
Vous qui m'avez tant puni,
　Dans ma triste vie,
Pour tant d'horribles forfaits
Que je ne commis jamais,
Laissez-moi jouir en paix
　De mon agonie!

老い、醜悪、虚弱――そして死にかけて
　自分の巣穴の中で不平も言わずに、
私には欲望もありません
良い終わりを迎えること以外には――
後悔もなく、悔悛もなく――
　希望も恐れもありません！

Ⅳ

冷厳で、信者を独占しようとなさる嫉妬深い父よ、
あなたの御子は私たちのために死にました！
私もまた、たいした恨みもなく、
　あなたの御許に留まります
私が望むものを、遠慮なく言わせてもらえば、
私の監獄の戸口で、
何か小さな祈りをすることです……

III.

Né pour souffrir, et souffrant —
Bas, honni, bête, ignorant,
Vieux, laid, chétif — et mourant
  Dans mon trou sans plainte,
Je suis aussi sans désir
Autre que d'en bien finir —
Sans regret, sans repentir —
  Sans espoir ni crainte!

IV.

Père inflexible et jaloux,
Votre Fils est mort pour nous!
Aussi, je reste envers Vous
  Si bien sans rancune,
Que je voudrais, sans façon,
Faire, au seuil de ma prison,
Quelque petite oraison …
  Je n'en sais pas une!

私はそれを一つも知らないのです！

Ⅴ

お告げの鐘が鳴るのが聞こえます
あなたに選ばれた人を集める鐘が。
私にとっては、神の家から追放された者の鐘。
　鳴り響くのは死！
祈りは何の役にも立ちません……
許すことこそ唯一の善行。
それはあなたのものであり、私のものでもあります。
　私は、私はあなたを許します！

Ⅵ

同じようになさってください！

V.

J'entends sonner l'Angélus
Qui rassemble Vos Elus:
Pour moi, du bercail exclus.
　C'est la mort qui sonne!
Prier ne profite rien …
Pardonner est le seul bien:
C'est le Vôtre, et c'est le mien:
　Moi, je Vous pardonne!

VI.

Soyez d'un égard pareil!
S'il est quelque vrai sommeil
Sans ni rêve, ni réveil,
　Ouvrez-m'en la porte —
Faites que l'immense Oubli
Couvre, sous un dernier pli,
Dans mon corps enséveli,
　Ma conscience morte!

もし夢も目覚めもない
本当の眠りであるのなら、
　そのドアを私にお開きください――
あなたの無限の忘却をお与えください
最後の封書で覆ってください、
埋葬された肉体の中の、
　私の死んだ意識を！

おお、何て不器用なんだ！　私という者は、万事、小さいことでも大きなことでも、何と絶望的な落第者であったことだろう。

第三部

私には、リントット家とその友人たち以外に友人はいなかった。「Les amis de nos amis sont nos amis!［友達の友達は友達だ！］」

いとこのアルフレッドは、彼の前、父親がそうであったように軍隊に入っていた。いとこのチャーリーは教会に入っていて、私たちの間には完全に隔たりができていた。祖母は亡くなった。プランケットおばは、ひどく病弱になってフィレンツェに住んでいた。その娘のマッジはインドにいて、今は名高い将軍となっている若い兵士と幸福な結婚をした。

リントット家は自由業の代表として、またペントンヴィルの旧家として、堂々と振

る舞っていた。当時、人々は概して排他的だった――主として女性たちによって維持された排他性であった。ペントンヴィルにさえ特権グループがあったのだ。

最も排他的な人々の中に、リントット家もいた。公平性という点で、彼らが排除した人々が少なくともその他の人々を排除できていたならいいのだが。

私は彼らの歓待を受けていたし、彼らの輪がかつてと同じく魅力的であったことを否定するというのは私らしくないだろう。ところが、私には友人を作る才能がなかった。自分とは正反対の人々に惹かれることはよくあったのだが。特に、小さく、賢く、機敏だが、あまり親しみやすくはない男性たちに。しかし、たとえ彼らが近づきたいという気になったとしても、私の側の悲惨なまでの内気さと態度の固さは救いようがなく、それが私たちの間に氷の障壁を立ち上げてしまうのが常だった。

彼ら、善良なるリントット家の人々は、かなりもてなしがよく、たくさんの友人がいて、多くのパーティーを催したのだが、私の悲惨なまでの内気さがそれを心から楽しむことを妨げた。パーティは堅苦しすぎと自由すぎの両方の面を備えていた。

応接間では、リントット夫人と別の女性一人か二人が、厳格に着飾って、最も厳格な音楽を、その厳格さを軽減することのないやり方で演奏していたものだ。それらは無情なものだった！　ほぼ常にバッハかフンメルかスカルラッティで、この人たちは

それぞれ、芸術家と紳士の両方――ずいぶん珍しいのだが、絶対に必要な組み合わせであるように思われた――を備えた作曲ができたと言われていた。

若い、あるいは中年のほかの女性たち、それに私のようにぽかんとしている少数の若者たちは、聴くことは許されたけれども応酬はできなかった――演奏や歌でお返しすることができなかったのだ。

もし誰かがメンデルスゾーンの無言歌を無謀にもリクエストしたりすると――あるいは歌詞のある歌、シューベルトのドイツ語の歌詞が付いた歌でさえ――、その者は音楽的に軽薄であるという罪状により譴責（けんせき）され、赤面させられたのであった。

その間、リントット事務所（彼が裏庭に

LA BELLA CAPRICCIOSA, BY HUMMEL
［気まぐれな美女］　フンメル作曲

建てた）では、謹厳だったり忠実だったりする男性たちが、夕食の時刻まで、タバコを吸ったり水割り酒をちびちび飲んだりして仕事の話をしていた。最初は形式張って、十分に礼儀正しく。が、徐々に、手探りで、言わば社会的なボタンを外してリラックスし、互いの名前の前から「ミスター」を落として（翌朝には復活するのだが）活気ある職業上の冗談に耽り、それはすぐに個人的で自由で抑制のないものになった――それは、機敏さと当意即妙さの欠乏から私では生き生きと輝くことのできない、陽気な闘争とでもいうべきものだった。例えば、彼らは人に、あなたは見た目よりもずっと大馬鹿なのか、それとも実際よりも大馬鹿に見えるのかと尋ねる。その質問の答えがどちらであっても、その痛烈なる論駁（ろんぱく）は「それはあり得ない！」で、答えた者はそれ以外の全員からの哄笑（こうしょう）に囲まれたものだった。

そこで私は妥協案を採用し、午後の大半を階段や玄関ホールで過ごし、夕食の時刻が来るまで著名な大聖堂や公共の建築物の写真を（あまりにも作り物めいているため自然に見えないことに多大な興味をそそられつつ）研究した。その時刻になって、女性たちにせっせと付き従うことにより、私は自分という惨めな存在を思い出してもらい、許してもらうことになったものだ。またすぐに再び忘れ去られたのではないかと心配してもいるのだが。

私は自分が、特に夕食時、概して紳士たちよりも女性たちといる方を好むことを自覚したなどと書いて、傲慢な気取り屋と思われないよう願っている。

夕食後には変化があった――それは良い方向への変化であると考える者もいた。リントットが明るい喧騒と友情に元気づけられ、夫人がああだというのに、それはもう騒々しくひょうきんに振る舞うのだ。彼には正真正銘、道化の才能があった。友人たちは、リントットの「スイッチが入った」と互いに囁き交わすと、彼を促した。バッハとフンメルとスカルラッティは棚上げされ、若者たちは楽しい時間を過ごすことになった。戯れ歌や黒人歌謡の全員合唱があった。リントットは『ヴィリキンズと彼のダイナ』*をロブソン氏をまねて歌い、それがあまりにも上手だったので、リントット夫人の険しい顔面でさえにんまりとした微笑みへと緩むのだった。それは抵抗できないほど魅力的なのだ。パーティが終わるときには、（ホストのおかげで）私たちは全員がホステスに「とても楽しい夜」を率直に感謝することができ、楽しげに、でもほとんど残念そうに、彼女におやすみなさいを言うのであった。

＊ヴィリキンズと彼のダイナを……『ヴィリキンズと彼のダイナ』は、『ウィリアムとダイナ』という民謡の替え歌。一八五三年初出。「ロブソン氏」とは、コメディアンで俳優でバラード歌手であったフレデリック・ロブソンのこと。小柄な人だったらしい。

時には笑うのもいい――できることなら賢明に。そうでなければ quocumque modo! [どんな方法でも!]「ポット*の下でパチパチと音を立てるいばら」のような愚かな笑い声でさえ、役に立つ季節がある。それは、ポット――すべてのポット――と、それらが空(から)の場合は、その空虚を温めるように思われる。

・　・　・　・　・　・

実を言うと、私は一度だけ、現実に友人を作ったのだが、彼は私とはあまり長くはもたなかった。

それはこんなふうに起こった。リントット夫人がいつもよりも大きなパーティを開催した。その招待客の一人が偉大な画商のモーゼス・リヨン氏であった――リントットの顧客である。彼はラファエル・メリデューという若者を連れてきた。すでに有名な画家で、私がそれまで見た中で最も魅力的な若者であった。小さくて痩せていたが、実に美しい造形で、月並みでない異様なファッションに身を包み、ハンサムな顔、まぶしいほど上品なマナー、人を惹きつけてやまない魅力ある声を備え、自分の栄誉に十分に見合っていた。それらがなくても、彼は十分にまぶしい存在だっただろう。ミ

デルトン・スクエアのもてなしのよいドアが、かくも輝かしい客人に対して開かれたことはかつてなかった。

私は彼に紹介された。彼は、私の鼻梁（びりょう）が彼の『太陽神と夜明けの乙女』という絵の太陽神にぴったりだと気づき、一度か二度モデルになってくれないかと依頼してきた。私はそのような要求に応じることをまことに誇りに思い、何度もモデルになってやった。私は、リントットの所での自分の仕事が始まる前、夜明け頃に起きて座りに行ったものだった。時間が割け次第、また行って座る。

私は、太陽神（あまり知的な神ではないように思えるが）の鼻や額だけでなく、腕や胴体も備えているようだった。こういった理由のためにも座ったわけである。私はその後ずっと自分を誇りに思った。

彼を喜ばせたこのモデル活動の間に、私は、ダヴィデがヨナタンを愛したように、彼を愛するようになった。

私たちは、ハンサム型二輪馬車で一緒にダービーに行くことにした。私は数日前にロンドンで最も洗練されたハンサムを予約した。素晴らしい水曜日の朝、私はその馬

＊ポットの下で……伝道の書七章六「愚かな者の笑いは、ポットの下に燃えるいばらの音のようである。これもまた空である」。

車でシャーロット・ストリートの彼の家のドアに、時間厳守で着いた。そこにはすでに別のハンサム――私のよりもさらに洗練されたハンサムで、個人所有のもの――があった。彼が下りてきて、私にこう告げた。気が変わって、前の晩に自分を誘ってきたリヨンと一緒に行くことにしたんだ、と。

「ロンドンの一流画商の一人なんだ、我が友よ。ちくしょう、分かってくれるだろうが、僕には断れっこない――本当にすまない！」

それで私は孤独な豪華さの中でダービーに行ったのだが、晴れやかな天気、道中のユーモラスなもの、あらゆる陽気な場面が、私には無駄になった。私の心の苦みはそれほどのものだった。

午後の早い時間に、四頭立て馬車の屋根上座席で、スマートで貴族的な風采の数人の男性の間で昼食を取っているメリデューを見た。彼は座を楽しませる人のようで、私が通り過ぎたとき、上機嫌に会釈してくれた。すぐに私は、ハンサムの中でリヨンが、しかめ面で独りぼっちでつまらなそうに座っているのに気づいた。彼は私を昼食に誘い、私が抱いたのと同じくらい強烈で大きな苦みを打ち明けた（私の方は胸に秘めておいたが）。抜け目のないヘブライ人の商人は、心の温かい、傷ついた友人へとランクを下げた。メリデューは、チズルハースト伯爵のためにリヨンを見捨てたのだった。

ちょうどリヨンのために私を見捨てたように。

それは私たち二人にとって、どんよりと冴えないダービーだった。

数日後、相変わらずにこやかなメリデューに会った。彼はこう言っただけだった。

「チズルハーストのために昔なじみのリヨンを外すのは、ひどい罪悪感を感じたんだよ、分かるだろ？　でも伯爵だからねえ、友よ！　ちくしょう！　気の毒なオールド・モーは自分のハンサムに一人で戻らねばならなかったが、それでも『太陽神』は買ってくれたよ」

間もなくメリデューは、私との付き合い

「私たち二人にとって冴えないダービー」

を全面的に断ってしまい、私はひどく悲しい思いをした。私は彼のダービーでの義務不履行をリョンと同じくらいすぐに許していたし、その先も彼なら何だって許しただろうからだ。常に彼は、特別手当が快く支給されるような人々の一人だったのだ。

彼は三十歳前に亡くなった。かわいそうな友よ！　それでも、彼の名声が死ぬことはない。『太陽神』は（あまりにも悲惨に鼻を明かされた者の、その鼻梁が描き込まれているとしても）、それだけで不朽の名声を持つ人々の中に彼を置くのに十分である。リョンはそれを、チズルハースト卿に三千ポンドで売った――画家からは五百ポンドで買ったものだ。それは今は国立美術館にある。

*詩的正義は満たされた！

・　・　・　・　・　・

友情よりも恋の方が幸運だったということもなかった。

この世のどんな排他性も善良で美しい乙女を排除することはできないし、そのことはペントンヴィルでも不足することはなかった。

その他大勢よりもずっと美しくて善良な乙女が、常に一人いるのである――オテ

ル・ド・ゴンドロリエの女性たちの中のエスメラルダのように。ペントンヴィルというか、厳密には近くのクラーケンウェルに、そのような乙女がいた。ところが、彼女の身分は（エスメラルダのように）かなり卑しいものだったので、最も排他的傾向が少ない者でさえ、**彼女**とは一線を画してしまいがちだった！　彼女は大家族の一員で、その家族はミドルセックス留置場の西壁の向かいにあるかなり小さな店で、牛の胃と豚足、それに犬猫の餌を売っていた。彼女はその貧しい売り場では最年長で、多忙な、責任のある人間だった。彼女は創造主の造りたもうた貴婦人たちの一人、創造主の造りたもうた絶世の美女たちの一人――女神だったのだ！　私は彼女の店を通りかかるたびにそのことを確信し、彼女の優しく素直で媚びのない視線を恥ずかしそうに受けた。自分の恥ずかしがりを克服し、全女性中で彼女だけが自分にとっての女性であり、自分たち二人は一つになることが不可欠、絶対に必要だということを彼女に告げなければいけないときが近づいていた――直ちに！　すぐに！　永遠に！

しかし、私がそれをする気になる前に、彼女は別の誰かと結婚し、私たちは一言も言葉を交わすことはなかった！

もし彼女が今でも存命なら、老婦人である――どこにいようと、人生の階級が何で

＊詩的正義……文学作品に見られる因果応報の原理（勧善懲悪とは限らない）。

あろうと、善良で美しい老婦人になっていることを、私は確信するものである。あまりありそうにないけれども、もし彼女がこの本を読むようなことがあれば、彼女は未知の称賛者からのこの小さな賛辞を受け入れてくれるかもしれない。その者にとって、彼女は何年も前、ミドルセックス留置場の西側にいまだに接している忌まわしい通りを、美しく詩的なものにしてくれたのだ。また、それ以来その著者が、長くて開口部のない壁の、また苦悶の石の顔が荒涼たるスラムを見下ろすもの寂しい玄関の、その間違った側の方にいるとしても、彼女はこの賛辞を低く評価したりはしないよう努めてくれるかもしれない。

"Per me si va tra la perduta gente …!"

「我*を通り過ぎれば、地獄に落ちた人々の中に行くであろう……！」

・　・　・　・　・　・

この失望の後、私は（バイロンやビスマルクやヴァーグナーのように）大型犬を手

に入れたが、別に彼らを見習いたいという精神からではなかった。それどころか、当時の私はビスマルクもヴァーグナーも彼らの犬のことも聞いたことがなかったし、バイロンへの情熱や何かしら彼の模倣をしたいという願望も失ってもいたのである。それは単に愛すべきものの欠乏のためであり、それはもう一度私を愛してくれるに違いなかった。

＊我を通り過ぎれば……ダンテ『神曲』地獄篇第三歌より。この「我」とは、地獄の門の自称。

"PER ME SI VA TRA LA PERDUTA GENTE!"
「[我を通り過ぎれば、地獄に落ちた人々の中に行くであろう！]」

買ったときは大きな犬ではなく、片腕で運べるくらいの、暗いオレンジ色の小さなボールにすぎなかった。彼は私に、パッシーへの休暇旅行のために貯めた全財産をつぎ込ませた。私は彼の父犬、セントバーナードのチャンピオンをドッグ・ショーで見たことがあり、ああいう仲間と一緒に暮らす生活は十分価値があるだろうと感じた。しかし、**彼の**値段は五百ギニーだった。その生後六週間になったばかりの愛くるしい息子を見て、雄親のたった五十分の一であることを聞いたとき、私は、パッシーは待つべきだ、彼の飼い主にならなければ、と感じた。

私は彼に、金で買える最上のものを与えた――一クォート五ペンスの本物のミルクを一日三クォート、毎朝彼の軟毛をとかし、週に三回洗い、ノミを一匹ずつ全部退治した――愛の奉仕活動である。毎週土曜日に体重を計ると、週に六から九ポンドの割合で増えていくのが分かった。そして、彼の愛情パワーは、体重の二乗に比例して増加した。私は彼をポルトスと命名したが、それは彼がとても大きくて、ずんぐりして、陽気だったからである。だが、彼の高貴な子犬の顔と美しく悲しげな目に、私は、彼が中年になったら、気高いラ・フェール伯爵アトスの特徴である高貴で憂いに満ちた威厳を備えることを予見していた。

彼は喜びの種だった。夜、眠りに就いて、朝、彼がそこにいることを知るのは、す

てきなことだった。私たちが一緒に歩き回るときはいつでも、誰もが彼を見ようと振り返って感心し、彼はおとなしいかどうか、何か特定の品種なのか、何を食べさせているのかと尋ねるのだった。彼はサイズにおいて怪物のようになった――美しく、陽気で、優美で、のしのしと歩き、極めて愛情深い怪物で、彼の幸福なフランケンシュタインである私は、彼の世話をするつもりであった少なくとも十二年、うまくすれば十四年も続く宝物を持ったことで、自分自身を祝福した。しかし、十一か月になったとき、彼はジステンパー

ポルトスと彼の付き添い従者

で死んでしまった。

小さな犬が、死ぬときに大きな犬と同じくらい大きな悲しみを引き起こすかものかどうか、私には分からない。だが私は、もう二度と犬――大きかろうが小さかろうが――は飼うべきではないと心に決めた。

・　・　・　・　・　・

その後、私は詩を書くのに没頭して、それらを雑誌に送ったが、掲載されなかった。それらはたいてい、ある曲によってずっと前に起こったことが思い出されることがあり、それを詠んだものだった。私の詩の手法は、私の絵の手法同様限定的だった。

ここに私が最後に書いた、三十年前の詩がある。それをここに挙げるための唯一の言い訳は、この詩が非常に**特異な予言**になっているということだ。

回想の引き金となった曲（父がよく歌っていたフランスの古い歌）は、かなり単純で感動的なものである。フランス語の古い歌詞はこんなふうになっている。

"Orléans, Beaugency!

Notre Dame de Cléry!
Vendôme! Vendôme!
Quel chagrin, quel ennui
De compter toute la nuit
Les heures — Les heures!"

「オルレアン、ボージャンシー！
ノートルダム・ド・クレリー！
ヴァンドーム！　ヴァンドーム！
何と悲しく、何と憂鬱なのだろう
一晩中指折り数えることは
時間を――時間を！」

これだけだ。これは眠れない中世の囚人によって歌われたと想像される。彼は、不眠症のせいで時間が進まないつらさを紛らわせるために、近くの鐘楼からの時刻を告げる鐘の音を、自分の頭に浮かんだ言葉に置き換えている。私は、彼の名前がパスキ

エ・ド・ラ・マリエールで、私の祖先なのだと空想してみた。

鐘

古いフランスの歌がある。
孤独と悲しみの小曲だ――
自然にできたように単純で、比類なく甘く――
そして悲しい――とても信じられないほどに！

メロディは名もない誰かが
書いたもの――だが、これには私見を述べよう。
この詩を作った者は、誰であれ昔の人で
私のフランスの祖先である。

私はこの深い地下牢を知っている
彼が長いこと繋がれていた場所を――なぜそこに繋がれていたのかも。

彼の苦悶は、眠れないことがすべて
　それは罪への自責の念のためだった。

　私には、彼の冷たくて硬いベッドが見える。
私には、彼の耳の中で響いている鐘が聞こえる。
彼が毎晩、その眠れない頭を、
　涙で濡れた枕に押し付けたときに。

　おお、休むことのない小さな鐘よ！
それは変わらなかった――*ラウンドレイが鳴るだけ
その不幸な時間の暗い一時間ごとに
　ため息で自らを吐き出して。

　そしてさらに、ますます、
その重荷は彼の失われた自己の一部になった――

＊ラウンドレイ……短いリフレインのある詩・曲。

そして、彼の記憶と入り混じり、
彼の心への道を穿(うが)った。

そこでは名前が織り込まれた
愛する者がいたために彼が愛した多くの町の名前が、
その音楽の織物の中に。こうして彼は
小さな歌を作り上げた。

かつてそれを耳にして、その甘美さのために
それを愛したすべての者の中には、私以外の誰もいない
その音の底に潜む、隠された言葉としての
道しるべの糸を見抜いた者は。

死んで久しい唇から出たその悲しい叫びは
この胸の中でだけ谺することに気が付いた！
血の記憶に導かれたおかげで、私だけが

この狂気の物語を知ったのだ！

これは本来なら私のものだが、
引っかき回して暴露するべき宝の山のうち――
ある悲しみと喜びの遺産を
世界は喜んで共有するだろう――

それでも、私は永久に打ち明けることも、
そのうちこっそり告げることも、すべきでない、
ある曲の中に閉じ込められた
わずかな数小節がこうして持つ秘密を。

その小さな歌が
頭の中に鳴り響くと、私はそれが彼であると知る、
長いことほこりまみれだった、私の不運な独りぼっちの祖先であると、
私は自分の中で彼の人生を再体験する！

私はこれを『――誌』に送ったが、いちばん上にこの詩の元になったあのフランスの六行詩を書いておいた。『――誌』はフランスの六行詩だけを印刷した――私の肉筆のうち、かつて印刷にかかった唯一の文書である。そしてそれは十五世紀にまで遡るのだ！

こうして私の小曲は世間から失われてしまい、しばらくは私からも失われていた。だが、かなり後になってから、私はそれを見つけ出した。*ロングフェロー氏がかつて**彼の**歌を見つけ出した場所、「友の心の中」で――確かに、どんな歌でも存在し得る最も快い行き先である！

本物の血の記憶が私を運んでくれる日がそう遠くないことを、私はほとんど予見できなかった――だが、その日は来ることになる。

・　・　・　・　・　・

詩も友情も恋愛も失敗したため、私は美術に慰めを求め、国立美術館、マールボロ・ハウス（ヴァーノン・コレクションがあった）、大英博物館、王立美術院、その他の

展覧会に頻繁に出かけていった。

私は、ティツィアーノ・ヴェチェッリオ、レンブラント、ベラスケス、ヴェロネーゼ、ダ・ヴィンチ、ボッティチェッリ、シニョレッリの前にひれ伏した――古いほど良かろう、というわけだ。私は、そこにあるとすでに知っていたり新たに知ったりした偉大さを、直に感じ取るために最善を尽くした。しかし、適切な訓練が不足していたため、私はその高みに達することができず、大半の門外漢同様、間違ったものでそれらを称賛した。というのも、それらには、まさに美――門外漢がいつも、巨匠の中に探し、しばしばそこに見つけたと自分に言い聞かせるような――さらにしばしばあることには、見つけた**ふりをする**ような――卓越し、言葉にできないような特質・線や色・表現などの美――が欠乏しているからなのだ！

私は、それよりも自分たちの時代の作品の方に、はるかに、心から感動させられた（とはいえ、あえてそうは言わなかったが）――例えば、若いミレー氏の『安息の谷』『秋の落ち葉』『ユグノー』――ちょうど私が、アルフレッド・テニスン氏の『モード』や『追憶に』のような詩の方が、ミルトンの『失楽園』やスペンサーの『妖精の女王』よりもずっと自分にとって貴重で愛すべきものであることに気づいたように。

＊ロングフェロー氏が……ロングフェローの詩『矢と歌』の内容を指している。

実際、当時の私は絶望的に現代的だった――まったくありふれた若者だったのだ。私がいちばん熱っぽく深い敬意を抱いていた名前は、そのとき存命中の男女のそれだった。本当は、ダーウィン、ブラウニング、それにジョージ・エリオットは、私にとってはまだ存在していなかった。しかし、テニスン、サッカレー、ディケンズ、ミレー、ジョン・リーチ、ジョルジュ・サンド、バルザック、老デュマ、ヴィクトル・ユゴー、アルフレッド・ド・ミュッセはそうではなかった！

実物の彼らを眺めたことはなかった。だが、その他の有名人と同じように、私は彼らの外見をよく知っていたし、彼らがかつて文字で書いたり線で描いたり色で描いたりしたたいていの作品についてなら、非常に難しい試験問題を出されたとしても耐えることができただろう。

それ以来、別のいろいろな等級の星が昇ったが、少なくとも古い銀河の四つは過去から輝き続けており、私の目には薄暗くならないまま古代の輝きを保っている――サッカレー。我が親愛なるジョン・リーチ。彼は、私が笑いたいときに笑わせてくれる力をまだ持っている。ほかの二人については、女王も世間も私も、彼らの功績に関しては同じように考えていることは明白である。彼らのうちの一人は、今ではイギリス貴族の看板的人物で、もう一人は准男爵で大富豪である。もし彼らがそうなりたい

と望むなら、カンタベリー大主教よりも優先してすぐにでも彼らを公爵にしてやりたい、などというのは私くらいだろうか。

私がこうして自分の長い間の恩義を記録し、無謀にも、まだ疑うことのない英雄崇拝の時代から得られたばかりのこの貧弱な賛辞を呈するのは、自信に満ちた、それでいて謙虚な心を伴ってのものである。少なくともそれは、私が身を置いていた精神的な緯度と経度がどんなものかを、私の読者（私のことを気にしてくれるくらい十分に興味を持ってくれる人がいたならば）にお見せするのに役立つだろう。あまりに並外れた経験――いわば一種の照会参照物だ――を運命づけられていたので、読者は一目で私を見分けられるかもしれない。そうした、有名で、おそらく不滅の名前に読者が抱いている尊重心によって。

少なくとも、私の嗜好――十九世紀の、特にあの期間のありふれた若者の嗜好――は平均的なものであり、大多数の人間に共有されていることは疑いないだろう。運動競技、冷浴、軽い読みものと安物のタバコに夢中になり、日常的な不満を与えられた

＊ジョン・リーチ……漫画家・イラストレーター。デュ・モリエイより十七歳年上で、彼と同じく『パンチ』誌でも活躍したが、デュ・モリエイが『パンチ』に関わり始めてから四年後、四十七歳で亡くなった。

者。誰かのために、誰かから、誰かによって、異常なものを期待することなど、しそうもない者。

・　・　・　・　・　・

しかし、エルギン・マーブルズの素晴らしさと言ったら！　私はそれをすぐに理解した――たぶんあまり理解べきものがないからだろう。肉であろうと大理石であろうと、肉体的に美しい人々は我々すべてに魅力を感じさせる、というだけの話なのだ。

その素晴らしい部屋で一体の塑像（そぞう）を見る前から、奇妙な直感あるいは自然の本能によって、私は、人間はそのように作られるべきだということを**知っていた**。私はそれを予知していたのだ――自分がいつも感じていた美的な理想を、それらはあまりにも完璧に実現していた。

ロンドンの通りを歩いているとき、私はよく、七フィートの身長の、慈善心に富む一種の上流階級のような数百の存在がいる、自分の想像上の世界に住んだものだった。血肉が作られ、それを思い描かれた彼らは、体格に釣り合った心と態度を持ち、その善良さのために世界のほかの人々よりも上に位置している。私たちが毎日会っている

ような数百万人の人々の形をした引き立て役を彼らに提供することが、（私の夢が意味を持つために）必要であると気づいたからである。私はうぬぼれが強く利己的だったと言わざるを得ない。前者の方に自分を参加させ、ちょうどテーセウスのような体格を自分の特定の用途と着用のために選択したくらいであるから。もちろん、（彼から奪われた）鼻と手と足は復元され、すべての損傷が修復された。

そして、自分の恋人かつ仲間として、私はリントットが石膏像を持っていたミロのヴィーナス（もはや腕なしではない）その人を正式に選んだ。彼女は、私が肉眼で見る前に予見していた美しさを持っていた。

イベットスンなら「Monsieur n'est pas dégoûté!［ムッシューは節度がありませんな！］」と言ったであろう。

・　・　・　・　・　・

しかし、私は何よりも、神の御業（みわざ）であるところの音楽を熱望した。

ああ、コンサートやオペラやオラトリオは、国立美術館や大英博物館のように、一文なしに対して開かれる――濫用（らんよう）されない特権だ！――はずがないのである。

私のような金欠人間でも、時にはこの熱望を満たせるだけの小銭を持てることがあり、やがて私は夢にも思わなかったような歓喜の領域を発見した。モーツァルトやヘンデルやベートヴェンその他のような王者たちを、私の父はどうやらほとんど知らなかったようだ。だが彼らは、父が年中歌っていた曲を作ったグレトリやエロルドやボワルデューよりも強力な魔法使いたちだった。

"MONSIEUR, N'EST PAS DÉGOÛTÉ!"
「[ムッシューは節度がありませんな！]」

そのうえ、彼らは人を魅了する以上のことができることも発見した――彼らは私の疲れた魂からその疲れそのものを追い払い、しばらくの間、その疲れた魂を勇気や諦念や希望で満たすことができるのだ。ティツィアーノ・ヴェチェッリオやシェイクスピアやフィディアスのような人たちでさえ、それを果たすことはできなかった――ウィリアム・メイクピース・サッカレー氏やアルフレッド・テニスン氏でさえ。

人生のこの期間の最も甘美な思い出(実際のところは唯一の甘美な思い出なのだが)は、自分が聴いた音楽と、それを聴いた場所のそれである。それは魔法だった！　私はそのすべてをどんなに鮮明に思い出せることか！　数日間の熱烈な期待。正式に公示宣伝されたような**あり余るほどの豊富さ**の中から、事前にする慎重な選択。それから、その一部が最安の天上桟敷(さじき)に行くはずの人々に予約されたドアへの、通りでの長い順番待ち。長い石段を苦労して上るという自分本位だが上機嫌な努力の後で、苦労してやっと手に入れた地上高い席にやっとたどり着く(虚弱な人には申し訳ない話だが、耳が飢えているとそんなことを意識する余裕もないのである)。華やかで壮麗な建物はぎゅうぎゅう詰めだ。巨大なシャンデリアが黄金色(こがねいろ)に燃える。期待の喜びが空中に漂い、ガスやペパーミントやオレンジの皮の香りもそうだ。音楽好きの人間というものは、普通の群衆よりも甘い香りがすることに私は気づいた。

オーケストラが一人ずついっぱいになっていく。楽器の音合わせ――聴き慣れた不協和音。甘美で魅惑的な気配。指揮者が席に座り――拍手――静けさ――叩く音が三回――指揮棒が一回、二回、三回と振られると――不滅の魔法の噴水が解放され、その最初の噴出が来る。

「*その日に集中する心配事の
そのテントを折り畳もう、アラブ人がそうするように、
またそれを彼らが静かに、こっそりと運び去るように」

次に、見よ！　幕が上がると、我々は一直線に*セビーリャに行く――ペントンヴィルの次がセビーリャなのだ！　変装下にあるアルマビバ伯爵が貴族らしく、雄々しく、陽気にギターをかき鳴すと、そこから何という音が発せられることか！　かつて発明されたあらゆる楽器が、そのギターの内にあるからだ――全オーケストラが！
「Ecco ridente il cielo…［ほら、空は微笑み……］」ロジーナのバルコニーの下で、彼はこう歌う（当時としては最も美しい男声で）。すぐにロジーナの声がカーテンの背後から聞こえてくる（当時としては最も美しい女声で）――あまりに少女っぽく、あ

まりに清浄無垢で、あまりに若く快活であるために、思わず目が涙でいっぱいになってしまう。

こうして元気づけられ、彼は、私の名前はリンドーロで、あなたと結婚したいのです、とさえずるように歌う。私は、この世界では財に乏しいけれども、（ちょうどピーター・イベットスンのように）並外れた無尽蔵の愛の能力には恵まれています、こんなふうに、夜明けから山の後ろに日が沈むときまで、私はあなたにいつまでも歌いましょう、と誓う。だが、言葉など何だというのだろう？

「続けてください、愛しい方、続けて、**今みたいに！**」ロジーナが歌い返す――鈍感で意気消沈して陳腐なピーター・イベットスンの心が、晴れ晴れとした希望と愛と歓喜以外の余地を持たなくなるまで！　それでも、それは単なる音にすぎないのだ――信じがたく、異常で、非現実的で、無意味なものに！

あるいはまた、きちんとして十分に明るいが、ほかの点では目立たない四角い建物――まさに音楽の礼拝所だ――の中で、モダンな服装と眼鏡を身に着けた四人の実務的な紳士が、上品な拍手に包まれて、控え目な舞台上の位置に就く。するとすぐに、

＊その日に集中する……ロングフェローの詩『一日の終わり』より。

＊セビーリャに行く……上演されているのは、ロッシーニの『セビーリャの理髪師』である。

静まっていた空気が十六本の弦の振動で震え出す――それだけで、それ以上のものは何もない！

だというのに、その中には、ベートーヴェンやシューベルトやシューマンがさしあたり私たちに言わねばならないことが、全部詰まっているのだ！　そしてそれは、何と申し分のない精密さと完璧さをもって発言されることか――また、何と数学的に正確な確実さを持ち、それでいて何と口当たりよく、厳かで、優美で、ほかとの相違を際立たせていることか！

彼らは世界でいちばん偉大な四人の演奏家だ、たぶん――ところが、彼らは我を忘れ、（彼らが私たちにそうあってほしいと願うそのままに）私たちは彼らを忘れてしまう。その巨匠の作品を彼らがあまりに敬意に満ちて解釈するために、私たちは彼の強力な願望とともに憧れを抱いたり、狂喜と勝利とともにわくわくしたり、天国的な苦痛とともに心を疼かせたり、神聖な諦念とともに忍従を経験したりすることができるのだ。

かつて存在したいかなる言語のどんな言葉――緊密に繋ぎ合わせ、脚韻や頭韻を踏ませ、好きなようにねじ曲げた言葉――であっても、その十六本の弦のえも言われぬ震動がやってのけるようには、人間の魂の最深部にまで突き刺さることも、神を垣間見させることも、できるものではない。

ああ、言葉のない歌は最高だ！

それから、ジプシーのように小さく、屈強そうでもじゃもじゃ髪で、まるで天国で夜の声を聞いて一生を過ごしてきたように見え、リトアニアの森がどんなものかを知っていて、そこで狼と猪（いのしし）を親友とし、木々を渡る風を教師としたような者が、真鍮で補強されたオーク材のブロードウッド社製ピアノに座っている。彼の驚異的な指の下で、容易に忘れられない、繊細な、疑問に満ちた世界の悲しみが――月のない闇の神秘、星明かりの自然が――夜想曲や即興曲や前奏曲の中に、それ自身を吐息のように放出する――ただのワルツやマズルカの中にさえ！　しかし、ワルツやマズルカのような最も軽い曲でも、それに合わせて踊ることを夢見ることはない。気まぐれで魅力的な悲しみ――仮に涙をこぼそうという気になっても、涙を誘われるほど深くはない――は、とても繊細で、とても新鮮で、それでいてとても気品があり、とても軽やかに洗練され、世俗的で、優雅に仕上げられているために、いつまでも続く上流社会的な法悦へとそれ自身を結晶化する。まるで感じ取った彼にとっては死（厳密に言えば安楽死）であったものが、私たちのために演奏されているようにも思われる。確かに不滅の悲しみが、そのリサイタルが、何があっても決してつまらなくなることがない不滅の悲しみ――ショパンの悲しみ――が。

けれども、ショパンがそれほどまでに悲しんでいた理由を、私たちは推測すらできない。おそらく、ただ悲しむために悲しんでいただけなのだろう。とても贅沢な悲哀――本当の理由がない、本当の悲しみ（当時の私のそれのように）。結局のところ、悲しみの音楽を作るためには、それが最も良く最も安上がりな種類の悲しみなのである。

そして、この偉大なる小さなジプシー・ピアニストは、ショパンを実に上手に演奏する。明らかに彼は、リトアニアの森で人生を過ごしたわけではなくて、夜も昼も鍵盤を懸命に訓練したのだ。それに彼は、木々を渡る風よりも良い師匠を持っていた――すなわち、ショパンその人である（プログラムに印刷されているのだから）。夜の声を聞いたのは、彼より前の、彼の両親とそのまた両親だった。ところが、彼はその全部を記憶しており、その全部を自分の師匠の音楽に込め、私たちにもそれを思い出させるのである。

あるいはまた、合唱を見た。人が上へ上へと段状に積み重なり、巨大なオルガンで終わっている。だが、その雷鳴のような音は、今は沈黙している。

場合によっては、*リリプティアンのような姿である男女の何人かが、リリプティアンの大群衆の真ん中で小さな脚で立ち上がり、完璧な声を神聖な静寂を通して前方に

響かせる（その声はリリプティアンではあり得ない）。それは私たちに「主*の前に安らげ」と命じるか、さもなくば「彼は侮られて人に捨てらた」と告げる。だが、ここでもまた、言葉はどうだろう？　それらはほとんど邪魔でしかない。たとえそれが美しいものだとしても。

硬化していた魂は、歌手の声音で、嘘をつけない音の言い表せない情念で、溶けて和らぐ。人はほとんど信じている――少なくとも他人の信仰を信じている。最後には理解し、不寛容と冷笑的な侮蔑を一掃し、純然たる人間の共感のうちに、ほかの人々と共にひざまずくことになるのだろう。

おお、惨めな門外漢よ（もし以下がすべて真実なら、該当だ）。その者は――書かれた言葉に対してあまりにも絶望的に鈍感で、話されたメッセージに対してあまりにも絶望的に無感覚な心の持ち主で、訓練された喉や金属パイプやリードやヴァイオリンの弦によってしか心を動かされない――耳の奥にある小さな太鼓に打ちつける、数学的に組み合わされた、目に見えない、実体のない、不可解な小さい空気の波によってしか、心を動かされないのだ。そして、これらの数学的な組み合わせとそれを支配

＊リリプティアン……『ガリヴァー旅行記』の小人国リリパットの住人。

＊主の前に……詩篇三七章七。「彼は侮られて……」はイザヤ書五三章三。

する法則は、モーゼより前、牧神（パン）よりも前、喉や鼓膜が進化したのよりもずっと前から、絶えず存在していた。それらは絶対だ！

おお、神秘の中の神秘！

ミューズの中のミューズ、エウテルペよ、そなたが演奏できるよりもはるかに上手に彫刻できるギリシャ人たちに、そなたが初めて（その何も習っていない両手に馬鹿げたリラを持たせた）己の似姿のためのモデルになってから、そなたはどんな風采になったことだろう！

四本の弦。だが、ストラディヴァリウスの指板上の弦ではない。いや、申し訳ない——五本だ。そなたの音階は五音音階だったと思うから。オルフェウス、彼自身も、それより良いものは持っていなかったのは事実だ。彼が魔法のような力でハデスからエウリュディケを連れ出すのにもう少しで成功というところまでいったのは、まさにそのような楽器を用いたおかげだった。しかし、ああ、彼女は戻ってしまった。再考した結果、彼女はやはりハデスの方が好きだったのだ！

そなたは、あの貧弱な、間に何もない五つの基礎音で、心を燃え立たせ、狂わせ、かきむしり、それからそれを和らげ、慰め、あらゆる理解を超えた平穏へと魔法のように導くことができたというのか？

固定された五つの音、変更不可能な音高から、六番目の音ではなく、星を作ることができたのか？

それは何だったのか、その五つの音は？「ド・レ・ミ・ファ・ソ」？　もしそなたがそれで何かを作ったとしたら、そなたの言葉のない歌はどんなものになったのか？

エウテルペよ、そなたは当時、本当に無垢な乙女であった。とはいえ、そなたの八人の双生児の姉妹はすでに成長し、外に出ていた。そして今、そなたは少なくともその他の全員よりも頭半分は抜きん出ている。「Tu leur mangerais des petits pâtés sur la tête — comme Madame Seraskier!［彼女たちの頭の上の小さなパテを食べられそう――セラスキア夫人のように！］」

そして、おお、そなたは美しさのため、何とほかの全員を上回っていることか！私の評価によれば、少なくとも――おおよそで――これまたセラスキア夫人くらいに！

そなたもようやく成長し終えたということだろうか？

否、それどころか、そなたはまだ無垢な乙女ですらない――一歳で、身長七フィートで、そなたが離れたばかりの祝福された天界と、我々哀れな死すべき運命の者たちの冴えない家、それらの中ほどをよちよち歩いている、かわいらしい赤ん坊だ。

私たちの親族である一歳のかわいらしい赤ん坊は、その両手を私たちの膝の上に置き、言うに言われぬ意味ありげなものに満ちた目で私たちの目を見上げる。その子には、言いたいことが山ほどあるのだ！「ガーガ」と「バーバ」しか言えないというのに、おお、その声の探し方や見えるものへの触り方と言ったら――赤ん坊が好きならば、の話だが！　私たちはまさに核心に心を動かされる。私たちは理解したいと思う。それは私たち全員に関係しているから。私たちは、かつては自身も――個人でも種族でも――そんなふうであったのだが、どうしても**思い出す**ことができないのだ。

そして、**そなた**はまだ私たちに何かを言うことができるのか、エウテルペよ。そなたの「ガーガ」と「バーバ」以外に、それに対して私たちが感じ、意味が理解できない何とも言えないかわいらしさ以外に？　しかし、それはどんなに美しいことだろう――そなたがどんな見た目を、どんな声を持っているか――音楽が好きならば、の話だが！

Je suis las des mots — je suis las d'entendre
Ce qui peut mentir.
J'aime mieux les sons, qu'au lieu de comprendre

Je n'ai qu'à sentir.

「私は言葉に倦んでいる*――嘘かもしれないものを
聞くことに。
私は音の方が好きだ、理解するのではなく
ただ感じるだけでよいものだから」

・　・　・　・　・　・

翌日、私は、そのような感激や歓喜で自分を満たしてくれた音楽を買ったり物乞いしたり借りたりして、家の小さなスクエア・ピアノの所まで持ってきて、自分の総力を挙げてそれを指奏しようとした。だが、人生において、始めたのが遅すぎた。
読むことができない美しい楽譜とともに、演奏できない楽器を前にして、熱烈な憧れを抱きながら手も足も出ないまま座っているなんて！　タンタロスでさえそれほど厳しい試練を味わうことはなかった。

＊私は言葉に……シュリ・プリュドムの詩『臨終』より。

自分たちは音楽にかなり熟達していた我が親愛なる父と母が、学ぶのが非常に容易だった年齢のときに楽譜を私にまったく教えようとしなかったのは、無情なことのように思われた。そうしていれば、私は、それはもう異常なほどの喜びを味わったあの音の不思議な世界を自由自在に渉猟(しょうりょう)でき、名を上げていたかもしれない――たぶん。

だが違うのだ。父は、実に私が生まれる前から、科学の女神に私を捧げていたのである。私はいつか、自然の女神のより厳格な秘密の追求、捕捉、利用のために必要なものを、彼よりも多く身に付けられるかもしれなかった。浮ついたミューズたちとの戯れなどあってはならなかったのだ。ああ、それなのに！　私は虻蜂(あぶはち)取らずに終わってしまった！

こういうわけで、エウテルペは不在で、彼女の魔法は消えてしまうのだった。彼女が手書きしたものは私の前にあるのに、私はそれを解読する方法を学んでいなかった。すると、私の疲れた自己は、その元の牢獄――自分の魂――へと這い戻るのが常だった。自分病(セルフ・シックネス)――selbstschmerz, le mal de soi!　何という病！*　こんなのは医学その他のどの辞書にも載っていない。

このために私は鞭打たれるべきだった、本当に。しかし、私を鞭打ってくれるほど大きい人も優しい人もいなかったのだ！

・　・　・　・　・　・

しまいには、疲れて弱っていた、滑稽至極な私の自我が排斥される日――善によって悪が追い払われる日――がやって来た。ヘンデルやベートーヴェンやシューベルトさえ凌駕するような、さらに強力な一人の魔術師によって！

クレイ卿という人がいて、リントットは彼のためにハートフォードシャーに労働者用のコテージを建てたことがあるのだが、私は時々そこに行って職人たちの監督をしていた。コテージが完成したとき、クレイ卿とその細君（非常に魅力的な中年女性）がそれらを見に来て、なされたことすべてに非常に満足し、そのうえこの世の全人類の中で**私**にいたく興味を抱いたようだった！　数日後、私は街中の彼らの家での演奏会への招待状を受け取った。

最初私は、あんまり恥ずかしくて行けないと感じた。しかし、リントット氏は、そうすることは君の義務だ、それがビジネスに繋がるかもしれないのだから、と主張し

＊何という病――……selbstschmerz はドイツ語、le mal de soi はフランス語で、英語の self-sickness を直訳したもの。

た。それで私は、夜が来ると勇気を振り絞って出かけていった。

その晩は何もかもが魅惑的だった、あるいは私がかなり場違いだったというやや苦い感覚がなければそうなったところだった。

だが、私はずっと、全立会人中でいちばん注視されていないことに十分満足し、ここでは少なくとも一人で放っておかれるだろうという安心感に幸福を感じた。完全な他人が、私を友好的でなれなれしい冷やかしの的にすることで、私を落ち着かせようと試みないことにも。また、靴下止めで靴下を止めた公爵もベルトを着けた伯爵も(肩書き記章は付けていなかったけれども、私は公爵やら伯爵やらがブラックベリーと同じくらいそこにたくさんいたことを疑っていない)、私の背中を叩いて褒めたり、私が実際よりもむしろ大馬鹿に見えるのか、それとも見た目よりも大馬鹿なのかを尋ねたりはしなかったことにも(私はまだその陰険な質問のための気の利いた回答を思いついていない。それがその質問にいらいらさせられる理由なのである)。

常に私は、イギリス人はお堅い人々だと聞いていた。が、レディ・クレイのもとに集まる人々には堅苦しさはないように思われた。おどけた様子もなかった。彼らは見るだけで人を安心させた。たいていは大きく、たくましく、健康的で、静かで、ユーモアがあり、柔らかく愉快に調整された声を持っていた。広く明るい部屋部屋は暑く

も寒くもなかった。壁には美しい絵があり、花の絶妙な香りが広大な温室から漂ってきた。私はそれ以前にそのような集会に行ったことはなかった。何もかもが新鮮で、驚きで、実を言うと、私の好みにぴったりだったのだ。それは私が最初に「上流社会」を垣間見た機会で、最後でもあった――たった一度だけ！

大勢の人がいた――だが群衆というわけではなかった。誰もがほかの皆をかなり親密に知っているようで、一時間前にどこかほかの場所で始まった会話をもう一度始めているようだった。

やがてその会話が静まると、グリジ*とマリオが歌ったのだ！　私は、熱狂と狂喜を抑制するために精一杯努力しなければならなかった。でなければ、私は大声で叫んでしまいそうだった――もう少しで自分も歌ってしまいそうだったのだ！

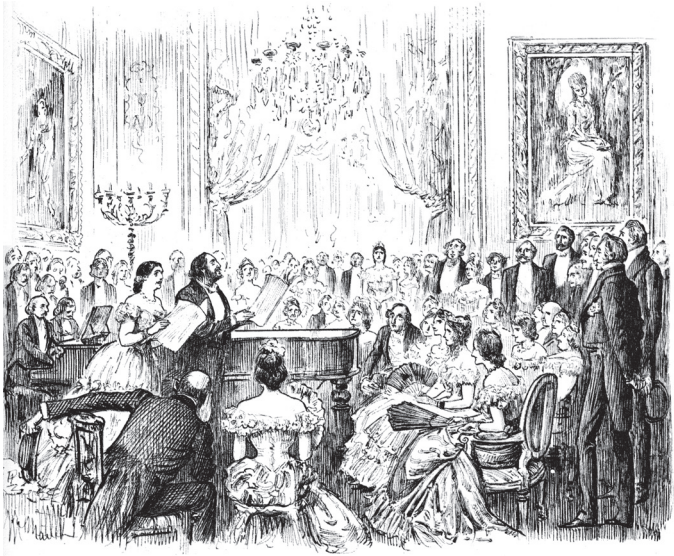
その天上のデュエットに続く拍手の最中、一人の女性と紳士が部屋に入ってきたのだが、その女性を見たとき、新しい興味が私の人生に入り込んだ。セラスキア夫人の美しさが子供の頃に私によく感じさせた、半分忘れていた昔の無言の苦痛と歓喜のすべてが、もう一度甦ってきた。とはいえ、深さと強さを比較してみると、昔の小さな

＊グリジとマリオ……ジュリア・グリジとジョヴァンニ・マッテオ・マリオ。前者はイタリアの高名なソプラノ歌手で、後者は彼女の二人目の夫でテノール歌手。ロンドン在住だった。

男の子の高音に対し、今は頑丈な男性のバリトンのようであった。

それは、極めて理解が容易でありながら、捉えがたく、完全で、高度に組織化された秩序の美しさが、すっかり覚悟ができている犠牲者に加えることができる、素早く、鋭く、残酷な一撃、coup de poignard［短刀の一突き］だった。

そして私は、何とすっかり覚悟ができている犠牲者であったことか！　みすぼらしく、恥ずかしがりで、過敏で、処女のごとき野蛮人――上流階級の当世風なロンドンで初めて道に迷った、チンガッチグックの息子アンカス。



"PARIGI, O CARA…"「［おお、愛する人よ、パリを……］」
【訳注】ヴェルディ『椿姫』（1853）の二重唱

崇敬も嫌悪もどちらにも禁欲的で、月足らずで生まれた純潔な中世の騎士。彼は抽象的な女性が唯一の信奉物で、具体的な女性は一日五十回の幻滅の原因だった！

十九世紀の中頃で途方に暮れた、頑強で愛に飢えた熱烈な異教徒。何らかの奇妙な遺伝的本能が、常に愛される女性の形とはどうあるべきかについての明確で完璧かつ精巧に仕上げられた概念を、彼に植え付けていた――額、こめかみ、うなじに髪が伸びるべき道筋から、足指一本一本それぞれの長さと曲がり具合と位置を統制すべき律動性に至るまで！　彼が誇らしく、またうれしく思ったことは、彼の先入観的理想像は、あたかも自分がペリクレス*とアスパシアの時代に生きていたかのように、フィディアスのそれに近いものであることに気づいていたことである。

こんなことを書くのも、この哀れな筆記者はそういう者であり、また子供の頃からそうだったからだ。この美しい女性が初めて彼の視界にすっと現れるまでは。

彼女は非常に背が高かったので、その目は私とほぼ同じ高さに見えた。しかし、彼女は背の低い人のような隙のない俊敏さと優雅さで動いていた。彼女の太くて重い髪は濃い銅褐色で、顔色は色艶があって青白く、眉とまつげは黒く、目は明るく青みが

＊ペリクレスと……ペリクレスはアテネの政治家、アスパシアは彼の愛人、フィディアスは彫刻家。彼らの時代とは、紀元前五世紀頃である。

かった灰色だった。鼻は短くて尖り、いくらか先端で傾いていて、赤い口は大きくてとてもよく動いた。この点は私の先入観的理想像から逸脱していたため、彼女は先入観的理想像というものがどんなにたいしたことがないものになり得るかを私に示してくれたことになる。彼女の完璧な頭は小さく、長く太い喉の周りに二本のかすかな皺が平行に走っていて、フランスの彫刻家が「le collier de Vénus［ヴィーナスの首飾り］」と呼ぶものを形成していた。首の皮は白椿のようで、ほっそりとした怒り肩だが骨は見えなかった。彼女はフランス人が「la fausse maigre［着痩せする女性］」と定義するタイプの美人だったが、それは「痩せたように見せかけた女性」を意味しない。

彼女は思慮深さと陽気さを同時に兼ね備えているように見え、私は人の優しさというものをかつて一度も見たことがなかったために、優しそうに見えた――紹介もされないのに、あらゆる心配事を伝え、信用して秘密を打ち明けるべき人のように！　笑うとき、彼女は上下両方の完璧な歯を見せ、目はほとんど閉じられたようになり、そのため上下両方のまぶたに沿って並んでいる濃いまつげのせいでもはや目は見えなくなった。そんなときの彼女の顔の表情はかなり強烈に、残酷なまでに甘美なものになったため、それはナイフのように人を突き通った。それからその笑いが突然やんで、唇全体がまた合わさると、彼女の目は情け深いユーモアと思いやりのある好奇心に満ち、

周囲のあらゆる物と人への興味をいっぱいに湛えながら、再び穏やかな二つの灰色の太陽のように輝き出すのだった。だがその点で――私は美しい曲を説明できる以上の説明をすることはできない。

その素晴らしすぎる眼球から、優しさ、また優しさ、さらに優しさが、香油のように流れ出た。しばらくすると、たまたまその香油が私にもわずかの間注がれて、私は甘美だが恐ろしい混乱に見舞われた。次に、彼女が女主人に私が誰であるかを尋ね、答えを受け取っているのが見えた。彼女が流していた香油を私にもう少しの間注いでから、彼女は私を自分の思考から追放した。

グリジ夫人が再び歌ったのだ――『オテロ』*のデスデモーナの歌を――そして、その美しい女性は神々しい歌手に感謝した。彼女はその歌手をまったく親密に知っているようだった。彼女の感謝――イタリア語での感謝――は、私には歌よりもずっと神々しいように思われた――私はその言葉をあまり理解できなかったし、ちゃんと聞き取ることさえできなかった――遠すぎたのだ。しかし、彼女は目と手と肩でも感謝していて――わずかだが幸福そうな動作で――、それは言葉と変わらなかった。それまで

＊オテロ……今は一八五〇年代半ばであるから、この『オテロ』はヴェルディ作曲のもの（一八八七年初演）ではなく、ロッシーニ作曲のもの（一八一六年初演）であろう。

話された中で最も甘美で誠実な言葉であったことは確かだ。

彼女は多くの人に取り囲まれ、気に入られようとされていた――明らかに極めて重要な人物だった。私は自分がいる隅に立っているもう一人の内気そうな男性に、彼女が誰なのかを思い切って尋ねてみた。すると、彼はこう答えた――

「タワーズ公爵夫人ですよ」

彼女は長くは留まらず、彼女が立ち去ると、彼女が来る前にはとても明るいと思われていたもの全部が、味気なくありふれたものに変わった。私たちがペントンヴィルでやってい

タワーズ公爵夫人

たように、女主人がおやすみを告げて楽しい夜を彼女に感謝する、という必要はないと分かったので、私はその家を抜け出して、変貌した男となった自分を下宿へと歩いて戻した。

たぶん私は、あのすてきな若い公爵夫人に再び会うことはないだろうし、彼女と知り合うことは確実にないだろう。しかし、彼女の大矢（おおや）は、まさに私の心臓にまっすぐ正確に突き刺さり、私はそれが、しっかりとかかりが引っかかってどんなに抜けないものか、その祝福された傷からいつか引っこ抜かれるという可能性をどんなに完全に越えてしまっているかを感じていた。これは治らないかもしれない。いつまでも血を流し続けるかもしれない！

彼女は私の孤独な人生で、思考と言葉と行動において、それに対して恥じないように行動すべき理想となるだろう。私が絶対に確実だと感じた直感が、彼女は美しいのと同じくらい善良であるということを告げていた――

憎*しみの中の憎しみ、軽蔑の中の軽蔑、
愛の中の愛を与えられて。

＊憎しみの中の……テニスンの詩『詩人』より。

そして、セラスキア夫人のイメージが消えていくと同時に、この新しい星がその光で私を導くために生まれたが、ほんのわずかな間しか見えない。が、一度発生すれば、割れた雲を通して、私はそれが天空のどの部分に存在し、最も美しい星座たちの間で独立して輝いたかを知った。そしてその後、その星は私の顔をその方向へと向かわせ続けた。できることなら私は、自分の生涯で二度と再び卑劣なことや不純なことや不親切なことを、したり言ったり考えたりしたくなかった。

・　・　・　・　・　・

次の日、神聖な奉仕のために孤児院へと歩いていたとき、リントット夫人が――あたかも嫌々するかのように――夜の冒険のことで私を厳しくご追及あそばした。

私はタワーズ公爵夫人については言及しなかったし、さまざまな女性のドレスを説明することもできなかった。しかし、私は彼女が深く興味を抱きそうだと思うやり方で、ほかのすべてを説明した――花、素晴らしい絵とカーテンとキャビネット、美しい音楽、たくさんの華やかな紳士淑女。

彼女はそのすべてに不満の意を表した。

そんな贅沢基盤の上での生活が、道徳的にも知性的にも本当に優れた価値の資質に貢献することなどないわ。少なくとも**私**には、質素な暮らしと高邁な思想をお与えください！*

「ところで」彼女は尋ねた。「あちらではどんな夕食が出たの？　そうとうな珍味が出たに違いないわね。ズアオホオジロとか、ナイチンゲールの舌とか、ワインに溶かした真珠とか？」

率直さが、夕食はありませんでした、もしあったのだとしても、自分は不覚にもそれを逃してしまいました、と告白することを私に強いた。たぶんみんな遅い時間に食べたのではないでしょうか。それから私は彼女にこう言った。真珠は全部女性たちの首と髪にありました。自分は空腹を感じなかったので、それをどこか別の場所に欲しいとは思いませんでした。ナイチンゲールの舌はその鳥たちの喉の中に留まっていました。天国的なイタリア人デュエットと一緒に歌うために。

「連中はそれをもてなしと呼んでいるわけだ！」夕食を愛するリントットが声高に言った。それから、ひとたび自分の妻が指針を与えると、彼は総括して権威者のよう

＊質素な暮らしと高邁な思想……ワーズワースの詩『一八〇二年九月、ロンドンにて書く』より。

に断言するのが好きだったので、次のような旨のことを言ってそれをやった。お偉方は、表面的なやり方で万事オーケーで、お互いのための、また嘆かわしいくらい弱いために彼らの吸引力の勢力下に落ちてしまうようなすべての者のための、外面的な魅力をたくさん持っているかもしれないけれども、彼らの好みと自分たちの好みとの間には大きな隔たりがあり、もし自立心と自尊心を保ちたければ、その隙間を埋めようとはしない方がよい。もちろん、ビジネスに繋がるなら話は別だが。彼はこれを心配していた。それが私に関わってこないことを。

「連中は、ある日君を連れていき、次の日にはもう熱いポテトみたいに慌てて放り出す。さらにはな、ピーター君」彼は、一緒に歩くときよくするように自分の腕を私の腕に優しく組みながら（と言っても彼は私より優に十二インチは低かったが）、結論を下した。「社会的境遇の不一致は、真に親密になるための障害になる。体の身長差みたいなもんだ。人はだいたい自分と同じ大きさの人間としか腕を組んで歩けんのだよ」

この総括はあまりにも賢明で議論の余地がないように思われたため、もし自分がレディ・クレイに何度も会うとしたら、自分は彼女の吸引力の勢力下に落ちて、そのために自尊心を失う、自分はそれほど嘆かわしいくらい弱いのだと、また彼女の家で過ごした幸福な夜の後、自分は彼女に名刺を残して帰らなかったが、自分はそれほど嘆

かわいしいくらい弱いのだと、私に強く感じさせた。

私は何と気取り屋だったことだろう、彼女を慌てて放り出すなんて――「熱いポテトみたいに」彼女が私を放り出すのを恐れて。

さらに私は、少なくとも単なる外見的な魅力においては、あの立派な人々の方が、私の古き良き友人リントット家の排他的団体よりも私の好みに合っている、という罪悪感と気取り屋根性を感じていた。しかしながら彼らは、心と頭の優れた品質において、(私が知る限りの)その排他的団体に劣るかもしれない――パークレーンとピカデリーの外面の方がペントンヴィルのそれよりも魅力的ではあるが、私のような者が住むには後者の方がおそらく健康によいと気づいたように。

それでも、自分たちのためにマリオとグリジを来させて歌わせることができる人々(それにタワーズ夫人を来させて聴かせることができる人々)、美しい絵で覆われている壁を持つ人々、社会生活の小さな外的事物すべての滑らかで調和の取れた秩序化が、習慣および専門となっている人々――そのような人々は、切り離そうとしても心の痛みなしにはできるものではないのである。

そのため、私は痛みを伴いつつ、何事もなかったように自分の型どおりの生活に戻った。ところが、タワーズ公爵夫人の顔は、昼夜を問わずずっと私の心に浮かび続けた。

人生を支配する固定観念のように。

・　・　・　・　・　・

この過去のページを読み、再読すると、私は自分が許せないほど利己的で、過度に冗漫で散漫であったことに気づいた。それに、何と弱いビール（くだらないこと）を書き付けていることか！

それでも私は、こちらを削除するならばあちらも削除しなければならない、というように感じる。それは全部の削除と完全なる意気阻喪に繋がるだろう。それに、私はもっと伝える価値のある語るべき話を持っているのだ！

一旦それをするようになれば、私は抑えがたい自分語りの誘惑に駆られるのを経験したに違いないと思う。

それは明らかに容易に得られる習性だ。老齢であっても――たぶん老齢においては特に。というのは、それはこれまでのところ私の習性にはなっていないからだ。私は、読者であるあなたについてのことをあなたに、あるいはあなたについてのことをほかの誰かにすぐに話していただろう――あなたの友人に、あるいはあなたの敵にさえ。

または彼らのことをあなたに話したかもしれない。

しかし実際は、目下のところ、そして私が死ぬまで、私には誰かについてのことや話す価値のあることを話す相手がいないし、そのために私の語りのほとんどはペンとインクで行われている――一方的な会話なのだ、おお辛抱強い読者よ、あなたとの。私は世界でいちばん孤独な老人だが、たぶんいちばん幸せでもある。

と言っても、私が住む場所が必ずしも楽しいというわけではなくて、別の領域への移行を楽しんで待っているのである。

善良な教誨師（きょうかいし）がいるのは事実だ。善き司祭もいる。その人たちは自分のことを私にいささか話しすぎるように思われる。それに医者。彼は司祭と教誨師について私に話すが、その方がいい。彼は教誨師たちがあまり好きではないようだ。とても機知に富んだ人である。

だが、我が兄弟の狂暴さときたら！

結局、彼らは悲しいほど comme tout le monde［みんなと同じ］なのだ。狂乱の発作に因われるときだけ、彼らは興味深い。すさまじい不平不満から解放されているとき、彼らの大部分はごく普通の人間である。型にはまった凡俗の人、私と同じような愚鈍な犬で、愚鈍な犬はお互いどうしを好まない。

最も分別のある二人（一人は偽造犯、もう一人は重度の盗癖の持ち主）は、私の友人である。彼らはかなりよい教育を受けており、ちゃんとした都会人で、清廉、謹厳、古風、几帳面、従順なのだが、二人とも不幸である。彼らは狂気と犯罪という二重の烙印に苦しめられており、その結果自由を奪われているのだが、それが不幸の理由ではない。犯罪者用精神病院には「紳士淑女」がごくわずかしかいないことに気づき、また彼らはずっと「紳士淑女の社会」に慣れてきたのだが、それが理由であった。これがなければ、彼らはここで生活することに十分満足したことだろう。で、それぞれがもう一人の方を、かなり高潔で信頼できる奴だ、だが「完全な紳士」ってわけじゃない、などと、思っていることを私に打ち明けるのが習慣となっている。彼らが私をどう思っているかは分からない。たぶん二人で互いに打ち明け合っているのだろう。

奇妙さ、風変わりさ、興味深さが劣ることはあるだろうか？

別の者は、完全に正気のときはフランス語のアクセントと表現豊かなフランス人のジェスチャーを使って英語を話し、古いフランス政治体制の失われた栄光を嘆き悲しみ、いちばん簡単な英語の単語を忘れたふりをする。とはいうものの、彼はフランス語の単語を知らないのだ。それなのに、彼の狂気が起こり、拘束衣を着せられると、彼の英語はすべて戻ってくる。それは非常に力強く流暢かつ慣用語法の多い英語であ

り、また強いロンドン訛りのようで、すべての「h」が型どおりに転換されるのだ。

また別の者（ここではいちばん不愉快で醜悪な男だ）は、自分の過去の情事を打ち明ける信頼のおける友人に、私を選んだ。彼は私に、相手の名前と日付など何もかもを教えてくれた。私が耳を傾けないようにすればするほど、彼はより多く打ち明けるのだった。彼は私の気分を悪くする。私が彼を信じていると彼が信じることを阻止するには、どうしたらいいのだろう？　私は女性についての嘘のために人を殺すのにはうんざりしているのだ。彼を嘘つきのゲス野郎と呼んだりしたら、どんなものなのか神のみぞ知る休眠状態の狂乱を、彼の中に目覚めさせてしまうかもしれない――私は、彼の精神病の性質についてはまったく見当がつかないのだから。

また別の者は、弱々しいけれども感じのよい善意溢れる若者で、自分が音楽を熱烈に愛していると思い込もうとしている。ところが彼は、呆れたことにバッハとベートーヴェンしか耐えることができないくらい排他的で、メンデルスゾーンやショパンを耳にしようものならその部屋を出て行かざるを得なくなるのである。彼を喜ばせたいと思ったら、私は『善王ダゴベール*』を口笛で吹き、それをバッハのあるフーガの**モチーフ**だと言えばよい。そして、彼を追い払うためには、これまたそれを口笛で吹

＊善王ダゴベール……古いシャンソン。十八世紀中頃にできた歌らしい。

いて、それをショパンの即興曲の一つだと言えばよい。彼の狂気が何なのかはよく分からない。非常に口数が少ないからだが、彼は生きた猫を焼くのが好きなのだと聞いたことがある。猫を一匹見ただけでその恐ろしい性癖が呼び覚まされ、彼の頭から健全で無邪気で害のない自然な愛情が追い払われるのに十分なのである。

ここには、（誰でも外でそういう者に会ったことがあるように）自分が唯一の存命中の画家と言うに足る者だと信じている画家がいる。実際のところは、彼は他人の名前をみんな忘れてしまっていて、それらを十把一絡げにして軽蔑したり罵ったりすることしかできない。彼は意気揚々と自分の作品を見せてくれるが、それは粗野さ、生半可な知性、いいかげんさ、印象派的な塗り方などで構成されていて、そんなふうに自作を話すアマチュアから予想できるとおりのものである。一体なぜ彼は、この世のあらゆる場所の中で精神病院にいなければならないのだろう。（これも外で往々にしてあるように）彼の患者仲間の中には、彼自身の評価をそのまま真に受けて、彼を偉大な天才だと信じる者がいる。また、厚かましいペテン師として、彼を蹴飛ばしたいと思っている者もいる（しかし、それをするには、彼はあまりに小柄である）。そして、大多数の者は特に気にしてなどいないのだ。

彼の偏執対象は放火。気の毒な男だ。その場所に火をつけたいという恐ろしい願

望に取り憑かれると、彼は自分の芸術的自負心を忘れ、下劣で弱く愚かな顔がほとんど支配的になってしまうのだ。

そして、女性受刑者たちについても、事情は全く同じである。ここで人生の二十年間を過ごしてきた女性がいる。彼女の父親はスノゲットという名の小さな田舎の医者だった。彼女の夫は目立たずよく働く教区副牧師だった。そして彼女は、どこまでも平均的で、ありふれていて、下品ですらあった。彼女の趣味は、生まれのよい称号のある人たちや州の旧家の話をすることで、交際することが常に彼女の希望と欲望であった人々だった（ほかにそういう人々はいなかった）。そしてまだ、ほとんど白髪になっているのに、彼女はまだここにいる。彼女は「洗練された人々」以外は誰のことも考えず、話さず、気にかけもしない。私には非常に温かい好意を抱いてくれたが、それはホプシャーのイベットスン・ホールに住むイベットスン大佐が理由である。私が彼を殺害し、そのために絞首刑を宣告されたためではなく、また彼が私よりも重い罪を犯したからでもない（このすべてが十分に興味深いのだが）。彼が私の親戚で、私は彼を通じてリーチミアのイベットスン家と遠く離れて繋がっているに違いないと、彼女が思っているからである。その人たちが誰であろうと、彼女も私も会ったことはないのだが（それどころか、私はその人たちのことを聞いたこともなかった）、その

家系を彼女はほとんど暗記して知っている。平凡で育ちの悪い田舎者の女性のおしゃべりよりも、単調で面白くなくて無味乾燥で下劣さにうんざりさせられて絶望的に健全すぎて独特なものが、何かあるだろうか？

それでも、この女性は、夫婦間の嫉妬に駆られて自分の子供を殺したのだ。彼女の父親はその結果気が狂い、彼女の夫は自分の喉を切った。

実際、正気でいる間は、彼らが狂っているということが人の心に浮かぶことはまずないだろうし、彼らは人がこの世で毎日会う人々とまったく同じなのである――そのような偏狭な大馬鹿たち、そのようなひどく退屈な連中なのだ！　ペントンヴィルやホプシャーに再び戻ったも同然、またはパッショネート・ブロンプトン（私はブロンプトンをこう呼んでいた）に住んでいるも同然である。ついでに言えば、あるいはベルグレイヴィアに住んでいるも同然でさえある！

というのも、我々には若い貴族と中年の准男爵がいるからだ――ショッキングな二人で、彼らは生きることが許されるべきではない。家の権勢がなければ、人里離れたここで快適に生活するのではなく、刑務所で二十年間の懲役に服していただろう。ウィーダの上流階級の主人公たちのように、彼らは「自分の身分に固執する」し、我々のうちのその他の者と交際することはない。彼らは私たちを完全に無視しているので、

その悪徳にもかかわらず、私たちは彼らを尊敬するほかはない――外でしなければならないのとちょうど同じように。

そして私たち、中流階級の私たちも、自分たちの秩序に固執し、小さな商店主たちとは交際しない――その者たちは、肉体労働者や職人や機械工とは交際しない――その彼らは（ああ、彼らにとっては！）、お互い以外に見下すべき者がいない――しかし、彼らはそれをしないし、この場所で最も礼を知る人たちなのである。

私たちはそういう者なのだ！　私たちが平凡であるのをやめ、悲劇的で偉大になるか、さもなくば独創的でグロテスクでユーモラスになるのは、狂気があるときだけである。自分たちの笑いと自分たちの涙の両方を強いるその真に深いユーモアは、それが私たちを見いだしたときよりも、私たちを老いた、悲しい、賢いものにする。

"Sunt lacrimæ rerum, et mentem mortalia tangunt."

「物事*への涙があり、人間の営みは心に触れる」

＊物事への……『アエネーイス』からの引用。

（私が優しいウェルギリウスで思い出せるのはせいぜいこの程度だ）

では、弱いビール（くだらないこと）に戻ろう。この後のそれは、さらに二日酔いをもたらすだろう。

・　・　・　・　・　・

私はこうして、ブライアントの水鳥のように孤独な道をたどった。自分の前にはあまり明確でない目的しかなかった――ずっと記憶に残る六月の土曜日に、ついにそれが自分に明らかになり始めるまで。

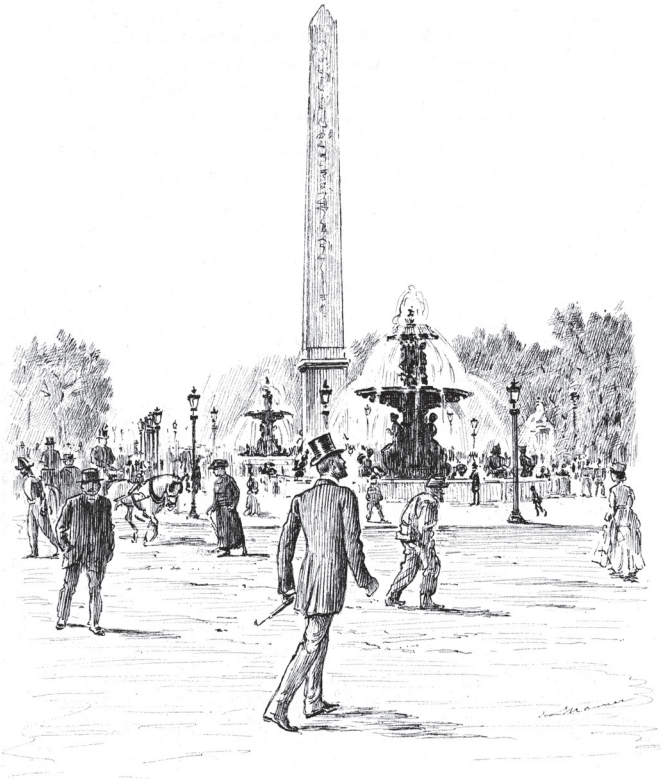
私は、パリへの長く憧れた旅を実行に移すのに十分なお金を、もう一度貯めていた。セーヌ号のボイラーは蒸気を立ち上らせ、セーヌ号の白い天幕はほかの人たちだけでなく私のためにも立てられていた。そして、美しい雲一つないイギリスの朝、私は舵取りのそばに立って、セントポール大聖堂とロンドン・ブリッジとロンドン塔が視界から消えていくのを見た。どうにも言い表せないような希望と喜びを感じつつ。私は自分が自分であることをほとんど忘れていた！

そして翌朝（美しいフランスの朝）、パッシーのポンプ通りに行く途中、シャンゼリゼを進んで慣れ親しんだ凱旋門をくぐるとき、また私がいまだによく知っているお

なじみの言葉を周り中から聞いたとき、そして長いこと見失い、半分忘れかけていたが、今は強烈に思い出したこの土地の空気の匂いを再び吸ったとき、私はどんなに歓喜したことだろう！　漠然として、柔らかく、名状しがたい、ほとんど感知できないほどの土地の匂い。それは、ずっと前にそこに住んだことのある人々にとっては、あまりにも素晴らしい過去の重みを含んでいる――最も巧妙に人を酔わせることができるエーテル！

トゥール通りとポンプ通りの交差点に来て、角の食料雑貨屋を見たとき、女性なのに口ひげを生やした凜々（りり）しい女食料雑貨店主がリヤール夫人だと分かり（繁栄の十二年がその口ひげを灰色に変えていた）、私は感激のあまり気を失いそうになった。あの顔を前にしてこれほど感動した若者がかつていただろうか？

窓（今は板ガラスのもの）の後ろ、近年のものになるナポレオン一世風の素晴らしい製品の中、色の付いた網に昔と同じ天然ゴムの古いボールが複数入っていた。昔と同じ、茶色の紙の中で震える新鮮な練りものの塊もあり、それはとてもひんやりとして心をそそりそうに見えた。昔と同じ水彩絵の具の三スーの箱（今は七十五サンチームと値段が付けられている）もあり、それは私がミムジー・セラスキアに仕えて何度も消費したものだ！　私は店に入り、それを一つ買って、そこで過去に購入した品す



もう一度、「至福の領域」へ！

べての匂いを大きな喜びとともにもう一度嗅いだ。彼女のおなじみの声の響きを受け取りながら――

「Merci, monsieur! faudrait-il autre chose?［メルシー、ムッシュー！　ほかにご入り用の物は？］」それはまるで祝福のようだったが、私はあまりにも内気すぎて彼女の腕に飛び込むことができず、また自分が「独りぼっちでさまよっているけれども迷子ではない」ゴーゴー・パスキエであると彼女に告げることもできなかった。彼女はこう言ったかもしれないのだ――

「Eh bien, et après?［それで、それから？］」

その日は順調に始まっていた。

私は、ポンプ通りの古い門まで歩いて、大通りを進んで私たちの古い庭に戻るべきか、それともブローニュの森に行くとき帰るときに出入りに使った、いつもの小道のわきの、昔の私たちが再三使ってすり減らした公園の生け垣の隙間へと回り道するか、どちらにするかを美食家のように熟考検討した。

全体として、喜びの妙なる階調においてより有望ということで、私は後者を選んだ。あの公園の生け垣の隙間が、まさか！　公園の生け垣は見えず、公園そのものがなくなり、分割され、破壊され、すべてが小さな庭に分けられていた。小ぎれいな白い

住宅が複数建っていた。鉄道が、その白亜の中の深い切り込みを通って走っている部分を除いて。私が、長年抱いてきた希望の残骸の上で呆然と見回していたとき、列車は轟音を発しながら蒸気を吐いて進み、その汚れた蒸気で私を窒息させた。

もしその列車が私を轢いて、私がそれを生き延びたとしても、さらに大きな衝撃を私に与えることはできなかっただろう。そのすべてが、あまりにも残酷で粗暴な怒りのように思われた。

曲がりくねった車道が、その荒野のちょうど中心を貫通していた。それにきれいに垣を巡らした小さな真新しい庭々が隣接し、それらの中のあちこちに、私が少年時代にたびたび登った、まだよく覚えている木という形をした古い友人を認めることができた。それは非常に多くのものから突出したままだったが、昔の環境の消失のためにあまりにも変わってしまっていて、管理され、檻に入れられ、移植された姿になっていた——申し訳なさそうにしていると言ってもいいくらいで、まるでとうとう見つけられてしまったことを恥じているかのようだったのだ！

ほかには何も残っていなかった。かつては大きく見えていた小さな丘や崖や谷や白亜坑は平らになったり離れたりして、私は方角を完全に見失い、奇妙な、ぞっとするような空白と死別の寒気を感じた。

しかし、大通りと私の旧家はどうなったのだろう？　私はかき立てられた不安が早足で迫ってくるのを感じつつ、ポンプ通りに急いで戻った。大通りは、なくなっていた――最近塗装された格子細工で覆われた巨大なレンガ造りの建物によって、門から十数ヤード以内で塞がれていたのだ！　私の旧家はもうなかったけれど、その場所にはるかに大きくて当世風な、彫刻された石の建物があった。少なくとも古い門は消えておらず、門番小屋もそうだった。私は、これらの哀れな残存物で自分の悲嘆に暮れた目をもてなした。それらは、このあらゆる新しい輝きの真ん中で、冷遇されたように、みすぼらしく、場違いに見えた。

やがて、きれいなピンク色のリボン付き帽子をかぶった垢抜けた女性管理人が出てきて、しばらくの間私を見つめ、ムッシュー、何かお望みですか、と尋ねた。

私は話すことができなかった。

「Est-ce que monsieur est indisposé? Cette chaleur! Monsieur ne parle pas le Français, peut-être?［ご気分が悪いのですか、ムッシュー？　この暑さでは！　どうやら、ムッシューはフランス語が話せないのですね？］」

やっと口が利けるようになったとき、私は彼女に、自分はかつてここの、通りを見渡すささやかな家に住んでいたのだが、それはずっと豪華な住居に変わってしまって

いた、と説明した。

「O, oui, monsieur — on a balayé tout ça!［おお、そうなんです、ムッシュー——何もかも一掃されてしまったのです！］」と彼女は答えた。

「Balayé!［一掃！］」**私**にとって、耳にしたそれは何という表現だったことか！

それから彼女は、どんな変化が起こったのか、不動産の価値がどんなに上がったかを説明してくれた。彼女は私に、庭の小さな区画を見せてくれた。残存していた私の古い庭の断片で、古い林檎の木がまだあるかもと思ったが、伐採されてしまっていた。切り株が見えた。それは粗木作りのテーブルの役割を果たしていた。

今、新しい壁を見渡すと別の小さな庭が見え、その中に古い小屋の廃墟があり、そこで私はおもちゃの手押し車を発見した——そこにも建物ができれば、

古い林檎の木

すぐに消えることになる。

私は、いちばん関心の低い人々――肉屋、パン屋、燭台職人などいろいろな職業の人――から始めて、考え得るあらゆる人々の様子を尋ねた。

死んだ者もいたし、引退して自分の「commerce［商売］」を子供や義理の子供に任せた者もいた。私が去った後、三人の異なる校長があの学校を維持した。ありがたい、学校はまだある――もっとも、かなり変わってはいたが。私はそれを探すのを忘れていた。

彼女には、私の名前やセラスキア家のそれの記憶はなかった――私はドキドキしながら尋ねたのだ。私たちの痕跡はなくなっていた。十二年という短い年月で、私たちのあらゆる記憶が消されていたのだ！　しかし、彼女は、décoré, mais tombé en enfance［受勲者だが、耄碌（もうろく）してぼけてしまった］紳士が、すぐ近く、ミュエット通りの私立療養所に住んでいると教えてくれた。名前はデュケノワ少佐。私は彼女に報酬を与え、心からの感謝を告げてから、そこに向かった。

デュケノワ少佐に面会を求めると、彼は散歩に出ていると告げられたが、私はすぐに彼を見つけた。かなり老いて腰が曲がり、療養所のシスターの腕にもたれかかっていた。私は感動のあまり、話せるようになるまでに二、三回彼のそばを通り過ぎなけ

ればならなかった。彼はとても小さかった――悲しくなるほど小さかったのだ！

私が何者かを彼に分からせることが可能になるまでに、長い時間がかかった――ゴーゴー・パスキエですよ！

それからしばらくして、彼は過去を少しだけ思い出したようだった。

「Ha, ha! Gogo — gentil petit Gogo! — oui — oui — l'exercice? Portez … armes! armes … bras? Et Mimsé? bonne petite Mimsé! toujours mal à la tête?［ハ、ハ！ゴーゴー――かわいいゴーゴーか！――ああ――ああ――訓練か？　担え……銃！銃……腕、だったか？　で、

M. LE MAJOR［少佐殿］

ミムジーは？　とてもかわいいミムジー！　相変わらず頭痛か？」

彼はやっとセラスキア夫人を思い出すことができた。彼女の名前を何度か繰り返してからこう言った。「Ah! elle était bien belle, Madame Seraskier!［ああ！　すごい美人だった、セラスキア夫人！］」

おとぎ話を話してくれた昔、彼が疲れたのに私がまだ続けてほしいような場合、彼はこんなふうに取り決めていた。彼がお話の途中で出し抜けに「*クリック」という言葉を持ち込み、私がすぐに「クラック」と答えられなければ、そのお話は次の散歩まで延期されてしまうのだ（次号に続く！）。彼がその恐ろしい言葉を言い出すやり方があまりにも巧妙なため、私はしょっちゅう術中に陥り、その日の午後のお楽しみをなしで済ませなければならなかった。

私は突然「クリック！」と言うことを思いついた。彼は直ちに「クラック！」と言い、そして心が動かされるような、年老いた笑い方で笑った――「Cric! — Crac! c'est bien ça!［クリック！――クラック！　いいぞ！］」それから彼はすっかり真面目になっ

＊クリック～クラック……昔話を聴かせたい話し手が大衆に「クリック？」と呼びかけると、聴きたい大衆が「クラック！」と答える、ハイチ発祥と言われる風習をまねたもの。それぞれ、「聞きたい？」「聞かせて！」くらいの意味で使われる言葉。

て言った。

「Et la suite au prochain numéro!［次号に続く！］」

その後、彼は咳をし始めた。すると、善良なるシスターが言った――

「Je crains que monsieur ne le fatigue un peu!［ムッシューが少し疲れたのではないかと心配です！］」

それで私は彼に別れを告げなければならなかった。私が彼の手をぎゅっと握ってキスをした後、彼は極めて上品なお辞儀をした。まるで私がまったく見知らぬ人間であるかのように。

私は両腕を上げて一目散に逃げた。古い親友への憐れみと悲しみ、それに雑多な後悔と幻滅に駆られた狂人のように。私はブローニュの森に突進した。そこで見いだしたのは、懐かしの兎とノロジカが出没する茂みやシダの群生や見通せない叢ではなく、ボートやスキフが浮いた巨大な人造湖と、ローシェルヴィル・ガーデンズに引けを取らないような岩石庭園だった。その途中では、城壁の鉄の門の近くで、私の友人は一人だけ、サン＝クルーからチュイルリーに向かう伝書使にしか会わなかった！　そこで彼は以前と同じように、低い光沢のある帽子をかぶり、強大なジャックブーツを履いて、あぶみの上に立ち上がることもなく、腕を上下に揺り動かしながら馬に乗って

いた。そのとき馬は、首の周りのきれいな音のする小さな鈴の響きを聞きながら早足で駆けていた。

ああ！　彼のコートは、もはやブルジョワ王の無垢で純朴な青と銀の制服ではなく、別の体制の忌々しい緑と金だった。

オートゥイユの池は、それ自体は高度な変化を受け、立派なものになっていた――帝国的な立派さである。蛙もイモリも水生甲虫ももういない、それは確かだと感じた。代わって、金や銀の魚が俗悪なナポレオン時代風のおびただしさで棲息していた。

太陽に照らされた草深い水辺をもう一度歩いたとき、私は自分を満たした悲し

緑と金

みと思慕を表現できる言葉を見つけることができなかった――これが、十二年間の独りよがりな大望のゴールなのだ。

その日は日曜日で、周囲にはたくさんの人がいた――たくさんの子供たちが、いちばん良い晴れ着を着て、いちばん行儀よく振る舞って、慎重に魚にパンくずを投げていた。新しい世代は、かつて網で跳ね散らす水音と英語の声の興奮した騒音とで、閑寂をあんなにも満たしていたいとこたちや私よりも、はるかに地味で質のよい服を着ていた。

（ラットが住んでいた）古い柳のそばのベンチに座ってじっと見つめに見つめながら、自分の熱望の強さでは、古いなじみの顔や姿を自然に呼び起こし、この現代の侵入者を消えさせるには不十分であるということに、私はほとんど驚くばかりだった。これをやるための力は、ほとんど手が届く範囲内にあるように思われた。私は全身全霊でそうしたいと思い、思い、それはもう懸命に思ったけれども、無駄だった。視覚や聴覚をだますことが一瞬もできなかったのだ。彼ら、その幸福で行儀がよくて身なりのよい小さなフランス人たちは、何も気づかず邪魔もされずに依然としてそこにいて、金銀の魚に餌をやっていた。私は疼く心とともに、その場所に彼らを残して去った。

おお、我々はきっと、必ずや、今しているのよりも十分に完璧に過去を保有する何

らかの方法を見つけるべきだ、と、私は自分自身に向かって叫んだ。あまりに絶望的でありながら非常に自然でもある欲求が満たされないとしたら、人生は私たち多くの者にとって生きる価値がないではないか。記憶が、もしこのような成就の寸前までしか私たちを導けず、それが満足させることができない欲望で私たちを狂わせることしかできないとしたら、それはなくてもよいような、貧弱で原始的なものでしかないのである。消え去った手の感触*、沈黙した声の響き、過ぎ去った柔らかく優しい日。それらは、精妙で、完璧に想像することができる諸感覚の幻想によって、意のままにでき、永遠に私たちのものであるべきだ。

ああ！　悲しいことに！　私は、愛する人々と別の人生でもう一度会うことは望んでいないのだ。おお、**この人生**で、自分の脳の何らかの策略により、かつてその人たちがいたときのように、その人たちのあまりにもかすかに記憶された姿に出会えるなら！　その人たちを目で見て、耳で聞いて、白日夢の中のように古い忘れられた道を彼らと共に踏めるなら！　そんな自らに術にかける魔術師のような者になれるのなら、発狂するというのも十分に価値があるだろう。

このように悲しい思いに耽りながらサン＝クルーに到着したが、少なくとも**そこ**と、

＊消え去った手の感触……テニスンの詩『砕けよ、砕けよ、砕けよ』より。

そこまで私を導いたブローニュには、目に見える変化はほとんどなく、まるで自分がほんの一週間前にそこを去ったようにしか見えなかった。橋からの快い景観は、両側も向こう側も、かつての魅力で私を満たした。少なくとも、栄光は過ぎ去ってはいなかった。

私は金ぴかの門を通り、グラン・カスカードまでの広範囲にわたる散歩を急いだ。あちらには美しい花輪の壺とゼラニウムの広口瓶（ひろくちびん）の間に、昔なじみの変えることのできない神々が、依然として座っているか、寄りかかるか、身振り手振りを使っていた。あちらには花崗岩と大理石と青銅の中に、気味が悪いほど愛想のよい怪物たちがうずくまり、暑いパリジャンの目を楽しませるために無限ガロンの液体を依然として噴き出していた。（自分が想像していたのよりも全然大きくなかったことを除けば、）変えられず、変えることのできないあらゆる物の姿、その冷静で穏やかで皮肉な辛抱強さは、私を恥じ入らせ、元気づけ、気分を上向きにしてくれた。美しいもの、ひどく醜いもの、人が好むものが何であれ、それらは永遠の安定性に対する無感動とでもいうような、まさにそんな感覚を大いに楽しんでいるように思われた――時間や風や天候、また気難しくて弱腰で長く続かない人間の不満に対する、それら石ならではの軽蔑。一日中あらゆる塵や吹きだまりや廃墟を重い足取りで通り抜けた後、もう一度石たちに

愛情を込めてお祝いを言って、――そこまで行ける場合は――それらにしばらくの間抱き付くのは楽しいことだった。

それどころか、それらはほとんど忘れられていた俗界の喜びすべてに対する健康的な欲求――お粗末な飲食物に対するものさえ――を私の中に目覚めさせ、そのため私はテト・ノワールに行って高価な食事を注文した――真新しいテト・ノワールだ、ああ！　まっ白で、何もかも石とスタッコになり、歴史は感じられなかった！

美しい日没だった。ディナーを待ちながら、私は二階から窓の外を見つめ、フランスにおける日曜日の生活の庶民的な楽しみすべてに抱いた失望と後悔の念への慰めを見いだした。私はそれを、昔、何でもないことのように繰り返し見ていた。少なくとも**それ**だけは、かつて私が知り、愛していたものへと帰宅していくようだった。

橋と公園の間の小さな「Place［広場］」にあるカフェは、人で溢れかえっていた。consommations［飲食物］を楽しみながらおしゃべりをしている人々は、外にも座っており、広場のほぼ中央にまで達しそうだった。あまりにもすし詰め状態だったため、忙しく活発な白いエプロン姿のウェイターたちが客たちの間を移動する余地はほとんどなかった。空気は、公園から吹き流されてきた、踏みつけられた草とマカロン*とフランス・タバコの匂いで満たされていた。陽気なフランス人の笑い声とミルリトンの

音楽。夕日によって紫と金に染められた、明るくほこりっぽい靄（もや）。ボートとカヌーがたくさん浮かぶ川は空の栄光を地上でも反映反復し、よく覚えている木の生い茂った丘々が私の前に隆起し、ランテルヌ・ド・ディオジェヌで頂点に達していた。

私は、この木々の迷路を、目隠しされてもすべて縫って進むことができただろう。

二人のローマの*ピッフェラーリがこの場所にやって来て、異様な感じの、この上なく興奮させられるようなメロディを吹き始めた。それは私を窓の外に誘い出しそうになった。それには特定の形式も、開始も中間も終結もないように思われた。息継ぎもなく、ひばりの歌のようにどんどん高く舞い上がって、狂ったようなジーグのリズム――たぶんタランテラだ――へと達し、常に緊張と圧迫を保ちながら、この世の音楽の範囲を超えた、非常に高くて遠い陶酔の激しいクライマックスへと次第に近づいていった。その一方で、執拗な持続低音が、地上のうなりを保ち、脱け出すことを不可能にし続けた。何もかもがひどく陽気で、ひどく悲しく、名前はない！

乞食の兄妹（けいまい）で、*口には歯のない大きな隙間があり、上唇がないという、奇形の捨て子のように見える二人の小人が、踊り始めた。群衆は笑い、拍手をした。ますます高く、ますます演奏不能音高に近づきながら、ピッフェラーリの素早くつんざくような音が大きくなった。天国はほとんど手が届くところにあるように思われた――この急

速な狂気の後に来る、音楽の涅槃（ねはん）――普通の人間の耳が捉えられる範囲を超えたところにある、超高音の領域！

騎乗御者と「guides［護衛騎兵］」を伴う四頭立て馬車が、宮殿から音を立てながら荘厳に下りてきて、橋に向かって滑らかに進みながら群衆を追い散らした。その中には女性と紳士が二人ずつ乗っていた。女性の一人は若きフランス皇后だった。もう一人は私がいる窓を見上げた――一瞬、夏の稲妻の柔らかい閃光のように、彼女の顔が友好的な認識で輝いた――優しさと興味と驚きの甘美なきらめきで――天空からの突然の閃光のように私を刺し貫いたきらめきで。

それはタワーズ公爵夫人だったのだ！

私は、まるでバグパイプがこれに導いてくれたかのように感じた！　もう少しする

＊ミルリトン……中に薄紙や薄皮を張った膜鳴（まくめい）楽器。笛のようにくわえて声を出して演奏する。

＊ピッフェラーリ……クリスマスが近くなるとローマにやって来て、聖母像の前で演奏した羊飼いたちのこと。ピッフェロ（オーボエのような楽器）とザンポーニャ（バグパイプのような楽器）を奏し、投げ銭などをもらう。その絵が多く描かれており、ベルリオーズは『回想録』の三九章でその様子を詳しく書いている。ただし、今は六月で、十二月ではない。

＊口には歯のない……口唇口蓋裂（こうしんこうがいれつ）（みつくち）であろうか。遺伝するとも言われるため、兄妹が二人ともみつくちである可能性はある。

と馬車は見えなくなり、太陽は完全に沈んでしまい、ピッフェラーリは演奏をやめていて、帽子をかぶってぶらぶら歩いていた。すべては終わったのだ。

私は食事をして、ブローニュの森を通ってパリまで歩いて戻り、オートゥイユの池で旧友であるウォーターラットがそれを泳いで渡っているのを見た。彼は、銀色の彗星（すいせい）の尾のように、自分の後ろに航跡の輝きを引きずっていた。

"Allons-nous-en, gens de la noce!
Allons-nous-en chacun chez nous!"

「帰ろう、結婚式の人々よ！
帰ろう、それぞれの家へ！」

夏の稲妻

浮かれた結婚式の一団が、パッシーの長い本通りを腕組みをして陽気に歩きながら、こんな歌を歌っていた。人間の望みのはかなさという悲しい経験がなかったら、人の心を羨望でいっぱいにしていたであろうはしゃいだ希望を振りまいて。

「それぞれの家へ！」何と魅力的な響きだろう！

それぞれの者は、家に着いたら自分の心からの欲望に気づくことを強く確信していたのだろうか？新郎自ら、それを強く確信していたのだろうか？

心からの欲望――心からの後悔！　私は、この出来事が多かった日曜日に、両方のはるかな深みをかなりうまく測定したとうぬぼれていたのだ！

昔なじみのウォーターラット

第四部

私はミショディエール通りのホテルに戻った。

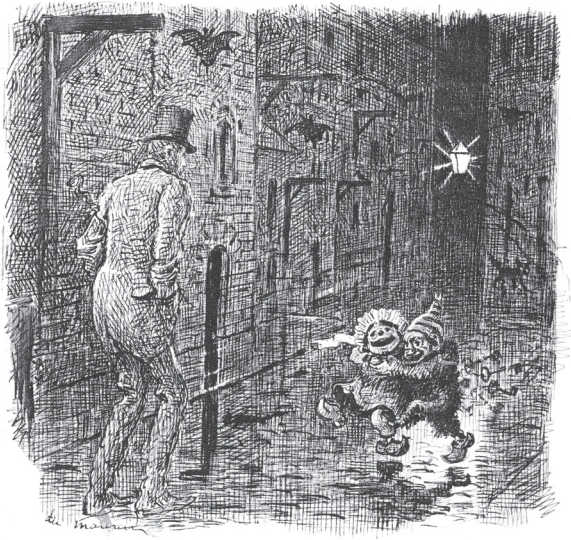
強い感情の動きと疲労に打ちひしがれ、タランテラがまだ耳の中を駆け回り、忘れられない最愛の顔が言葉にできないような微笑みを湛え、それが閉じた目の網膜に焼き付いたまま、私は眠りに落ちた。

そのとき、私は夢を見て、私の真の内面的生活の第一段階が始まったのだ！

その日のすべての出来事が、夢の通常のやり方に従って歪められ、誇張され、ごちゃ混ぜになって、悪夢と抑圧のようなものに編み込まれた。私は昔の住まいに向かっているところだった。そこで出くわし、目に入ったものは、皆グロテスクで受け入れがたいものだったが、時には奇妙で漠然とした連想と回想の魅力を備え、時には変化と喪失と荒廃の悲惨な感じを漂わせていた。

大通りの門に近づくと、左手に学校の代わりに刑務所があった。ドアの所には、ややずんぐりした、身長が三フィートほどのひどく醜い看守と、彼の身長を上回ることのないやや醜い女看守が、目の端から私を抜け目なくちらりと見て、歯のない笑顔を

見せた。やがて彼らは、古いなじみの曲に合わせてワルツを踊り始めた。体のわきで巨大な鍵が揺れていた。二人があまりにも滑稽に見えたので、私は笑って拍手をした。しかし、その歪んだ顔は実際には滑稽なものではないということがすぐに分かった。それどころか、彼らは極めて破滅的で恐ろしいのだ。間もなく私は、その死人のような小人たちが、私と、私が行こうとしていた大通りの門の間でワルツを踊ろうとしていることに気づいた――私の行く手を遮り、私を刑務所に追いやろうとしているのかもしれない。月曜日の



朝、そこで人々を絞首刑にするのが習慣だったのだ。

恐怖に悶え苦しみながら大通りの門へと急ぐと、そこにはタワーズ公爵夫人が立っていた。彼女は、目には軽い驚きを、顔には優しい微笑みを浮かべていた――強さと現実性を感じさせる天国的な光景。

「あなたは本当の夢を見ていません！」彼女は言った。「怖がらないで――その小人たちは存在しません！　手を私に預けて、こちらにいらして」

私がそうすると、彼女はその野蛮人たちを手を振って払いのけ、彼らは消滅した。私は、これはもはや夢ではなく、別の何かだと感じた――自分に何か奇妙なことが起こっている、私は何か新しい人生に目覚めたのだ、と。

というのも、彼女の手に触れると、自分の意識、私は私、自分自身であるという感覚、そういった、それまでの夢（そのときまでに先行したあらゆる夢）の中では部分的で断続的で曖昧でしかなかったものが、突如として完全で首尾一貫した実際的な活動として立ち現れたからだ――ちょうど人生において、はっきりと覚醒しながら何が起こっているかに大きな関心を抱くときのように――ただ知覚力だけがはるかに鋭く、より抜け目ないものになって。

私は、自分が何者であるかを完全に知っており、前日の出来事をすべて思い出した。

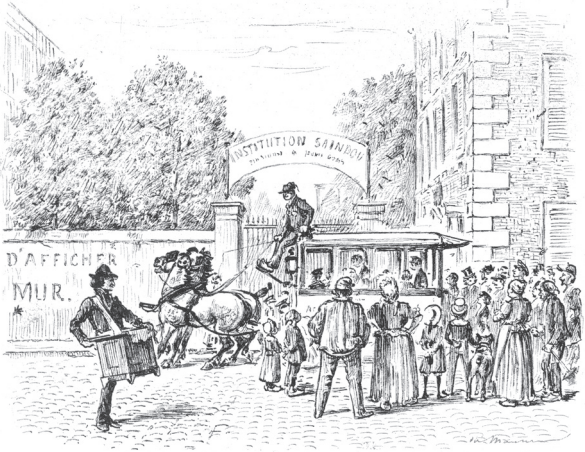
私の現実の体が、今はミショディエール通りにあるhôtel garni［家具付き安ホテル］五階の小さな部屋で、服を脱ぎ、ベッドに横たわってぐっすり眠っていることを意識した。私はこれを完全に知っていたのだ。それなのに、ここにも自分の体があり、まさに実体があるかのようだった。こちらは完全に着衣であった。ブーツはややほこりっぽく、シャツの襟は体温で湿っぽかったが、それは暑かったからだ。繋いでいない方の手がズボンのポケットにあるのが分かった。そこにはロンドンの家の鍵、財布、ペンナイフが入っていた。コートの胸ポケットにはハンカチ、その尾部ポケットには手袋、パイプ・ケース、その日の朝持ってきた小さな水彩絵の具の箱が入っている。私は時計を見た。ちゃんと動いていて、十一時を指していた。私は自分の体をつねって、咳払いをした。目が覚めていることを確かめるために、人がひどい驚きの重圧下で通常行うようなことを全部やってみた。自分は**目が覚めていて**、依然としてここに立っていて、紹介されたことのない素晴らしい女性と本当に手を繋いでいた（彼女は、私の混乱がおかしくてたまらないという様子だった）。そして、あるときは彼女を見つめ、あるときは古い母校を見つめていたのである。

刑務所はカードの家のように崩壊しており、そして見よ！　その場所には、サンドー氏のmaison d'éducation［寄宿制教育施設］が昔さながらにあったのだ。その黄色い壁

には、乾いた泥の手の押し跡さえ認められた。十五年前、パリゾという名の通学組男子生徒によって付けられたもので、彼は壁のそばの側溝に落ち、もう一度立ち上がろうとしたときにこんな具合に手跡を残したのだった。それは休暇中に白塗りされるまでの数か月間、そこにそのままになっていた。十五年を経て、それはあらためてここに現れていた。

燕が飛び、さえずっていた。黄色の乗合馬車が校門に止まった。馬たちは、当時のフランスの馬がいつもしていたように、足を踏み鳴らし、いななき、互いに噛みつき合っていた。御者はおざなりな感じで彼らを罵っていた。

群衆が見ていた——フランソワおじさ



PREMIÈRE COMMUNION［初聖体］

んとおばさん、食料雑貨商の妻リヤール夫人、その他。私はすぐにうれしさとともに彼らを思い出した。私たちのちょうど目の前で、小さな男の子と女の子がほかの者たちと同じように見ていた。私は、ミムジー・セラスキアの背中と髪を短くした頭と痩せた脚を認めた。

バレル・オルガンが、私がよく知っているけれども忘れていた、かわらしい曲を演奏していた。

校門が開き、サンドー氏が、（いつもそうだったように）誇らしげに、うぬぼれに満ちた感じで、当世風な白いズボンと輝くブーツを履き、絹の白いバンドを左腕に巻いた、私が顔と名前をよく知っていた数人の少年たちと一緒に乗合馬車に乗り込み、実際よりも格好よく見せかけた様子で運ばれていった――金色の戦車で天国へ行くように――そんなふうにも見えた。それは見ても聞いても美しかった。

私はまだ公爵夫人の手を握っていて、彼女の手袋を通してそのぬくもりを感じていた。それは磁流のように私の腕をひっそりと這い上っていた。私は至福の地（エリュシオン）にいた。天国的な感覚が、自分の体表は遂に自分のもの以外の霊に勝利され侵入されたのだ、という気持ちにさせた――極めて強力で慈悲深い霊に。結局、私の突き通せない自己の甲冑には祝福された弱点があり、強さと慈善と親愛の天才がそれを発見していたの

だ。

「今、あなたは本当の夢を見ています」と彼女は言った。「あの男の子たちはどこへ行こうとしていますか？」

「教会です。première communion［初聖体］をするために」私は答えた。

「そうです。私があなたの手を取ったので、あなたは本当の夢を見ているのです。あの曲は知っていますか？」

聞き耳を立ててみると、それに所属する言葉が過去からやって来て、私は彼女にそれらを告げた。すると彼女は本当にうれしそうに目を細めて、再び笑った。

「完全にそのとおり――完璧です！」彼女は叫んだ。「あなたが知っているなんて、何て意外なことでしょう！　イギリス人にしては、フランス語を何て上手に発音するのでしょう！　ということは、あなたはイベットスンさんですね？　レディ・クレイの建築家の」

私が同意すると、彼女は私の手を離した。

通りは人でいっぱいだった――おなじみの人影と顔と声が、しゃべり合ったり黄色の乗合馬車が行った道を見下ろしたりしている。昔なじみの姿勢、昔なじみの足取りと物腰の特徴、昔なじみの忘れられたフランス語の話し方――何もかも遠い昔そのま

まだ。誰も私たちに気づかない。私たちは今はさびれた大通りを歩いていた。

あらゆるものの幸福と魅惑！　もしや私は死んだのか。ミショディエール通りのホテルで、眠っている間に突然死んでしまったのかもしれない！　タワーズ公爵夫人も死んだのか――サン＝クルーからパリへ行く途中で何かの事故に遭って死んでしまったのか？　そして、二人とも互いにすぐ近くで死んだので、この天国的な様式での永遠の来世を始めたということだろうか？

それでは出来過ぎで本当らしくない、と私は内省した。本能の一部が、これは死ではなく、超越的なこの世の人生なのだと告げていた――それに、ああ！　これが永遠に続くことはないということも！

私は、彼女の顔のあらゆる特徴、彼女の体のあらゆる動き、彼女の服のあらゆる細部を深く意識した――実際の人生でできるよりもはるかに――そして、心の中でこう考えた。「何であれ、これは夢ではない」。しかし私は、最高の状態で目覚める瞬間にのみ私たちを訪れ得る言い表しようのない高揚感が自分にあると感じていた。そして、今のこれと比べると、そのときの高揚感もほんのかすかなものにすぎず、しかも私たちの多くの者はそれさえ決して味わうことがないのである。私はといえば、小さな手押し車を見つけたあの朝以来、それを経験したことはなかった。

しかし私は、大通りそれ自体が、わずかにそれを夢見ているという感触を持っていることも意識していた。それはもはや完全に正しいものではなく、いわば正確な描画と遠近法の埒外になりつつあった。私は支えを失っていたのだ――彼女の手の感触を。

「まだ本当の夢を見ていますか、イベットスンさん？」

「完全ではないような気がします」私は答えた。

「多少は自分で試さなければいけません――頑張りましょう。この家を見てください。ポーチには何て書いてありますか？」

金文字で「テト・ノワール」と書かれているのが目に入り、私はそう言った。

彼女はさざ波のような笑い声を上げ、こう言った。「いいえ、やり直しです」。そして指先でほんの一瞬私に触れた。

私は再試行し、言った。「ノートルダム広場」

「多少ましになりました」と彼女は言って、再び私に触れた。私は、昔その前でよく読んでいたように、「パルワ・セド・アプタ」と読み上げた。

「今度は向こうのあの古い家を見てください」と私の旧家を指し示した。「最上階には窓が何枚ありますか？」

私は、七枚だと言った。

「いいえ、五枚です。もう一度見てください！」五枚あった。すると、家全体が、かつての姿そのままに、極めて細かい部分に至るまで正確になった。私は、窓の一枚を通して、私のベッドを整えているテレーズを見ることができた。

「けっこう」公爵夫人は言った。「すぐできるようになりますよ――とても簡単です――ce n'est que le premier pas!［（大変なのは）最初だけです！］父が教えてくれたのです。いつも両腕を頭に上げて仰向けに寝ること。それで両手を握って、左利きでないのなら足は右足を左足の上に交差させること。そして、眠って夢の中に着くまで、その中でどこに行きたいか考えることを一瞬たりともやめてはならない。目覚めていたときに自分が何者でどこにいたのか、夢の中でも決して忘れてはならない。夢を現実に結び付けること。忘れないでくださいね。私はもうここでお別れしますが、私が行く前に、両手を私に預けて、目で見える範囲をどこでも見回してみてください」

彼女から目を離すのは難しかった。その顔は私の目を引き、目を通して私の心を引き寄せた。それでも私は彼女が言ったとおりにし、慣れ親しんだ全光景をじっくり見た。木々の開けた所を通して、はるかヴィル・ダヴレーの森さえ垣間見ることができた。何マイルも離れた、ヴェルサイユに向かう列車の煙まで見える。古い電信機がモン・ヴァレリアンの頂上でその黒い腕を作動させていた。

「問題ないですか？」彼女は尋ねた。「よさそうですね。今後、ここに来たときはいつでも、あなたの視界が届く範囲内ではあなたは安全でしょう――この地点から――私が導入している間はずっと。有力な友人を持つということがどんなものかを知ってください！　踊る小人の看守はもういません！　これからは自分で遠ざけることが徐々にできるようになります。

向こうの、あの公園を通ってブローニュの森に行けます――あなたが通れるような生け垣の隙間があります。ただし、気を付けてほしいのですが、あなたの前の何もかもが明らかになるようにしてください――**ちゃんとやってくださいね**、もう一歩進む

「彼女から目を離すのは難しかった」

前に。そうしないと、あなたは目覚め、最初からやり直さなければならなくなります。それを意志の力で行い、自分は目覚めていると思いさえすれば、うまくいくでしょう――もちろん、あなたが以前そこに行ったことがあるということが条件です。それと、これも気を付けてほしいのですが、物や人への触り方には注意してください――聞こえたり、見えたり、匂いがしたりするかもしれませんが、触ったり、花や葉を摘んだり、動かしたりしてはいけません。それは夢を曇らせるのです。窓ガラスに息を吹きかけたときのように。なぜなのかは分かりませんが、そうなのです。ここではすべてが死んで過ぎ去ったものなのだということを忘れてはいけません。あなたと私については、状況は異なります。私たちは生きていて、実在します――つまり、**私**はいるわけです。それに、あなたの両手の握りから察するに、あなたが実際の存在であることもどうやら間違いないようです、イベットスンさん。でも、あなたは**いません**。なぜあなたがここにいるのか、あなたがこの中、私特有の夢の中にどんな用事があるのか、私には分かりません。これまで、以前見た夢の中に、生きている人が入り込んだことなどなかったのです。私には理解できません。思うに、今日の午後、『テト・ノワール』の窓から外を見ているあなたの実体を、私が見たからではないでしょうか。あなたは、私の疲れ果てた脳が作り出したさまよえる幻想にすぎません――とても好まし

い幻想であることは認めます。それでも、今このときに、あなたはここには存在していません――存在し得ないのです。どこかほかの場所にいるのですよ、イベットスンさん。マ*ビーユでダンスをしているか、あるいはたぶん、どこかでぐっすりと眠って、イギリスの優秀な若い建築家にふさわしく、フランスの教会や宮殿や著名な噴水を夢見ているのでしょう――さもなければ私があなたにこんなふうに話しかけるはずがありませんし、きっとそうでしょう！

まあとにかく。私はあなたの役に立てた夢を見られてとてもうれしいし、あなたはここでは大歓迎です、あなたが来て楽しいと思うのならね――というのは、特にあなたは私の単なる偽りの夢なので、あなたにはほかに何が**できる**のだろう、とも思うからです。もうお別れしなければ。それでは、ごきげんよう」

彼女は手を離し、天使のような笑い方で笑い、それから公園の方を向いた。私は、その背の高いまっすぐな姿と風に吹かれるスカートを見つめ、数人の女性と子供たちを追って私がよく覚えている茂みの中に入っていく彼女を見ているうちに、彼女はすぐに見えなくなった。

私は、まるで自分の人生からあらゆる温かさが失われたかのように感じた。まるで歓喜が飛び去ってしまったかのように、まるで貴重なものが自分の所持から離れ、体

表の隙間が再び閉じてしまったかのように。

彼女が姿を消した地点に視線を固定させたまま、私は長い時間立って考えていた。後を追いたいとも感じたが、その後、それは慎重さを欠く行為だと思量した。それは以下の理由による。彼女は私の偽りの夢にすぎず、刺激的で出来事の多かった日の単なる追憶で、疲れ果てて興奮した脳のさまよえる幻想――好ましい幻想**以上**の（それ以外の**何だというのか**！）――であるにもかかわらず、それでも彼女は素晴らしい女性であり、赤の他人でまったく取るに足りない私を、類い稀なる丁重さと親切さをもって待遇してくれた。それに私が報いたのは事実である。彼女を初めて見たときからずっと、私の肉体に呼吸がある限りずっと、彼女が好きなことを一緒にするために、まさに私の人生が彼女のものとなるほどの、深く強い愛で！　だがこのときの夢が、適切な紹介なしでの知己（ちき）を形成することはなかった。フランスでさえ――夢の中でさえ。夢の中であっても、疲れて眠っている脳のさまよえる幻想に対してであっても、人は礼儀正しくあらねばならないのだ。

それと、**彼女**は、**あれ**の中、**私**特有の夢の中で、どんな用事があったのだろう――彼女自身が私に尋ねたように？

＊マビーユ……バル・マビーユ（十九世紀中頃に営業していたダンスホール）であろうか。

それにしても、これは夢**なの**だろうか？　私は、昨日の朝離れたベントンヴィルの下宿を思い出した。自分が何者で――なぜパリに来たのかを思い出した。そのときぐっすり眠っていたパリのホテルの寝室を、大きな音で時を刻んでいた時計を、貧弱な家具のすべてを思い出した。そして、私はここに、完全に目を覚まして意識を持ち、消滅して長年経った古い大通りの真ん中にいる――新しく色を塗った格子組で覆われた巨大なレンガ造りの建物が、土地を塞いでいる場所に。私はそれを見ていた、その建物を、自分自身で、ほんの十二時間前に。だというのに、ここには私が子供の頃に存在していたものが全部あったのだ。そして、若く美しいイギリスの公爵夫人の、あの実体のある幻影が面倒を見てくれている間じゅう、その手袋に包まれた温かい両手を、あのわずかな時間、私は自分の手の中に握っていたのだ！　彼女の手袋の香りが、まだ私の手のひらに残っていた。私は時計を見た。それは十二時二十三分前を示していた。このすべてが、一時間の四分の三未満の時間内に起こったのだ！

どうしようもなく困惑しながらこのすべてを黙考するうち、私は自分の旧家の方へ足を向けた。すると、驚いたことに、庭の壁越しに向こうを見ることができた。それはかつて約十フィートの高さがあると思っていたものだ。

満開の古い林檎の木の下で、私の母が小さな靴下のほころびを繕いながら座ってい

た。母の耳の前に垂れている亜麻色の髪の房（髪をそのようにすることが彼女の流儀だったので）が、顔を半分隠していた。私の感動と驚きは途方もないものだった。心臓は早鐘を打っていた。こめかみに脈拍を感じ、息切れがした。

昔流行したやや奇妙な服を着た小さな男の子が、よく覚えている小さな緑色のテーブルに着いている。広いシャツの襟の周囲にフリルが付いていて、彼の金髪は頭頂部でとても短く刈られていて、側頭部と後頭部はいくらか長かった。その子はゴーゴー・パスキエであった。彼はとてもきちんとした男の子のように見えた。前にペンとインクと書き方帳と、赤いモロッコ革で装丁された金縁の本があった。私はそれが一目で分かった。『雅文抜粋集』だ。犬のメドールが日陰で寝ていた。蜜蜂がキンレンカとサンシキヒルガオの間でブンブン音を立てていた。

小さな女の子が、門番小屋から大通りを走って庭の門を押した。それは開きながら鈴音（すずおと）を鳴らし、彼女は庭に入った。私は彼女を追った。だが彼女は私に気づくことはなく、ほか者もそうだった。その子はミムジー・セラスキアであった。

私は進み出て母の足元に座り、彼女の顔を長い間見た。

彼女に話しかけたり、触ったりしてはいけない――自分の唇で彼女の忙しい手に触れことさえ。さもないと「夢を曇らせ」てしまう。

私は立ち上がって、少年ゴーゴーの肩越しにのぞき込んだ。彼はグレイの『哀歌』をフランス語に訳していた。あまり進んでおらず、次の行に悩まされているようだった。

「そして、世界に暗闇と私を残す」

ミムジーは、親指を口にくわえ、片腕を椅子の背もたれに載せ、彼のもう一方の肩越しにのぞき込んでいた。彼女も悩まされているように見えた。それは翻訳するには厄介な行なのだ。

私は身を屈めてメドールの鼻に手を当て、彼の温かい吐息を感じた。彼は尾*の痕跡を振って、眠りながらクンクン言っていた。ミムジーが言った。

「Regarde Médor, comme il remue la queue! *C'est le Prince Charmant qui lui chatouille le bout du nez.*［メドールを見て、あの尻尾の振り方を！　**シャルマン王子が鼻の頭をくすぐっているんだわ**］」

それまで話さなかった母が口を開いた。「英語を話してちょうだい、ミムジー、お願いだから」

おお、神よ！　母の声、すっかり忘れていたが、それでもとても親密な、言葉にな

らないほど愛おしい声だ！　私は彼女に駆け寄り、その足元にひざまずき、手をつかんでキスをして、こう叫んだ。「お母さん、お母さん！」

奇妙な曇りがあらゆるものを覆った。現実感は失われた。すべてが夢――美しい夢――のようになったが、ただの夢でしかなくなった。そして私は目を覚ました。

・・・・・・・

私は小さなホテルの寝室で目

＊尾の痕跡……断尾（だんび）された尾であろう。五五ページに「三インチの尾」とあった。

「お母さん！　お母さん！」

を覚ました。街灯の明かりによって、すべての家具や自分の帽子や衣類が見えた。マントルピースの上からは時計が時を刻む音、通りからは荷車のゴロゴロいう音と鞭の鋭い音が聞こえてきた。それでも私は、自分の奇妙な光景の中で一分前に感じていた以上に目が覚めているとは少しも感じられなかった――むしろそちらでの方が覚醒していたくらいだ！

私は、大きな馬のそばを小走りするポニーのように、マントルピース上の時計の傍らで私の時計が小さなカチカチ音を発しているのを聞いた。時計が十二時の鐘を打ったとき、私は立ち上がって街路のガス灯の光で自分の時計を見た。それは同じ時刻を指していた。私の夢は一時間続いた――私は十時半にベッドに入っていたのだ。

私はそのすべてを思い出そうと試みて、極めて細かい点まで思い出した――オルガンが演奏していた曲と、それに付いていた歌詞以外のすべてである。それらは喉まで出かかっていたのだが、それ以上進むことを拒んでいた。私はもう一度立ち上がり、部屋の中を歩き回って、あれは全然夢のようではなかったと感じていた。あれは前日の現実にあった冒険全体よりもより「回想可能」なのだった。あれは夢のようであることをやめ、公爵夫人の手に初めて触れた瞬間から母の手にキスした瞬間までは現実になり、それから曇りが現れた。私がくぐり抜けたのは、まったく新奇な、ひどく困

惑させられる経験なのだった。

夢の中では常に、中断、矛盾、逸脱、一貫性の欠如、連続性の侵害など、連鎖において失われる輪がたくさんある。覚醒している心に後でそれ自身を刻み込むのに十分なほど鮮やかな印象は、ポイントポイントにおいてのみなのであって、それでさえ実際の人生の印象に匹敵するほど真に鮮明であるわけではない。それが、夢の中では現実そのままに見えるはずのものだとしても。覚醒時にはそれをよく覚えているが、すぐに消えていき、その後覚えているのはそれを見たという記憶だけである。

私の夢には、これはなかった。

それはラムズゲート桟橋の「カ*メラ・オブスクラ」のようなものだった。人が中に入ると、自分が真っ暗闇にいることに気づく。目の準備が整う。その人はすっかり期待する。しっかり目は覚めている。

突然、港と、その中のあらゆる生命、それに家々と向こうの崖の動画が、視界にぱっと飛び込んでくる。もっと遠くの緑の丘、白い雲、青い空も。

小さな緑色の波が港で追いつ追われつ互いに競(せ)り合い、砕けて壊れやすそうな白い泡沫(ほうまつ)になる。鷗(かもめ)たちが旋回し、突進し、マストとロープと滑車の背後に急降下する。

＊カメラ・オブスクラ……カメラの原理で、外の景色を暗所に映し出す装置・施設。

通路上の輝く真鍮の器具類と羅針盤が、目をくらませることなく陽光に輝く。快活なリリプティアンたちが歩き、話す。彼らの白い歯は針先ほどの大きさで、笑うときに輝くが音はない。周遊旅行者でいっぱいの蒸気船が入ってきて、その外輪が水をかき回しているが、音を聞くことはできない。細部が失われることはない——水夫の上着のボタンも、彼の顔の上の髪も。何マイルも満たす海と大地と空のあらゆる光と色が、ここでは数平方フィートの中に集中している。そして、何という色彩だろう！　画家を絶望させるもの！　それ自体が光であって、古い教会のステンドグラスの窓から流れ込むものよりも美しいのだ。また、すべてが完全な闇に囲まれているため、十分に開いた瞳孔はそれらを最大限に見ることができる。あたかも何もかもが実物大に描かれ、それから効果を強め、豊かにするため、本来の大きさの百万分の一まで縮小されたかのようだ。縮緬（ちりめん）に描かれた日本の絵のように。

すべてが終わる。覆いのない太陽の下に出る。何もかもがぎらぎら光り、剝き出しで単調でありきたりに見える。魔法すべてが光景から次第に消えていく。あらゆるものが、ほかのあらゆるものからあまりにも遠く離れている。出会う人がみんな粗野で巨大で近すぎるように思われる。そして、人は生涯を通じてそんな連中をずっと見てきたのだ！

ゆえに、私の夢は、日常的な覚醒時の毎日の経験の方と比較し得るものであった。十数平方フィートのブリストル紙の上を、平たく音のないただの小映像が動くだけの、目にしか訴えないというものではなく、夢の中の物も人も実生活におけるのと同じくらい丸みと安心感を持っていたし、実物大だったのだ。その間を移動したり背後に回ったりできたし、あえてやろうと思えば、触れたり握ったり抱き締めたりもできるかのように感じられるのだ。耳も、目と同じように、この脳の暗い部屋から解放されていた。話したり笑ったりする声が、実生活さながらに聞こえるのだ。それだけではなく、柔らかなそよ風が頬を撫で、雀がさえずり、太陽が暖気を放射し、たくさんの花の香りがこの幻想を完全なものにしていた。

それから、タワーズ公爵夫人！　彼女は、ほかの人と同じように見えて聞こえるのみならず、さらに触れて感知することもできた。私の触覚神経にある感覚の最大範囲で。私の手が彼女の手を握ったとき、まるで私は彼女の全人生を自分のそれの中に引き入れていたかのように感じたのだ。

その一人の人物を除いて、見たところ、すべて数年前の**現実**の中に**あった**のと同じだった。まさに虫が立てる羽音、花の垂れ下がりに至るまで。

ひょっとして、私は気が狂ったのか？　数時間前にそうしたいと切望していたよう

に、私は過去を手に入れていたのだ。

視覚、聴覚、触覚、その他とは、何なのだろう？

全部で五つの感覚。

いくつもの世界を超えた世界、何十億マイルも離れている星々とは、目の後ろの神経ネットワーク上の単なる光る点でなければ、私たちにとって何なのだろう？　人はそこでそれらをどう**感じる**のか？

私の友人の声の響き、それは何なのだろう？　彼の手の握り、彼の顔の楽しげな様子、彼のパイプと私のそれの匂い、私たちが共に食べたり飲んだりしているパンとチーズとビールの味、それらは脳の虚構（たぶんぽつんぽつんと生じる虚構）でなければ何なのだろう？――目的をもって作られた神経を走る小さな震動、それがなければ、星々も、パイプも、パンもチーズもビールも、声も、友人も、私も、存在しないのだろうか？

もしかすると、肉体の肉の層のどこかに埋め込まれた第六感のようなものがあるのか？――使われないために青白く衰えた、過去や種族の遺物のようなもの、また私たち自身の子供時代にもあったかもしれない遺物のようなものが？　あるいは、将来の子孫のために無上の幸福と慰めを生み出す源泉へと開発されるための萌芽というか、始めるべき努力というか、隠された極めて貴重な能力というか、そのようなものが？

今のところは夢の中でしか震えさせられることも揺れさせられることもできない神経のようなものは、まだ繊細すぎて、普通の日中の光の中でその機能をしっかり働かせることができないのだろうか？

そして、全世界全人類中の私――私、つまりペントンヴィルのウォートン・ストリートに住む建築家兼測量士ピーター・イベットスン――まったく無能で散漫で無学な夢見人――は、何か素晴らしい精神上の発見をする運命にあったのだろうか？

これら厳粛なことを深く、じっくりと考えながら、私は再び睡眠へと自らを送り込んだ。至極自然であるように――しかし、それ以上夢は見なかった。私は朝遅くまでぐっすり眠り、コンコルド橋の近く（反対側）にある快適な室内プール、バン・ドゥリニーで朝食を取り、そこで水泳、居眠り、喫煙を代わる代わる行い、また前夜の不思議な出来事を考えたり、次の夜にそれが繰り返されるよう願ったりしながら、一日の大半を過ごした。

私は一週間パリに留まり、幼年時代の古い通い先の間を一日中ぶらついて――もの悲しい喜びを味わいつつ――、夜には夢の中の公爵夫人が言っていた「本当の夢を見る」ことを試した。成功したのは一度だけだった。

私は「オートゥイユの池」を一所懸命に考えながら就寝した。すると、しっかり

眠ったと思うとすぐに目覚めたように思われ、その現実感と至福感によって、自分が「本当の夢」に入っていることを直ちに理解した。それは再び超越的な**人生**だった――実現した追憶の法悦、**それと同様の**この上なく魅力的な驚き！

そこには緑のフロックコートを着た少佐殿がいて、水際の小さなサンザシのそばにひざまずいていた。水に浸かったその根の間には、テーブルスプーンのつぼほどの大きさの、狡猾で老練なゲンゴロウモドキが棲息していた――私たちがよく捕まえようとしては、その努力が無駄になった貴重種だ。

少佐殿は手に網を持ち、真剣に水を

少佐と水生甲虫

見つめていた。汗が鼻から落ちていた。そして彼の周りには、静かな期待感と緊張感を漂わせたゴーゴーとミムジーと私の三人のいとこたち、それに私がすっかり忘れていた、陽気でそばかす顔のアイルランド少年が群れを作っていた。私は不意に彼の名前がジョンストンであったことを思い出した。彼が非常に喧嘩っ早かったことや、バス通り（今はレイヌアール通り）に住んでいたことも。

池の反対側では、私の母が水からメドールを遠ざけていたが、彼の楽しみを損なっていることを懸念していた。柳のそばのベンチに座ったセラスキア夫人――美しいセラスキア夫人――は、とても興味深そうだった。私は彼女のそばに腰を下ろし、言い表せない喜びをもって彼女を見つめた。

円錐型ウエハース・ケーキ売りの老婆がやって来て、こんな歌を歌っていた――「V'lâ l'plaisir, mesdames — V'lâ l'plaisir!［プレジールありますよ、ご婦人方――プレジールですよ！］」セラスキア夫人は十スー分買った――山のようだった！

少佐殿は網で突撃した――失敗だ、いつものように。メドールは解放され、池全体に大きな波を立てるほどの勢いでざぶんと飛び込み、全員の興奮の叫びと金切り声に包まれて、架空の石を追って潜水した。おお、聞き慣れた声たちよ！　私は泣きそうになった。

メドールは石をくわえることなく水から上がってきて体を震わせ、いつものように身をよじったり吠えたり歯を剝いたりぐるぐる回ったりして、私のすぐそばにいた。私はうれしさと共感のあまり、彼をうかつにも撫でようとして、夢はたちまち「曇ってしまった」――すべてが混乱し、わけが分からない普通の夢に変化したのだ。十分に楽しい夢なのだが、質も程度も違う――**普通の**夢である。そのため、苦悩のうちに私は目を覚まし、その夜は（夢を見たかったのに）再び夢を見ることはできなかった。

翌朝（早い時刻の水泳の後）私はルーヴル美術館へ行き、魅せられてレオナルド・ダ・ヴィンチの『リザ・ジョコンダ』の前に立った。私はそれが過分なまでに激賞されていたのを聞いており、その驚異的な美しさがどこにあるのかを見つけようと懸命に努力した。が、その試みはあまり成功しなかった。セラスキア夫人をもう一度見たことで、その『ジョコンダ』など偽の作り物だと感じられたからである。

やがて私は、自分のすぐ後ろにグループがいるのに気づき、陽気な男性の声が声高に言っているのを聞いた。

「では、公爵夫人、私の最初で最後の唯一の恋人、モナ・リザを紹介させてください」。振り向くと、そこには兵士のような老紳士と二人の婦人（一人はタワーズ公爵夫人だった）が、その絵を見つめながら立っていた。

彼らに道を譲るとき、彼女と視線が合った。その目にはまたもや、私を認識したことで優しい表情が浮かんでいた。私には確かにそう感じられた――ほんの半秒で。彼女はどうやらレディ・クレイの所で私を見たことを思い出したようで、そこで私は、かえって人目につきそうな片隅にその晩ずっと独りぼっちで立っていたのだ。私は並外れた長身だったため（当時は今ほど背の高い人はいなかった）、気づかれやすく記憶されやすかった。特に、あの頃のイギリス人には珍しく顎ひげを蓄えて

"LISA GIOCONDA"「［リザ・ジョコンダ］」

いたということもあった。

彼女は、**私**が**彼女**をどれほど記憶しているかなど考えてもいない。また、私にとって彼女が何なのか、何だったのかもまったく分かっていなかった――実人生と夢の中で！

私は、感情があまりにも大きくなりすぎて、膝が震えるようだった。歩くことができそうになかった。体も心ももろくなっていた。その美しい他人への崇拝は、ほとんど狂気のようになりつつあった。彼女はセラスキア夫人よりもさらに美しいのだ。そのような美しさは残酷なものだった。

私は、非常に背が高くてほっそりした、黒髪と百合（ゆり）のような皮膚と明るく天使のような目を持つ女性の前に、膝を折りひれ伏す運命にあったようだ。クラーケンウェルで牛の胃と豚足を売っていた美しい少女もそのタイプだったことを思い出した。ディーン夫人もそうだった。私にとって幸運なことに、それはよくいるタイプではなかった。

日中はずっと、岸壁や橋の上で欄干に寄りかかったりセーヌ川を見たりしながら、甘美な絶望の療養に努め、パリでいちばん大柄な馬鹿者を自認し、あの青灰色（せいかいしょく）の優しそうな目の光を何度も何度も思い出して過ごした――私だけの光、私にとっての世の*

光を！

・　・　・　・　・　・

短い休暇が終わって、私はロンドン――ペントンヴィル――に戻り、元の仕事を再開した。しかし、私の生活の方向性は全部変わってしまった。

日々、仕事がある日（私は以前よりも一所懸命に働き、リントットは非常に満足した）は、仕事でも遊びでも、何もかもが穏やかな満足と快い黙諾から成る、取るに足らない夢のように過ぎた。

私は、もはや少しも運命に不平を言ったり、己自身から逃れたいと願ったりはしなかった。仕事やレクリエーションに熱中して臨んでいるとき、私という存在のすべてがタワーズ公爵夫人の記憶でいっぱいになっていた。彼女は、全人類および自分自身と自分との関係を良好に保つ、温かい内面的な輝きのようなものだった。夜になれば、夢のパッシーの旧家の中やその周りで彼女のイメージともう一度出会い、ことによるともう一度彼女の手に触れるという言いようのない至福を感じることさえできるかも

＊世の光……マタイによる福音書五章十四、ヨハネによる福音書九章五など。

しれない、という希望、そのうっとりするような希望に、胸を躍らせていたのである。それにしても、彼女はなぜそこにいるのだろうか？

眠りのための祝福された時間が巡り来るとき、私の人生の真の務めが始まった。私は人が美術の練習をするように「本当の夢」の練習をし、多くの失敗の後、専門的熟練者――自在（マスター）に操れる者――になった。

私は仰向けにまっすぐな姿勢で横たわり、足を交差させ、両手を頭上の対称な位置で握った。記憶の中にある空間と時間の、あるポイント――例えば、少佐殿が散歩に行くのを待っていたことを思い出したときは、クリスマスの午後の大通りの門――に、自分の意志を真剣に根気強く固定し、同時に、ペントンヴィル、ウォールトン・ストリート、建築家のピーター・イベットスンとしての現在の自己認識の感触を失わないようにする。公爵夫人は「Ce n'est que le premier pas qui coûte「大変なのは最初だけです」」と言っていたけれども、このすべてをうまくやってのけるのは思うほどやさしいことではない。そして、ある夜ついに、生涯通じて見ていた普通の夢（二回を除く）を見る代わりに、しっかり眠った瞬間に**目覚め**、大通りの門のそばでゴーゴー・パスキエが石柱の一つに座り、雪の積もった通りに少佐を探しているのが見えたことで、天にも昇る気持ちになった。やがて彼は旧友に会うためにぱっと立ち上がった。その者の

暗緑色で覆われた姿が遠くに現れたところだった。私は彼らが温かく親しげな挨拶を交わすのを見たり聞いたりして、オートゥイユを通ってあの池まで気づかれないように彼らのそばを歩き、それから城壁まで戻りつつ、一人の乱暴者のスリリングな冒険譚に耳を傾けた。私はそれを完全に忘れていたことを告白しておく。「ラ・ミュエット門」を三人全員が一緒に通り抜けるとき、少佐殿の記憶力（あるいは発明力）がいくらか衰え始めた――というのは、彼が突然「クリック！」と言ったからだ。ところが、ゴーゴーが情け容赦なく「クラック！」と答えたため、物語

巨大な乱暴者の物語

は夕暮れ時にパスキエ家の門に達するまで続けられねばならなかった。そこで二人は翌日の約束をした後、最上の愛情を込めて別れを告げた。私はゴーゴーと一緒に入り、勉強部屋に座って、テレーズが彼にお茶を出す間、その日の午後にパッシーで起こったことをすべて彼に伝えているのを聞いた。それから彼は、就寝時刻が来るまで、母と一緒に読んだり要約したり翻訳したりしていた。私は、彼が母のハープで寝かしつけられている間、彼のベッド脇に座っていた……その甘美な調べが夜中に止まるまで、私はどれほど耳と心のすべてを傾けて聴いていたことか！　その後私は、言うに言われぬことを思いながら、寝静まった家を抜け出して、――メドールが月に吠えている雪に覆われた庭を通り――静かな大通りと公園を通り――パッシーの人けのない諸街道を通り――寂しい岸壁とパリの闇の区域への橋を通り続けた。私がその場で覚醒し、もう一つのわびしく単調な日――とはいえ、あのような振り返ったり期待したりする経験――あのような不思議で喜ばしい奇妙な相続物――を持つ私にとっては、もうわびしくも単調でもない日――が、ロンドンの上に明けていたことに気づくまで！

私は時折、さらに数回失敗をした。例えば、覚醒時と睡眠時の生活の間の糸が、一瞬の不注意によって、あるいはおそらくベッドにある自分の体の何らかの動きによって、ぷつんと切れたようなときである。その場合、急に視界が曇り、その現実性は破

壊され、代わりに普通の夢が生じてくる。そうなったことへの咄嗟の意識は直ちに自分を目覚めさせるのに十分で、私はもう一度開始し、すべて望んだとおりになるまでダ・カーポした。

どうやら私たちの脳は、写真乾板と蓄音機蝋管の両方に類似したもの、およびまだ発見されていないたくさんの同種のものを含んでいるようだ。視覚や音や匂いが失われることはない。味や感覚や感情もなくならない。無意識的な記憶は、私たちの目下の興味や注意を引いているものの範囲を超え、私たちの周囲で起こっていることに注意を払うことすらせず、すべてを記録するのである。

こうして私は、毎晩、はっきり覚えている場面だけでなく、完全に忘れてしまった場面までが自分の眼前で繰り返されるのを見た。忘れたとは言っても、覚えているのと同じくらい紛れもない真実で、すべてがあの名状しがたい光、過ぎ去りし日の光——海にも陸にもない光、それでも絶対に確かな真実の光——の中に浸かっていた。

それは、日常のけばけばしい光を、美しさにおいても価値においてもどんなに凌駕していることか！　哀れな人類は、今までそんな光によって生きて死ぬことに満足してきたのだ。知識の欠乏のため、実体に対する影、物質に対する精神、といったことを気にすることもなく。私は、これらの睡眠体験の真実を細部にわたって検証した。

保存しておいた家族の手紙があり、起きたときにそれらを調べてみたところ、夢で見たり聞いたりしたことが真実であると裏づけられた。昔話がそれ自身を説明したのだ。それはすべて過ぎ去った真実であり、脳のどこか辺鄙（へんぴ）な場所に蓄えられ、私の意志のとおりに薄暗い過去から持ち出され、もう一度現実にされたのだ。

そして、奇妙な、また極めて不可解な話だが、私はそのすべてを独立した観客、部外者として見ているのであって、彼が以前にその役を演じた場面場面を再び順に演じていく俳優としてではなかったのだ！

それでも、多くのことが私を当惑させ、悩ませた。

例えば、ゴーゴーの背後に立ったとき、彼の背中や後頭部が顔と同じくらい見え、どうやら実物そっくりだったのだが、私は彼の背中も後頭部も見たことはなかった。私がその合わせ鏡の秘密を知ったのは、ずっと後年のことだった。それから、ゴーゴーが部屋を出たとき、時に彼はそれをしながらどうやら私を通り抜けて（夢の一瞬の曇りとともに）反対側に出るようなこともあったが、ほかの人々は理性を保ち、自然に、前と同じように話し続けていたものだった。木と壁と家具が、今では私の眠っている脳にのみ存在しているその消えて久しい木と壁と家具が、耳と目を持っていて、ゴーゴーが離れるときに通過した、私が想像することしかできない思い出のものすべての

音と形と意義を記憶に留めた、とでもいうのだろうか？

料理人のフランソワーズは、ゴーゴーが学校に行っているとき、母とディナーについて話し合うために応接間に入ることがよくあった。それで私は、与えられた注文を聞いて、その後（ゴーゴーがいつでも十分に満喫していた）食事をするところに参加してみると、母が注文したとおりだった。謎の中の謎だ！

彼女たち、過ぎ去った時代の幽霊たちが一緒に導いてくれたのは、何と楽しい生活だったことか！　あんなにも温和で、平穏で、寛大で、楽天的な状態だった――半分はブルジョワ、半分はボヘミアンで、それでいて目立った簡素さ、洗練、非常に貴族的な態度と会話という特徴があったのだ。

使用人たち（たった三人――ハウスメイドのテレーズ、料理人のフランソワーズ、かつては私の子守でそのときは母のメイドになっていたイギリス人セアラ）は、この上なく優しく親しみやすい言葉で友人のように私たちと話し、私たちの関心事に自らも興味を持ち、逆もまたしかりだった。私は、彼女たちがいつも、私たちそれぞれにおはようとおやすみなさいを言うのを望んでいることに気づいた――ルイ＝フィリップ時代におけるパッシーのブルジョワの、かなりフランス的な流儀である（彼はブルジョワ王だった）。

私たちの料理もブルジョワだった。（十ペンスのロンドン・ディナーの後の）ピーター・イベットスンの口は、soupe à la bonne femme［田舎のおばさん風スープ］、soupe aux choux［キャベツのスープ］、pot au feu［ポトフ］、blanquette de veau［子牛のホワイトシチュー］、bœuf à la mode［流行の牛肉シチュー］、cotelettes de porc à la sauce piquante［豚の骨付き背肉のピリ辛ソース］、vinaigrette de bœuf bouilli［牛肉のビネグレットソース煮］――フランス人をかなり若いうちから肥満体にする名料理の数々――それに極上のクラレット（あの幸福な時代、一ボトル一フランだった）――を見たり湯気を嗅いだりすると、よだれが出そうになった。クラレットのコルクが抜かれるや否や、その芳香が部屋を満たすように思われた！

そのような食事が終わると、時に感無量な「le beau Pasquier［美男子パスキエ］」が、信じられないような声の花火を唐突に打ち上げることがあった。半音階の上昇ロケットが、かなり高く上昇して柔らかく爆発してから、美しい色の星々のように抑揚やトリルやルラードをめいっぱい伴って下降してくる。するとテレーズがこう叫んだものだった。「Ah, q'c'est beau!［ああ、何てきれいなんでしょう！］」まるで本物の花火大会に参加しているかのようだ。テレーズは完全に正しかった。私は人間の喉からそのような声が出るのを聞いたことがなく、そんなことが可能であると思いもしなかった

だろう。ヨアヒムのヴァイオリンだけが、そのような美技をそのように美しくやってのけるのだ。

あるいは、彼は私たちに、ブルターニュで撃った狼や、ブルゴーニュで撃った猪のことを話したり――彼は素晴らしい狩猟家だったので――、シャルル十世の garde du corps［親衛兵］としての冒険や、すぐに私たちに名声と幸運をもたらすだろう驚くべき発明について話したりした。また、アンリ五世に忠義をもって乾杯したりもした。彼はとてもひょうきんで楽天的で機知に富んでいたため、彼が話すのを聞くのは歌うのを聞くのと同じくらい楽しかった。

しかし、この消えてしまった生活の奇妙な喜劇全体には、別の、悲しい側面があった。

LE BEAU PASQUIER［美男子パスキエ］は王に乾杯する

彼らは空中楼閣を築き、計画を立て、父に金が入ったときに彼らのものになる富と幸福のすべてを話し、彼らがしようと思うすてきなことのすべてを話した。近い将来を悲しいほど意識することなく。これはもちろん、彼らの歴史の愛情深い聴衆にとっては過去の歴史でしかなかったのだ。

そんなとき、愛と同情が合わさった耐えがたい痛みで涙がこぼれたものだった。それはパッシーの旧家のワックスがけされた床の上に落ちては乾き、私は目覚めたときに、ペントンヴィルの枕の上がまだそれで濡れているのに気づくのだった。

・　・　・　・　・

間もなく私は、一、二秒の間なら練習によって単なる見物人以上になれることを発見した――もう一度俳優になれるのだ。自分（イベットスン）を昔の自分（ゴーゴー）に変える。そうすれば、私が深く愛した人々に触れられたり愛撫されたりが可能になる。母が私にキスすると、私はそれを感じた。呼吸を止められる長さとちょうど同じくらい、夢が曇るまで、セラスキア夫人と手を繋いで歩いたり、歩きながら四、五ヤードの間、ミムジーの軽い体重を背中に、彼女の腕を首の周りに感じたりすることがで

きた。もし曇りが目を覚まさせなければ、それはすぐに消え去り、私はもう一度ピーター・イベットスンとなって、散歩の間、彼らの中に混じって歩いたり座ったり、話し声や笑い声を聞いたり、食事を見たりした。父の歌と母の甘やかな演奏を聴いたが、常に彼らからは見えず、顧みられることもなかった。さらに、すぐに私は、うまく夢を曇らせることなく物に触れる方法を習得した。私は薔薇を摘み、ボタンホールに差し込んだが、それはそこにそのままになっていた――だが、見よ！　私が摘んだまさにその薔薇は、依然として薔薇の茂みにもあったのだ！　私は石を拾って壁に投げた。それはそこで音も立てずに消えてしまった――その石そのものが私の足元にまだあった。何度もそれを拾って投げたとしても、そうなのだろう！

この世界での覚醒時の喜びは、睡眠時に得られるこれらの複雑な喜びに、激しさにおいて匹敵し得なかった。覚醒時の喜びは、相対的に非常にわずかで、非常に曖昧なものに思われた――集中力と脇目も振らないような注意力が欠乏するため、その感覚のかなりの量が逃げてしまうわけだ――覚醒時の知覚力は、とても鈍い。

それは人生の内部にある人生――より激しい人生――だった。そこでは、夢の国の魔法と組み合わされた幼年時代の新鮮な知覚力があり、満たされない憧れが一つだけあった。しかし、その名は憧れは粗暴なほどのものだったライオンだった。

その夢の国でもう一度タワーズ公爵夫人に会うことが、熱烈な憧れだったのだ。

・　・　・　・　・　・

こうして、しばらくの間、私は以前よりも孤立して暮らしていたのだが、自分の前に開かれたこの奇妙な新しい人生によって、自分の孤独はすべて十分に補償されていた。驚異も歓喜も決してやむことはなかった――そんなある朝、私はレディ・クレイから短信を受け取った。彼女はクレイ家の、ハートフォードシャーにある田舎の大邸宅に厩舎（きゅうしゃ）を建てたがっていて、私に一昼夜そこに行ってほしいと依頼してきた。

当然私は、単なるビジネスの問題としてこの招待を受け入れなければならなかった。レディ・クレイは、友人としては私を長いこと「厄介払い（熱いポテト扱い）」していたように思われ、幸いにも、私が彼女を切り捨てていたということには気づかないようだった。

しかし、彼女は私を友人として受け入れた――旧友として。私の内気と紳士気取りは、彼女の手に触れるだけで私から落ちていった。

私は午後の早い時刻にクレイ邸に到着し、すぐに仕事に取りかかった。それは数時間を要したため、私はディナーのための着替えにかろうじて間に合うくらいに邸に着

いた。

私が応接室に入ったとき、そこには人が数人いて、レディ・クレイはある若い女性に私を紹介した。教区牧師の娘で、私が彼女をディナーにエスコートすることになった。

私は、応接間に集まったその来客が、ほかならぬサー・エドウィン・ランドシーアを含んでいると彼女に言われたことで、非常に感銘を受けた。何年も前、私はミムジー・セラスキアのために、彼の絵の一枚を版画にしたものを写したことがあったのだ。その絵は『挑戦*』あるいは『物事には必ず前兆というものがある』という題名だった。私は、すこぶるおしゃべりで明るく、自分の名声に少しも困惑していないその素晴らしい小男を眺めて楽しんだ。

ある客が遅れていて、自分の食料をいらいらと待ち遠しがっているように見えるクレイ卿が叫んだ――。

「もし時間に正確だったら、メアリーはメアリーじゃないだろう！」

ちょうどそのとき、メアリーが入ってきた――そして、そのメアリーこそは、誰あろう、タワーズ公爵夫人その人だったのだ！

私の下半身では膝が震えた。しかし、そんな繊細な軟弱さに屈している暇などはな

＊『挑戦』……一八四四年の絵画。発表後すぐに版画版が雑誌などに載ったものであろうか。

かった。クレイ卿が彼女を連れていった。行列が食堂に入場し、そのほぼ最後尾に我が若き教区牧師の娘と私がいた。

公爵夫人は私から遠く離れて座っていたが、私は一瞬彼女と目が合い、その中にあの優しい認識の微光を再び見たような気がした。

魅力的な隣人が私に、今までに見た中でタワーズ公爵夫人が最も美しい女性だと思いませんか、と尋ねた。

私が我が意を得たりと二つ返事で同意すると、あの方は美しいのと同じくらい善良で、善良であるのと同じくらい賢いのですよ、と言われた（あたかも私がそれを知らないかのように）。あの方は何だって、自分が着ているものだって人にあげてしまうでしょう。他人のための苦労を厭うようなことはありませ

メアリーは遅刻する

ん。でも、ご主人とはうまくいっていないのです。お酒飲みで、まったくもって不品行で下品な人ですから。あの方は深い悲しみを抱えています――とても愛しているお子さんが一人だけいるのですが、知恵遅れなのです。いつかはタワーズ公爵になるのでしょうけれど。あの方は、高い教養をお持ちで、外国語も達者で、素晴らしい音楽家で、イギリス社交界全体でたぶんいちばん人気のある女性でしょう。

ああ！　この哀れな筆記者よりもタワーズ公爵夫人を愛した者がいただろうか！　彼女はその者の魂で生き、明るい特別な星――太陽――のように輝いたのだ。リントットが言ったように、彼女の吸引力の勢力下に、知らないうちにかくも急速に引き込まれた者がいただろうか！　いつか、最終的には永遠に吸い込まれてしまうことを、私は願っている！

「タワーズ公爵夫人は、結婚前はどんな人だったのですか？」と私は尋ねた。

「セラスキア嬢ですわ。父上はハンガリー人で、お医者様で、政治改革論者で――それはもう魅力的な方でした。あの方はその環境で礼儀作法を身に付けたのです。母上は、あの方がほんの子供の頃にお亡くなりになったのですが、良家のとてもきれいなアイルランドの娘さんで、クレイ卿のいとこに当たります――デズモンド嬢と言って、その興味深い愛国者とは駆け落ちで一緒になりました。二人はパリの近くのどこかに

住んでいました。そこはセラスキア夫人がコレラで亡くなった場所で――……。どうかなさいまして？――ご気分がすぐれませんか？」

私は暑さで気が遠くなったふりをして、自分を圧倒した感情と当惑の洪水を全力で隠した。

私は、タワーズ公爵夫人をもう一度見ることはあえてしなかった。

「おお！　痩せ細った腕が私の首に巻き付き、冷たく青白い頬が私の頬に当たっていた、かわいいミムジー。私はつい昨夜、それらを感じたばかりだ！　それが、ここまで女性的な健康と強さと美しさを備えた絶世の美女に成長するとは！――あの魅力的な、いつでも準備ができている笑いと微笑みまで身に付けて！　もちろん、当時はまつげがなかったあの目が、今は周囲を厚く縁取られている！――かといって、私は何だってその目を見誤っていたのか？　ああ、ミムジー、あの当時、君は決して微笑んだり笑ったりしなかった。そうでなければ、私は君の目を再び認識できたはずだ！今ならできるか？――できるのか？」

こうして、私は女性*たちがいなくなるまで自分の殻に閉じ籠もり続けたが、私の若く美しい相手役は、すぐに回復しますよ、と優しい心配と上品な希望を表明してくれた。

私は、女性たちに加わる時が来るまで黙って座っていた（テーブルを占拠していた

偉大な画家の、機知に富んだ華々しい逸話さえ追跡できなかった）。その後、私は自分の部屋に引き上げた。自分が聞いたことの後では、そうすぐには再び**彼女と**顔を合わせることができなかったのだ。

善良なるクレイ卿が親切に尋ねに来てくれたが、私はすぐに気分は悪くないと言って彼を満足させた。しかし、彼は立ち去らずに話をした。ディナーは大いに彼の利益になったようで、彼はタバコを吸いたがった（しかも誰かと一緒に吸いたいと）。食堂では、出席していた老主教師のためにそれができなかったのだ。それで彼は、フランス人のように小さな紙巻きタバコを自分で巻いて、心ゆくまでスパスパと吸った。

彼は、自分が雇った控え目な建築家が自分に出ていってほしいとどれほど望んでいるかなど、ほとんど想像もしないのだった。そう望んでいたのも、彼がタワーズ公爵夫人――彼は「メアリー・タワーズ」と呼んでいた――のことと、「タワーズ」がどれほど足蹴（あしげ）にされたり荷車*の後ろで鞭打たれたりして当然の人物なのかを話し始めるまでのことだったが。「そう、彼女はイギリスでいちばん善良で美しい女性で、と

＊女性たちがいなくなるまで……この当時の食事会では、先に女性が食堂から応接間に引き上げ、男性はしばらく食堂に残ってタバコを吸ったり男どうしで雑談したりした。

＊荷車の後ろで……実際にあった刑罰で、上半身裸で荷車に縛り付けられ、鞭打たれた。

にかく頭の回転が速い！　彼女がそうじゃなかったら、彼はずっと前に破産裁判所行きだっただろう」等。「彼女と肩を並べられる公爵夫人などイギリスにはいやしない。見た目でも頭脳でも、教養においてもだ。彼女の母親は私の親戚なのだよ（メアリーを除けば、史上最高級の美女だった）。彼女はその環境で礼儀作法を身に付けたのだ！」等々。

こんなふうに、この高貴なる伯爵は私のために音楽を作ってくれた――甘美で苦い音楽を。

メアリー！　それは、特にイギリス人の唇には天国的に響く名前だ。愛らしいyを使い、イギリス流に綴られる。

甘美で苦い音楽

偉大な人々はその名前への情熱を持っていた――バイロン、シェリー、バーンズ。しかし、私よりも大きな情熱を持つ者や、それに正当な理由を持つ者は、誰もいなかったと思う。

とはいえ、時には、またあちこちに、性悪なメアリーもいたに違いない。醜いメアリーだっていただろう。それどころか、かつてはその両方を兼ね備えた血*まみれメアリーがいたのだ！　信じられないような気がする！

メアリーなのだ、まさに！　なぜ*ヘカベではないのか？　それは、私がタワーズ公爵夫人にとって何だったのか？　ということに現れている。

再び一人きりになったとき、私はベッドに行って、仰向けで腕を上げ、本当の夢を期待して眠ろうした。ところが眠りは訪れず、私はフランス人が言うように白い夜（眠れぬ夜）を過ごした。早起きして公園を散歩し、朝食の時刻になるまで厩舎に興味を向けようとしてみた。誰も起きてこないので、私はこの上なく親切なレディ・クレイと二人だけで朝食を取った。彼女が私のことを非常に機知に富んだ仲間だと感じたとは思えな

＊血まみれメアリー……十六世紀のイングランド女王メアリー一世。プロテスタントを三百人以上処刑したことからこう呼ばれた。

＊ヘカベ……ギリシャ神話で、息子を殺されたため、犯人の王とその息子たちに復讐する女性。

かった。その後、私は考えるために厩舎に戻り、うとうとしていた。

十二時頃、木のボールの音が聞こえ、芝生で「*クロッケー」に興じている人がいるのに私は気づいた。それはまったく新しいゲームで、数年後に流行し始めた。

私は芝生の近くの、枝が垂れた大きなトネリコの木の根元に座った。それはテントのようで、下に椅子とテーブルがあった。

やがて、レディ・クレイがタワーズ公爵夫人と一緒にそこにやって来た。私は空に飛び上がりたかったが、その場に釘付けになっていた。

レディ・クレイが私を紹介し、ほとんど間髪を入れずに使用人が彼女宛の伝言を伝えに来た。私はこの世にたった一人の女性と共に残されたのだ！　私の心臓は口から飛び出しそうで、息は乾き、こめかみ両側が脈打っていた。

彼女は私に、この上なく自然な物腰で、私が「クロッケー」をするかどうかを尋ねた。「はい――いえ――少なくとも、時々は――つまりその、それについては全然――おお――忘れました！」私は自分の馬鹿丸出しの言葉にうめき声を上げ、両手で顔を隠した。彼女は、私がまだ調子が悪いのかと尋ね、私はいいえと答えた。それから彼女は、いろいろな、あらゆることについて、本当にゆったりと気楽に話し始めた。私がもっと楽な気分になるまで。

彼女の声！　夢の中以外ではちゃんと聞いたことがなかったが、それは夢と同じく――とても豊かで、聞き手に合わせて調整された声――低い――コントラルトで、非常に多様かつ快い抑揚を持っていた。彼女は、一般的なイギリス人女性よりも話すときにより多くの動作を用い、それによりセラスキア夫人を思い起こさせた。私は、彼女の手が長くてとても細く、足もそうだと気づき、ミムジーもそ

紹介

＊クロッケー……八ページ、序文でマッジが書いていた「彼女（＝教区牧師の娘）はクロッケーをプレイしていたうちの一人だったのです」は、ここを指している。

んなふうだったことを思い出した――それらは哀れなミムジーの唯一の美点だと見なされていたのだ。私は、彼女の左のこめかみにほとんど見えないような傷跡があることにも気づき、夢の中で大通りを一緒に歩いていたときに自分がそれに気づいていたことを、戦慄とともに思い出した。覚醒時の生活の中では、小さな傷に気づくほど彼女の近くにいたことはなかったし、昔のミムジーにそんな傷はなかった――それは確かだと感じた。私は最近ミムジーをよく見ていたからだ。

私はその状況に慣れてきた。そこで、ロンドンのレディ・クレイ宅で一度お会いしたことがありますね、と思い切って言ってみた。

「おお、そうです。覚えています。ジュリア・グリジが『柳の歌』を歌っていました」それから彼女は目をくしゃくしゃにして笑い、顔を赤らめ、こう続けた。「あなたが片隅の、ゲインズバラの名画の下に立っているのに気づいていました。あなたは、かつて知り合いだったフランス少年を思い出させます。その子は、私がフランスで少女だった頃、とても親切にしてくれたのです。彼の父上は偶然あなたに似ています。でも、あなたはミスター・イベットスンで、イギリス人建築家で、レディ・クレイがおっしゃるには非常に将来有望な方だとか」

「私は昔、フランス少年だったんです。ある親戚を満足させるために名前を変えなけ

ればならず、それでイギリス人になりました――言ってみれば、私はずっと、**本当に**イギリス人だったのです」

「まさか、何て不思議なことでしょう！　あなたのお名前は何**だった**のですか？　当時の」

「パスピエ――ゴーゴー・パスピエです！」うめくようにそう言うと、目に涙がこみ上げてきて、私は目をそらした。公爵夫人は答えなかった。私が向き直って見ると、彼女は私を見ていた。ひどく青ざめ、唇は真っ白で、両手を膝の上で固く握りしめ、至る所を震えさせながら。

私は言った。「あなたはかつての少女ミムジー・セラスキアですね。私はあなたをよく背中におぶって運んでいました！」

「おお、何という！　おお、どうしましょう！」彼女はそう言って泣き始めた。

私は立ち上がり、彼女の目が乾くまでトネリコの木の下を歩き回った。クロッケーに興じている連中は自分のゲームに集中していた。

私は再び彼女のそばに座った。もう目は乾いていた。ついに彼女が口を切った――「本当に恐ろしいことになりました！　あなたのお気の毒なご両親と、**私の**愛する母については。母を覚えていますか？　母はあなたが去った一週間後に亡くなったので

す。私はパパ――セラスキア医師――とロシアへ行きました。みんな恐ろしいくらいばらばらになってしまいました！」

それから私たちは、往時のことや今は亡き愛する人々について、徐々に、まったく自然に話し始めた。彼女は決して私から目をそらさなかった。しばらくしてから私は言った――

「パッシーへ行ったら、何もかも変わっていて、みんな建物で塞がれてしまっていることが分かりました。それで私は今にも気が狂いそうになりました。サン＝クルーに行くと、あなたがフランス皇后と一緒に車に乗っているのを見ました。あの晩に、あの異様な夢を見たのです！　私はポンプ通りで四苦八苦していて、ちょうど大通りの門に達したらあなたがそこにいた、という夢です」

「何てこと！」彼女は小声で言い、またもや青ざめて全身を震えさせた。「何をおっしゃりたいの？」

「そう」私は言った。「あなたが私を助けに来ました。私は小人と恐怖に追われていたのです」……

彼女「何ですって！　ふ――二人組の小さい看守に、ですか？　男とその妻で、踊ってあなたを閉じ込めようとしていた？」

今度は私が「何ですって！」を叫ぶ番だった。私たちは二人とも恐れおののき、身震いした。

私は言った。「あなたが私の手を取ると、何もかもがたちどころに現れたのです。私の母校が、刑務所の代わりに立ち上りました」

彼女「黄色の乗合馬車も？ première communion［初聖体］に向かう男の子たちも？」

私「そうです。群衆がいました――フランソワおじさんとおばさん、それにリヤール夫人、食料雑貨屋の奥さんです、それに――それにミムジー・セラスキア。髪を短くしていました。オルガンが私がよく知っている曲演奏していましたが、今は思い出せません」……

彼女「『Maman, les p'tits bateaux?［ママ、小さなお船に］』ではなくて？」

私「おお、**そうでした！**

'Maman, les p'tits bateaux
Qui vont sur l'eau,
Ont-ils des jambes?'

『ママ、水の上を行く
小さなお船に
脚はないの？』

彼女「それです！

'Eh oui, petit bêta!
S'ils n'avaient pas
Ils n'march'raient pas!'

『あらまあ、お馬鹿さん！
もしなかったら
進みませんよ！』

彼女は椅子に腰を下ろした。青白く、打ちひしがれて。しばらくして——

彼女「それから、私は本当の夢を見る方法について良い助言をして、私たちは私の

昔の家に着き、私はポーチの文字をあなたに読ませようとして、あなたはそれを間違って読み、それで私は笑った、と」

私「そうです。私は『テト・ノワール』と読みました。間抜けもいいところでしたね？」

彼女「その後、私がもう一度あなたに触れると、あなたは『ノートルダム広場』」と読んだ」

私「そう！　あなたがさらにもう一度私に触れると、私は『パルワ・セド・アプタ』と読みました――小さいながらも調和の取れた、です」

彼女「**それ**が意味ですか？　でも、少年の頃、あなたは私に**セド・アプタ**は一つの単語で、『建築物』のラテン語だと言いましたよね。それ以来、私は『パルワ・セド・アプタ』を『petit pavillon［小さな建物］』の意味だと信じ込んでいたんですよ！」

私「お恥ずかしい！　間違ったラテン語でしたね。その後、あなたはもう一度良い助言をくれました。何かに触ったり花を摘んだりしてはいけないことについてです。私はそれをしませんでした。それからあなたは公園に入って見えなくなりました――光が、寝ているときも起きているときも、私の人生から離れていきました。それ以来、私はあなたの夢を見ることがかないません。今日以降も、再びあなたにお目にかかるとは思えません！」

その後、私たちは長いこと黙り込んでいたが、私は時々ハミングしたりあーとかえーとか言ったりして話そうと努力した。私は感情の葛藤で気分が悪くなった。とうとう彼女が口を開いた――

「親愛なるイベットスンさん。これはすべてがあまりにも異常すぎるので、私はお暇して、最初から考えてみなければなりません。もう一度あなたに会えたことが私にとってどんな出来事だったか、とても言い表すことはできません。それに、その私たち二人に共通の二重の夢も！　おお、私は言葉にできないくらい幻惑されて、今、まるで夢を見ているかのような気分です――このすべてが非現実的で、ありそうにないと感じられていることを除けば――あまりにも現実離れしていると！　私たちは、もう離れた方がよさそうです。もう一度会えるかどうかは分かりません。あなたは、ちょくちょく私の思考の中に現れることはあっても、夢の中にもう一度現れることはないでしょう――少なくとも、私はそれを抑制することができます――あなたの夢の方に私が現れることもありません。あり得ないことなのです。かわいそうな父は、死ぬ前に私に夢の見方を教えてくれました。目が覚めているときの悩みに対し、夢の中で無邪気な慰めを見いだせるようにと。私には、悩みはたくさんあったし、それらは大きなものでした。父がそうであったように。そうした方がよさそうだと思えたら、手

紙を書くかもしれません――でも――期待はしないでくださいね。私はもうさよならを言って、あなたとはお別れするつもりです。あなたも今日出発ですよね？　何よりです。私は、これが最後のお別れになればいいと思っています。あなたが私にどれほど関心を抱かせるか、どれくらいずっとそうだったかは、言葉にできないくらいです。あなたはずっと前に死んだと思っていたのです。私たちはしょっちゅうお互いのことを考えることになるでしょう――それは避けられません――**でも決して、決してお互いの夢は見ません。それはもうないのです。**

親愛なるイベットスンさん。

私は、一人の人間が別の人間に祈ることができるありったけの幸せが、あなたに訪れることを祈っています。それでは、お別

告別

れです。願わくはあなたに天の神様の祝福がありますように！」

震え、青ざめ、目に涙を溜めながら立ち上がり、私の両手を固く握り締めてから、彼女は私から去っていった。夢の中で私を置いていったように。

私の人生から光が離れ、私はもう一度孤独になった――彼女に会うことがなかった場合よりも、いっそう哀れで惨めな孤独に。

私はペントンヴィルに戻り、表面上は自分の単調な暮らしを再開し、普段どおり食べて飲んで働いて動き回ったが、それは通常の平凡な夢の中でしているようだった。というのは、今では夢――本当の夢――だけが、私にとって唯一の現実になっていたからである。

夢の中でもたらされた驚異があまりに大きく、あまりに信じがたく並ぶもののないものだったため、人生のあらゆる状況が変更され、翻（ひるがえ）されてしまったのだ。

私と、もう一人の別の人間が、二重の夢、私たち二人に共通の夢の中で、出会った――実際に、本当に出会ったのだ――。そして、互いに手を握り合った！　しかも、それぞれがもう一人に対し、忘れようにも忘れられない言葉を話したのである。

この別の人間と私は、何年にもわたって――子供の頃から――お互いの記憶の中に大切に安置されてきて、今では非常に驚異的で前例のない経験という繋がりによって

互いに結び付いている。そのため二人は、生命と感覚と記憶が続く限り、もう一人の思考から外れることはなさそうだ。

私の心には、私たちがクレイ邸のトネリコの木の下で話し合ったときの彼女自身は、あの爽やかな夢の大気の中で大通りを一緒に歩いていた、別の、もっと親しげな彼女自身よりも、生き生きした感じが乏しいように浮かんでくる。そこで私たちは、生き、動き、ほんのわずかな間だけ一緒にいたけれども、あのときはそれぞれが、もう一人は自分が眠っている間の、想像力による単なる空想的産物にすぎないと思っていた。夢のような物質で作られたものだと！

だが、見よ！　あれは全部真実だったのだ――日常生活の普通の経験と同じくらいの真実――もっと（十倍以上も）真実らしい真実だ。なぜなら、より鋭くより意気揚々とした感覚による認識、より分散しにくい注意力によって、私たちは互いの本当の内面的存在をより意識していたからである――しばらくの間、より密接に繋がった内面的存在を――世界開闢（かいびゃく）以来、おそらく二人の生身の人間がそうなったであろうよりも、さらに密接に。

あの夢の中の手の握り――それは、クレイ邸での悲しいさよならの手の握りよりも、どんなに膨大な量のことをもう一人に伝えていたことか！

私は自分の惨めな外面的生活の中で手紙を待ったが、無駄だった。彼女にもう一度会えることを期待して、公園や通り――特に彼女が住んでいた通り――を頻繁に訪れたが、無駄だった。あの家は閉ざされていた。彼女は遠くに――後に知ったところでは、アメリカに――、夫と子供と共に行ってしまったのだ。

夜になると、かなり上手に呼び起こすことを身に付けたおなじみの情景で、私は彼女の痕跡を見つけたいという変わらぬ切実な願望をもって、隅々まで探索した。私は「パルワ・セド・アプタ」からはほとんど離れなかった。セラスキア夫人とミムジーと少佐がいて、私の母とゴーゴーがいつも出入りしていた。もちろん、私のこの中身のある霊体には気づかぬまま、まるで私は存在していなかったかのように。私はミムジーと彼女の母親を見ながら、タワーズ公爵夫人が誰なのか、誰の娘なのかを、一目見ただけで認識できなかった自分の愚鈍さを訝しんだ。身長、声、目、足取りと身振りの独特の癖――あのような最近の夢の機会の後で、彼女を再認識するのに失敗するとは、一体どういうことだろう？

そしてセラスキアは、今の彼の娘が女性たちの中でそびえ立っているように、この全員の中でそびえ立っている。私は、彼が自分の娘の中で再び生きているのを見ていた。**彼の**微笑みは、**彼女の**と同じく、目が閉じられる微笑みだった。もし当時のミム

ジーが微笑むことがあったなら、私はそのかなり独特な特徴によって彼女を再認識できたことだろう。

この彼の娘（今日の公爵夫人ではなく、往年のミムジー）に、今の私は決して飽きるはずもなく、彼女にゴーゴーと一緒にいるすべての場面を何度も何度も繰り返させた。私の記憶にとっても彼女のそれにとっても、とても大切な場面を。要するに、シャルマン王子は私なのであり、その見えない臨席を彼女は思いもよらない何らかの方法で意識していたのである。何という奇妙な洞察力！　だが、妖精タラパタポウムはどこにいるのか？　言葉にできないほどの憧れの対象は、その年の間は現れなかった。彼女は言っていた。私が彼女の夢の中に、あるいは彼女が私の夢の中に再び現れることは、決して、決してない、それでも、私たちはお互いの思いの中に絶えず存在し続けることだろう、と。

こうして、クレイ邸における最後の生身の会合の後、十二か月が瞬く間に過ぎていった。

・

・

・

・

・

・

ここで私は、不本意な心と極めて気の進まないペンによってできるだけ少ない言葉で語ろうと努めるという、人生における大きな苦難に直面しなければならない。

読者は、もし途中を飛ばすことなく読んでくれるほどの善良さを持ち合わせていらっしゃるのなら、私が数年前ホプシャーで恋に落ちたような気になった、美しいディーン夫人のことを思い出すことになるだろう。

あれ以来、私は彼女に会っていなかった――それどころか、彼女のことはほとんど忘れていた――のだが、彼女がホプシャーを離れてロンドンに来て、自分よりもかなり年上の裕福な男性と結婚したことは何となく耳にしていた。

さて、私はある日ハイドパークに行って、馬車で通過していく人々を見つめていたのだが、かなりきれいで真新しい無蓋馬車が通り過ぎたとき、その中に悲しげなディーン夫人（旧姓）がいて、彼女の今の栄光の中、独りぼっちで、実際かなり不機嫌そうな顔をしているのが見えた。彼女は私を認めてお辞儀をし、私はほんの一瞬心に動揺を感じながらお辞儀を返し――旧交への何気ない感謝の印だ――、かつては彼女をあんなに称賛できた自分のことを不思議に思いながら、自分の道を進んだ。

やがて、私は肘に触れられて驚いた。それはまたもやディーン夫人であった――私はこの後も彼女をディーン夫人と呼ぶことにする。彼女は車から降りて、歩きで私を

追ってきたのだった。彼女の望みは、私が彼女と一緒に公園の周囲をドライブし、昔話をすることであった。私は従い、これを最初で最後として、自分がよく好奇心に満ちた目で見ていた、あの誇り高く陽気な行列の一部をなしているのに気づいた。

彼女は、私がイベットスン大佐と和解したかどうかを知りたくて仕方ないという様子で、私が、していませんし、おそらく今後もする気はありません、私の彼に対する感情は激しく辛辣で、ずっとそのままである可能性が高いものです、と言うのを聞くと喜んだ。

彼女は彼を、ものすごく嫌っているようだった。

彼女は、私の健康と私の人生の見通しを親切に尋ねてくれたが、私の答えにはあまり興味はなさそうだった――その後、私がフランスでの生活や愛する両親のことを話し、彼女がそれを熱心な共感をもって聞き、私がいたく感動するまでは。彼女は、彼らの肖像画はあるかと訊いた。私は持っていた――極めて優れた細密画を。別れるとき、私は翌日の午後に彼女を尋ね、その細密画を持っていくと約束した。

彼女は元気のない、ひどく退屈した女性のように見え、どうやら大きな知り合いの輪がないらしかった。その日公園全体でお辞儀した唯一の人間が私だったと、彼女は言った。夫はハンブルクにいて、彼女は彼と一両日中にパリで会う予定だった。

彼女に会うよりうれしいと感じるような友人があまりいなかったので、私は喜んで訪れ、約束したとおりに肖像画を持っていった。

彼女はマーブル・アーチ近くの大きな新築の家に住んでいた。私が訪ねたとき、彼女は完全に一人で、すぐに私が細密画を持ってきたかどうかを尋ねた。それらをかなり熱心に見て、それから私を見てから叫んだ――

「あらまあ、あなたはお父様の肖像そのものですね！」

確かに、私はいつもそのように見なされてきた。

父の眉も私のそれも、特に、鼻梁と稀に見る独特な方法で接触しており、彼女はこれにかなり強い印象を受けたようだった。父はシャルル十世の「gardes du corps［親衛兵］」制服の見本となっていた。彼は二年間その任務に就き、「le beau Pasquier［美男子パスキエ］」というニックネームをもらっていたのである。ディーン夫人は、それを見つめるのにまったく飽きないようで、父が「若い娘が夢見る理想像そのものであったに違いありません」と言った（親子で似ているという話をした後ゆえ、私を赤面させた間接的な賛辞である。数年前に上手にやってのけたように、彼女が再び私を馬鹿にしようとしているのではないかと、私はほとんど不審に思い始めた）。

それから彼女は、私の若年期と思い出に再び興味を示し、両親が愛し合っていたか

どうかを知りたがった。二人は極めて愛情深く恋人のような夫婦であり、お互い一目惚れで、死ぬまでそのままだったと、私は彼女にそう言った。会話はこんなふうに続いた。私がすっかり興奮するまで、すなわち私に権利がある、邪悪なおじの陰謀に巻き込まれなかったいくばくかの財産について、彼女が知っているに違いないと想像するまで。

というのも、私は夢の中で、おじは父の不倶戴天の敵で、父の経済的破滅の主たる原因であったことに、もうだいぶ前から気づいていたからである。複雑すぎてここで説明するのは困難だが、それは利己的で冷酷で不正な行為によってであった――紛うことなきシャイロック*である。

パッシーの昔の応接間で、ゴーゴーが本に没頭している間、父と母の間で交わされた長い会話を（夢の中で）聞くことで、私はその情報を得ていた。ゴーゴーの無頓着な耳を通って、別のことに心を奪われている小さな脳に入ったすべての語句は、蓄音機のようにそこに記録されており、今や彼らの間に気づかれずに座っているピーター・イベットスンのために何度も何度も繰り返された。

私は冗談めかして、もしかして、私がイベットスン・ホールの正当な相続人である

＊シャイロック……シェイクスピア『ベニスの商人』の強欲なユダヤ人金貸し。

ことが分かったのですか？　と尋ねてみた。

彼女は、それなら私としても何よりの喜びだろうけれど、私やあなたにそんな幸運は待ち構えはいない、と答えた。彼女はもうずっと、イベットスン大佐がまだ絞首刑になっていない最低の悪党であることに気づいていて、彼はこれ以上悪くなる余地が見いだせないほどだという。

そのとき私は、彼がどれだけ頻繁に彼女のことを話していたかを思い出した。私にさえ話していたのだ。それに、おそらく真実ではないことをほのめかしたり遠回しに言ったりもしていたが、私は信じなかった。それらが真実なのか虚偽なのかの問題がどうであれ、そういう行為が彼を見下げ果てた、口にするのも汚らわしい者にしたことに変わりはない。

彼女は、おじが私に彼女のことを話したことがあったかどうかを尋ねた。たくさんの説得と巧妙な詰問の後で、私は彼女に、自分が勇気をもって言える限りの真実を伝えたところ、彼女は雌の虎のようになった。彼女は、彼がホプシャーで彼女を中傷し、評判を落とすことを実にうまくやってのけたため、彼女と母親はそこを去らなければならなかったと、私に断言した。そして、全世界の前で告白できないようないかなる関係も二人の間にはなかったことを、極めて厳粛に私に誓った（彼女が真実を話して

いたことを、私は完全に信じている）。

本当は、その富と地位のため、彼女は彼との結婚を望んでいた。彼女と母親は二人ともかなり貧乏で、生活を維持し、世間の前でまともな外見を保つことがしばしば困難になったからである。そして、彼は彼女を選び出し、最初から目立った注目をし、その注目が真剣で結婚を考えているものであると信じてしまうようなあらゆる理由を彼女に与えていた。

この時点で彼女の母親グリン夫人が入ってきて、私たちは旧交を温めた。彼女は、自分の娘に対する私の男子生徒的憧れを完全に容認してくれていた。彼女の憎悪のパワーはすべて、娘同様イベットスンに集中していた。私は、彼女たちが受けた非道な仕打ちと彼の恥ずべき行いの長い物語を聞きながら、以前よりもいっそうひどく彼のことが嫌いになっていき、この場で彼女たちの擁護戦士になり、直ちに彼女たちの喧嘩を買って出る覚悟ができていた。

しかし、これはしない方がよいと思われた。彼女たちの評判が彼のそれに、どんな形でも巻き込まれることが、二度とあってはならないからだ。

そのとき、不意にグリン夫人が、彼がインドに行った時期を知っているかと尋ねた。私は、それが両親が結婚した直後、私が生まれるほぼ一年前であったことを知って

いたため、彼女を満足させることができた。そのうえで彼女は、彼が自分の連隊とともに出発した正確な日付や輸送機関の名称など、あらゆることをを教えてくれた。さらに、驚いたことには、メリルボーン教会で両親が結婚した日付と、そこで行われた十五か月後の私の洗礼のそれ――パッシーでの誕生のちょうど十四週間後――まで教えてくれたことである。私は、自分の出来事に関するこのすべての知識にすっかり戸惑いを膨らませ、次第に怪しむ気持ちが増していった。

私たちはしばらく黙って座っていた。二人の女性はお互いを見て、私を見て、細密画を見た。雰囲気はだんだん不気味なものになりつつあった。これは一体どういうことなのか？

やがてグリン夫人が、娘からのうなずきを得て、このように私に言葉をかけた。

「イベットスンさん、あなたは彼をおじさんと呼んでいますが、彼はあなたのおじ*ではありませんね。彼はとんでもない悪党で、あなたやあなたのご両親にそれはもう忌まわしい悪事を働きました。そのこと（あなたが知るべきだと私が思うこと）を申し上げる前に、あなたには、私たちの評判がイベットスン大佐のそれにどんな形でも巻き込まれるようになることをやったり言ったりしないと、誓約していただかなくてはなりません。今は優秀な方と幸せに結婚できましたが、娘が受けた傷は取り返しがつ

きません」

胸をどきどきさせながら、私は厳粛に求められた保証を与えた。

「では、イベットスンさん、あなたがイベットスン大佐を知るべきなのは、法に照らしても正しいことです。娘にたち悪く言い寄っていたとき、彼は、あなたが彼のいとこのキャサリン・ビダルフ嬢、後のパスキエ・ド・ラ・マリエール夫人と彼との間にできた実の息子であることを、はっきりと知らせてきたのです！」

「おお、おお、おお！」私は叫んだ。「それは絶対に間違いです――彼は、それはあり得ないと知っていました――彼は母に三回振られたんです――私が生まれるほぼ一年前にインドに行って――彼は――」

そのとき、ディーン夫人が、ポケットから古い手紙を取り出してこう言った。

「あなたは彼の筆跡と個人紋章をご存じですか？　イベットスン・ホールで、彼からの短信を私に持ってきてくれたことがあったのを思い出せますか？　それがこれです」。彼女は私にそれを手渡した。紛れもなく彼のものであり、私はすぐにそれを思い出した。そこにはこんなことが書かれていた。

＊あなたのおじでは……ピーターから見て、大佐は「いとこおじ」「いとこちがい」である。

「後生ですから、親愛なる友よ、あなたがゆうべ賢明にも推測なさったことを、生きた人間には一言も漏らさないでください！　似ているところがあるのは当然なのです。哀れなアンティノウス！　彼は本当の関係を何も知りません。そのことが、私に多くの恥辱と自責の念の苦しみを引き起こしました……

『Que voulez-vous? Elle était ravissaure!［仕方ないじゃないですか？　彼女が魅力的だったんです！］』……私たちはいとこどうしで、一緒になることが多かったのです。『二人とも若すぎ、一人はとても美しかった！』……当時の私はただの無一文の旗手で――まだ少年でしかありませんでした。幸いにも、彼女をずっと愛していた、疑うことを知らない良家のフランス人男性がいて、彼女は彼と結婚しました。『Il était temps!［危ないところでした！］』……

あなたはこの『entraînement de jeunesse［若気の至り］』を許してくださいますか？私は悲哀に深く沈んで後悔し、一瞬の心酔の対象を絶え間なく思い出させる者を養子にし、自分の名前を与えることで、自分にできる賠償をしました。哀れな子よ、あれはほとんど何も知りませんし、これからも知らないでいることを願っています。『Il n'a plus que moi au monde!［彼には、この世に私しかいない！］』

これは読んだらすぐに燃やしてください。そして、この話題が私たちの間で再び持

ち上がることがありませんように。

R。（Qui sait aimer［愛することを知る者］）」

青天の霹靂（へきれき）だ！

私は呆然として座り、激怒した。永遠に激怒が続くかのように感じた。

長い沈黙があり、私はその間こめかみで脈が破裂寸前になっているのが感じられた。その後、グリン夫人が言った。

「さて、イベットスンさん、私はあなたが早まったことをしないでいてくださるよう願っています——娘の評判を、あなたとおじさ

運命の手紙

んの間の喧嘩に巻き込むことはできません。お母様の名誉のためにも、あなたは慎重でいてくださると思っています。もし彼が、若い頃に恋していたいとこのことをこんなふうに話すことができるというのなら、私のかわいそうな娘のことでどんな嘘だってつかないことがあるでしょうか？　彼は、**ついたのです**――ひどい嘘を！　おお、何て私たちは苦しんだことでしょう！　彼がその手紙を書いたとき、彼は本気で娘と結婚するつもりだったと思います。彼は娘を最大限信用していましたし、そうでなければこんな馬鹿な立場表明はしなかったでしょう」

「おじはこの手紙の存在を知っているのですか？」私は尋ねた。

「いいえ。彼が娘と不和になったとき、娘は彼の手紙を送り返しました――この一通を除いて全部。これについては、娘は彼に、指示どおり読んだ後すぐに燃やしたと言ってやりました」

「私が保管しても？」

「ええどうぞ。あなたは信頼してよさそうですし、ご覧のように、娘の名前は表面から削除されています。これは私たち以外誰も見たことがありませんし、私たちとしては一瞬たりとも信じられなかったので、この内容を人に言ったこともありません。二、三年前、私たちは、あなたのご両親がいつどこで結婚したのか、あなたはいつ生まれ

たのか、**彼**はいつインドに行ったのか、などに興味が湧きました。結果は、私たちを少しも驚かせることはありませんでした。それから私たちはあなたを見つけようとしましたが、それはすぐに諦めました。問題はこのままにしておく方がよいと思ったのです。その後、彼がまた悪さをしたと聞きました――ちょうど同じような悪さを。そのとき、娘が公園であなたを見て、私たちはあなたが知るべきだと結論を下したのです」

忘れられない会話の要旨はこのようなものだった。ここではできるだけ簡略にしてある。

この二人の女性と別れたとき、私は公園の周囲を急ぎ足で二回ほど歩いた。歩いている間にしばしば激しい憤怒が込み上げた。たぶん私は怒っているよう見えたのだろう。人々が私のことをじっと見ていたのを覚えている。

それから私はリントットの所に直行した。自分の苦悩を彼に伝え、助言をもらいたいという強い衝動に駆られつつ。

彼は不在で、私はしばらく彼の喫煙室で、何度も何度もあの手紙を読み返しながら待っていた。

その後、私は彼には言わないことに決め、その家を出たが、出るときに詰め物を仕込んで重くしてある杖を持ち出した（ただし、明確な目的はなかった）。少年でも使

えるかなり強力な武器で、私が自分でリントットの直近の誕生日に贈ったものである。アナンケー！

それから私は、ピカデリー・サーカスの近くのいつもの飲食店に行って食事をした。私はビター・エールを一クォート、シェリー酒を二杯飲んで、ウェイトレスを驚かせた。水を飲むのが私の習慣だったのだ。彼女は私に、具合が悪いのか、それとも面倒事でもあるのかと質問を浴びせた。私は違うと彼女に答え、最後には一人にしておいてくれと頼んだ。

イベットスンはセント・ジェームズ・ストリートに住んでいた。私はそこに行った。彼は不在だった。時刻は九時で、使用人は彼がいつ帰ってくるか正確には分からないようだった。私は十時にもう一度そこに戻った。彼はまだ不在で、使用人は、少し考え、通りを左右よく見て、私の格好がきちんとしていて決して危険でないことを理解してから、二階へ行って待つように求めた。私は彼に、非常に重要な用件があるのだと言ったのだ。

そこで私はおじの応接間に行って、座って待った。

使用人は私と一緒に来て、蝋燭に火を灯し、天気の感想を言い、私に『サタデー・レヴュー』と『パンチ』を手渡した。私はかなり自然に見えたはずで――そう見える

ように努めていたので――、彼は私を残して出ていった。

マントルピースの上にマレーのクリス*が見え、私はそれを額縁の後ろに隠した。もう一つ、グランド・ピアノと、ピアノの上の方に刀剣、短剣、戦斧（せんぷ）などを掛けた武器掛け（トロフィー）のある応接間があるのだが、そこに通じるドアの鍵をかけ、ポケットに鍵を入れた。

私が待っていた部屋の鍵はドアの内側にあった。

これまで私は、彼の側からの暴力の可能性については漠然と考えていたが、彼を殺そうとは考えていなかった。自分は、それをするにはあまりに強すぎ、そんな展開にはならないだろうと。実際私は、静かな、圧倒的な力を感じていた――抑え込まれた興奮の結果である。

私は座って、言うつもりのことすべてを沈思黙考した。それを何度も何度も決定し、運命の手紙を繰り返し再読した。

使用人がグラスとソーダ水を持って入ってきた。私は、別の部屋へのドアが施錠されていることに彼が気づくのではないかとびくびくしていたが、彼が気づくことはなかった。彼は窓を開けて通りを右、左とよく見た。やがて彼は「やっと大佐のお帰り

＊クリス……刀身が波形（なみがた）の短剣。三五三ページのイラスト参照。

ですよ、サー」と言って、ドアを開けに階下へ降りた。

彼が中に入り、使用人に話しかけているのが聞こえた。それから『la donna e mobile［女は気まぐれ］*』の鼻歌を歌いながらまっすぐに階段を上り、私が記憶している陽気で浮ついた挙動そのままに中に入ってきた。彼はイヴニング・ドレスを着て、ほとんど変わっていなかった。彼は私を見てかなり驚いたようで、真っ青になった。

「これはこれは、我がT定規使いのアポロ殿、この御来臨はどうしたわけだ？　殊勝な甥っ子よろしく、謙虚になって許しを請いに来たってわけか？」

私は言うつもりだったことを全部忘れてしまったが（実際、私が思い描いたようなことは何も起こらなかった）、立ち上がり、できるだけ穏やかに、しかしくぐもった声で言った。「あなたと話をしに来ました」

彼は動揺したようで、ドアの方へ行った。

私は先回りしてドアを閉じて鍵をかけ、鍵をポケットに入れた。

彼は別のドアに素早く移動したが、施錠されているのに気づいた。

次に彼はマントルピースの方へ行ってクリスを探したけれども、見つからなかった。そのため振り返って暖炉に背を向け、両手を腰に当て肘を張って挑戦的な姿勢を取り、極力軽蔑的で断固とした顔を作ろうと試みた。彼の顎は染められた口ひげの下でまっ

白になり――蝋のように――、目は神経質に瞬いていた。

私は彼に近づいて言った。「あなたはディーン夫人に、私があなたの実の息子だと言いましたね」

「それは嘘だ！　誰がそんなことを？」

「彼女が言ったんですよ――今日の午後」

「それは嘘だ――捨てられた女の悪意に満ちた捏造だ！」

「彼女はあなたの愛人ではありませんでした！」

「馬鹿が！　あいつはおまえにそれも言ったようだな。部屋から出ていけ、青二才のウスノロが、さもなければ追い出させるまでだ」。彼はベルを鳴らした。

「自分の筆跡は分かりますか？」私はそう言って、彼に例の手紙を渡した。

彼は一、二行読んでから、これは偽造だと喘ぎながら言い、もう一度ベルを鳴らして、再びクリスを時計の後ろに探した。それから手紙に蝋燭の火をつけ、盛んに燃えている暖炉の中にそれを放り込んだ。

私は彼を制止しようとはしなかった。

＊『女は気まぐれ』……『リゴレット』（ヴェルディ作曲）の「女心の歌」であるが、このオペラの初演は一八五一年、小説の今は一八五〇年代の後半であるので、矛盾はない。

使用人がドアを開けようとし、イベットスンは窓の所に行って警察を大声で読んだ。私はクリスを隠した絵へと駆け寄り、それをテーブルの上に投げた。それから彼の上着の後ろ裾を引っつかみ、振り回して彼を窓から離し、クリスを指さしながら自分を守れと言った。

彼はそれを握り、防御姿勢を取った。使用人は、どうやら助けを求めて階下に走ったようだ。

「さあそれでは」私は言った、「ひざまずけ、この忌まわしいゲス野郎、そして白状しろ。これが唯一のチャンスだ」

「何を白状しろってんだ？　この馬鹿が」

「あんたが臆病者で嘘つきだってこと、その手紙を書いたこと、そしてディーン夫人も私の母も、あんたの愛人なんかじゃなかったってことをだ！」

人々が階段を駆け上がってくる音がした。彼は一瞬耳を傾け、それから語気強く小声で言った。

「あいつらは**二人とも**大馬鹿だ！　おまえが俺の息子かどうかなんて、どうすりゃはっきり分かるってんだ？　全部同じことだ。もちろん、俺はあの手紙を書いた。さあ来いよ、腰抜け暗殺者、私生児野郎の尊属殺人者が！」……そして、彼は右手にク

リスを低く持ち、上に向けて私に迫り、突進し、甲高い声でこう叫んだ。「ドアを壊して開けろ！　早く！」外の者たちはそのとおりにしたが、遅すぎた。

私は逆上した！

彼は私を見失い、私は彼が頭上に保っていた左腕に杖を振り下ろし、次に頭に振り下ろすと、彼は崩れ落ち、叫んだ。

「おお神よ！　おおキリストよ！」

彼がくずおれていく間に私はもう一度彼の頭を打ち、床に倒れたときにさらにもう一度打った。正しく砕いたようだった。

これが、私がイベットスンおじを殺した理由と方法である。

「私生児野郎！　尊属殺人者！」

第五部

"Grouille, grève, grève, grouille,
File, file, ma quenouille!
File sa corde au bourreau
Qui siffle dans le préau…"

「動け、悲しませよ、悲しませよ、動け、
紡げ、紡げ、私の糸巻き棒よ！
中庭で口笛を吹いている
死刑執行人の縄を紡げ……」

『ノートルダム・ド・パリ』の老婆はこう歌った！

いつも私の内部に甲高い声で歌いに来るか細く小さな声が、昼も夜も、幾昼夜にもわたって、私に向かってこう歌った。時にはある曲で、あるときは別の曲で、だが常

に同じ歌詞で――ブルーフライアーズの男子生徒だったとき、こんなふうによく私に取り憑いた恐ろしいリフレイン！

・　・　・　・　・

おお、長いグレーの上着と馬鹿げたピンクのストッキングを着た男子生徒に、もう一度なろうとは――無邪気で自由な――唯一の恋人がエスメラルダで、親友がアトスとポルトスとダルタニアンで、第三巻を手にする土曜日の午後にこう伝えられるよりもひどい艱難辛苦はなかったような――「volume trois en lecture!［第三巻は貸し出し中です！］」

・　・　・　・　・

日曜日の夜は、時々、ほとんど眠れなかったことを思い出す。月曜日の朝、近くで絞首刑になる予定の惨めな悪漢を憐れんだためである。そしてそれは、今度は**私**の番なのだ！

おお、メアリー、メアリー、タワーズ公爵夫人、幼い頃のかわいい友、生涯の恋人よ。君は今の私をどう思っただろう？

・　・　・　・　・　・

・　・　・　・　・　・

信じる者はどれほど恵まれていることだろう！　神と天国、また罪の赦(ゆる)しを信じ、無邪気であること以外はすべてにおいて小さな子供のようであることは、どれほど幸福なことだろう！　犯罪の全経歴は、その罪に十分見合った死という極度の恐怖の中、土壇場でのたった一つの安っぽい信仰の証となる精神的行為の瞬間に、一掃される。人が（その後も長期間悪を増殖し続ける）生涯を通じてずっと働いてきたあらゆる悪が、汚れた衣服のように肩から下ろされ、他者――取るに足りない――を感化するために、どこかに適当に投げ捨てられる。

それがもし愚か者の楽園であったらどうだろう？　楽園は楽園だ、それを手に入れる誰にとっても！

フランスがパレルモを占領していた間、あるシチリア人鼓手隊長が銃殺を宣告されたという。彼は臆病で有名であり、最期の瞬間にフランス人兵士たちの面前で自分の国に泥を塗ることが恐れられていた。兵士は、潔く、軽い心で銃殺される傾向があったのだ。彼らは銃殺に慣れ親しんで育ったのである。

シチリアの名誉のために、聴罪師は極秘に、君への宣告は見せかけのもので、君は空砲で銃撃されることになっているのだ、と彼に伝えた。

それは敬虔なる欺瞞（ぎまん）であった。*十二の弾薬筒（だんやくとう）のうちの二つを除くすべてが弾丸を持っていた。彼は崩れ落ち、蜂の巣になっていた。こんなにも軽い心で、思い切りよく死んでいったフランス人はいなかった。彼は堂々としており、国の名誉は守られた。

この話が本当なら、シチリア人鼓手隊長は大いに幸せだった！　その空砲への信頼神的負担を軽減するため。自分の銃は空砲だったのだと思い込めれば、多少心は軽くなる。

＊十二の弾薬筒の……銃殺のとき、一部の銃は空砲にされた。銃撃する兵士の殺人への精

は、彼の楽園だったのだ。

・　・　・　・　・　・

おお、その瞬間が来て綱が引かれたとき、禁欲的でいるのは骨の折れる仕事だ！しかし、綱引きが一瞬以上持続するとしたら――昼も夜も、何昼夜も！　おお、幸せなシチリア人鼓手隊長！

・　・　・　・　・　・

祈るかって？　祈るとも。私は夜と朝、それに日中もずっと祈るつもりである。何であれ、この不幸な出来損ないの宿なしピーター・イベットスンの中に受け継がれた力と勇気のうちで、残っているものに対して。それがまだ少しの間、彼を支えることができますように。被告人席や絞首台で、彼が恥ずべき振る舞いをしませんように。

・　・　・　・　・　・

後悔しているか？　している、たくさんのことに。だが、私がここにいる理由については？　全然だ！

・　・　・　・　・　・

裁判官と陪審員と死刑執行人が一体となって、私的・個人的な過ちのために――有罪判決をし、打ちのめし、殺すことは、恐ろしいことだ。

同情が後に来る――時すでに遅しである、幸運にも――みすぼらしく弱々しい同情だ！　はん！　*キャルクラフトが**私を**憐れむことなどないだろうし、私だって彼にそうしてほしいとは思わない。

・　・　・　・　・　・

彼は、私の杖に対して長い蛇状のナイフを持っていた。彼もまた、かなり自己防衛

＊キャルクラフト……実在のイギリスの死刑執行人。

に熟練した、大柄で強健な男性だったのだ！　彼は倒れ、私は何度も彼を打った。彼は「おお神よ！　おおキリストよ！」と悲鳴を上げていた……。

「それは、死ぬまで私の心と耳に残って響くだろう――死ぬまで！」

・　・　・　・　・　・

無駄にできる時間はなかった――最善の結果が得られるよう考えるだけの暇はなかったのだ。現状のみが最善の結果である。もし彼が生きていたら、いろいろ、ありとあらゆることを言ったことだろう！

・　・　・　・　・　・

ありがたいことに、同情は、自責の念や恥ではない。どんな罪が、彼の罪よりも重い可能性があるだろう？　人が心から愛する死者たちから、彼らの名誉を奪うなんて！

彼はもしかすると気が狂っていて、やがて自分自身についた嘘を信じるようになったのかもしれない。そういうことはあった。しかし、そのような狂人は、狂犬同様生かしておくわけにはいかない。嘘を葬るための唯一の方法は、嘘つきを葬ることだった――それでとにかく嘘を葬ることが**できる**のなら！

哀れなウジ虫よ！　結局、彼はそうならざるを得なかったのだと思う！　彼はそういうふうに**造られていた**のだ！　そして**私は**、そのために彼を葬り、絞首刑になるよう造られていた。アナンケー！

「Gogo — gentil petit Gogo!［ゴーゴー――かわいいゴーゴー！］」にとって、何という退場だろう！

・　・　・　・　・　・

ちょうどその壁の向こう側、道の反対側に、かつて小さな牛の胃と豚足の店があって、平民の中では極めて美しい娘によって切り盛りされていた。私の目にはあまりにも美

人で善良に見えたので、私は彼女に妻になることを求めるつもりだった。彼女は、今の私をどう思うだろう？　私が図々しくも憧れていたなんて！　何というコフェチュア王だ！

・　・　・　・　・　・

みんなはどう思っているだろう？　私は人に本当の原因を漏らすことはできない。ただ二人の女性だけが真実を知っており、彼女たちは言わないよう細心の注意を払ってくれるだろう。ありがたいことだ！

・　・　・　・　・　・

誰が何を考えているかは、重要なのだろうか？「百年経てば皆同じ」。これはかつて創案された中でも最も賢明なことわざだ。

・　・　・　・　・　・

しかし、その一方で！

・　・　・　・　・　・

裁判官が死刑宣告用の黒帽（くろぼう）をかぶる。全部おまえのためだ！　すべての目がおまえに固定される。かなり大きく、若く、強そうで、活気に満ち溢れたおまえに。うわぁっ！

・　・　・　・　・　・

おまえは縛られ、歩き、男らしくしなければならない。教誨師は熱心に訓戒を与え、祈り、慰めようとする。そのとき、ずらっと並んだ顔の海が見える。食べたり飲んだりはしゃいだりして**おまえを**待っている、反対側の人々。帽子が引っ張られておまえの目を覆う――おお、恐ろしい！　恐ろしい！　恐ろしい！

＊**コフェチュア王**……伝説のアフリカの王子。女嫌いだったのに、乞食娘ペネロフォンの美しさに惹かれ結婚した。ここで、ピーターが今ミドルセックス留置場にいることが分かる。

「Heureux tambour-major de Sicile!［幸せなシチリア人鼓手隊長！］」

「Il faut laver son linge sale en famille, et c'est ce que j'ai fait. Mais ça va ma coûter cher!［自分の汚れた下着は家で洗え（＝内輪のもめ事は内輪で処理せよ）、それが私がやったことだ。しかし、それは私にとってかなり高くついている！］」

もう一度、最初からやり直そうか？　おお、希望を持たせてほしい、ぜひ！

ああ、彼はあまりにもあっけなく死んでしまった。私は数秒にも満たない間に四発の攻撃を加えた。彼が部屋に入ってきてから、私が彼の息の根を止め、現行犯で捕まった瞬間までは、たぶん五分――でなければ長くても十分――くらいだった。それで私の方は――何と長い間もがき苦しんだことか！

・　・　・　・　・　・

おお、もう一度「本当の夢」を見て、もう一度愛する人々に会えればいいのに！　だが、あの運命の夜以来、本当の夢を見る力は私から失われてしまったようだ。何度やっても、それは現れないだろう。私の夢は恐ろしいものになっている。そして、おお、**覚醒**も！

・　・　・　・　・　・

結局、これまでの私の人生は、子供時代の幸福な数年間を除き、生きる価値のないものだった。百歳まで生きたとしても、そんな価値はほとんど生じそうにない！　お

お、メアリー！　メアリー！

・　・　・　・　・　・

そして懲役！　死んだ方がましだ。私の秘密が、私とともに死ぬはずなのは良いことだ――軽減事由もなく、情状酌量(しゃくりょう)もなく、速やかなる死刑の減刑もないだろう。

"File, file…
File sa corde au bourreau!"

「紡げ、紡げ……
死刑執行人の縄を紡げ！」

・　・　・　・　・　・

どんよりした巡回路を何度も循環するこのような単調な思考や、同じように憂鬱で

絶望的な別の思考によって、私はイベットスンの死とオールド・ベイリーの裁判との間にある恐ろしい時間を紛らした。

今となっては、それは皆とても些細でつまらない――記録する価値のない――、覚えておくのさえ困難なもののように思われる。

しかし、自分の苦悩があまりに大きく、絞首台の恐怖があまりに強烈だったときには、自分は、へたをするとあと二十四時間経過するよりも前に、悲痛そのもののために死んでしまうに違いないと思っていた。

耐えがたい重圧が緊張の頂点に達するまでますます厳しさを増し、ヒステリックな涙の噴出がしばらくの間心を和らげると、私は自分の運命と和解したように感じられ、男らしく死に直面することができるようになったものだ……。その後再び、苦悶が徐々に私を包んでいき、肉体の制御できない脆弱性に襲いかかって……。

そして、これら二つの相反する気分はそれぞれ、一方が続く間は他方をあり得ないもののように、まるで二度と再び戻ることはないかのように思わせた。それなのに、それは潮の干満の規則性とともに戻ってくる――かつてない、最も悲惨なシーソー。

私はずっとこんな具合に不安定だった。しかし、以前は、高揚と落胆の間を揺れ動いていたものが、今では、無言の諦観的絶望から最も狂暴な苦悶と恐怖までを往復す

るのである。

私は自分の中に探せそうな唯一の慰めを空しく探した。しかし、苦しみに消耗し、ついに眠りに就いたとき、私はもう本当の夢を見ることはできなかった。私は、ほかの悲惨な境遇にある者たちが見るのと同じような夢しか見ることができなかった。

私はいつも、あの二人の踊る醜い小人の看守夫婦が、ついに私を確保する夢を見た。彼らが私を中に引き入れ、それぞれが私の両脇にぴったりくっつき、不吉な笑顔に歯のない歯茎を見せながら熱く酸っぱい臭いのする毒息で私を汚染している間、私は愛する公爵夫人に助けを求めて大声で叫ぶのだ！　門があり、大通りはすべてが歪んでいて、まったく違ってしまっている。反対側には刑務所。だが、恐怖を振り払ってくれる強力なタワーズ公爵夫人はいなかった。

・　・　・　・　・　・

おそらく、私の裁判がどんなに短かったかを覚えている人もいるだろう。

私に「無罪」の嘆願が入った。十分な動機がなかったため、提示された弁護は精神異常というものだった。この弁護は検察からすぐに棄却された。私が正気であったと

いう証拠に不足はなく、十分な動機は、私「――暴力的で気難しく執念深い性質で、親類かつ恩人の血で自らの手を汚した――」とイベットスン大佐「――被告の父親でもいいくらいの年齢で、実際、彼が被告に与えた愛情から見れば父親であったかもしれず、被告が無一文で残されたときに、自分の責任となった外国の孤児に自分の芳名を与えた――」との、過去の関係の中に見いだせた。

ここで私は、裁判報告書に正式に記録されているように、大声で長々と笑ってしまい、極めて不快な印象を与えた。

陪審員は、二日目の午後のかなり早くに、陪審員席から離れることもなく私の有罪を認めた。そして「裁判の間じゅう保ってきた無感覚で平静な表情態度を最後まで維持していた」私は、減刑の望みもなく正式に死刑を宣告されたが、裁判官――有名な絞首刑好きの裁判官だ――の方では遺憾の意が述べられた。被告のように教育があり前途がある人間が、その者自身の邪悪な性質と手に負えない激情によって、非常に嘆かわしい結末を迎えることに対して、である。

・　・　・　・　・　・

それにしても、最悪の決定というものは、未決定の状態よりもましなものなのか――私の苦痛の神経は、「猫」に一定数引っかかれた後で人の背中がそうなると言われるように、裁判に先立つ期間にあまりにも働きすぎたがために実際は無感覚になっていたということなのか――、私がその最悪の決定を知り、事実上の安堵感という驚きの感覚をもってそれにおとなしく従い、その決定が耐えられないわけではないと内心感じられることに気づいたのは確かであった。

少なくとも、その夜の私の気分はそのようなものだった。私はそれをできるだけ有効活用した。私が体験してきたことに比べれば、それは幸福と言ってよいものだった。私は、我ながら驚くような旺盛な食欲で食事をしたことを覚えている。ディナーからそのまま絞首台に行って、軽い心と潔さをもって死ぬことができそうだった――シチリア人鼓手隊長のように。

私はタワーズ公爵夫人に本当にあったことの一部始終を手紙に書く決心をした。彼女への長く絶望的な憧れの告白と、私のことは、昔の遊び友達で、この恐ろしい災難が起こる前に知っていたとおりの者としてのみ考えるよう努めてほしいという希望の文言を書き添えるつもりで。そして、書こうとしている手紙のことをかなり遅くなるまで考えているうちに、二人の看守が見張っている独房で、私は眠りに落ちた。その

後で――私の内面的生活の別の局面が始まったのである。

・　・　・　・　・　・

易々と、何の支障もなく、私は大通りの門の所にいた。

ピンクと白のサンザシ、それにライラック、キングサリが満開で、太陽が至る所に黄金の小道を作っていた。暖かい空気は香りに満ち、初夏の虫などのうなり音と鳴き声でいっぱいだった。

私は本当の夢の地に再び到達し、もう一度くつろいだ気持ちになって、半べそ状態になっていた――chez moi! chez moi!［我が家よ！　自分の家よ！］

フランソワおばさんが、loge［門番小屋］のドアの所にジャガイモを剝きながら座っていた。彼女はこんな小曲を歌っていた。

「cinq sous, cinq sous, pour monter notre ménage

"CINQ SOUS, CINQ SOUS,
POUR MOTHER NOTRE MÉNAGE"
「［五スーで、五スーで、所帯道具を揃えるの］」

[*五スーで、五スーで、所帯道具を揃えるの]」。私はそれを忘れていたが、そのときすっかり記憶が戻った。

おどけ者の郵便屋イヴェルドンが、私の家の古い庭の門に入った。彼がそれを押すと鈴が鳴り、私は彼に続いた。

花芽(かが)がいっぱいに顔を出している林檎の木の下に、母と少佐殿が座っていた。母が郵便屋の手から手紙を受け取るとき、彼は言った。「Pour Vous? Oh yes, Madame Pasquier, God sev ze Kveen! [あなた宛てですかって？　おお、そうですよ、パスキエ夫人。ゴッド・セヴ・ゼ・クヴィーン！]」。母は送料を支払った。それはイベットスン大佐からの手紙で、そのときはアイルランドにいて、まだ大佐になってはいなかった。

メドールは芝生で寝転がっていびきをかき、ゴーゴーとミムジーは『musée des familles [家庭博物館]』の絵を見ていた。

ガーデン・チェアにだらりと腰掛けたセラスキア医師は、膝と交差する長い磁器パイプとともに、どうやら眠っているらしい。

セラスキア夫人は、ジゴ袖の黄色いナンキン木綿のガウンを着て、『Constitutionnel [憲法]』紙からカールペーパーを切り出していた。

私は彼ら全員を言いようのない優しさをもって見つめていた。おそらく、これが彼

らを見つめる最後の機会になる。

私は彼らを名前で呼んでみた。

「おお、私に話しかけてください、愛する影たちよ！　おお、お父さん！　おお、お母さん！　私はこんなにもあなたたちに焦がれているのです！　数秒だけでも過去から抜け出して、私に慰めの言葉をかけてください！　私は、それはもう悲惨な状況に陥っているのです！　あなたたちが**知る**ことさえできれば……」

しかし、彼らは私を聞くことも見ることもできなかった。

そのとき突然、もう一人の人影が林檎の木の背後から歩み出た――それは、こちらからは見たり聞いたりすることしかできず、こちらを見返したり聞き返したりすることはできないような、古風な装いに身を包んだ過ぎし日の実体のない影ではなく、素晴らしく生命力に溢れた、救いと力の柱石（ちゅうせき）である人――メアリー、タワーズ公爵夫人であった！

彼女が両手を差し出して私の所に来たとき、私はひざまずいた。

「おお、イベットスンさん、私は毎晩ここであなたを探して待ち続けていたんですよ！　気が狂いそうだったんです！　あなたが最後まで来なかったら、私は何もかもかなぐ

＊五スーで……シャンソン『オーヴェルニュの持参金付き娘』の一節。

り捨てて、ニューゲートにあなたに会いに行ったに違いありません。目が覚めているときに、世間の面前で、あなたと話すため――abboccamento［面談］のために。あなたはとても眠ったり夢を見たりできなかったのだと思います」

最初のうち、私は答えられなかった。できたのは彼女の両手をキスで覆うことだけだった。それをしながら、私は彼女の温かい生命力の流れが私のそれと溶け合うのを感じていた――何という喜び！

その後私は言った――

「私がいちばん神聖に思うすべてのものにかけてあなたに誓います――

愛する影たち

私の母の記憶と**あなたの**母上の記憶にかけて――あなた自身にかけて――、私はイベットスンの命を奪うつもりはなかったし、彼を打つつもりさえなかったことを。なのに、ひどい攻撃が加えられて……」

「まるで私にそれを言う必要があるみたいですね！　私が昔からあなたのことを知らなかったみたいですよ！　私の、いちばん親切で優しくて、かわいそうなお友だちであるあなたのことを。だって、私はあなたの手を取っていて、あなたの心の奥深くをのぞき込んでいるんですよ！」

（私は彼女が言ったことは全部、彼女が言ったとおりに書き留めている。当然のことながら、私は、彼女のいつもの愛情深い注視が彼女の目にそう見えさせていたような者ではないし、今も昔も一般に見なされていた残忍な怪物以上ではないのである。女性らしく、彼女も自分の偏愛の奴隷だったわけである）

「ところで、イベットスンさん」彼女は続けた。「最初に言っておきますが、判決が減刑されるのは確実です。私、三、四時間前に内務大臣と会ったんです。あなたとおじさんとの悲しむべき諍（いさか）いの本当の原因は、公然の秘密となっています。おじさんの性格はよく知られているんです。グレゴリー夫人（あなたがホプシャーでディーン夫人として知っていた人です）が、今日の午後に内務大臣と会いました。裁判でのあな

たの騎士道的な寡黙ぶりは……」

「おお」私は遮った。「私はもう生きたいとは思いません！　今、あなたにもう一度会って、あなたが私を赦し、起こったすべてに関係なく私を良い人間だと思ってくれたからには、もういつ死んでもかまいません。**私**には、この世であなたしかいなかったのです――私の母とあなたの母上が死んで以来、女性の幽霊も出てきてくれないし、一人の友人さえもいなかった。あの頃と、レディ・クレイ宅での演奏会で初めてあなたを見た夜との間、私は生きていたとはとても言えません。私は記憶の残り物を常食としてきました。ご存じのように、私には新しい友人を作る才能はありませんが、おお、古い友人への忠誠を保つ才能にはかなり恵まれているんです！　私はミムジーがまた戻ってきてくれるのを待っていました。私にとって、あの甘美な時代から生き残った唯一の人だと思うのですが、とうとう彼女が現れたとき、私はあまりにも馬鹿すぎて彼女だと認識することができませんでした。彼女は流星のように私の貧しい人生の中で燃えて輝き、気も狂わんばかりの愛と痛みでそれを満たしました。愛と痛みのどちらの方が甘美なのかは分かりません。どちらにしても私の人生でした。それがどんなものだったのか、あなたには理解できないでしょう。嘘ではなく、私はもう十分に生きてきました。いつ死んでもかまわないし、進んで死を受け入れたいくらいです。そ

れが、私が考え得る唯一の理想的な成就なのです。今この瞬間に匹敵するものはありません――地上でも天上でも。もし私が明日自由の身になったとしても、**あなた**なしでは生きる価値はありません。そんな贈り物を受け取る気はないのです」

彼女は、こちらには気づかない私たちの親類縁者の影たちの近く、彼らの幸福そうな話と笑い声が聞こえる範囲内の、私のそばの芝生に腰を下ろし、膝の上で手を組んだ。

突然、ミムジーがゴーゴーにこう言っているのが二人に聞こえてきた――

「おお、すごく仲良しなのね、シャルマン王子と妖精タラパタポウムは！」

私たちはお互いを見て、実際に声を出して笑ってしまった。それから公爵夫人が言った――

「世界開闢以来、このような会合のためのこのようなmise en scène［演出］が、存在したことがあったでしょうか、イベットスンさん？　考えてみてください！　想像してください！　**私が**これ全部、手配したんです。みんなが一緒にいた日を選んだんですよ。アメリカで言われているように、**私は**ボスなんです、この特別な夢の」

そして彼女はもう一度、涙ながらに笑った。目を閉じ、彼女をとても愛らしくする魅力的なさざ波のような笑い方で。

「かつて」私は言った――「世界開闢以来、私が今感じているような恍惚感があった

でしょうか？　今後、死以外の何が私にあり得るというのでしょう――十分生計が立てられるような、十分報酬が支払われるようなものがありますか？　来たれ、甘き死よ！」

「まだ考えたことがないのですね、イベットスンさん――自分にどんな人生が待ち受けているのかに、あなたは気づいていないのです、もし――もしあなたが私への愛情について言ってくださったことが全部本当だとしたら。おお、私は一人の少年としてのあなた以上のことはほとんど知りませんし、あなたが人生の残りを悲惨な監禁と無益な単純労働で過ごさなければならないなんて、恐ろしくて考えられません。でもね、その状況には**もう一つの**側面があるのです。

では、あなたの古い友人の話を聞いてください――哀れで小さなミムジーの告白を。できるだけかいつまんでお話ししましょう。

あなたは、初めて私と会ったときのことを覚えていますか？　二十年前、大通りの門で、病弱で、かわいくもなくて、悲しい小さな女の子と会ったときのことを。

フランソワおじさんが鳥を殺していました――喉を折り畳みナイフで切っていたのです――そのかわいそうな生き物は、側溝に血を流し込みながら、しっかりと握られた彼の手の中で半狂乱でもがいていました。男の子たちのグループが大喜びで見つめ

ていて、その間じゅうフランソワおじさんは、鳥には全然関心のなさそうな司祭様と世間話をしていました。私はかわいそうなのと恐ろしさとで気を失いかけていました。そこに突然、向かいの学校からあなたが、アルフレッドとチャーリーのプランケット兄弟と一緒に出てきました。あなたはそのすべてを見て、気高い発作的激怒に駆られ、フランソワおじさんを『聖なる暗殺者の豚』と呼んだのです――ご存じのように、フランスでは非常に失礼な呼び方です――そして手が届く所まで近づいて彼を殴りました。

　忘れていましたか？　ああ、**私は**忘れませんでした！　たぶん有効な行為ではなかったでしょうし、確かに遅すぎて鳥を救うことにはなりませんでした。そのうえ、フランソワおじさんはあなたを殴り返して、鳥の血があなたの頬に残りました。それは洗礼でした！　あなたは直ちにその場で私の英雄になりました――私の光の天使になったのです。あちらにいるゴーゴーを見てください。彼は十分に美しいでしょう？　あれは**あなた**だったのですよ、イベットスンさん。

　司祭様の方は、人が馬を鞭打つと正気を失うくせに、人にお金を払ってお互いを死ぬまで殴り合わせる『ces Anglais［あのイギリス人ども］』にまつわる話をしました。本当に覚えていないのですか？　おお、**私の**記憶力って！

それと、私たちが発明して、いつもすごく流暢に話していたあの小さな言語！ Don't you *rappel* it to yourself?［**思い出し**ませんか？］Ne le *récollectes* tu pas?［**思い出し**ませんか？］当時はこんな言い方で言ってましたよね。あのときは、私たち、**おまえ・俺呼び**が普通でしたしね。

そう、とにかくあなたは、私たちがしょっちゅう一緒にいた幸福な五年間がどんなふうだったかを思い出す必要があるのです。どんなふうに、あなたが私のために絵を描いて、本を読んで、私と遊んでくれたか、良かれ悪しかれあらゆることで私を支えてくれたか、私がくたびれたときにおんぶしてくれたか。あなたが描いてくれたもの――私、それを全部持っているんですよ。それに、おお！　あなたは時々すごく面白かった！　どんなにママと少佐殿を笑わせていたことか！　もう一度、すぐにゴーゴーを見てください。彼が今やっていることを忘れてしまいましたか？　私は忘れていません……。彼は『家庭博物館』と『ペニー・マガジン』を取り替えたところで、ホガースの絵『怠慢な、そして勤勉な徒弟』のシリーズをミムジーに説明していて、両人とも、その二人のうちでは怠慢な徒弟の方がずっと好ましいということで意見が一致していますね！

ミムジーは、親指を口にくわえて、そうとう受け身に見えるでしょう？　ゴーゴー

への感謝の念と愛情で小さな胸がいっぱいになりすぎていて、口が利けないのです。親指を吸うことしかできないわけですね。かわいそうで、病弱で、見苦しい子供！彼女はゴーゴーの奴隷になりたいんです――ゴーゴーのためなら死んでもいいと。それに、母もゴーゴーを熱愛しています。彼女は、とてもかわいい息子がいることで、親愛なるパスキエ夫人にほとんど嫉妬していました。今からほんの一分後、最後のカールペーパーを切り出したら、ずっと前に死んだかわいそうなママは、ゴーゴーを呼んで『アイリッシュ・ハグ』をして、一週間彼を幸せな気分にします。一分間待って、見ていてください。**ほら！**　言ったとおりでしょう？

まあでも、全部、もう終わったことです。パスキエ夫人はどこかへ行って戻ってきませんでしたし、ゴーゴーもそうでした。パスキエご夫妻は亡くなって、愛するママはコレラのため一週間で逝ってしまいました。悲嘆に暮れたかわいそうなミムジーは、同じくらい心に傷を負った父親によって、サンクトペテルブルク、ワルシャワ、ライプツィヒ、ヴェネチアなどヨーロッパじゅうを連れ回されました。

プロのピアニストになることが彼女と父親の望みで、彼女はほぼすべての首都で、ヨーロッパのほぼすべての大家のもとで、何年も懸命に勉強し、成功が予測できるまでになりました。

こういうわけで、彼女はある場所から別の場所へとさまよい歩きながら、妙齢女性になりました――それはもうかわいがられ、甘やかされ、騒がれるような妙齢女性に、ですよ、イベットスンさん、自分で言うのも何ですが。それで、さまざまな種類の人間の、いろんな国の、たくさんの求婚者がいたのです。

でも、きれいでまっすぐな鼻と『aux enfants d'Edouard［エドワード*の子供たち］』みたいな髪の、かわいい小さな白いシルクハットとイートン校の上着を着た、英雄的で天使のようなゴーゴーは、美しく勇敢で善良なあらゆるものの具現化として、いつだって彼女の記憶の中に、その心のいちばん深い場所に安置されていたのです。ああ、それなのに！　それまでの間に、あのゴーゴーはどうなったのでしょう？　ああ、彼のことは全然耳にしませんでした――彼は死んだのだわ！

それで、この脚の長い、心の優しい、成熟した十九歳の若いミムジーは、ヴィーンでかなり機知に富んだ、洗練されたイギリスの大使館員――ハーコートという名の――に惹かれました。彼も彼女を深く愛しているように見え、彼女を妻にと望みました。

彼は裕福ではありませんでしたが、セラスキア医師がかなり彼を気に入って信頼していたため、この若いカップルの結婚を可能にするために必要となるものについて、その自らの所有権をほぼすべて放棄してしまいました――結果、二人は結婚しました。

そして、一年間は彼らが非常に幸福で、この縁と相手に満足していたことは真実であると認めなければなりません。

その後、彼ら双方に大きな不幸が降りかかりました。ハーコート氏の家族の死が、ほとんど予想もできないような死に方で四、五回も連続し、そのため彼はまずハーコート卿となり、次にタワーズ公爵となりました。その後はね、イベットスンさん、私には平安も幸福も一時間だってなかったんです。

まず最初に、私に息子が生まれました――肢体不自由の哀れな子が！　生まれたときから奇形児だったのです。そして、成長するにつれ、彼が知恵遅れで生まれてきたこともすぐにはっきりしました。

そのときから、私の不幸な夫は完全に人が変わってしまいました。お酒を飲み、賭博をし、もっと悪いこともしていました。私たちが他人として同居しているだけになり、公の場や世間を前にしたときにしかお互い話さなくなるまで……」

「ああ」私は言った。「あなたは変わらず素晴らしい女性だった――イギリスの公爵夫人よ！」

私は、その獣のような公爵との幸福な十二か月を考えることに耐えられなかった！

＊『エドワードの子供たち』……ドラローシュの絵画（一八三〇年）を指すか？

私は、酒も飲まず、女性も知らず、潔癖で――ああ！　殺人を除けば――、そして死刑囚なのだ！

「おお、イベットスンさん、**私**のことを勘違いしてはいけません！　私は生まれつき公爵夫人になるよう予定された人間ではないのですよ――特にイギリスの公爵夫人には。もし公爵や公爵夫人が必要なら、イギリスは最良であると言えなくもないですが――もちろん、私が言う公爵や公爵夫人とは、自らを『社会』と呼んでいるあのイギリスの上流階級全体を指しています――まるで話す価値のあることがその『社会』以外には何もないかのような。ほとんど天使に近いような人もいるのですが、私のような部外者には向かない人々です。延々と続く狐狩り、鉄砲撃ち、釣り、競馬――食べて、飲んで、殺して、愛し合って――果てしない王室の噂話とおしゃべり――王子――女王――女王は誰が好きで何が好きか、誰が好きじゃなくて何が好きじゃないか！――無気力なイギリスの党派政治――教会――主任司祭、主教、大主教、それに彼らの妻と娘がいるというのに、信念のない教会――社会的地位と位階についての、彼らの愚かな、真面目くさった感覚！　終わりのない世間話にディナーに夜会と、一年じゅうお互い同じ顔ぶればかり！　ああ！　そのような生活を送り、それに満足するためには、若い頃に捕らえられ、早くから馬具を付けられる必要があるのです！　そして私

は、父と一緒にいた**ような**男女と会い、知り合うようになりました。彼らは知るに値する人々**でした**！

ロンドンやその他の場所には、もう一つの社会があります――知性と教養と勤勉の、フリーメーソン――la haute bohême du talent［才能ある高尚なボヘミアン］――です。その男女の名前は世界中でよく知られており、また知られるべきです。彼らの多くは、国内でも国外でも私の良き友人です。父と母にとって十分に良い社会でしたが、私にとってもかなり満足のいくものです。

私は共和主義者なんですよ、イベットスンさん――コスモポリタンで――生まれながらのボヘミアンなのです！

'Mon grand père était rossignol;
Ma grand mère était hirondelle!'

『祖*父はナイチンゲールで、
祖母は燕だった！』

＊祖父はナイチンゲールで……ギュスターヴ・マチューの詩『ボヘミアン』より。

あちらの、私の愛する人たちを見てください――あなたの愛する人たちを見てください！　何という文無しでしょう。お金持ちになるまでのつもりですが、決してそうはならないことを私たちは知っています！　父たちは、アイディアを求めて五感をずっと酷使し続けています！　母たちは、お金の節約と収支のやりくりのためにそうしています！……そう、イベットスンさん、あなたは私よりもrossignol［ナイチンゲール］に近い。お父様の声を覚えていますか？　私はいつまでも忘れないでしょう！　彼はつい前の晩、私に歌ってくれたんです。あなたについての不安に苦しんでいる最中に、私はその歌声に惑わされて窓の外で耳を傾けました。彼はロッシーニの『Cujus Animam［彼女の魂を］』*を歌いました。彼はナイチンゲール**だったのです**。それが彼の天職でした。せめてそのことをご自分で理解なさっていれば。ですから、あなたは私のボヘミアンの兄弟なのです。それが**あなたの天職**です！……ああ、**私の**天職は！　それはね、忙しい頭脳労働者――科学者でも――陰謀者でも――作家でも――画家でも――建築家でも、お好きなものでかまいませんが、その妻になることなのです。彼の周囲に垣を巡らし、小さな心配事や悩みの元、人生の些細な苛立ちの種などのすべてから彼を保護すること。私はpar excellence［とりわけ］実務向きの女なんです――

"ÉCHOS DU TEMPS PASSÉ"「［過ぎし日の谺］」

＊『彼女の魂を』……『スターバト・マーテル』の二曲目。テノール独唱である。

管理者などですね。彼は、自分のアイディアを追い求めた後に帰るべき、温かくてよく整頓された小さな巣を持つことになるでしょう。

そう、私は、自分のことを生きている女性の中でいちばん不幸だと思い、それからひどく苦しんでいる小さな息子への愛情に包まれました。彼を胸に抱き締めたとき、彼を温めて、感情と知性を吹き込む催眠術をかけようとしましたが、無駄でした。ゴーゴーが私の心の中に戻ってきて、私はずっと『おお、もしゴーゴーのような息子がいたら、私はどんなに幸せな女性になったことだろう!』と考えていました。そして、彼とあまりに早く死に別れたことで、パスキエ夫人に同情しました。本当の夢を見始めたばかりの頃で、ゴーゴーとその優しい母上をもう一度見たからです。

その後のある晩――決して忘れられない一夜になりました――、私はレディ・クレイの演奏会に行き、あなたが隅に一人で立っているのを見かけました。私は、心臓が飛び出しそうになりながら思いました。『まあ、あれはゴーゴーに違いない。黒くなって、フランス人みたいな顎ひげと口ひげを蓄えて!』でも、ああ、あなたはミスター・イベットスンでしかなく、レディ・クレイの建築家で、彼女が『それまで見た中でいちばんハンサムだったから!』という理由で自宅に呼んだのだということが分かりました。

笑うことはありません。あなたはとてもすてきに見えますよ、それは保証します！　そう、イベットスンさん、あなたはゴーゴーではなかったけれど、急にものすごく興味が湧いたので、あなたのことが忘れられなくなりました――あなたは私の心から決して離れませんでした。私はあなたの相談役となり、助言し、手を取ってあげるような、姉になりたかったのです。この世界とその経験においては、あなたよりすでに年長であると感じたからです。私はさらに二十歳年を取り、あなたを息子に持ちたかった。私は自分が**何を**望んでいるかを知らなかったのです！　あの上流階級のあらゆる俗物たちの中にあって、あなたはとても孤独で、若々しくて、世界の汚れに染まらず、なおかつとても大きく、強く、がっしりして、無敵に見えました――おお、とても強そうに！　そのうえ、あなたはあんな誠実で快く騎士道的な敬愛と共感で私を見て、――ええまあ、それについては私は話せませんが――ですから、あなたは、ゴーゴーがなったかもしれない人に**とても**似ていたのです！　おお、あなたは一目で、誰もが望むような温かく献身的な、私の友人となったのです！

同時に、あなたは私にひどく人目を気にする恥ずかしがり屋だと感じさせたので、紹介を強いてお願いするようなことはしませんでした――何を恥ずかしがっているのか、私にはよく分かりませんが。

親愛なるジュリア・グリジが『Sedut' al Pie d' un' Salice［柳*の木の下に座って］』を歌いましたが、それ以来この曲は、私の心の中であなたのイメージとずっと関連付けられていて、これからも変わらずそうでしょう。あなたの親愛なるお母様がハープでよく演奏していました。覚えていますか？

それから、あなたも私も覚えているあの異様な夢が現れました。不思議だと思い**ませんでしたか？** ご存じのように、親愛なる父は脳の奇妙な秘密を知っていました――睡眠中に、かつて見たり聞いたりした過去の出来事や人や場所を――覚えていないような物事さえ――呼び起こす方法です。彼はそれを『本当の夢見』と呼んで、長い練習によってそれを行う技術を完成したと私に言いました。幸福な青年時代と子供時代、それに愛する若い妻と過ごしたごく短い数年間に、眠っている間に何度も行くことは、彼の悩み多き人生の一つの慰めだったのです。父は、亡くなる前、私があまりにも不幸になっていたため、私にとっての人生はもういかなる喜びへの希望も持てそうにないのを見て取ると、自分の極めて単純な秘密を私に教えてくれました。

こうして私は、私がかつて住んでいたあらゆる場所を、眠っている間に再訪問してきました。特にここ、私が小さな女の子だった頃に**あなた**を初めて知った、最愛の場所を！

私たちが共通の夢で再び会ったあの夜、私はサンドー校から première communion［初聖体］に行こうとしている少年たちを見ていました。数時間前、目が覚めていたときにあなたを見かけたせいで、あなたのことをすごくたくさん考えながら、『テト・ノワール』の窓から外を見ていたのです。そのとき、あなたが突然現れたのですが、あなたは見せかけのひどい窮地に陥っていて、酔っぱらった人のようにふらふらと歩いていました。私の視界が刑務所の影でかき乱されました――まあ！　何てこと！――そして、二人の小さな看守が鍵をチャリチャリ鳴らしながら、あなたを閉じ込めようとしていたのです。

あれほどの短時間のうちにあなたをもう一度見たときの私の感動はすごいものでしたから、私はもう少しで目を覚ましそうになりました。でも、私はあなたを架空の恐怖から救い、あなたの手を取りました。あとは全部覚えていますよね。

私はあなたが一体なぜ私の夢の中にいるのか、理解できませんでした。私はほとんどいつも本当の夢を見ていたからです――つまり、自分の人生で**あった**ことを見てい

＊『**柳の木の下に座って**』……三二四ページに『柳の歌』として出ていたもの。ピーターの母がハープで演奏していたとのことなので、ロッシーニの『オテロ』第三幕のデスデモーナのアリアで間違いなかろう。このアリアは、始終ハープが中心となって伴奏する。

たのであって――**ありそうな**ことを見ていたわけではないということです。私は、あなたの手の硬さを説明することも、私がそれを取ったときにあなたが消えていかず、夢が曇らなかった理由を理解することもできませんでした。それは、私が起きている間と眠っている間の両方の生活にわたって何時間も悩まされた、この上なく厄介な謎でした。その後、クレイ邸であなたと会う機会があって、その謎の一部は説明できました。結局、あなたが私の古いお友だちのゴーゴーだったからです。それでも、二人の人間が、今こうして会っているように、一つの同じ夢の中で会うなんて、依然として謎のまま、恐るべき謎のままでした――お互いの脳があんなに精密に噛み合うなんて。私たち二人の間にあるのは、イベットスンさん、すでにあのような記憶で繋がっている二人の間にあるのは、何てすごい繋がりなんでしょう！

クレイ邸でお会いした後、起きているときであれ眠っているときであれ、あなたと再び会うべきではないと感じました。何しろ、あなたがゴーゴーだったという発見は、あなたがただの他人だったときから長いこと生じていた執心と相まって、私の精神にひどい混乱を引き起こしたのですからね――その混乱ときたら――それについては、あなたにも自分で試したり想像したりしてほしいところです。

クレイ邸での発覚の前でさえ、私は、私の夢の中であなたがこの場所に来ることに

しばしば気づき、注意深くあなたを避けてきました……あなた自身の夢の中でもあなたがこの場所に来ているとは、それこそ夢にも思わずに！　あの上の小さな屋根窓から、私はあなたが公園や大通りを、見たところ私を探してさまよっているのをよく見ていて、あなたがなぜ、どのようにやって来るのかを疑問に思っていました。あなたから隠れるため、あなたは私を屋根裏や使用人の寝室に追いやったわけです。それは完全にかくれんぼでした――私たちが*カシュカシュと呼んでいた、あの遊びです。

でも、私たちがクレイ邸で会った後、私はもうカシュカシュはやめるべきだと感じました。私はとにかくここに来ることを避けました。あなたは私を完全に追い払ったのです。

で、イベットスンさんの恐ろしい訃いのニュースが突然世間に現れたときに、私が感じたことを想像してみてください。私は取り乱しました！　毎晩ここに来ました。あらゆる場所であなたを探しました――公園、ブローニュの森、オートゥイユの池、サン＝クルー――思いつく場所全部です！　それで今、やっとあなたが来てくれた――やっとです！

しっ！　まだ話さないで！　すぐ終わりますから！

＊カシュカシュ……cache-cache は、フランス語で「かくれんぼ」の意。

六か月前、私はかわいそうな幼い息子を喪いました。私があの子を愛した量を、あの子から返してもらう望みはありません。二週間以内に、私は軽蔑すべき夫から合法的に離れることになります――天涯孤独の身になるのです！　その後は、イベットスンさん――おお、その後はね、この子あるいはこの女がかつて持った中でも最愛の友よ――、私が覚醒時の生活から捻出できる全時間が、私たち二人が生きている限り、そして二人が二十四時間中同じ時間帯に眠る限り、今後はあなたに捧げられることになるでしょう。私のただ一つの目的と努力は、あなたの楽しく価値ある若い人生の残骸を埋め合わせることになるでしょう。『石の壁*でも刑務所にならず、鉄の棒でも牢屋にならない！』（そして、ここで彼女は泣き笑いをしたため、目を閉じることで涙を絞り出し、私は『おお、私はそれを飲んでもいい！』と思った）

今はお別れします。私は弱くて愛情のある女です。あまり自己批判せずにできるようになるまでは、あなたのそばに留まるべきではないと思います。

実際私は、喜びを完全に使い果たした状態から、間もなく目覚めるだろうと感じます。おお、喜びについて言うなら、私は利己的で嫉妬深い恥知らずなのです！

あなたに対して私がなりたいものになることができるほかの女性がいないことは、喜ばずにはいられません。ほかの女性があなたに**近づく**ことは、決してできないので

すから！　私はあなたの専制君主であり、奴隷なのです――あなたの災難は、あなたを永遠に私のものにしたのです。でも、私の人生のすべて――すべて――すべて――が、あなたにあなたの人生を忘れさせるよう努めることに費やされ、私はそれに成功すると思います」

「おお、そんなにひどく急がないでください！」私は叫んだ。「**私は**本当の夢を見ているんですか？　目が覚めたとき、それを自分に証明するものが何かありますか？　私は人類の中でいちばん救いがたい最低の人間なのか、それとも人生にこれ以上不幸な瞬間はもう訪れないのか。どうすれば**知る**ことができますか？」

「聞いてください。私たちがよく『パルワ・セド・アプタ、le petit pavilion［小さな家］』と呼んでいた家を覚えていますか？　私がここにいるとき、それはまだ私の家です。あなたがそうしたければ、しかるべきときが来たら、それはあなたのものになるでしょう。そこには、あなたが興味を引かれるものがたくさん見つかりますよ。そうですね、明日の早い時刻に、あなたは独房で、中に紙片の入った私からの封筒を受け取ることになるでしょう。菫も一緒に入っていて、紙には菫色のインクで書かれた『パルワ・セド・アプタで――à bientôt［また近いうちに］』という言葉が書いてあり

＊石の壁でも……リチャード・ラブレースの詩『アルシアへ、刑務所から』より。

ます。それで納得できますか？」

「おお、はい、できます！」

「いいですね。それでは、あなたの手を私にください、最愛、最良の人――両手とも！私はまたすぐにここに来るつもりです。この林檎の木のそばに。私は時間を指折り数えます。さようなら！」そして彼女は去り、私は目を覚ました。

私は自分の独房の、ガス灯で照らされた暗闇を認識した。夜明けの直前だった。看守の一人が、何か欲しいものはあるかと礼儀正しく尋ね、水を一杯くれた。

静かに彼に感謝してから、自分の身に起こったばかりのことを、言い表せないような驚きと法悦とともに思い起こした。

そうだ、あれは**夢**では**なかった**――私はそれを確信した――いかなる点においても夢ではない。その超越的で言語に絶した恍惚感を除けば、あれに夢と言えそうなところは何もなかった。

あの最愛の声のあらゆる抑揚。そこには、以前は気づかなかったほとんど知覚できないほどの外国語のアクセントが含まれていた。あの生き生きとしたあらゆる身振り。それは、彼女の父母両方をそれとなく思い起こさせた。彼女の黒いドレスには灰色の

装飾があり、黒と灰色の帽子をかぶっていた。彼女の周囲には白檀の香り――このすべてが、もし彼女が実在して肉体を持ち私の枕元にいたとしても、それよりもはっきり生き生きと私に印象づけられたことだろう。彼女の声音がまだ私の耳に響いている。私の目は彼女でいっぱいになった。あるときは、清らかで彫刻されたように整った横顔。あるときは、その灰色の目（時には優しく真面目で涙に濡れ、時には笑いのために半分閉じられた）が私の目に固定された正面顔。しなやかで美しい彼女の胴は前方にカーブし、膝を抱え

「私の目は彼女でいっぱいになった」

て座っていた。弓なりで細く、滑らかでまっすぐな彼女の足は、かなり高級な靴を履き、時々彼女の話に合わせて拍子を取っているように思われた……。

そのうえ、手に触れたときの、あの生命を注入するような奇妙な感覚！　おお、あれは**夢ではなかった！**　あれが何であったのか、私に言うことはできないが……。

私は寝返りを打ち、言いようのない幸福を感じながら、再び眠りに落ちた――夢のない眠りは、目覚めて服を着るよう言われるまで続いた。

いくばくかの朝食が運ばれ、**それと一緒に開封された封筒も届けられた。その中身は数輪の菫、白檀の香りの付いた紙片で、その紙には菫色のインクでこんな言葉が書かれていた――**

"Parva sed Apta — à bientôt!
Tarapatapoum."

『パルワ・セド・アプタで――また近いうちに！
タラパタポウム。』

私は、判決から減刑までの間に経過した時間は省略するつもりである。善良な教誨師の援助と訓戒。リントット夫妻の優しさと感動的な別れ。彼らもまた、私がイベットスンの息子であると信じ込んでいた（私は真実を知らせた）。旧友ディーン夫人の面会……彼女の異様な情熱での感謝と称賛。

もし正確に記憶され、巧みに伝えられるなら、これ全部が十分に興味深いものになることは疑いないと思う。ところが、これは皆、あまりにも夢のようなものでありすぎ――誰もが見る夢の方で――**私**のあの夢ではない――、あまりにももろく薄弱なので、永続的な記憶に残したり、あまり重要視したりすることができなかったのだ。

やがて私は刑務所に移され――、世間に別れを告げ、快く気軽に新しい外面的生活の状態に適応した。

刑務所の日課は、脳を非常に自由に、何事にも支配されない状態のままにした。健康的な労働、澄んだ空気、質素で体によさそうな食事は、私にとっては快適なものだった――毎夜の騒がしい感情の後の、日中の待ち望んでいた精神的休息である。

というのは、私はすぐにパッシーに戻ったからである。私はもちろんそこで睡眠中のすべての時間を費やし、古い林檎の木からあまり離れず、その変化をすっかり経験した。枝に葉のない状態から華奢（きゃしゃ）な新芽と花が付くまで、花から果実が熟すまで、果

実から黄色い葉が落ちるまで、それからまた枝が裸になるまで。このすべてがわずか数回の穏やかな夜に起こったのだが、そちらの方が昼間の生活のようなものだった。私は今ではもう、フランスの林檎の木とそれに付く毛虫の習性に通じていると自任しているのだ！

そして、私が愛する人々、決して飽きることのない人々が皆、その周囲にいた――一人を除いて全員が。**絶対的存在**である人以外は！

ついに彼女が到着した。庭のドアが押され、鈴が鳴ると、彼女が晴れやかに、意気揚々と、素早く芝生を横切り、両腕を大きく広げた。そこには私たちの小さな世界が周りにあり――私たちがかつて愛し大切にした人たちが皆いるけれども、その人たちにはまったく見られることも聞かれることもない――、母とセラスキア夫人が亡くなって以来、私は人生で初めて女性を抱き締め、彼女の唇が私のそれに押し付けられた。

十五、十六、十七年前によくしたように、私たちは芝生をぐるぐる歩きながら話をした。言いたいことはたくさんあった。「シャルマン王子」と「妖精タラパタポウム」が「とてもかわいらしく一緒に」なった――ついに！

時間が急に加速した――あまりにも速すぎる。私は言った――

「君は僕に、君の家を見るべきだと言ったね――『パルワ・セド・アプタ』を――そ

こに興味を引かれるものがたくさん見つかるだろうと」……

彼女は少し顔を赤らめ、微笑んで言った――

「**あんまり**期待しすぎないでね」私たちはすぐに、自分たちが大通りをそちらの方へ向かっているのに気づいた。子供の頃、私たちはよくこんなふうに歩き、そしてもう一度――この一度は記憶すべきものだ――それをしたのである。

黄金の銘のある小さな

「ついに彼女が到着した」

白い家が建っていた。少年時代に千回も見たのと同じように――それ以来百回見たのと同じように。

柔らかく豊かな日ざしの中で、それは何とかわいらしく、小さく見えたことか！ 私たちは石の perron［外階段］を上り、ドアを開けて入った。心臓が激しく打った。見ることができた範囲では、すべてが以前と同じであった。セラスキア医師がシラーを読みながら窓の所の椅子に座っていたが、私たちを気に留めることはなかった。彼の髪がそよ風で動いた。頭上では、部屋が掃除され、ベッドが整えられている音が聞こえていた。

私は彼女の後について小さな物置部屋に入った。以前は入った覚えがない場所である。そこはがらくたのようなものでいっぱいだった。

「なぜここに僕を連れてきたの？」私は尋ねた。

彼女は笑って言った――

「反対側の壁のドアを開けてみて」

そこにドアはなく、私はそう言った。

そのとき、彼女は私の手を取った。すると、見よ！ ドアが**ある**ではないか！ 彼女はそれを押し、私たちは以前はあり得なかった別のアパートの特別室に入った。そ

のための空間などなかったのに――あり得なかったのに――パッシーのどこにも！

「こちらへ」彼女はそう言うと、すぐに笑い、赤面した。そわそわと興奮して、恥ずかしがっているらしかったからである――

「覚えてる？――

『そしてヌーハはトーキルの手を取って導いた、

すると彼女の燃えるたいまつが丸天井に沿って揺れた』

――緑色のモロッコ革のバイロンの本から、あなたが描いてく

「そしてヌーハはトーキルの手を取って導いた」

れた『島』の小さな模写を覚えてる？　それがここにあるの、このきれいなキャビネットのいちばん上の引き出しに。ここにはかつてあなたが私のために描いてくれたものが全部ある――無彩色のも色付きのも――すべてに私が書き入れた日付や説明などが付いている――『l'album de la fee Tarapatapoum［妖精タラパタポウムのアルバム］』ね。これはただの複製。本物はハンプシャーの自宅にあるわ。

キャビネットも複製――きれいじゃない？――ロシア皇帝の冬の宮殿から頂いたものよ。ここにあるのは、程度の差はあれ、全部が複製。見て、これは小さな応接間で――こんなに何もかもが完璧なのを見たことある？――有名なシュヴェーニュ王女のsalle à manger［食堂］なの。時々、フランス・バターと『カソナード』を添えたイギリスの家庭用パンのスライスを食べるとき以外は、使ってはいないのだけれど。向こうにいる小さなミムジーは、ゴーゴーが彼女のそれを運んでくると、時々それをしたの。そのままだとミムジーの大きく開いた口から出るよだれが見えちゃうから、それで彼女は持っていってそうしなければならなかったのね。スライスはいかが？

ほら、クロスが広げられていて、deux couverts［テーブルセットが二組］あるでしょう。ド・ロスチャイルド氏から贈られた有名なシャンパンのボトルがあって、そこからのものがもっとたくさんある。花はチャッツワース邸からのもので、これは**あなた**

のためのロブスター・サラダ。パパはロブスター・サラダが得意で、私に教えてくれたわ。二週間前に自分で作ったら、ご覧のとおり、作ったばかりみたいに新鮮でおいしそうなままだし、花は少しも色褪せない。

こっちにはタバコとパイプと葉巻ね。良いものならいいのだけれど。私は自分では吸わないので。

ここの家具はみんな、珍しくてきれいだと思わない？　私、ヨーロッパのあらゆる宮殿からその最高級品を盗んできたの。でも、その持ち主たちは一ペニーも損していないわ。上の階でもぜひ見てほしい。

あの絵を見て――ラファエロにティツィアーノにベラスケスね。あのピアノも見て――私、ライプツィヒで、それをリストが何度も弾いているのを聴いたのよ！

これが私の図書室。私がこれまでに読んだ本が全部揃ってる。素晴らしいと思った装丁の本もみんなある。あまり頻繁には読まないのだけれど、ほこりは丁寧に払っているの。本物っぽくするために、普通のやり方でほこりが落ちるようにしてあるのよ。外面的生活のそれを思い出させるためでもある。そういう生活って、離れられるのならかなりうれしいものでしょうけれど。ここでは何もかも、すごく真剣に受け止める必要があって、自分自身に多少面倒をかけるようにしなければいけないの。見て、こ

こに父の顕微鏡がある。レンズの下には敷地内で私に捕まった小さな蜘蛛がいて、まだ生きている。残酷だと思うでしょう？　でも、それは私たちの脳内にしか存在しないのよ。

私が着ているドレスを見て――触ってみて。すべての細部がどんなにうまく作られているか。そして、あなたも無意識に同じことをした。それはあの朝クレイ邸のトネリコの木の下であなたが着ていたスーツよね――私が今まで見た中ではいちばんいいスーツだわ。ここ、あなたの袖の上に、能う限り本物そっくりのインクの染みがあるわね（お見事！）。それに、このボタンは取れかかっている――完璧に現実どおり。私、夢の針と夢の糸と夢の指ぬきで、それを縫うつもりよ。

この小さなドアは、ヨーロッパのあらゆる美術館に繋がっているの。このすべてを自分で組み上げて整理するのに、ずいぶん時間がかかった――夜の丸一週間分ね。きれいなカタログを持ってそこを歩くのはすごく楽しいわ。外は土砂降りにしてね。

このカーテンを通るとオペラ・ボックスよ――これまでに私が入ったうちでいちばん快適なもの。演劇だけでなく、オラトリオ、コンサート、科学の講義にも適している。あなたはそこから、私が今までに見た全上演演目を見ることになる。六か国語でね。私の手を握っていれば、それを全部理解できるでしょう。親愛なるジュリア・グ

リジが『柳の歌』を何度も歌って、あなたは拍手を聞く。ああ、何てすごい拍手！

この小さな部屋に入って――私のお気に入りなの。**この**窓から出て、その踏み段を下りると、あなたや私が今までに行ったことがあるどんな場所にも歩いて行ったり馬車で行ったりできる。それ以外の場所にもね。遠い場所はないし、私たちは手を繋いで行かなければならないだけ。私の厩舎と馬車置き場がどこにあるのか、まだ知らないの。見つけるのを必ず手伝ってね。とはいえ、これまでのところは、私がドライブに行きたいと思うとき、この踏み段の下に馬車がいなかったことはないし、汽艇にもゴンドラにも行くべきすてきな場所にも事欠かなかったわ。

この窓から、このソファから、私たちは好きなものを何でも、座ったまま見つめることができる。あれは何でしょう？　あなたも今気づいたように、猛烈に荒れ狂う海がある。見える範囲に船はいないわね。逆巻いて砕ける波音が聞こえるかしら？　アホウドリが見える？　私、キーツの『ナイチンゲール頌歌（しょうか）』を読んでいたの。そうしたら、

『荒涼たる妖精の国にある、危険な海の』

泡に開いた格子窓がある、という着想にすごく魅了されたわ。私にもそんな格子窓があればいいのに、と思った。私、自分の内なる意識から、というか、ええと、私が航海したことのある海から、その海をその海を導き出そうとしたの。気に入ってくれた？　二週間前にやったことで、ほぼそのときからずっと波は逆巻いている。何という轟（とどろ）きでしょう！　風の音を聞いて！　私は『妖精の国』を管理しきれなかったわ。海と陸に一つずつ格子窓が必要だと思う。ぜひ手伝ってほしいの。ところで、今夜は何をしたいかしら？――ヨセミテ渓谷？　冬のネフスキー大通りで橇（そり）に乗る？　リアルト橋？　日没後のナポリ湾でヴェスヴィオ山の噴火を見る？……」

「――おお、メアリー――ミムジー――、僕がヴェスヴィオ山や日没やナポリ湾に関心が**ある**とでも？……**今この瞬間に？**……。本音を言えば、ヴェスヴィオ山にはあるんだけれどね！」

・　・　・　・　・　・

こうして、私たち二人のための二十五年間が始まった。その間、私たちは互いに仲間として、二十四時間中八時間ないし九時間を過ごした――たまにある、病気やその

他の原因によって私たちのどちらかが正常な時間に眠れないような場合を除いては。

メアリー！　メアリー！

彼女が生きていた間、私は彼女を偶像視した。今は彼女の思い出を偶像視している。彼女のおかげで、私にとってあらゆる女性が神聖なものになった。最下層の者、ひどく堕落した者、神に見捨てられた者でさえ。彼女たちはいつも、助けてくれる友人を**彼女の**中に認めていた。

自分にこんなにも近い者に対して、どうすればふさわしい敬意を表することができるのだろう？――かつて男性に近くあり得たいかなる女性よりも、さらに近い女性に対して。

私は、自分の心が分かるのと同じくらい、彼女の心が分かる！　私たちほどには、二人の人間の魂が互いに浸透し合ったことはないだろうし、そういう先例があるなら聞いてみたかったところである。幼少期から死までの間に彼女が抱いたあらゆる考えが明らかになった――そのすべてが私の考えだったのだ！　私たちが生きたように生きることは、避けられないことだったのである。指を触れるだけで、奇妙な回路を確立し、私のでも彼女のでも、過去と現在の共通の意識を覚醒させるには十分だった。

そして、おお、ある幸運な機会が、彼女が黙認できないと思ったであろうものから

私を、私のような殺人犯の囚人を守ってくれたことに、私はどんなに感謝していることか。

私は、内気さと貧しさ、見苦しさと社交的虚弱さが統合された人間だ。だが、私よりも優れ、私よりも才能に恵まれた非常に多くの男性は、あまりにも多くの致命的な落とし穴に陥ることがあり、そうならないためには自制や自尊心が必要となる。私の場合、生来の弱々しさが、そうした落とし穴に陥らないための自制や自尊心と同じ働きをした、とも考えられるわけだが、私はそのようには考えないようにしている。

私は、彼女の並外れた愛情、幼年期に受けた持続的な印象の偶然の結果が、何らかのオカルト的、神秘的方法で、私の知らないうちに生涯を通じて私を追跡し、たとえ彼女が寛大すぎる目を持っていたにせよ、私を無価値なものにする考えや行為から私を遠ざけていたのだ、と考えるようにしている。

ひょっとして、何年も前に私が大通りの門で別れを告げたとき、彼女の美しい母親の別れのキスと祝福、それに私に流してくれた優しい涙には、防腐の魔力がかかっていたのだろうか？　メアリー！　私は、彼女が病弱でつらい思いをしていた幼年期から少女時代まで彼女の姿を追った――そして、成熟し切っていない優美な痩せ方をした少女時代から、素晴らしく光彩を放つ者となり、自分がそうなった世界から引退し

た日までも。少女から女性への時代は、ヨーロッパの全宮廷を通過する勝利の行進のように思われた――私が夢でも見たことがないような場面だった――どんな王女でものぼせ上がらせるようなお世辞と奪い合い！　が、彼女は、現役の科学者兼医者の娘で――ヴァイオリン弾きの孫娘にすぎなかった。

それでも、オーストリア宮廷の礼儀作法さえ、庶民であるセラスキア医師の子供のためにと省略された。

私が見た彼女にひれ伏す男たちは、何とすごい面々だったことか――どれほど素晴らしく、ハンサムで、雄々しくて、華やかで、騎士のようで、威厳があって、快活だったことか！　そして、すべての者に対し、彼女からは、変わらない幸福そうな愛想が注がれた――優しくて、うれしそうで、はしゃいでいるようで、無垢な、変わらない陽気さが、私利を考えることもなく。

少佐殿は正しかった――「elle avait toutes les intelligences de la tête et du cœur.［彼女は頭も心もすっかり知性でいっぱいだった］」。それで、老いも若きも、最上位の者も最下層の者も、同じように彼女を愛し、尊敬しているように見えた――女性も男性も――彼女の完璧な誠実さと感じのよい穏当さのために。

そして、私の方はといえば、その間ずっとペントンヴィルで自分の冴えない製図板

にこつこつと図を描いたり、厩舎や貧窮者用の小家屋のためにもう一人が描いた設計図を実行したりしていたが、そんな貧弱な仕事さえあまりうまくいったためしがなかったのだ！

私がこの彼女の過去の人生を見れば、屈辱と嫉妬で気が狂いそうになるところだろうが、私たちはそのすべてを手を繋いで一緒に見たのである――魔法の回路が確立されたのだ！　私は、このすべてが彼女にどう影響したかを見て理解し、この壮麗と光輝をほとんどたいしたことだとは考えない彼女の純真さに驚愕した。

そして私は、彼女の心の中の、永遠に愛する母の記憶と父（最も気高く善良な男性の一人）のイメージによって満たされていない空間の全部が、白いシルクハットとイートン校の上着を身に着けた小さな男の子のおかしな姿を安置していることに気づき、身震いした。その小さな男の子は私だったのだ！

その後、恐ろしい十二か月が来て、私はそれを進んで空白のままにした――その十二か月の間は、夫に対する彼女の少女らしい空想が持続したのだ――その後、彼女の人生は、再び永遠に私のものになった！

そして**私の**人生は！

囚人の生活は、概して幸福なものではない。その者のベッドは、一般に薔薇のベッ

ドであるとは思われていない。

ところが、私のはそれだったのだ！

もし私が、かつてモロカイ島*の編み枝小屋まで這っていった者たちの中でも最も惨めな癩病患者であったとしても、やはりいちばん幸福な人間だったはずで、眠るだけで薔薇のベッドにいる自分を見つけることができただろうし、眠っている私だけが眠っているメアリー・セラスキアの友人でいることができただろう。この場合、彼女は私をよりいっそう愛してくれたことだろう！

彼女は、私の長い囚われの生活を、王様でも夢見たことがないような至福で満たし、そうすることで彼女自身の至福を見いだした。ひどい災厄の前に私が送っていたあの哀れな歩みの遅い生活、書き記そうと努めてきたあの生活を――私たちが手を繋いで互いの過去を一緒に通り抜けていく間、彼女は熱烈な関心と共感をもってほぼ一時間ごとに目撃した。いつも彼女はそれをとても喜んで共有し、自分のものとした。

私は、そのようなむさ苦しい実態が、あのように輝かしく、あのような高い地位で生きた人間に及ぼす影響が怖かった。恐れる必要などなかったのに！　八歳の頃の彼

＊モロカイ島……ハワイの島であるが、かつてハンセン病患者を隔離した地を含むことで知られていた。

女が私のことを「天使のような英雄」だと思ったのとちょうど同じように、彼女は生涯通じて、私がアポロで――正しく理解されなかった天才で――殉教者であったと思い込んだままだったのだ！

それを思うと、私はたまらなく恥ずかしくなる。しかし私は、盲目的で無差別な愛情が、その極めて貴重な宝を気前よく与える対象として選び出した無価値な人間の、最初の例というわけではない。タラパタポウムも、ロバの頭を付けた図体の大きい道化者をシャルマン王子へと理想化した、唯一の妖精というわけではないのだ。こんな光景は、ああ！　珍しいものではないのである。しかし、少なくとも私は、不相応な祝福に謙虚に感謝し、その価値を理解してきた。また、私はさらに、ある一つの才能の所有権を主張してもよいと思っている。いつ、どこで、どのように愛するべきかも直感的に理解するという才能だ――一瞬で――たちまちのうちに――永遠に！

二十五年！

それは千年のように思われた。あの活発で魅力的な四半世紀の間に、私たちが見て、感じて、やってきたことは、たいへんな数になる。それでも、その時間はどんなに速く進んだことだろう！

そして今、私は、私たちの驚くべき内面的生活――à deux［二人の］――を説明す

る努力をしなければならない。繊細で困難な仕事である。

世間の目に――どんな目にも――明らかになる人の打ち明け話――女性の人生が自分のそれと密接な繋がりがあり、その献身的な女性の愛のおかげで彼のもとに訪れた無情の幸福の打ち明け話――には、理不尽さと趣味の悪さの両方がつきまとう。

最も同情的な読者でも、そのような暴露には反発しそうである――会ったこともない者の美だの美徳だの心的な贈り物だのに懐疑的になるためだ。いずれにしても彼らは、彼の得たものなど知ったことではないと感じ、彼女側については、あまりにも幸運な恋人や夫など、聖なる沈黙の対象であるべきだと感じるからである。

そのような沈黙を守らないせいで、たくさんの自叙伝の興味が損なわれてきた――たくさんの小説の興味さえも。そして、私生活においては、そのような愛の籠もった内緒話が聞き手をどれほど当惑させることがあるかを、そのような当惑を引き起こしてしまったという苦い経験によって、思い知ったことのない者がいるだろうか？私はこの点を踏み越えないよう最善を尽くすつもりである。私が失敗した場合（すでに失敗しているかもしれないが）、それらの状況は完全に例外的で、失敗するようなほかの状況と同等のものではないと弁明することしかできない。そして、私が抱いている深い感謝の念を、さらには私の情熱的な称賛と愛さえも、ぜひ考慮に入れてほし

いところである。

私の人生の次の三年間は、退屈だが満足のいく刑務所生活と、それまでなかったような蜜月との交替反復以外、何もお見せできるものはない。刑務所生活の方には、記録する価値がある時間は一時間もないし、記憶する価値さえない。そのもう一方の引き立て役としての時間を除いては。

それは私にとって、就寝時間の一時間だけだった。幸い、それは早い時間帯だった。肉体が健康的に疲労し、心がこの上なく幸福な期待に満ちた状態で、私は仰向けになり、両手を頭の下できちんと交差させると、すぐに眠りが香油のように広がっていった。実際の自分は誰で、どんな人間で、どこにいるのかを忘れてしまう前に、意志を向けた目標地点に到達し、目を覚ますと、肉体が別の場所、別の服装で、魅惑的な窓の近くのソファにあることに気づく。腕は依然として頭の後ろで交差したままだ――神聖なポーズで。

次に私は四肢を伸ばし、外面的生活からするりと解放される。それは、自分で紡いだ繭（まゆ）の監禁状態から新生した蝶のようで、言葉にできないような若さ、力、新鮮さ、至福の感覚を伴う。目を開けると、隣のソファにやはり仰向けになったメアリの姿が見えるが、それは彫像のように静止して生命感がない。時が来るまでは、彼女を目覚

めさせられる術はない。彼女の時間の方がやや遅く、彼女は相変わらず私が後ろに置いてきたばかりの外面的生活の苦労の中にいたのである。

その苦労は、彼女の場合、私のそれよりも複雑だった。彼女は世界を諦めてしまっていたのだが、それでも彼女にはたくさんの友達がいて、膨大な通信があった。そのうえ、無限の健康とエネルギー、精気の素晴らしい回復力、ビジネスのための高い能力が授けられた女性であることで、彼女は多くの厄介事と従事活動を自分に生じさせてきたのである。

彼女は、身を持ち崩した女性のための家、青少年窃盗犯のための更生施設、子供の病後療養所の、事実上の女主人なのだった――このすべてに、彼女は直接個人的な監督をし、持っているお金をほぼすべてつぎ込んだ。ハンプシャーの自宅は貸してしまい、キャンプデン・ヒルの小さな家具付きの家に、二人の女性使用人と一緒に住んでいた。馬車は持たず、辻馬車や乗合馬車で動き回り、女家庭教師がよく着るような服を着ていたが、私たちが一緒にいるときの彼女以上に堂々と格調高く見える者は誰もいなかった。

彼女は自分の名声と肩書きを、自らの慈善行為に利する影響力の強力な武器としてなおも保持し、高貴な人々が好きな慈善心ある実利家たちの財布への絶え間ない襲撃

において、それを無慈悲にも振り回した。

このすべてが、彼女の心の平静に少しも影響しない多くの世評を生じさせた。

彼女は、講義、委員会、理事会、評議会にも出席し、バザー、無料食堂、簡易食堂などをオープンした。彼女が自らに課した務めのリストは無限だった。このように、彼女の外面的生活は溢れるほど満たされていて、また私と違ってそのすべての時間が記録に値するものだった――と言えるのも、そのすべてを目撃した私は、内容をよく知っているからである。しかし、ここは公爵夫人の外面的生活を書く場所ではない。誰もが知るように、それは別の人がやってくれたから。

これ以降のページは、「Magna sed Apta マグナ・セド・アプタ*」（私たちは、彼女が自分の幼少期の家である「パルワ・セド・アプタ」にくっつけていた新しい家と芸術の宮殿をそう呼んでいた）の「妖精タラパタポウム」であるメアリー・セラスキアに捧げられなければならない。

彼女が無意識で横たわっていると書いて放置してしまった箇所まで話を戻そう。頬には色が、鼻孔には呼吸が、心臓には鼓動がすぐに戻り、彼女は目覚めて自分のエデンの園に気づく。これから八時間、お互いの所属集団内にいながらそこで過ごせるそれを――私たち共通の内面的生活を――、彼女はそう呼んでいた。

この幸せな瞬間を待って、私はコーヒー（素晴らしいコーヒーだ！）を淹れ、一、二本タバコを吸う。**その**至福を十分に味わうには、イギリス刑務所内で実生活を送る常習的喫煙者である必要がある。

外界での十六時間の多忙な夢うつつ状態から彼女が目覚めると、それまでほかの人間が決して知らなかったような喜びの選択が私たちの前にあった。彼女は生涯を通じてたいへんな旅行家であり続け、多くの国や都市に住み、たいていの人よりも多くの生活や社会や自然を見てきたのだ。私が彼女の手を取るだけで、そして二人のうち一人が願うだけで、見よ！　どちらかが行ったことのある場所ならどこであっても、見たり聞いたり感じたり食べたり飲んだりしたことのあるものなら何であっても、その中から選んだものがもう一度そこにあり、もう一人はそれを共有するのである――以前には想像もできなかった自己催眠か相互催眠のようだ。

すべては、それが起こった実際の時間にどちらかにとってそうであったのと、同じくらい実物そっくりで、同じくらい私たち両者にとって現実そのもので、さらにこの世の生活のものではない新鮮さと魅力が付け加わっていた。それは夢ではないのだっ

＊マグナ・セド・アプタ……「大きいながらも調和の取れた」の意。

＊芸術の宮殿……テニスンに同名の詩があるが、関連があるか？

た。それは第二の人生、より優れた世界だったのだ。

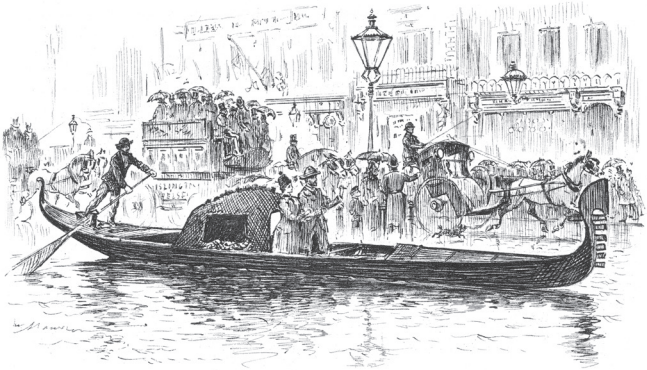
しかしながら、私たちは一定の範囲内に留まらねばならず、自分たちで発見したある法からの逸脱に注意する必要があった。それを十分に説明することはできないのだが。例えば、実際の経験を外れるような偉業、空を飛んだり、高所からジャンプしたり、何にせよこうした普通の夢を魅力的で驚異的なものにする非自然的なことをするのは、破壊をもたらした。もしそれをしようものなら、私たちの本当の夢は曇り、普通の夢と同じようになってしまう――曖昧で、たわいなく、非現実的で、不正確な――根拠のない映像の織物のように。また、自分を少しも変えてはいけないのだった。爪の形さえ、自分のそれそのままでなければならない。ただし、私たちは自分を最高の状態に保っていたし、なるべき年齢を選択することならできた。私たちは二十六歳から二十八歳を選び、それに固執した。

それでも、実生活ではまったく不可能であるようなことでも、大手を振ってできることがたくさんあった――最高に楽しいことが！

例えば、目覚めのコーヒーの後、ヨセミテ渓谷で二、三時間を過ごし、ゆったりと散策して、香りある新鮮な空気を呼吸し、仲間の旅行者たちを見て、彼らの会話を聞きながら、巨大な松――私たち両者にとって飽きることのない喜びの源――を眺める

こと、それも私たちどうしは実質と中身があるが、彼らから私たちはまったく聞こえず、見えず、触れないという快適さを意識しつつそれをするのは、確かに楽しいことだった。私たちはしばしば観光客を省き、ヨセミテ渓谷を独占した（そこではいつも、彼女が夫と一緒に訪れたことのあるどの場所でも、彼女と彼の以前の姿、私が耐えられない光景を省いたものだった）。

そぞろ歩きと賞翫に満たされると、彼女の意志のわずかな努力と、二人が目をほんの少しの間閉じただけで、気づくとドレスデンでの優雅なガーデン・コンサートに向かってコルニチェ通りを馬車で移動していたり、セント・ジェームズ・ホールの土曜日大衆向けコンサートに向かってゴンドラで漕がれていた



セント・ジェームズ・ホール、ピカデリーへ

りしたが、これもまた楽しいことだった。そこからハンサムに飛び乗って、ピカデリーと凱旋門への公園をさっと通り過ぎ、パッシーのポンプ通りにある「マグナ・セド・アプタ」へと、ディナーにちょうど間に合うように帰宅した（魅力的なドライブで、少しも長すぎるということはなかった）。

私ではなく、**彼女**の記憶から上手に注文された、非常においしい小さなディナー（全パリで最高級の小さな食堂で食べられる――シュヴェーニュ王女のそれだ）。「huîtres d'Ostende［オスタンド*の牡蠣（かき）］」と言ってみよう。すると「soupe à la bonne femme［田舎のおばさん風スープ］」、「perdrix aux choux［シャコとキャベツの煮込み］」、パンケーキ、「fromage de Brie［ブリーチーズ］」と続く。飲み物は「ロマネ・コンティ」のボトルだ。ウェイターが皿を取り替える煩雑さもない。願い、目を閉じた瞬間――augenblick!［一瞬で！］それは完了した――それから私たちはお互いに給仕し合うことができた。

刑務所の食事、そして近い過去に食べていたことを思い出す十ペンスのロンドン・ディナー以外は何もない生活の後で、私は、自分があのような連れとそのわずかな御馳走をありがたがるような、低俗な物質主義者だと思われないことを期待している（子供の頃の昔のディナーを除き、十ペンスではないもので私が覚えている唯一のディナーは、タワーズ公爵夫人がミムジー・セラスキアであることが判明したクレイ邸で

の名高いディナーであったが、私は**それ**をあまりたくさん食べなかったのだ）。

それからタバコ、コーヒー、それにキュラソー。その後、プライベート・ボックスに到達するためにする必要があるのは、その部屋を横切ってカーテンを上げることだけである。

すると、私たちの前には明々（あかあか）と照明が灯された劇場やオペラ・ハウスが現れ、楽器がチューニングし、素晴らしい観衆が入場していた。国王や女王、有名な美女たち、世界的に知られた武人や為政者たち、ガリバルディ、ゴルチャコフ、カヴール、ビスマルク、モルトケ。今とても有名で、そうでない者がいるだろう

オペラ・ボックスへ

＊オスタンドの牡蠣……オードブル名のように見えるが、料理のコース名のようだ。

か？　メアリーは彼らに私の目を向けさせた。隣のボックスにはセラスキア医師とその長身の娘がいて、その輝かしい観客たち全員と友人のようだった。

それは、時にはサンクトペテルブルク、時にはベルリン、時にはヴィーン、パリ、ナポリ、ミラノ、ロンドンであった――あらゆる大都市が順番に現れたのだ。しかし、私たちのボックスは常に同じで、いつもその劇場の最高のものであり、私は、あの王族や上流階級や輝かしい人々全員を前にして自分の葉巻を吸う特権を与えられた唯一の人間であった。

それから、序曲の後で幕が上がった。それが演劇で、その演劇がドイツ語かロシア語かイタリア語あった場合、そのすべてを理解するために必要なのは、メアリーの小指に触れることだけだった――真実ではあるのだが、不可解なことである。理解できているほどにはどの言語も話せなかったし、少しでも接触が断たれた瞬間、それらは**私には**ギリシャ語かヘブライ語で演じられたも同然になったからだ。

しかし、私たちが最も関心を寄せたのは音楽で、あの三年間は（その後でさえ）、私たちに音楽は供給過剰なほどだったと言ってもよいと思う。メアリーは、その多忙な覚醒時の生活を通してずっと、ロンドンで良質の音楽が演奏されるならそのすべてを聴きに行く時間を捻出し、夜それを私に持ち帰ることができたのだ。私たちは一緒

に、それを繰り返し**ダ・カーポ**して聴き直した。

国王や女王の後援と臨席によって栄誉を与えられたコンサートに同席し、さらに自分たちが好きな特定の曲をどれでもアンコールできるのは、二人の私人、しかもその一人は囚人である者たちにとって、類い稀なる特権である。私たちはそれをどれほどの頻度で実行したことだろう！

おお、ヨアヒム！　おお、クララ・シューマン！　おお、ピアッティ！――皆、よく知ってはいたが、生の耳で聴いたことはなかった！　おお、そのほかも、全員の名前を挙げることなく名前を出したのでは不公平になりそうな人々だ――何という壮麗な目録！

あなたはまったく意識されることなく、腹立ちや疲労の合図をあなたが発することもなく、私たちはあなたに同じ楽章をどれほど何度も繰り返させたことか！　私たちのお気に入りの居間を飾っていたリストお気に入りのピアノで演奏してもらうために、どれだけ彼を頻繁に召喚したことか！　私たちにどんなに最高の喜びを与えてくれたかを、彼はどれほど知らなかったことか！（これからも知ることはないだろう、ああ！）おお、パッティ！　アデリーナ*！　おお、サントリーにシムズ・リーヴス！　おお、

＊アデリーナ……原文 Angelina だが、アデリーナ・パッティのことであると見て訂正した。

ド・ソリア、応接間のナイチンゲールよ、その声はまだあなたたちに残っているのかどうか！

そして、あなた、リストリ、あなた、サルヴィーニ、et vous, divine Sarah, qui débutiez alors! On me dit que votre adorable voix a perdu un peu de sa première fraîcheur. Cela ne m'étonne pas! Bien sûr, nous y sommes pour quelque chose!［そして、あなた、当時デビューしたばかりの聖なるサラ！　あの愛らしい声は、初期の新鮮さをやや失ったと言われている。別に驚きはしない！　もちろん、私たちにはその責任があるのだ！］

・　・　・　・　・　・

それから、あらゆる国々の美術館、博物館、植物園に動物園――「マグナ・セド・アプタ」にはそれ全部のためのスペースがあった。大英博物館のエルギン・マーブルのためのスペースさえ。それは私が加えたものである。

世界の絵画や彫刻の間で過ごすのは、何と魅力的な時間だったことか！　あちこちで、たぶん余計であろうものを取り除いたり、別のやり方で吊したり、もっと良い光があると思われる場所に置いたりしながら。『ミロのヴィーナス』は、ルーヴル美術

館よりも「マグナ・セド・アプタ」の方がはるかに引き立って見えた。

家でこんなふうに忙しく楽しんでいるときに、またその楽しみを高めるために、私たちは外をひどい悪天候にした。土砂降りの雨が降るか、さもなくば北風がヒューヒューうなり、「マグナ・セド・アプタ」の荒涼たる庭に雪が降り、見渡す限りの風景が白くなった。

とはいえ、いちばん懐かしかったのは、私たちと同時代の多くの絵であった。結局のところ、私たちは自己修養の努力にもかかわらず、現代人の中の現代人だったからだ。

存命しているか、最近まで存命したヨーロッパの大家で、その最高の作品が私たちの所有にならなかった人はほとんどいなかった。その作品がかなり明るい照明を当てられて吊られているので、大家たち自身も満足したことだろう。私たちには自由になるたくさんのスペースがあったため、それぞれの絵にそれ自身のための壁を持たせ、その美しさを十分発揮するよう色調を整え、その真向かいには二人のための快適なソファを置いた。

しかし、私たちがいちばん多く過ごした小部屋、あの魔法の窓がある部屋には、特にお気に入りのイギリス派*の作品を少数だけ詰め込んでいた。私たちにはかなり外国

＊イギリス派……ラファエル前派を指す。

の血が入っていたため、典型的なイギリス人よりもさらにイギリス人だったからである――plus royalistes que le Roi［王よりも王党派］だったというわけだ。

そこには、ミレーの『秋の落ち葉』『ウォルター・ローリーの少年時代』『十月の冷気』、ワッツの『エンディミオン』『オルフェウスとエウリュディケ』、バーン＝ジョーンズの『愛の歌』『ヴィーナス賛歌』、アルマ＝タデマの『アグリッパの謁見』『アンピッサの女たち』、J・ホイッスラーの母の肖像、E・J・ポインターによる『ヴィーナスとアスクレピオス』、F・レイトンの『ダフネフォリア』、ジョージ・メイソンの『中秋の満月』、フレデリック・ウォーカーの『避難港』、それにもちろんメリデューの『太陽神』。

さらに、H・S・マークスがデザインした、ムナグロとその卵（私はそれが好きだった）で縁をぐるりと精妙に装飾された衝立の上には、いつだったかメアリーが恋に落ちた油彩と水彩の小さな珠玉作があった。ホイッスラーの不滅の『月光ソナタ』、E・J・ポインターの非常に美しい『田園の聖母マリア』（パリ、一八五七年の日付入り）、子供たちからたいへん好まれそうな、V・プリンセプによるかわいらしい『ビンビ』二枚。T・R・ラモントの感動的な『アベ・コンスタンティンの夕食後』では、すてきな女の子が昔のスピネットを弾いている。T・アームストロングの称賛すべき作品、彼の

初期のより現実主義的な様式で描かれた『ズワーブ兵と婆(ばあ)や』。ジョン・リーチ、チャールズ・キーン、テニエル、サンボーン、ファーニス、コールデコット等の見事なラフ・スケッチは言うまでもない。信じられないほど巨大で、色黒で、ぼさぼさの毛のセント・バーナードの、銀筆による数え切れない小さなスケッチもまた言うまでもない――どこかの陽気な鉛筆のトルバドゥールで、私と同じようなさすらいの混血児で、その者のよくあるフランス名が署名されている。彼は、私が私の犬を愛するのと同じくらい自分の犬を愛していたようだ。

その後、突然私たちは、この比類なき芸術的豪奢(ごうしゃ)さすべての中心には何かが欠けていると感じた。それについて、何か空虚感のようなものがあったのだ。そして、私たちの場合、こうしたあらゆる美しいものを集めるための主たる動機がないのだということに気づいた。

一　私たちは唯一の所有者ではなかった。

二　私たちにはそれらを見せる人がいなかった。

三　したがって、私たちはそれらを自慢に思うことができなかった。

変化のための悪天候と家にいることの喜びを求めたとき、私たちは、リスと猿とハ

＊王よりも王党派……シャトーブリアンの『憲章に基づく君主制について』より。

リネズミがいる昔の勉強部屋でもまったく同じように幸福になれることに気づいた。私たちそれぞれが薪の火のそばで座面が籐の肘掛け椅子に座り、互いのために栗を焼き、間に一冊の本を置いてどちらか一人が大声で読み上げる。あるいは、さらに好ましいのは、彼女が数時間前に読んでいた朝刊と夕刊を読み上げることだった。話しても信じられないかもしれないが、彼女は覚醒時にそれらを**読んで**などいなかったのだ！　彼女はただそれらを注意深く一瞥し、上から下までそれぞれの欄の外観を把握しただけだった――それなのに、彼女は手にした夢の新聞からあらゆる言葉を読み上げることができた――こうして、報道を正しく反芻したのである！

小さいながらも実用的なやり方で、これは常に、私たちがすでに達成していた中で

子供の勉強部屋

の問題に対する、最も完全で目覚ましい心の勝利であるように思われた。

本当のところは、あまり多くのものを読めたわけではなく、それについて話すべきことの方がたくさんあった。

残念ながら、「マグナ・セド・アプタ」の弱点はその図書室にあった。当然のことながら、それは私たちのどちらかが覚醒時に読んだ本でしか構成できなかった。彼女は非常に活動的な生活を送っていたので、本のために残された余暇がほとんどなく、私はと言えば、読書好きな若者が日常的に読んでいるようなものしか読んでいなかったのだ。

しかし、私たちが読んだ**ことがある**ような本は最大限に利用され、かなり豪華に製本されたため、もしここに見に来たならば、その著者たちさえ誇らしさとうれしさとで顔を赤くしたであろう。それらをさらに繰り返して読む時間はほとんどなかったけれど、私たちはその背を眺め、取り出して指で触れ、注意深く元に戻すという真の愛書家的歓喜を楽しむことができた。

これらの歓待、小旅行、祝い事、炉端の楽しみのほぼすべてにおいては、当然メアリーがリーダーであり主人であった。そうでないケースはほとんどあり得なかった。

かつて有名なメアリーという人がいて、その彼女を知ることが自由教育になると言*

われていた。メアリー・セラスキアを知ったことは、私にとってそのすべてになったと言ってよいと思う！

しかし、時々私は、彼女のもてなしにお返しするための小さな試みを実行した。

私たちは、クラーケンウェル、スミスフィールド、カウクロス、ペチコートレーン、ラトクリフ街道、東インドと西インドのドックなどの貧民街に一緒に出かけていった。

彼女は私と一緒に低級な演芸場（ペニー・ガフ）やミュージックホールに入った。グリニッジ・フェアやクレモーン・ガーデンズやロシャーヴィル・ガーデンズへ――彼女はそのすべてを好んだ。彼女は私と同じくらいペントンヴィルを知っていた。そこには私の昔の下宿があって、私たち二人はそこで、以前の私が本を読んだり絵を描いたりしているのを肩越しにのぞき込んだ。私がすっかり忘れていた『鐘』についての小さな予言の歌を、忘却の淵から救い出したのは彼女だった。彼女はリントット氏のパーティーに行き、それらが非常に愉快であることに気づいた――特にリントット氏が。

さらに過去に遡って、彼女は私とパリじゅうを歩き回り、私とノートルダムの塔に登り、神秘的な言葉「アナンケー！」を当てもなく探し回った。

しかし、私のようにあまり旅慣れていない寡聞な者にも、見せるべきもっと良いものがあった。

彼女はハムステッド・ヒース公園を見たことがなかったのだ。私はそれを、暗記していると言えるほど知っていた。ハムステッド・ヒースはいつでもそうだが、十月下旬の晴れた朝は特に、どんな者からも軽んじられるべきではない。

葉の半分が落ち、そのため残っているものの衰えゆく美観を見ることができる。黄色、茶色、青白い色、病的に紅潮した赤色が、*スパニャーズの近くの高い傾いた松や、古いヒマラヤスギの木々や、ハムステッドの庭園を有名にしたイチイと柊の生け垣のように、冬の間じゅう繁茂するつもりの木々の、豊かで暗い実用的な緑を背景にして、ギニー金貨や光る銅貨のように輝いている。

私たちの前に衰退のため朽葉色に変わっているシダの海があり、その中に深緑色のハリエニシダの島々と、緋色とオレンジ色とレモン色の小葉が舞い落ちる小さな木々があった。その小葉は明るい草の上に互いを追いかけるように落ち、草の上には柳をざわつかせる身の締まるような西風が吹き、柳は次の変化への敬虔なる諦念のうちに葉に白いものを生じさせていた。

ハロウ・オン・ザ・ヒルには鋭い尖塔があり、彼方に青くそびえている。遠くの尾

＊自由教育……生活のための手段ではなく、人間としての資質・教養を高めるための教育。

＊スパニャーズ……「スパニャーズ・イン」（古くからあるパブ）のことか？

根は、後退する波のように、低層の霧から青色の中へと次々と隆起している。最後の尾根は青くなって空間に溶け込んでいた。その真ん中ではすべてが、剝離して風景の中へと光沢面を上にして落ち込んできた空の破片のような、ウェールズ・ハープ湖の光を反射している。

反対側にはロンドン全体があるのだが、目線の高さにはセントポール大聖堂の金色の十字架以外は何もない。ほかはパッシーの高さから見えていたパリのように足元に見えた。本当の夢を見る者たちをしていっそう見つめさせ、考えさせ、夢を見させる光景だ。私たちは座って、十分に考え、夢を見、景色を見つめた。手を繋いで、共に喜びを沸き立たせつつ。

一度、私たちが座っていたとき、背後に蹄の騒音が聞こえたことがあった。そこにいたのは、私が以前所属していた連隊の一隊で、彼らは外での訓練中だった。私たち自身と彼らのお互いどうしを除いては見えない中で、私たちは忍耐強くおとなしい黒の軍馬に乗っている奔放な騎兵たちを見ていた。

最初にやって来たのは騎乗旗手だった――明るい髪のアポロという男で、裕福な若者である。見た目には優雅で堂々としていて――気取らず恐れ知らずだが、愚かでがさつで高慢で――まるでフェビュス・ド・シャトーペールのイギリス人版で――請負

師の大物の息子であった。私は彼をよく覚えていて、彼は私をあまり好きではなかったことも覚えている。次は厩舎用の上着を着た下士官兵たちで、（所々にいる屈強な伍長を除けば）彼らのほとんどは新米の、ひょろっとした若者であり、将来的には大いに力を付けることを予測させ、それぞれが二頭目の馬を引いていた。そしてその中に、彼ら全員の中で最も長身でひょろ長いが、それでいて田舎の若者みたいに血色がよい以前の私が、『On revient toujours à ses premiers amours［人は*常に初恋に戻るものだ］』を無感動に口笛で吹きながら馬に乗っていた――どこにでもあるようなその光景（と音）は、いかにもメアリーらしい感じやすい心の琴線に触れたらしい。彼女の目に涙が溢れていたからである。

＊『人は常に……』……イズアールの歌劇『ジョコンダまたは恋愛の放蕩者たち』より。

"ON REVIENT TOUJOURS À SES PREMIERS AMOURS"
「［人は常に初恋に戻るものだ］」

このような珍しい経験で満ちた三年間にわたる蜜月を、すべて略さずに記述する必要はない。そんなものは、一方の側の人間の未熟なペンによる、別の側の人間の表面的な記録にすぎない。そのようなテーマにどんなペンを求めればよいというのか！それはただの人生ではなく、私たちが互いに共有した、人生の最上部分と核心部分そのものだったのだ――苦労や厄介ごと、摩擦や疲労は、すべて除外されていた。ある喜びから別のそれへと、時間と空間を通過するのに必須となる世俗的な旅は省略された。そのような旅それ自体が喜びとならない限りは。

例えば、素晴らしい汽船の甲板でなら楽しい時間を過ごすことができる。サファイア色の熱帯の海を突き進み、美しい西インド諸島に向かうときのように。質のよい葉巻と、この世で最愛の連れとともに、イルカやトビウオを見たり、自分の同乗者や船長や船員たちに控え目な興味を抱いたりしながら。その後は、時間を過ごして葉巻の煙を吐いて、目を閉じ、船の横を降りて美しい橇に乗り込むのもよい。すると、豪華な毛皮で全身を半ば覆われ、凍ったネヴァ川を疾走してロシア皇帝の冬の宮殿の舞踏会へと向かい、そこでサンクトペテルブルクのすべての美女と騎士たちの中で私のメアリーとワルツを踊るのだが、初めてのこととて完璧からはほど遠い私のワルツの欠点や、メアリーが着ているものほど当時の社交界向きではない私の装いの欠点に、気

づく者はいないのだ。私たちは美的感覚のある人間であり、まさにギリシャ人的で、自分たちのファッションは自分たちで作ったのであるが、私はそれを書く気はない。

バッキンガム宮殿から下層のホールまで、私たちが一緒にワルツを踊らなかった場所があるだろうか？ヴァルスなのかワルツなのか、その正しい呼び方は何であれ、私は自分がそれを楽しむようになったことを白状しておこう。たいして自慢できることではないが、一年後か二年後には、私よりも優れた踊り手はヴィーンじゅう探しても見つからなくなるだろうと言ってもよいと思う。

ところで、私はさらにここで、何年も前のレディ・クレイの演奏会で快く始まった英国貴族との旧交を温め、親睦を深めることが（もちろん、例によってメアリーと手を繋ぎ、彼女の追体験で、だが）、どんなに

冬の宮殿へ

喜ばしいことだったかに言及してもよい。

我が英国貴族は、決してワルツがうまくなく、一般に軽快さが不足している。しかし、ヨーロッパ社会の最上層と交わる至高の機会を得た（元兵士で、建築家かつ測量士で、囚人かつ狂気の犯罪者の）ピーター・イベットスンが、我が英国貴族は、貴族全体の中では最も見た目がよく、最も身なりがよく、最も上品に振る舞える貴族であり、また最も良識があり、最も閉鎖的ではない――おそらく、最も閉鎖的でない**から こそ**最も良識があるのだろう――と考えていると聞けば、喜び、勇気づけられる人もいるかもしれない。

彼らは、そうした優れた天分のある特権的な部外者ならば、よく無視もするけれども、完全に拒絶することはない。（その者の名誉と栄光のためだけに）お世辞を言ったり教えたり楽しませたり、また彼らの使い走りになり、雑用をし、彼らを喜ばせるために転んでみせるような、そういう心構えが十分にできている者、そしてまた、自分と同じ羽を持つ鳥とはつがいになる望みのないような、彼らの中のそんな「醜いアヒルの子」（あるいは「魅力のない白鳥の雛」と言おうか？）と結婚することさえやぶさかでないと思っているような者、そのような者なら、受け入れることもあるのである。

というのは、彼らは、肉体美に対する真のイギリス人の目を持っているからだ。

実際、彼らにとってはかなり幸運なことに、自分たちの狭い範囲を超えて――いや、広い大西洋さえ超えて、美*しさとドルとがかくも幸福な組み合わせで見いだされるであろう国へと白羽の矢を立てるのは――もちろん成功する――、実によくあることなのである。

彼らは、ユダヤの娘たちの顔立ちの良さも、その富も、その頭脳も、その古くからの極めて貴重な血も、軽蔑することはない。彼らは、科学では「内浸透」と「外浸透」（これらの語を私が正しく綴れていればいいのだが）の名称でよく知られている、流体の自動的な浸透という秘密の美徳を知っており、それと同じことを実践しているのである。それにより、彼らは自分の種の保存において賢さを見せ、それだけ長く持ちこたえるだろうが、あまり長くは続かない。

ピーター・イベットスン（等々）は、個人的にはそれが害にならないことを望んでいる。

・　・　・　・　・　・

＊美しさとドルとが……この当時、イギリス貴族とアメリカの富豪令嬢との結婚はよく行われていた。なお、「内浸透」と「外浸透」の原文は"endosmoses" and "exosmoses"である。

さて、本題に戻ろう。これらの旅行と娯楽と社会と社交界のすべての誘惑とともに、「私たちの子供時代のかわいらしい場所」とその全関連物への愛は飽くことがなかったため、私たちの最大の喜びは、自分たちの昔の生活を何度も送り直すことと、ゴーゴー、ミムジー、二人の両親、いとこたち、少佐殿に、もう一度その行動を経験させることだった。さまよう忘れられた過去の断片から、彼らの昔の**新たな**行動を思い出すこと。時々うまくいったが、それを狩り出すのは、この世で最もわくわくするスポーツであった。

これら愛する影たちへの私たちの優しさは、知れば知るほど大きくなった。私たちは、それぞれの親愛なる父と母の魅力と善良さと優しさを、十分に経験を積んだ目ですっかり見ることができた。そのときの私たちは、彼らとほとんど同じ年齢だったからである。世界開闢以来、これと同じことを言えた子供はほかにいなかったし、私たちがしたような精密検査に耐えられる若い両親はどんなに少なかったことだろう。

ああ！　ほんのわずかにでも強引に気づいてもらうためなら私たちは何でもしただろうが、それは不可能だった。あるいは、容赦ない運命の差し迫った打撃を防ぐ警告の言葉だけでも囁くことができれば！　そうすれば、彼らは今も生きていたかもしれない、たぶん――確かに年老いてはいるだろうが、それ以前にそこまで尊敬され愛さ

れた親はいなかったというほどの尊敬と愛を受けたことだろう。あらゆることがどんなに違っていたことか！　ああ！　ああ！

そして、この世界のすべてのもののうち、私たちは大通りと公園とブローニュの森を通ってオートゥイユの池まで散歩するのに飽きることはなかった。早春の午後にその辺をゆったりと散策し、ちょうどよい時間帯に池のほとりで真夏の一、二時間を過ごし、懐かしいウォーターラットとゲンゴロウダマシとオタマジャクシとイモリを観察し、蛙が跳ねるのを見る。そして夕暮れ時に家まで歩き、私の旧家の勉強部屋に入る。その後、大晦日の、くるぶしまでの高さの雪が積もり、月光に照らされた大通りを通って、暖かく明るい「マグナ・セド・アプタ」に戻る。この全部がわずか数時間で完了する。

夢の風と夢の天気は――何と魅惑的なことか！　すべてが本物なのだ！

もし私たちが濡れることを望まなければ濡らすことのない、柔らかい、肌を軽く愛撫するような雨が降る。身が引き締まるが決して冷えることのない厳寒。焦がすことも幻惑することもない焼けつくような太陽。

春先の荒れ狂う風は、私たちのその実体のある骨格を一直線に吹き抜けるように思われ、幸福な子供時代は熟知していたのに、今はもう覚醒時には感じることのできな

い懐かしい英雄的な興奮と陶酔で、まさに骨の髄までぞくぞくさせてくれる！

穏やかな夏のそよ風は、失われて久しいフランスの森や野原や花が咲き誇る庭々の香りを満載している。速く柔らかく湿った彼岸嵐（ひがんあらし）が、秋らしく衰え重く実ったはるかなムードンの果樹園から、あるいはシュレーヌの古い市場（しじょう）向け菜園から吹いてくる。理由は分からないが、言葉で表現するにはあまりにも微妙で定義しにくい——言葉にするには美しすぎる！——奇妙で神秘的で不安になるような過去の心象とともに。その後は、北から吹き寄せてくる暗い十二月の風が短くて早い夕暮れと雪をもらたし、私たちを家へと追い立てる。楽しそうに震えながら、炉端としゅうしゅう音を立てている薪へ——chez nous!［私たちの家へ！］

ある昔の年の最後の夜——la veille du jour de l'an［大晦日］。

くるぶしの高さまでの雪が積もった月光の大通りを、私たちは暖かく明るい「マグナ・セド・アプタ」まで歩いていた。夢の雪ではあるけれども、私たちはそれが足の下でサクサクいっているように感じていた。しかし、振り返って見ると、私たちが歩いた跡は消えていた——月は満ちているのに、私たちの影も落ちていないのだ！

少佐殿が通り過ぎ、郵便屋イヴェルドン、大きな木靴を履いたフランソワおじさん、その他の人々も通ったが、彼らの足跡は残っている——それに、彼らの影は濃く、くっ

きりしている！

彼らは、会ってすれ違うとき互いに時候の挨拶をし合っていた。私たちには何も言わない！　私たちの方では、彼らに向け、声を限りに「la bonne année［よいお年を］」を言った。私たちの声は彼らのそれと同じくらい響いているというのに、彼らは私たちを少しも気に留めない。私たちは彼らに、善し悪しはともかく、ほぼ二十年前に迎えた「幸福な新年（ハッピー・ニュー・イヤー）」を祈っている。

セラスキア家からゴーゴーが出てくる。ミムジーも一緒だ。彼は雪玉を作って投げる。それはまっすぐ私の方に飛んできて擦り抜け、フランソワおじさんの広い背中に当たって飛び散る。「Ah, ce polisson de Monsieur Gogo … attendez un peu!［ああ、わんぱく坊主のゴーゴーさんかい……ちょっと待ってろ！］」そしてフランソワおじさんはお返しをする――どうやら、またまっすぐ私に飛んできて擦り抜けたらしい。そして、私はそれさえ感じないのだ！　メアリーと私は、肉と血が私たちを形作っているのと同じくらい、お互いどうし実体がある。私たちは、これらの夢の人々に、彼らの空気に溶け込むことなしには触れることさえできない。私たちは彼らを聞いたり見たりすることしかできないが、それには熟達していたのだ！

鶏肉屋の息子、小さなアンドレ・コルバンがやって来て、ペレ夫人の庭の滑りやす

い塀のてっぺんを走っている。その塀は十フィートくらいの高さがある。

「大変！」メアリーが叫ぶ。「彼を止めて！　覚えてないの？　彼、端に着いたら落っこちて、両脚とも折ることになるのよ！」

私は急行し、彼に向かって大声で怒鳴る――

「さあ下りるんだ、しょうがない奴め。両脚とも折ってしまうぞ！　こっちに跳び下りろ！　跳び下りるんだ！……」私は叫び、両腕を伸ばした。彼は少しも注意を向けない。彼は端に達し、その下でゴーゴーとミムジーが続く。彼らは惜しみない羨望と称賛で我を忘れている。二人の拍手に刺激され、彼はそれまで以上に向こう見ずになり、道化師になろうとまでして、片脚で立って、こんな歌詞で始まる小曲を歌う――

"Maman m'a donné quat' sous
Pour m'en aller à la foire,
Non pas pour manger ni boire,
Mais pour m'régaler d'joujoux!"

「お祭りに行くのに

ママが私に四スーくれた、食べたり飲んだりするんじゃなくて、おもちゃを楽しむためのもの！」

その後、彼は不意に滑って落ちた。かわいそうな少年よ。鉄のレールで膝から下を両脚とも骨折し、そのため彼は生涯にわたる障害者になった。

大晦日のこの悲しい小さな惨事は、すべてが新たに再生される。同情的な群衆が集まってくる。ミムジー

"MAMAN M'A DONNÉ QUAT' SOUS POUR M'EN ALLER À LA FOIRE"
「[お祭りに行くのにママが私に四スーくれた]」

とゴーゴーは泣いている。ひどく動揺した両親が到着し、小柄な名医ラルシェ医師も来る。メアリーと私は犯罪者のような気がしていた。自分たちがそれをすべて防げたかもしれないと感じないようにするのは、どうしたって無理なのだ！

この奇妙な影たちの世界では、私たち二人だけが生きており、実体がある。見たり聞いたりしている限りでは、彼らは私たちよりも実体があって生きているように見える。彼らは私たちのために存在しているが、私たちは彼らのために存在しているわけではない。私たちは、寝ても覚めてもお互いのためだけに存在している。私たちが覚醒時の人生を過ごしているその世界の人々さえ、私たちのことも、私たちの実在がどんなものなのかも、ほとんど知らないのだ。私たちに対し、もう一度両脚を骨折したばかりの小さくかわいそうなアンドレ・コルバン以上には！

こうして、二人ともこの嘆かわしい不幸に悲しみつつ「マグナ・セド・アプタ」に戻る。これらの驚異について沈思黙考し、話し合い、驚嘆するために。人間の潜在意識に潜んでいる、何らかの莫大で神秘的な力のぼんやりした感覚——今まで知られておらず夢にも思わなかったけれども、永遠なる神と彼を結び付けるもの——によって、心の核心部にまで影響を及ぼす驚異を。

そして、私たちが常に話し合わねばならないことは、ほかにどれほどたくさんあっ

たことか！

私は才気ある話し手ではないが、彼女は人を楽しませることをこの世で最も容易にやってのける人であることは間違いない――私が興味を引かれたすべてのものに興味があるし、そのおかげで私は陰気な沈黙の年月の（彼女のフランス語風英語*の一つを使えば）disdamaged myself［埋め合わせをすることになった］。

相手役としての彼女については、私に話せることはない。高名なタワーズ公爵夫人の社交的才能を詳述するなど、私のような立場の人間にとっては厚かましく、笑止千万なことであろう。

しかしながら、信じられないかもしれないが、私たちの会話の大半は非常に一般的な、世俗的な話題についてだった――彼女の家々や避難所、それらの管理の困難さ、果てしない金銭の必要性、多くの企画、計画、実験、失敗、幻滅――私は自然に、そのすべてに共感的な関心を持つようになった。それから、私の刑務所、そこで起こったことのすべて――彼女がかなり熱烈な関心を寄せたので、私自身もそのすべてに興味を持つようになった。彼女は私が知っていること、そこでの生活のあらゆる詳細を隅々

＊フランス語風英語……disdamage oneself は、おそらくフランス語の se dédommager（埋め合わせる、取り戻す）をそのまま英語に移植した言い方であろう。

メアリー、タワーズ公爵夫人。
ストルクジュスキーによる写真より、
ワルシャワ

まで知ることになった――ほぼすべての被収容者の名前、容姿、経歴を知り、そして諸事業の実際的経験からそこの内部組織を批判した。その実務的な洞察力には、私はずっと驚かされっぱなしだった。

私の最も滑稽な思い出の一つは、男女の有名な博愛主義者たちに同伴された、彼女の**生身の体での**訪問だった。私は模範囚として彼ら全員からインタヴューを受け、宗教的非正統性を別にすれば、その施設の名誉となった。私が身体の健康などについて尋ねられたとき、彼女は私の知的な回答を物静かに聴き、何か不満なことはないかと尋ねた。不満！　自分のねぐらにこれほどすっかり満足していたムショ暮らしはいなかった――こんなに健康で、こんなに幸福で、こんなに態度がよかった者も。彼女は四六時中メモを取っていた。

八時間前、私たちは手を繋いでフィレンツェのウフィツィ美術館を歩き回っていた。八時間後は、私たちはお互いの腕に中にいるはずだ。

・　・　・　・　・　・

妙な話だが、私たちのこの幸福――人間の愛の全歴史の中でも、とても深く、とても激しく、超越的で、並ぶもののない――は、不条理な切望や後悔が必ずしもないわけではなかった。人間は、うんと恵まれれば、必ずより大きな幸福を得たいと思うものなのだ。

私たちの親密な交際、（割り当てられた時間の間の）お互いどうしの真の占有は、絶対で、完全で、申し分ないものだった。かつて生存したダービー*の中に、私のメアリー・セラスキアの記憶以上に甘美で温かく優しいジョーンの記憶を持つ者など、いそうにないのだ！　見方によれば、各々はもう一人の脳の幻想のようなものにすぎなかったのかもしれないが、私たちにとってその幻想は幻想ではなかった。視覚的錯覚と同じように、それは真実を示す幻想であった。一つの莢（さや）の中の二つの実（メアリーはそれを「フィリップシェン*」と呼んでいた）のように、私たちは（それぞれが別々の自分の莢に入っている）ほかの人類よりもより多くの点で触れ合い、より近くにい

＊ダービー～ジョーン……仲睦まじい老夫婦のこと。十八世紀の雑誌に載った歌による。

たのである。私たちはそれを考えつくあらゆる方法で試し、テストしたが、自分たちが失敗したことに気づいたことはなく、大いなる不思議への驚嘆がやむことはなかった。例えば、完全に眠っている間に一緒に創案し完成していた複雑な暗号で、一緒にいるときに両者に起こっていたことに言及する手紙を、私が刑務所内で彼女から受け取る（また私がそれに返信する）、などということもできたのだ。（＊）

＊注――その手紙のうちの何通かは私の所有となっています。

マッジ・プランケット。

私たちの特権は、おそらく人類がそれまで享受できなかったようなものだった。時間と空間は、どちらもただ望むだけで私たちにとって無効になった――私たちは喜びの宮殿に住んでいた。考え得るあらゆる贅沢が私たちのものだった――そして何ものにも勝り、永遠に続く、人生の早い時期にのみ属するような新鮮さと高揚感――死が到来し私たちを分かつまでは、時間が決して鈍らせたり冷ましたりできないような、お互いへの愛。こうしたすべてとそれ以上のものが、二十四時間中八時間、私たちの分け前になったのだった。

そうなると、私たちは時々、残りの十六時間が十分に自分たちのものにならないことに苛立ちを感じざるを得なかった。人生の三分の二を離れて暮らさなければならな

いことに。見かけ上は眠っている間の至福の報酬――私たち共通の夢の繁栄――を共有するようには、日常の、覚醒時の生活の苦労や悩みを共有することができないことに。

それから私たちは、互いの消息を知らないまま離れて過ごしていた失われた年月を、深く後悔したものだった――嘆かわしい人生の浪費を。眠るにしても起きるにしても、人生などひどく短いものだというのに。

もし消息を知ってさえいたならば、どんなに違うことになっただろう！

私たちは、お互いを見失ったり、連絡が途絶えたりしなくてもよかった。最初から一緒に成長し、学び、働き、悪戦苦闘したかもしれない――男の子と女の子、兄と妹、恋人どうし、夫と妻――それでもやはり、自分たちの祝福された夢の国を見つけて、まったく同じようにそこに住んだかもしれない。

私たちの間に子供が生まれたかもしれない！　ペロー夫人のおとぎ話のような、beaux comme le jour［輝くばかりに美しい］、かわいらしい子供たちが。その子たちは

＊フィリップシェン……おそらくフランス語のphilippinesを、メアリーがドイツ語っぽく呼んだものであろう。その「フィリピーヌ」とは、双子のアーモンドを見つけたら二人で分け合い、次に会ったとき「ボンジュール、フィリピーヌ」と先に言ったほうが勝ちとなり、プレゼントがもらえる遊び。アーモンド以外のナッツでもよいらしい。

母親と同じくらい美しく、善良でさえあるかもしれない。

そして、こうした架空の小さな存在について話すとき、またその描写を試みるとき、私たちは、彼らを愛することにかけては途方もない能力があることを自分たちの中に感じて、互いの肩ですすり泣きを始めてしまうのだった。私は、彼女の短く不運な母親時代の情熱と優しさ、その浪費された苦しみのすべてを、十分によく知っていた。まるでそれが私の個人的な経験の一部を形成してさえいるかのように。彼女が別の男の子供を産んでしまったことへの私のひどい嫉妬の疼きは、この熱心で徹底した理解のうちに忘却された！　ああ、そうなのだ……この渇望する愛、この悲痛な同情心、それらを知らないようでは、とても生きていたとは言えない！　私には子供がいないので（祖父になれるくらい年を取ってはいるが）、心でそれをかなえるしかない！

私たちには息子も娘も望めなかった。私たちには、華やかに、豊かに、色褪せずに咲き誇る、祝福された愛の花がある。しかし、その花の祝福された生命の果実は、決して、決して、決して望めないのだ！

私たちの子供はミムジーとゴーゴーだけだった。彼らと私たちの間には越えられない境界があり、彼らは私たちの存在そのものを意識していなかった。妖精タラパタポウムとシャルマン王子が自分たちを見守っているという、ミムジーの奇妙な感づきを

除いては。

このすべてが、人生を生きる価値があるものにしてくれただけでなく、私たち二人にとっての楽園にまでしてくれたにもかかわらず――そのことに感謝しないなど恩知らずだが――、お互いへの徹底的な信頼をいっそう十分に認識することで、いつも終わるべくして終わるのだった。実際私たちは、ただこのように愛し愛されることそれ自体が（私たちが持っていたほかのすべての幸福を抜きにしても）あまりにも限りないものであったため、あえてより多くを求めるという自分たちの厚かましさに自ら進んでおののいていただけだ、ということを認めざるを得なかった。

・　・　・　・　・　・

こうして三年間が瞬く間に過ぎ、おそらく残りの年月もそうなるところだった。私たちの共同の人生に新しい扉を開き、思考力とエネルギーのすべてを新しい方向に向けるような、ある出来事がなかったならば。

第六部

刑務所当局者の一人に受けていたつまらない嫌がらせのため、ベッドに入った後しばらく寝付けず、そのためやっと「マグナ・セド・アプタ」で目覚め、（俗世の刑務所での日常的な一連の仕事の後、天国で生き返るかのような永遠に新鮮な感覚とともに）そこのソファに横たわったとき、メアリーはもうそこにいて、コーヒーを淹れ、その香りが部屋を満たしていたが、私は、彼女がそれをしながら静かにある曲をハミングしているのに気づいた――古風で趣があり、独創的だが非常にきれいな曲で、私は筆舌に尽くしがたい感動に襲われた。それまで血の通っ

た方の耳では聴いたことがなく、それでいて『ゴッド・セイヴ・ザ・クイーン』と同じくらいの親しみが感じられたからである。

夢中になって耳を傾け、目を閉じると、私の心理的視界の前を素晴らしい場面が通り過ぎていった。子供の頃夢に見た美しい白い髪の女性が、小さな**女の**子の手を引いているのだが、その子は私なのだった。鳩とその塔、小川と水車場。赤いヒールが付いた靴を履いた白い髪の若者。背が高く、頑丈そうで、錦織（にしきおり）の絹のドレスで豪華に着飾った、非常に美しい中年の女性。芝生や、小道や、幾何学的な形に刈り込んで整えられた木々のある公園。小塔のある城――あらゆる種類の魅力的な光景と、異なった年齢と国の人々。

「その素晴らしい曲は一体何だい、メアリー？」彼女がそれを歌い終えたとき、私は大声で言った。

「お気に入りの曲なの」彼女は答えた。「飽きて魅力がすり減るのが心配で、めったに口ずさまないのよ。あなたがこれまで聴いたことがなかったのは、それが理由だと思う。いい曲でしょう？　これであなたをあやして起こそうとしていたのよ。

私の祖父はヴァイオリニストで、よくこの曲に自分の変奏を加えて演奏していた。その当時は有名になったけれど、出版されず、今では忘れられてしまったの。

これは『Le Chant du Triste Commensal［悲しき共生者の歌］*』という曲で、祖父のそのまた祖母が作曲したものよ。美しいフランス婦人で、ヴァイオリンも弾けたけれどプロではなかった。祖父は、自分が子供で高祖母がすっかりお婆さんになっていた頃、この曲を彼女が演奏していたのを聴き覚えたのだとか。それとまったく同じように、ヴィーンで少女時代を過ごしていたとき、私はこれを**彼**が演奏しているのを聴き覚えた。彼は白髪の老人だった。高祖母は、ヴァイオリンを膝に載せ、下に構えて演奏していたらしい。いつでも完璧な、音の中心を絶対に外さないような音で、素晴らしい趣味の良さと表現を湛えて演奏したんですって。祖父の職業を決定したのは彼女の演奏だった。でも、彼女は『シングル・スピーチ・ハミルトン*』みたいな人でね。これが彼女が作曲した唯一のものだったから。彼女は、夫が狼に噛まれて死んだ直後、自分に双子の娘――彼女の子供はその二人だけだった――が生まれる直前の時期に、悲しみと興奮の中でこの曲を作った。その双子の一人が私の曾祖母というわけね」

「で、その素晴らしい老婦人の名前は？」

「ガティエンヌ・オベリー。ブードという名のブルターニュ人の騎士で、アンジューのサン＝プレスト近くの gentilhomme verrier［ガラス職人貴族］だった人と結婚した――つまり、彼はガラスを作ったということね――デカンターとか、ガラスの水差し

とか、タンブラーとかかしら――貴族なのにね。それをするのは権威を損なうことだとは考えられていなかった。実際、それは**貴族**に許された唯一の職業で、それに従事するためには少なくとも騎士階級でなければならなかった。

彼女は、la belle Verrière［美しきガラス製造者］と呼ばれて、それはもう傑出した女性だった。夫の死後も何年もガラス工場を経営して、二人の娘のために大金を稼いだの」

「何て変わってるんだ！」私は声を上げた。「ガティエンヌ・オベリーは！　ブライユの貴婦人――ブード――その名前ならよく知っている。マチュラン・ブード、モヌデアールとヴェルニー・ル・ムスティエの領主、だね」

「そう、それだわ。あなたが知っているなんてびっくり！　娘の一人、ジャンヌが、ハンガリー軍の将校だった私の曾祖父と結婚したの。ヴァイオリン弾きのセラスキアは、彼らのたった一人の子供だった。もう一人はアンヌという名前で（あんまりそっ

＊**『悲しき共生者の歌』**……変わったタイトルである。「悲しき」は、夫が亡くなった悲しみであろうが、「共生者」は、生まれる前に父を亡くした胎児を指したものか？　なお、四二ページの「triste ― comment ― sale［悲しき――どうして――汚い］」は、この曲名の Triste Commensal の部分が、切れ切れにこう聞こえたものであったことが判明した。

＊**シングル・スピーチ・ハミルトン**……十八世紀の政治家ウィリアム・ジェラルド・ハミルトンのこと。生涯で一度しか演説をしなかったらしい。

くりで、母親しか姉妹の区別が付かなかったそうよ)、ボワ何とか伯爵という人と結婚したの」

「ボワモリネルだね。それにしてもその名前、全部うちの家系にもあるな。子供の頃、日曜日の朝におとなしくさせておくため、父は僕に家紋やら四分割紋章やらに色を塗らせたものだった。たぶん血が繋がっているんだろう、君と僕は」

「おお、そうだったらすてきすぎる!」メアリーは言った。「どうやって調べればいいのかしら? 家の書類は持ってない?」

私「馬巣織(ぼすおり)のトランクの中にどっさりあったんだけれど、今どこにあるのかは分からないな。家の書類なんて、僕が持っていても何の役に立つだろう? 僕が名前を変えたとき、イベットスンが管理を引き受けたんだ。彼の弁護士に渡ったんじゃないかな」

彼女「いい考えがあるわ。私たちは弁護士なしでやりましょう。あなたの昔の家に立ち寄って、ゴーゴーにもう一度四分割紋章に色を塗ってもらうの。それを肩越しに見ていればいいのよ」

いい考えだ、本当に! 私たちはコーヒーを飲み、すぐに私の旧家に行った。ゴーゴーがそこにいて、長いこと忘れられていた紋章盾(もんしょうたて)の塗り絵にもう一度従事しようとしていることを願いながら(すぐ近くに証文に向かう父がいることも)。

美しい日曜日の朝、私たちは、開いた窓のそばの小さなテーブルでゴーゴーが懸命に作業をしているのを見つけた。床は古い証文やら羊皮紙やら家の書類やらで覆われていた――le beau Pasquier［美男子パスキエ］は、別のテーブルで自分の系図に没頭し、その余白に書き込みをしながら――彼が大好きだった作業だ――無意識に鼻歌を歌っていた。日当たりのよい部屋は、彼の声のよく通る柔らかな響きで満たされた。温室が花々の香りで満たされるように。

その奇妙極まりない矛盾によ

パスキエの家系

り、我が親愛なる父上は、（ブルボン家の白百合への想像上の忠誠にもかかわらず）本心では真の共和主義者で、実際には王子よりも賢く勤勉なフランス機械工の方に（後者との友情と交際が好きだったのだろうと私は思っている）はるかに心を動かされた自称科学者であったというのに、自分の古風で趣ある羊皮紙と不明瞭な四分割紋章とに、喜びと誇りをともに感じていたのである。もし事情が違っていたら、たぶん私もそうなっていただろう――一体どれほど真正な民主主義者であれば、他人のような証拠不十分は受け入れられない一方で、貴族の血統であるという当てにならなそうな彼の個人的主張を、軽視できるというのか！

彼は「noblesse oblige［位高ければ徳高かるべし］」「bon sang ne sait mentir［血は争えない］」「bon chien chasse de race［よい犬は血統で狩をする］」などのようなことわざや格言が好きで、自分でもお金の余裕がないときの慰めのために、「bon gentilhomme n'a jamais honte de la misère［由緒正しい貴族は貧困を恥じない］」という小さな警句を創案した。こうしたことわざは皆、彼を正しく表しており、もっぱら家庭内で使うものとして取っておかれたもので、ほかの誰かの口からそれが出るのを聞いたなら、彼は真っ先に笑い飛ばしたことだろう。

彼の唯一の偉大な才能、その喉にあった宝物については、彼はまったく何も考えて

いなかったのだ。

「Ce que c'est que de nous!［人間なんてこんなものだ！］」

ゴーゴーは、印刷された本（『Armorial Général du Maine et de l'Anjou［メーヌとアンジュー全紋章図鑑］』）の中の、パスキエ家の四分割紋章――「メゾン・ド・パスキエ」と書かれている――に、その下に付いている指示に従って彩色していた。彼はリヤール夫人の店で買った三スーの絵の具箱の一つを使っていたが、色合いにはまだ遺憾な点が多かった。

私たちは彼の肩越しに見て、絵のような文字の古い専門語を読んだ。それは、英語よりもフランス語で読んだ方がよほどきれいで快くも、また馬鹿っぽくも聞こえた。それはこんなふうに書かれていた――

「Pasquier (branche des Seigneurs de la Marière et du Hirel), party de 4 pièces et coupé de 2.

Au premier, de Hérault, qui est de écartelé de gueules et d'argent.

Au deux, de Budes, qui est d'or au pin de sinople.

Au trois, d'Aubéry — qui est d'azur à trois croissants d'argent.

Au quatre, de Busson, qui est d'argent au lyon de sable armé couronné et lampassé d'or,

［パスキエ（マリエールとイレルの領主の家系）、四分割および横二分割。
第一、エロー、赤と銀の四分割。
第二、ブード、金の地に緑の松。
第三、オベリー――青の地に銀の三日月。
第四、ビュッソン、銀の地に、武装し王冠をかぶり舌が体色と異なる黒いライオン］」等、もう一方の四分割紋章、ビゴ、エピネー、マレストロワ、マテフェロンを経て、最後は「Sur le tout, de Pasquier qui est d'or à trois lyons d'azur, au franc quartier écartelé des royaumes de Castille et de Léon.［その上にパスキエ家のそれ、金の地に青い三頭のライオン、カスティリャとレオンの両王国に分割される四分割］」

やがて私の母が、イギリス人メイドのサラと一緒に行っていたマルブフ通りのイギリスの礼拝堂から帰宅した。昼食が告知され、私たちには家の書類だけが残された。夢が曇ることのないようにと念には念を入れたことで、私たちは見つけたかったものを見つけることができた――すなわち、私たちは、美しきガラス製造者兼『Le Chant du Triste Commensal［悲しき共生者の歌］』の作曲者であるガティエンヌの玄孫（やしゃご）で、唯一生き残っている子孫である可能性があるということだった。

*系図をたどるとこうなる――

ブライユの領主ジャン・オベリー、アンヌ・ビュッソンと結婚。その娘、ブライユの貴婦人ガ*ティエンヌ・オベリー、ヴェルニー・ル・ムスティエとモヌデアールの領主マチュラン・ブードと結婚。

ヴェルニー・ル・ムスティエの貴婦人**アンヌ・ブード、ボワモリネルの伯爵ギ・エローと結婚。

ブライユとモヌデアールの貴婦人**ジャンヌ・ブード、ウルリク・セラスキアと結婚。

*系図……二段に分かれている部分は、上がピーターの家の、下がメアリーの家の系図である。（**を付けた）双子の一人アンヌ・ブードがピーターの、もう一人ジャンヌ・ブードがメアリーの曾祖母。よって、(*を付けた)その母である『悲しき共生者の歌』の作曲者で「美しきガラス製造者」のガティエンヌは、二人の「共通の」高祖母となる。

ジャンヌ・フランソワ・エロー・ド・ボワモリネル、フランソワ・パスキエ・ド・ラ・マリエールと結婚。

—

ジャン・パスキエ・ド・ラ・マリエール、キャサリン・イベットスン＝ビダルフと結婚。

—

ピエール・パスキエ・ド・ラ・マリエール（別名ピーター・イベットスン、囚人）。

ヴァイオリニストのオットー・セラスキア、テレーザ・プルチと結婚。

—

ヨハン・セラスキア医学博士、ローラ・デスモンドと結婚。

—

メアリー・セラスキア、タワーズ公爵夫人。

私たちは大喜びで「マグナ・セド・アプタ」に歩いて戻り、そこで新しく発見された自分たちの血縁関係を、今回は**私の**料理レパートリーからの簡単な食事で祝った。それは一ダース六ペンスだった、メイデン・レーンにあるルールズの牡蠣、瓶入りスタウト（l'eau m'en vient à la bouche［私には垂涎（すいぜん）の品だ］）から成っていた。そして、その夜の割り当てられた時間の残りを、古い曲『Le Chant du Triste Commensal［悲

しき共生者の歌］』から可能になる光景の展開に費やし、うまくいったりいかなかったりした。彼女はそれを、熟練した音楽家的なやり方で片手で自ら伴奏しながらハミングし、もう片方の手は私と繋いで、私が見たものをすべて見た。

薄紙を剝ぐように、場面と人々のおぼろげさが次第になくなり、私たちの共通の高祖母ガティエンヌその人であるとすぐに分かる、輝かしく重要な女性――「la belle verrière de Verny le Moustier［ヴェルニー・ル・ムスティエの美しきガラス製造者］」――が現れる。彼女はいつも、ほかの人よりもはっきりと識別できた。それはきっと、私たちが二人とも彼女の個人的特質の本質的な部分を持ち合わせていたためで、また彼女が非常に個性的だったためでもあるだろう。

私が容赦のない時刻に呼び戻されるまで、つけぼくろを付け、白粉（おしろい）を塗り、かつらをかぶった紳士淑女の影のような集団に向かって奏でる彼女のヴァイオリン演奏を見ることができたことで、それどころか、極めて独創的で絶妙に美しい『Le Chant du Triste Commensal［悲しき共生者の歌］』の旋律の、か細い、この世ならぬ音を現実に聴くことさえできたことで、私たちは最高の満足を味わった。人々は、その演奏に大いに感動して楽しんでいるようだった。彼女の娘、どうやらボワモリネル伯爵夫人アンヌ・エロー（旧姓ブード）によるよく聴き取れないスピネットが伴奏し、同時に幼

女のジャンヌ・ド・ボワモリネル（後の貴婦人パスキエ・ド・ラ・マリエールである）が夢見るような表情で聴き惚れていた。

そして、メアリーが言ったそのとおりに、彼女はヴァイオリンを胴を下にして膝の上に置き、まるで小型のチェロであるかのように演奏していた。そのとき私は、小さい頃にそのような姿を夢で見ていたことを漠然と思い出した。

この不思議な冒険から二十四時間以内に、実際的

LA BELLE VERRIÈRE［美しきガラス製造者］

で実務的なメアリーは、生身の体の方で、自分のメイドを連れて、これら私の先祖たちが住んでいたフランスの地方へと出発し、二週間以内には私のフランスの全家系図に精通して、私の縁故のまだ存在しているさまざまな家々を訪問した。

子供の頃の夢に出てきた小塔のある城は、隣接するガラス工場とともにまだヴェルニー・ル・ムスティエと呼ばれていて、それもその一つであった。彼女はそれがエクトル・デュ・シャモラン伯爵という人の所有で、その人の祖父が今世紀の初めに購入したものであることを知った。

彼はまったく新しい工場を建設し、それを西フランスで最初のガラス工場の一つにした。しかし、古い小塔のある corps de logis［本館］はまだ残っており、工場長が妻や家族とともにそこに住んでいた。pigeonnier［鳩小屋］は蒸気機関小屋の場所確保のために取り壊され、その場所の全景観は急激に変化した。それでも、小川と水車場は（後者はただ古風で趣のある廃墟としてのみ）依然として存在していた。とはいえ、小川は約十フィートの深さと二十フィートの広さの水路でしかなく、縁にはごつごつしてねじ曲がった柳と榛（はん）の木の群れがあるが、その多くは枯れていた。

小川は「ブライユ」と呼ばれ、高祖母の土地にその名が与えられた。それは、そこから三十マイル離れた所で（そして何百年も前に）発行されたわけである。しかし、

オベリー家の邸宅であったブライユの古城は、農場内の家屋になっていた。

塀を巡らせた公園内にあって、一五五〇年建立の美しく高い六角形の塔を持ち、その周囲何マイル先からも見えるマリエールの城は、そのときは繁盛している林檎酒醸造所になっていた。それは今でも、アンジェからル・マンへの幹線道路沿いにある。

かつてエロー家の所有であったボワモリネルの古い森は、まだあった。奥では炭焼き人やはぐれノロジカ一、二頭が見つかった。ずっと昔のような狼や猪はもういない。そのとき、古城があった場所には、ボワモリネル・エ・サン・メクソンの新しい鉄道駅が建っていた。

この地方でまだ見いだすことができるブード、ビュッソン、エロー、オベリー、それにパスキエのような家の大半は、おそらくメアリーと私の遠い血族で、弁護士、医師、聖職者になるか、商業に従事して地位ある職業には興味を失っていた。そうだとしても、彼らは私のような者との親戚関係を主張したいとはほとんど思わなかっただろう。

しかし、百年以上前は、これらはメーヌとアンジューで重要な名前であった。その持ち主たちは、ほとんどの場合、中世にフランスのありったけの最高位者と結婚した家々の、より新しい傍流の系統を引いていた。彼らは宮廷やヴェルサイユのnoblesse[貴族]からは見下されていたが、すべての田舎貴族同様、自分の領地では自分の地位を

よく維持していた。お互いどうしで饗宴、狩り、鉄砲撃ちを楽しみ、踊ったりヴァイオリンを弾いたり恋愛したり結婚したりし、それからガラスを吹いて、次第に裕福になっていったのだった。革命が勃発し、彼らとそのガラスとを、彼らよりも身分は高いけれども善良さは少なかった多くの者とともに宇宙に吹っ飛ばすまでは。愉快で温和な人たちであった彼らとその行動の全記録は散逸しており、夢の中でのみ回想が可能となっている。

ヴェルニー・ル・ムスティエは、これら古い邸宅の中では特に興味を引かれるものではなかった。

それは三百年前、さらに古い修道院（名前はこれに由来する）の跡地に建てられた。その古い教会堂の荒廃した壁は、家の庭にまだ残っていて（今も残っている）、杏と梨と桃の木で覆われている。これらの木々は、彼女が花嫁になったときに私たちの共通の先祖たちによって種が播かれた植えられたものであった。

メアリーにその場所の過去の歴史すべてを説明することに非常に大きな喜びを感じたエクトル伯爵は、古い邸宅から四分の一マイル離れた、古い敷地で残ったものの中に素晴らしい新しい家を自ら建てていた。彼女は古い邸宅のすべての部屋を見せてもらった。古い木製パネルがまだ残っており、過去の様式できれいに彩色されていた。

古い文書、羊皮紙の証書、養魚池や農場やそれに類するものに関する賃貸契約書などが彼女の閲覧のために持ち出された。それらは、私の祖父バスキエ、曾祖父ボワモリネル、我らが高祖母とその夫であるヴェルニー・ル・ムスティエ地主マチュラン・ブードによって署名されていた。ガティエンヌの伝承名 la belle Verrière［美しきガラス製造者］は、まだその地方に残っていた（la reine de Hongrie［ハンガリーの女王］というニックネームもあったようだ）。今でも高齢者の多くが、百年前には誰もが口ずさんだ『Le Chant du Triste Commensal［悲しき共生者の歌］』を、だいたい正確に覚えていた。

彼女はアンジューでいちばん背が高く顔立ちがよい女性で、傲岸不遜な意志と非常に男性的な性格の持ち主ではあったが、金持ちにも貧乏人にも等しく絶大な人気があったと言われていた。不屈の精力であらゆる事業に手を出していたが、それは常に自分のためというよりは、ほかの人々の幸福のためであった――経営的で実務的な、典型的なフランス女性で、おまけにまことに優れた音楽家でもあったのだ。

私たち共通の先祖女性はこのような人で、きっと私たちはこの人から音楽への愛情と、音の力に対する一風変わった、ほとんどヒステリックなまでの感受性を受け継いだのだろう。私たちの家系の二羽のナイチンゲールは、この人に由来するのだ――ヴァ

イオリニストのセラスキアと、歌手の私の父である。妙な話だが、彼女の両眉は私が持つ眉とちょうど同じように鼻梁で出会い、その下にはメアリーが持つ明るく黒く縁取られた青灰色の目が輝いていた。しかもその目は、持ち主が笑ったり微笑んだりするときにはいつも食（エクリプス）を被るのだ！

メアリーのこの生身の体の方での興味深い旅の間、私たちは精神の方での「マグナ・セド・アプタ」でいつものように毎晩会っていた。それで私は、そのあらゆる出来事に参加させられたのである。

私たちは魔法の窓のそばに座って、自分たちの楽しみのため、あるときは彼女が数時間前に見てきたままの、現代の生活、色、音、蒸気、ガスに満ち満ちた現状のヴェルニー・ル・ムスティエのガラス工場を見て、またあるときは霞んで不明瞭で、まるで晩秋の灰色の霧がかかったような午後に、曇った窓ガラスを通して近視の目で見たような、百年前の古城を見た。その古城では、忙しそうだが何も言わない影たちが動き回っている――何も言わないのは、初め私たちは、彼らが話すのを聞けなかったからだ。それは私たち人間の耳にはあまりにもかすかすぎた。夢の中で見るこの夢においてさえ！　ガティエンヌだけ、権威的で威厳のあるガティエンヌが言うことだけは、かすかに聞こえていた。

それから私たちは、下に降りて彼らと混じり合った。こうすると、あるとき私たちは、魅力ある古風なフランス家族の影の集団の真ん中にいたことがあった。ガティエンヌ、美しい双子の娘ジャンヌとアンヌ、庭師たち、ヴェルニー・ル・ムスティエ大修道院の昔の控え室と壁のうち、今もまだ残っている所に向かって這っている桃と杏の木々の、若いときのすべて――これらは皆百年以上前のものである――、影がちな庭の小道に、その薄い人影や木々の影のさらに薄い影を落としている、正午

私たちの高祖母と双子の曾祖母たち

をだいぶ過ぎたほの白い太陽。

その後、さあ変われ（プレスト）！　で、幻灯機のスライドを変更するように場面が変わると、私たちは一世紀を跳び越えて、また眺めることになるのだ！

同じように魅力的な別のフランス家族の集団が同じ場所にいたが、もう今日の服装で、曖昧でも聞こえなくもなかった。小さな木々は大きくなっていた。大きな木々は、勤勉な仕事場や機械装置の場所を空けるために姿を消していた。しかし、古い修道院の壁は尊重され、陽気でにこやかな父親、美しい母親、かわいらしい娘たちが、［la belle Duchesse Anglaise［美しいイギリスの公爵夫人］］に、彼女の高祖母が育てた桃や杏のことをみんなでしきりに話していた。

これは、このシャモランの愛想のいい家族が、ごく短時間のうちに――すなわち、初めて会ったその瞬間に――メアリーのことが大好きになったからである。彼らの親切、礼儀正しさ、もてなしを、彼女は決して忘れなかった。彼らは五分も経たないうちに、何年にもわたる知己であるかのように彼女に感じさせたのである。

数か月後、シャモランの令嬢から、かつて la belle Verrière［美しきガラス製造者］の所有であったまさにそのヴァイオリンを、（すてきな手紙とともに）彼女が受け取ったことも述べておいた方がよいだろう。それは、エクトル伯爵が昔の農場主――ガティ

エンヌの御者の曾孫（ひまご）である――の持ち物の中から見つけ、彼女の子孫であるタワーズ公爵夫人への新年の贈り物にできるようにと購入しておいたものであった。

それは現在は私のものになっているが、ああ！　私はそれを弾くことができない。しかし、メアリーと私が夢の中で頻繁に聴いたり見たりし、私たちの人生に非常に大きな影響を与えたあの奇妙なメロディを過ぎし時代に頻繁に鳴り響かせたその楽器を、完全に目が覚めているときに手にすることは、私を楽しませ、慰めてくれた。その外観、形、色、あらゆる傷と染みは、私たちがそれを肉体の目で見たり生身の手で持ったりする以前から、私たちにはなじみのあるものだった。こうしてこの楽器は、それ自身の幽霊によって告知され、おぼろげな遠い過去から私たちのもとへと駆けつけてきたのである！

・　・　・　・　・　・

話を戻そう。私たちの実践と団結した意志の集中によって、徐々に昔の人物たちが実体と色を獲得するようになり、その声が知覚できるようになってきた。私たちが彼らの間を動き、直近の先祖たち――ゴーゴーとミムジー、少佐殿など――にできるの

と同じくらいはっきりと声を聞き、姿を見ることができるまでになる日が、ついに到来した。

白い髪の女性（その髪はただ髪粉（かみこ）を振っただけだった）と手を繋いで歩き回り、鳩に餌をやっていた子供は、私の祖母、ジャンヌ・ド・ボワモリネル（フランソワ・パスキエ・ド・ラ・マリエールと結婚した）であった。靴に赤いヒールを付けていたのは彼女の父親で、彼は色付きガラスで小さなコックドハットが製造できると彼女に信じさせた。子供の頃の私がこの妙なる夢を見るときにはいつでも、彼女は私の中で再び生きていたのだ。

そのときの私は、意のままに彼女を呼び出すことができた。そして、彼女とともに、多くの埋もれた記憶が無から人生の中へと呼び起こされることになった。

その他の素晴らしい物事の中で、赤いヒールの紳士ド・ボワモリネル氏（私の曾祖父）が、リュリやその他の作曲家の美しい古い歌を、スピネットに向かって歌うのを聴いた。彼はその楽器を、当時としては稀なほどの腕前で魅力的に弾いていた。そして見よ！　それらの曲は、私の意識の中にしばしばひとりでに浮かび上がっていた曲であり、私はそれを愚かにも自分が作曲したと思っていたのだ――自作の小さな即興曲だと。そしてまた見よ！　彼の声は、細く高く鼻にかかっていたが、非常に好感触

で音楽的であり、掃除も装飾もされていない蜘蛛の巣だらけの私の脳の隅で半世紀以上もの間絶え間なく歌い続けていた、静かでも小さくもない声であった。

その蜘蛛の巣とは？

実は、間もなく私は、覚醒時、日々の刑務所の労役中（心が極めて明晰かつ自由な状態になっている）に、自分の内なる意識に深く潜り込むことによって、覚醒時の生活でもメアリーとの夢の生活でもない、かすかで捉えにくい追憶に満たされることに気づいたのである。完全にどっぷりと満たされるのだ。それは睡眠中の副次的な夢の追憶で、少年時代および青少年時代に属するものである。おそらく覚醒時に忘れられてしまった副次的な夢で、そのときの私は目覚める直前の表面的な夢しか記憶できなかったのである。

「静かでも小さくもない声」

池、川、橋、道、小川、木々のある通り、木陰、風車小屋と水車小屋、廊下と部屋、教会の式典、村の市、祭り、男と女と動物、別の時間と私が足を踏み入れたことのない地方のすべてが、私の記憶になじみのあるものになった。自分の中に十分に深く潜る必要があったが、それだけでそれらはそこにあった。夜が来ると眠り、「マグナ・セド・アプタ」で私はそのすべてを再び呼び戻し、メアリーと自分のために現実化して完全なものにすることができたのだ。

これらの捉えがたい微妙な追憶が出生前の真の記憶であることは、メアリーとの過去への小旅行ですぐに証明された。彼女がこのような追憶を経験するのとそれらを確証するのは、私とまったく同じように行われた。私たちは、彼女の祖父が『Chant du Triste Commensal［悲しき共生者の歌］』を満員のコンサート・ルームで演奏し、死んで埋葬され忘れられてから長い時間が経った男女に大喝采を受けているのを見たり聴いたりしたのだ！

今の私は、そのような追憶が、メアリーと私との間に起こったように、他人の潜在意識の一部を形成すること、また忍耐強く自己探索をすることで、多くの人がそれらへの到達に成功することを信じている――おそらく、私たちが成し遂げたよりもずっと容易に、完全に。

それは楽音の倍音を聴くようなものである。それらは存在し、認識することを強く要求しているのだが、私たちは最初のうちそれを聴くことはない。そして、ついにそれが聴き取れたとき、私たちは、自分のそれまでの鈍感さと、それらが非常に明瞭であることに驚くのである。

未開拓であっても標準的な耳を持つ人は、良いピアノで低いCの音を叩き、伸音ペダルを踏みっぱなしにしてみよう。最初は豊かな基礎音Cだけしか聞こえないだろう。

しかし、ほかの特定の音を**期待する**ようにしてみよう。例えば、すぐ上のオクターヴのC、それからそのすぐ上のG、それからさらに上のEの音だ。やがて最初に叩かれた音と同じくらいはっきりと、それらの音が聞こえてくるだろう。そして、ついには金切り声の小さな幽霊のような、まことに煩わしい高音域のBフラットが、かなり声高に鼓膜を震わせるようになり、それからは低音のCが鳴るたびにいつもその音が聞こえてきて、それがやむことはないだろう。

これよりははるかに大きな苦労が伴うだろうが（そして結局は大きな喜びと驚きが伴うだろうが）、まさにこのような過程をたどることで、人はその人生の個人的な経験の根底に潜む不明瞭で潜在的な出生前の経験に、やがては気づくようになることだろう。

私たちは、私が描いてきたような過去の場面（それらは無尽蔵だった）に対して、単なる観客としてだけでなく、時折、メアリー・セラスキアとピーター・イベットスンであることを当面はやめて、自分を俳優として認識することができることにも気づいた。これはガティエンヌの場合に顕著だった。私たちは、それぞれがしばらくの間はガティエンヌになることができ（二人一緒は無理だった）、自分自身の個性を復旧させたとき、彼女のそれの一部を持ち帰ると、それは二度と再び失われることはなかった――もし読者が、それを考えるだけで、この世で比較的個人的な不死の生命の芽を組成できるとなると、奇妙な現象である。

刑務所での作業中でさえ、ガティエンヌになっていたことを私ははっきりと思い出すことができた。そのため、当分の間、百年前に生きていたフランス女性ガティエンヌは、十九世紀後半にイギリスの刑務所で懲役を満足そうに受けていたわけである。まあ服役などは、体験できるにしても怪しげな特権であろう、たぶん。

しかし、それを埋め合わせるため、私の中で生きていないとき、彼女はメアリーの中で息を吹き返すことができた（それは一度に一人の中のみ可能だったようだ）。列車や汽船で旅をし、ガスや電気の使い方を知り、タイムズ紙の「特派員」の電報を読み、十九世紀をより好ましい状況で味わうことができたのだ。

こうして私たちは la belle Verrière［美しきガラス製造者］を交替で召喚し、彼女は百年前にはほとんど夢にも思わなかったことを見聞した。そのうえ、彼女は「マグナ・セド・アプタ」の栄光を共有させられたのである。

私たちは、彼女を知れば知るほどいっそう好きになった。彼女は、その子孫になるにはとても素晴らしい人間だった。メアリーと私は、これ以上良い高祖母を選ぶことはできなかったということで完全に意見が一致した。そして、私*たちそれぞれの、ほかの七人の高祖母はどんな人だったのだろうかとも思った。七人というのは、私たちの間には高祖母は合計十五人いたからで、それと同じ数の高祖父もいたのである。

三十人の高祖父と高祖母が、今の私たちを作った。彼らと、その背後にいる数百万人と格闘しても、特に役には立たないだろう。

その全員のうちの誰が、強いけれども、穏やかで恥ずかしがり屋で、血を見ることを嫌うくせに、奮起したときには激怒し、敵の血を渇望するような者だったのだろう？

その全員のうちの誰が、情熱的で優しいけれども、誇り高く気高く貞淑で、世間からもてはやされているのに、「無鉄砲なことをする」のも厭わず、愛のためならすべてをなげうち、世界を失っても惜しくないと思うような者だったのだろう？

こうして私たちは、私たちのより直系の先祖と自分たちとを結び付けることができることを、ただしさらに容易かつ徹底的にそれが可能であろうことを、十分に確信した。しかし、慎重な検討の結果、そのような人格の輸血のような試みをそれ以上実行するのはやめようと決心した。読者も察知なさるであろう、神聖不可侵であるべきという思慮分別が理由である。

とはいえ、これがいつの日か行われるようになること（今や方法は明らかになっている）、また同時に、このような能力の迷惑さや起こり得る悪用が人類の不断の工夫により予防され極小化されることは、私には既定の結果であるように思われる。

中止にするにはあまりにも貴重な能力であるし、それを修養することは果たしてありそうなのかできそうなのか、どんな成り行きになるのかは、読者の想像にお任せす

＊私たちそれぞれの……一人の人間にとって、親は一組二人、祖父母は二組四人、曾祖父母は四組八人、高祖父母は八組十六人存在する。二人の人間なら、高祖父母は倍の計十六組三十二人。ただし、ピーターとメアリーの場合は、互いの曾祖母の一人ずつが双子の姉妹ということで、その親の高祖父母は一組が共通するため、計十五組三十人となる。

る――読者には（この能力を自身で修練するための誘導として）、もし何かが、私たちを幸福と美徳に繋がる困難な道の中にうまく留めてくれることができるのなら、私たちの後に来る人々が私たち自身であったことをただ夢の中でのみ思い出すことになるのは確実であるということを、ただ指摘するだけに留めたい――孵化（ふか）したばかりの鶏であっても、生まれる前の長い経験の豊かさから、目や耳やその他の使い方を卵の中で覚えていたのである。彼らはこの点で、無力な人間の幼児よりもさらに幸運に、短く無責任な生活の務めと楽しみとをすぐに始めることができるのだ！

・　・　・　・　・　・

それだから、おお、読者氏よ、あなたがもし心身ともに健康でさえあるならば、この極めて貴重で優れ祝福された目的のため、外に出かけていって大いに子孫を増やすこと、若いうちからたくさん頻繁に結婚すること、異性の中からあなたにとって最高の人を選ぶことに、この上なく真面目に取り組む必要がある（あなたの後に来る人々のためのみならず、あなた自身のためにも）。あなたの未来における転生（およびあなたのパートナーのそれ）は、短いかもしれないが、たくさん起こるかもしれない。

そしてそれは皆、喜びや平和や愉快な驚きや気晴らしだけでなく、相応の自画自賛という値踏みできない報酬をもたらすのだ！

それというのも、かつてあなただったことを覚えている人は誰でも、当面はあなたを目覚めさせるからである――涅槃から、とでも言おうか？　あなたを呼んだ彼の強さも美しさも機知も、あなたのものだ。そして、この地上の生活において彼がそれらから得る幸福は、このあなたについての繊細で神秘的な追憶が彼の意識内に呼び覚まされるときはいつでも、あなたにも分け与えられることになる。あなたは二度と再び完全に逆戻りすることはできない――涅槃には。未来にあなたを呼び起こす者が全員いなくなるまで！

それは私たちがパッシーでよく遊んだ古風なフランスのミニ・ゲームのようなもので、暗い雨の午後には悪くない。全員円になって座り、吹き消したばかりだが、まだわずかに燃える火がくすぶっている木片かマッチを回し合う。こう言いながら――

"Petit bonhomme vit encore!"

「坊やはまだ生きている！」

そして、渡されたそれの火が消えた者は、罰金を払って退場しなければならない――「Hélas! petit bonhomme n'est plus! … Pauv' petit bonhomme!［ああ、坊やはもういない！……かわいそうな坊や！］」

こんなふうにずっと、あなたの個人意識の生きた火は、この世における実寿命の燃えさかるつかの間の炎が消えたとき、あなたとずっと離れた子孫にわずかに白熱しながら引き継がれるのかもしれない。完全に消えてしまうことがありませんように！――と、この祈りは必要ないか。あなたがずっと、世代から世代へと自分のことを「Petit bonhomme vit encore!［坊やはまだ生きている！］」と言って、楽しい地上のさまざまな物事にほんのわずかでも首を突っ込み続けることができますように！

そして、読者よ、この世でしっかり身を修めれば、あなたについての記憶は（la belle Verrière de Verny le Moustier［ヴェルニー・ル・ムスティエの美しきガラス製造者］ガティエンヌについてのそれのように）、死んでから甘く香り、美しい花を咲かせるかもしれないことを――呼び起こすと楽しい記憶となるかもしれないことを――、覚えておいてほしい。この目的のため、それが想起される数と想起する者たちの数は、親への愛情や先祖代々の誇りがそれをさせることができるのと、同じくらい多いかも

しれないことも……。

そして、おお！（**私たちが**したように）**過去を**振り返ったなら、あなたの先祖たちの欠点に対して優しくあってほしい！　生前は、自分の長く隠された心の秘密が、ある日**あなたに**対して暴露されるなどとは想像もしなかったのだ。彼らの欠点は、実際はあなた自身のものと言える。それはいわば、今のあなたが善悪が分かっているほどには分かっていなかった、無邪気で無知な子供時代の欠点と同じようなものなのである。こういうことは、あるいは

『Le Chant du Triste Commensal［悲しき共生者の歌］』

のおかげで、すぐに知ることになるだろう！

・　・　・　・　・

ゆえに、汝ら、愚かしき顔の十番目の伝達者たちよ、汝ら、病気で虚弱な肉体の、それにふさわしい心と脳を持つ肉体の、無謀なる生みの親たちよ、次のことにも用心し、

今のうちに警告されるがよかろう！　時間の回廊のはるか下方で、奇形足(あし)の天罰があなたの足跡をたどり、至る所であなたに襲いかかるだろう！　極めて無慈悲に、極めて執念深く、間違った不安な死の夢から、耐えがたいほど悲惨な眠れない時間（未来の覚醒しながら見る悪夢）の中に、あなたは目覚めることだろう。あなたの苦しみよりもさらにひどい、苦しみの遺産に参加するために――何年にも何世紀にもわたる不正な自堕落の全蓄積利子とともに悪化し、自己非難の刺すような痛みによって毒され、あなたの堕落した子孫の最後の一人が死に絶え、薄暗く忘れられやすい星間空間の深みの中で彼とあなたの真の涅槃を発見するまでは決して終わらない、そんな苦しみの遺産に！

・　・　・　・　・　・

ここで、この上なく誠実に、そのことは本当であると言わせてほしい。一つにはそのような訴えの厳粛さに対する私の鋭い感覚から、また一つにはそれをするに当たって私が引き受ける重大な責任から。しかし、おお、読者よ、あなたに印象づけるためにさらに特別に、十分な意味を持つこの黙示録的でいくらか脅迫的な語り口（真夜中

の内観的な自省の時間の間、あなたの優れた感覚を悩ませるかもしれないが）で、私は、自分が編み出せるうちでも最も不明瞭で難解な表現法でそれを表すため、最善を、この上なく最善を尽くしたのだ。もし私がそれをすることに失敗していたなら、もし私が気づかずに私が意図するものを部分的に明らかにしていたなら、もし私がほとんど常識のように見えそうなもの――単なる良識だ――に一度でも誤って逸れていたなら、それは私が半フランス人であることとまったく不完全な教育のせいなのである。私は貧弱な記述者にすぎないのだ！

・　・　・　・　・　・

かくして、この、奇妙な新しい世界で偶然私たちに明らかにされた共同発見のうち、最も重要なのものの説明を大ざっぱに試みた。私たちの二十年以上にわたる合同生活は、この細い道しるべの糸をたどることに捧げられてきた――この後に続く本には驚くような結果が見られることを、私は信じている。

私たちには、同じようにイギリスの祖先の解明を試みるだけの時間はなかった――クレイ家、デスモンド家、イベットスン家、ビダルフ家、等――これらは、イギリス

の過去の歴史と私たちを結び付ける家々だ。フランスを遡るのが昔に行けば行くほど、それはさらに魅力的に、容易になっていった――そして、離れるのがより困難にもなっていったのだ。

私たちにとって、どんなに前例のない経験だったことか！　私たちが見たと思った――本当に見た――de nos propres yeux vu［この目で見た］――のは、ナポレオン・ボナパルトその人で、世界の大権威者で、誇りと力の絶頂にあった頃の、小さなコックドハットをかぶり、灰色のダブルの外套（がいとう）を着て、白い軍馬にまたがり、部下全員が彼を囲んでいるという、かなりよく絵に描かれるのとまったく同じような姿だった！

確かに、すべての現代史の中で最も印象的で、忘れにくく、消すことのできない小さな姿、かつての劇場の衣装係が、大衆の目を引きつけ、これから来たるべき何年にもわたって大衆の記憶に絶えず浮かぶよう案出した、最も狡猾に想像された扮装で身を包んだ姿だ！

生で直に見ること、しかも現在であるかのように過ぎ去った現実を見つめること、また過去の方を予言したり未来の方を回想したりするのが一度にできることは、非常に新しい、快い刺激を与えてくれる、心躍らせる感覚である！

第一統領になる前の彼を眺めることもあったが、そのとき思ったのは――痩せて青

白く、首と頬にまっすぐな髪が垂れ下がり、こう言ってよければ、より強い印象を与え、まだ彼の前途に生まれてくる子供たち全員の中の一人と同じくらい無邪気そうだったということだ！　彼にひれ伏すヨーロッパ――王座――ワーテルローからセントヘレナ――イギリスの鉄の公爵――その頂点は、すぐにさらし台へと変化した！

"O corse à cheveux plats, que la France était belle
Au soleil de Messidor!"

「*おお、まっすぐ髪のコルシカ人よ、メシドールの太陽の下で、
フランスはどんなに美しかったことか！」

・　・　・　・　・　・

そして、ミラボーにロベスピエール、ダントンにマラーにシャルロット・コルデー！

＊おお、まっすぐ髪の……オーギュスト・バルビエの詩『偶像』より。「メシドール」は収穫月（共和暦の第十の月で、グレゴリオ暦の六月一九日頃から七月一八日頃まで）。

彼らのことも見てきた。そしてマリー・アントワネットと口汚い夫人たち、それに「ランバル公妃の美しい頭」（槍の先の！）……。カルーゼル広場へ向かう死刑囚護送車が通り過ぎるのを見て、月明かりでギロチンを見つめた――沈黙し、恐怖に怯え、心臓が口の中に込み上げるほどびくびくしながら……。

そのすべてのまっただ中で、マ*ダム・タッソーの馬鹿馬鹿しいさまよえる記憶が、血と報復の身の毛もよだつような夢に忍び込んできて、過去と現在と未来を説明できないような方法で混ぜ合わせ、私たちを涙ながらに笑わせる！

その後、私たちは（数回！）バスティーユの獲得に立ち会い、我がカ*ーライルを手にしながら、実際にその嵐の時間の嵐の場面のほとんどを目撃したのだ。そして私たちは、大笑いしながらよくこんなことを思ったものだった。否定する目撃者が一人もいない状態で不朽の歴史書を書くのは、どんなに楽しいことだろう、と！

さらに遡って、私たちは輝かしい時代のヴェルサイユに出没し、ルイ十四世宮廷の栄光のすべてを思う存分味わった！

何と堂々たる儀式だったことか、また私たちが参加しなかった何と膨大な王室行事があったことか！――そこでは、フランスのあらゆる美、機知、騎士道精神が、（まさに神の立ち会いのもとでのように）崇敬と畏怖にひれ伏し、この世界がかつて見た

ことのない最高君主に忠実な敬意を表していた――彼が厳粛に勅命を発するとき、まさにその王座の踏み段の上で私たちが傍観している間に。そして私たちは、彼の鼻の真下で大声で笑った――浅はかで愚かで尊大でちっぽけな俗物を――それに、その鼻を引っ張ってやりたいと熱望していた！　さらには、十九世紀のレガリア葉巻からの健康的な煙を吐きかけ、脂っこくてジャコウの匂いを発し毛が肩まで垂れている彼のかつらの、消毒も試みたのだ！

その愚かしいけれども魅惑的な時代で、私たちの記憶に残らないものはなかった。町、村落、川、森、野原。王宮、王子の城、飢えた農民の小屋。説教壇、舞台、サロン。港、野営地、市場。法廷、大学。工場、店、工房、鍛冶屋。居酒屋、賭博場、泥棒の巣。修道院、刑務所、拷問部屋、絞首台の庭。その他もろもろ！

連続するどの段階でも、かつては落胆や過度の不安や過度の重荷に苛まれた近代の私たちの魂は、現代の全線にわたる勝利の喜びと誇りと希望とでいっぱいになったのだ！　実は私たちは、華々しいボシュエの説教を聴き、モリエールの劇の一つに拍手

＊マダム・タッソー……十八～九世紀の蝋人形彫刻師マリー・タッソーのこと。ロンドンに蝋人形館を作り、その中にギロチンや落とされた首などを展示した「恐怖の部屋」があった。

＊カーライル……イギリスの歴史家。著書の中に『フランス革命史』がある。

喝采し、（過去のことはほとんど水に流して）ラシーヌ、コルネイユ、ボワロー、フェヌロン、素晴らしいラ・フォンテーヌ――この五人は、私たちのフランスでの無邪気な子供時代の無慈悲な迫害者だったのだ――を見たり聴いたりもしていたのだが、たとえそうだったとしても！

そして、さらに時の流れを遡り、私たちはモンテーニュとラブレーと親しく付き合い、マレルブには個人的に退屈し、ロンサールの教えを乞い、馬車でフロワサールのそばに乗り、フランソワ・ヴィヨンと一緒にいかがわしい場所に出入りした――なんと魅力的な貧民窟だったことか！……

フランソワ・ヴィヨン！　イギリスの吟遊詩人や今日のへぼ詩人を好む汝らよ、考えてみてほしい――汝らは、あの翻訳も模倣もされていない悲歌、不滅の『Ballade des Dames du Temps jadis［過ぎ去りし時代の婦人たちのバラード］*』の、翻訳者や模倣者になれるのだ！

それについて話す一方で、私たちが彼女らを見たことも、というか、彼女らのうちの何人かを見たことも、話しておいた方がよかろう――彼が見たことのなかったその美しい女性たち、彼が生まれる前にすでに去年の雪、les neiges d'antan［去年の雪］のように消えてしまっていた人々を！　大きな足のベルタ。善良なるロレーヌ人ジャン

ヌ・ダルク（今の故郷を彼女はどう思うだろう！）。とても博識なエロイーズ。かのピーター・エスベヤール、またはアベラール（私よりさらに運の悪いピーターだ！）は、彼女との愛のために、修道士の手によるあのような残酷な侮辱を被った。そして、あの傲慢で手に負えない、ネスルの塔の女王。

"Qui commanda que Buridan
Fut jecté en ung Sac en Seine…."

「袋詰めのビュリダンが
セーヌに投げ捨てられるよう命じた……」

そう、私たちは彼女たちをこの目で見て、彼女たちが話したり歌ったり、叱ったり冗談を言ったり、笑ったり泣いたりした声を、また祈る声さえも聞いたのだ！　そして、

＊**『過ぎ去りし時代の婦人たちのバラード』**……この後の記述からも分かるように、例の「されど去年の雪はいずこへ？」を含む詩だが、英訳されたのは十九世紀の後半らしい。

＊**あのような残酷な侮辱**……睾丸（こうがん）を切り落とされた。

善良なる読者よ、あなたがいつか見られるようにと、私は彼女たちをスケッチしておいた！　それに、彼女たちの美しさは、決して人を狂わせるようなものではなかったということをお伝えしておこう。フランスにおいてさえ、女性の美の基準は上がっているのだ。la très sage Héloïs［とても博識なエロイーズ］さえ、とてもあんな犠牲を払うだけの価値はなかった――だって、あそこですよ！　読者諸氏は、我慢して待っていてほしい。このすべては、ほとんど果てしなく続くのだが、いずれ時が来れば、世間が価格交渉をしたことのない私自慢の記述と挿絵を伴って世に出るだろうし、そうすれば世間はそれまでの歴史的記録物には決して付けなかったような価格を付けることだろう！

二十年以上にわたって来る日も来る日も、メアリーは膨大な日記をつけてきた（二人とも知っている暗号で）。それは現在私が持っており、そこには過去への二人の長い旅の全詳細が書き留められている。

同時に、私は来る日も来る日も（所長の好意により与えられた余暇の間に――）、「マグナ・セド・アプタ」でのあの不思議な夜々の間に本物から直に描くことができた人々と場所のスケッチを、繰り返し記憶から引き出してきた。私は、それらの正確さと彼らの肖像の忠実性を保証することができる。たぶん、それらの出来映えについては不

十分な点が多いことだろう。

（この自叙伝が導入にすぎない、将来の出版に向けての）彼女と私の仕事は、いずれも細心の注意と誠実さをもって行われた。時間も苦労も惜しまなかった。例えば、聖バーソロミューの虐殺だけでも、私たちは十七の異なる視点から研究することができ、二か月にもわたる不断の労力が費やされた。

時間の流れをどんどん遡るにつれ、仕事はある意味簡単になっていった。しかし、より一般化する必要が生じ、またしばしば時間と空間の不足のため、個人の代わりに類型を使う必要があった。すべての連続した世代とともに、私たちの祖先の数が（蹄*鉄の釘の問題におけるように）等比数列で、数の限界――すなわち、地球の総人口数だ――に達するまで増加したからである。七世紀には、（ヨーロッパは言うまでもなく）フランスで生きている人で、私たちの直系の先祖の系列から外れた人はいなかった。もちろん、子を持たずに死んだ人や、単なる傍系親族を除いて、だが。

私たちは、マンモスとホラアナグマと、生きて地に満ちるためにそれらを狩り、殺して食べている人間のかすかな影さえ、見ることができたばかりだ。

＊蹄鉄の釘の問題……マザーグースの『釘がないので』を指すか？　釘がないので蹄鉄が打てない、で始まって、小さな問題が次第に大きな問題を呼び、最後は国が滅びた、で終わる。

マンモス！

私たちは、彼が草を食んでいるときにその周囲や脚の間を歩き、横になって休んでいる場所でさえ彼を**通り抜けた**。静かで湿った朝に、小さな空洞の中で、焦げ茶色の霧を通り抜けるように。（適切な距離に離れてから）振り返って見てみると、再び紛うことなき姿がそこにあった。その向こうの、原始時代のぼんやりした風景の諸線を消し、空っぽの空に穴を開けるのにちょうど十分なほど濃い。畏怖で心をぞくぞくさせる、恐ろしい影――合成写真のようにぼんやりと不明瞭な――、それをともかくも見たことのある全員、必然的に私たちと、今生きているすべ

「マンモス」

ての人の祖先であるすべての人々（exceptis excipiendis［除くべきものを除いた］）によって、通常見られていたような、単なる**類型**。

そこにはそれが、毛むくじゃらの象の幽霊のような怪物が、立ったり横になったりしていた。私たちは、鈍くて冷たくてものすごく古い目の表情をほとんど見ることができたか、あるいは見たように思った――彼の毛皮には、ほのかに朽葉色の気味があることもほぼ感じ取れた。

メアリーは、尖った耳と尻尾を持った毛深い祖先にいつかは到達し、彼の生活が樹上性なのかそうでないのかを確認できると固く信じていた。そうなったら、彼女はどれほどの情熱的な興味をもって、彼に付いていき、研究し、表現したことだろう！　そして私も！　私はどれほどの熱烈な喜びと、さらにはどれほどの子孫としての敬意とをもって、彼の肖像をスケッチしたことだろう！――自分の非力が許す限りの、どれほど誠実な忠実さをもって。（見込みとは裏腹に、彼はかつて存在した中では最も魅力的で目を引く小さな獣であったかもしれず、今日野蛮人と称される多くの者よりも、その者を祖先とすることへの屈辱がはるかに少ない存在だったかもしれない）

ああ、だが運命は、それはなされるべきではない、また私たちが幸運にも発見できた道しるべの糸をたどるという楽しい仕事は、正式に訓練された別の者に委任するべ

きだ、という意志を持っていたのであった。

・　・　・　・　・　・

さて、死別の話をなるべく急いでお伝えすべきときが来た――今生きていようがもう死んでいようが、かつてこのような経験をした人間などまずいなかったほどの、あまりにも大きすぎる死別である。そして今は、私がそれをどのように切り抜け、分別を失わなかったかのみならず（これについては疑っているように見える人もいるが）、まるで有名なアカデミー会員か、俳優か、小説家か、政治家か、そのへんで外食している人のように――いかにして平然と饒舌（じょうぜつ）に、自分と世界に十分満足しつつ、穏やかに楽しげに自分の回想を書きながらここにこうしていられるようになったのかを、説明すべきときでもある。

メアリーと私が何世紀にもわたる魅惑的な旅に夢中になっていた共同生活の最後の数年間は、お互いの外面的生活をほとんど、あるいはまったく見ることがなかった。正確に言えば、私の方は彼女のそれをまったく見ることがなかった（というのは、彼女の方はまだ時々、私と一緒に刑務所に戻ってきたからだ）。私は、彼女が私たちの

夢の中に現れることを選んだときだけ、彼女を見ていた。

その根っこには、おそらく老けていくのを見られることに対する女性的な嫌悪感が彼女の方にあったのだろう。「マグナ・セド・アプタ」では、私たちは常に二十八歳かそこらだったのだ――いちばんいい年齢である。私たちは、ずっと続く若さの源泉を本当に発見して、それに酔っていたのだ！　それに私たちは、夢の中ではいつも見た目よりも若いとさえ感じていた。私たちは、すぐに元気を回復できる子供の気力と、彼らのフレッシュさとを持ち合わせていたのである。

私たちがしばしば死と別離とあの世の神秘について話したとしても、そのような偶発事件からかけ離れた人々が話すようにしか話さないものだ。ところが実際には、私たちにもほかの人々にとってと同じくらい、素早く時は過ぎ去ったのである。私たちは光陰が矢のごときことには、あまり敏感ではなかったというのに。

メアリーの、ずっと酷使されてきた溢れるような活力がダウンする日がやって来て、彼女はしばらくの間病気になった。それでも、それは私たちの通常の会合を妨げることにはならず、私たちが会ったとき、彼女にそれと分かるような違いは見られなかった。しかし実際には、彼女が以前と完全に同じようになることは決してなく、いつの日か別れるという恐ろしい可能性が会話の中でより頻繁に話題に上ったことは確かだ

と思う。悲しいことに、心の中ではあまりにも頻繁に。しかも、私たちの心は一つだったのである。

彼女は、もし私の方が先に死んだ場合、私が「マグナ・セド・アプタ」に持ち込んでいたものは皆（わずかだったが）、それ以上は存在できないことを知っていた。私の肉体に至るまで。魔法の窓のそばのソファにいつも仰向けに横たわっているそれ、私よりも前に彼女の方がたまたま私たちのいつもの生活に目覚めたときのそれ、あるいは私がはるか刑務所へと召喚された後に残されたそれ。

そして、もし彼女が死んだ場合、隣のソファの彼女の肉体のみならず、「マグナ・セド・アプタ」そのものすべてもまた消え失せることを、私は知っていた。その無限のギャラリーと庭々と魔法の窓々も、そこに含まれる驚異も何もかも一緒に、あたかも最初からなかったかのようになることを。

時々私は、眠りに沈むとき、そうなっていることを発見することになるのでは、というぞっとするような切迫した恐怖を感じることがあったが、その場所で目覚め、すべてがいつものようにそこにあることに気づいたときの変わらぬ天国的な喜びは、ますます強烈になるばかりだった。私は彼女の生気のない体のそばにひざまずき、人間が感じることのできるあらゆる種類のさまざまな愛で構成されているような愛の情熱

をもって、彼女を見つめたものだった。その中には、飼い主の女性に対する雄犬の愛や、幼獣に対する野獣の愛のようなものさえ含まれていた。

激しく過敏な不安と疼くような切迫感とともに、彼女の唇から最初の軽い呼吸が漏れるのを、頬に最初のかすかな薄臙脂色がさすのを、私は見つめたものだった。それらはいつも彼女の生への復帰を予告してくれるのだ。そして、彼女が目を開いて微笑み、その長く若々しい四肢を目覚めの喜びの中で伸ばすとき、感謝と安堵にどんなに狂喜したことだろう！

ああ、悲しいことに！　それはもう追憶なのだ！

待機

ついに、私の予感が現実のものとなる、恐ろしく忘れられない夜がやって来た。

私は「パルワ・セド・アプタ」の小さな物置で目覚めた。そこのドアは、いつもは私たちの喜びの宮殿と行き来できる。ところが、もうドアがなかったのだ――開口部のない壁があるばかりだった……。

私は、すぐに自分の独房で目覚め直した。とても言い表せないような状態で。何か間違えたに違いないと思い、多くの時間と努力を費やして再び眠りに沈んだが、結果は同じだった。開口部のない壁、「マグナ・セド・アプタ」は永久に閉ざされ、メアリーは死んだのだ、という確信。それから、刑務所生活への再度の恐ろしい帰還跳躍。

この夜の間にこういうことが何度か起こり、曙光（しょこう）が差し始めた頃、私は荒れる狂人となっていた。私は、最初に駆けつけた看守（私の「メアリー！」という叫びを聞きつけたのだ）をイベットスン大佐と勘違いして、彼を殺そうとした。彼はたいへんな大男で、私とほぼ同じくらいの力を持ち、年齢は私のわずか半分だったのだが、もしそうでなかったなら、私は彼を本当に殺してしまっていただろう。

ほかの看守たちが助けに来て、私は彼らのこともイベットスンだと思い込み、狂人

のように戦った。そのときの私は狂人だったのだ。

長い恐怖、脳炎、その他いろいろを経て正気に戻ったとき、私は刑務所の医務室から別の場所に移されたが、そこが今いる場所である。

私は突然理性を取り戻し、精神的苦痛を認識した。かつては被告人席に立って恥ずべき死刑宣告を受けた私のような者でも、夢にも思わなかったような精神的苦痛を。

私はすぐに自分に抜け落ちていた知識を確認し、かの有名なメアリー、タワーズ公爵夫人が、メトロポリタン鉄道の駅――で、自らの死に遭遇したことを聞いた（それが九日間以上も世人（せじん）の口の端（は）に上っていたことも）。

子供を抱いていた女性が、ちょうど列車が駅に入ってきたときに酔った男に押され、子供をレールの上に落としてしまった。彼女は続いて跳び下りようとしたが引き止められ、そこにやって来たばかりのメアリーが代わりに跳び下り、奇跡的な力と機敏さで子供をつかみ、機関車が通過するときには六*フィート道に上がることができた。

彼女は、列車の最後尾までその子を運ぶことができ、それからプラットホームの上に助け上げられた。それは彼女が乗る列車で、彼女は客車に乗ったのだが、次の駅に着く前に死んだ。彼女の心臓（しばらく前から病気であったらしい）は止まっており、

＊六フィート道……線路間の安全地帯。線路間は最低でも六フィート空ける決まりがあった。

すべてが終わった。

こうしてメアリー・セラスキアは、五十三歳で亡くなったのである。

・　・　・　・　・　・

私は何週間も、身体的には回復期にあったが、口が利けず、乾いて涙も出ず、絶望した状態で、一瞬の安らぎも訪れなかった。クロラール*で得られた夢のない眠りを除いては。私にはそれが大量に投与されたのだ――その後、覚醒！

私は話すことも質問に答えることもせず、ほとんど動くこともなかった。私は一つの固定観念を持っていた――自殺のそれである。不成功に終わった二度の試みの後、私はひどくがっちりと束縛され、昼夜監視されたため、それ以上の試みは無理だった。私には、つまようじもボタンも普通の荷造り紐（ひも）の一片も、信用して預られけることはなかった。

私は自分を餓死させようとし、あらゆる固形食を拒絶した。しかし、耐えがたい渇きが、提供されたいかなる液体の拒絶も不可能にし、私はミルク、牛肉のだし汁、ポートワイン、シェリー酒で誘惑され、それらが私を生かせ続けた……。

・　・　・　・　・　・

私は、夢を見たいという願望を完全に失っていた。

ある日の午後にやっと、オートゥイユの池をもう一度見たいという、奇妙で不可解で抵抗しがたいノスタルジックな欲望が、胸に甦った――たった一度だけ。これを最後に、ミュエット通りを通り、城壁のそばを過ぎて、そちらへと歩きたい。

それは、就寝時刻を待つのが拷問になるほど私の中で大きくなっていき、焦燥感で気が狂いそうになった。

ようやく待ち望んでいた時間になったとき、私はもう一度、長いこと試みなかった以前の姿勢で横になった（拘束具のため、できるだけ近い姿勢といったところだが）。私の心は、ブローニュの森への入り口とパッシー大通りを分ける古い石の門である、ラ・ミュエット門に向いていた――イギリスのテンプルバーのような門である。

それは四十五年前に解体された。

私はすぐにそこ、大通りがポンプ通りとちょうど出会う地点にいる自分に気づき、

＊クロラール……催眠剤・鎮痛剤。

門をくぐって森の方を見た。

曇って重苦しい空模様の秋の日だった。周囲に人はほとんどいなかったが、右手側の小さなレストランでは陽気な結婚披露宴が開かれていた。それは八百屋のアシル・グリゴゥと、セラスキア家のハウスメイドであったフェリシテ・ルノルマンとの結婚を祝するものだった。私は、不意にこのすべての記憶が甦り、ミムジーとゴーゴーがそのパーティに出ていたことも思い出した――それどころか、後者はpremier garçon d'honneur［新郎の付き添い］で、その役の少年は、すぐに新婦のガーターを盗み、それを細かく裁断して、舞踏会が始まる前に男性客のボタン穴を飾るという任務を与えられたものだった。

私の左側のアーチ道には、酷使され尽くした惨めな老馬たちが、根気よく客を待っていた――膝が折れ、肺気腫で、またがられたり、馬勒（ばろく）を着けられたり、貸し出されたりする準備をして――クローリス、ミュラ、リゴレットなどといった名の。私は彼らを知っていて、半世紀近く前にその全部に乗ったことがあった。ずっと前に死んだ、昔の惨めな影たち、本物そっくりで、現実のようで、哀れを催す影たち――彼らを見ると、「私の心は引き裂かれた」！

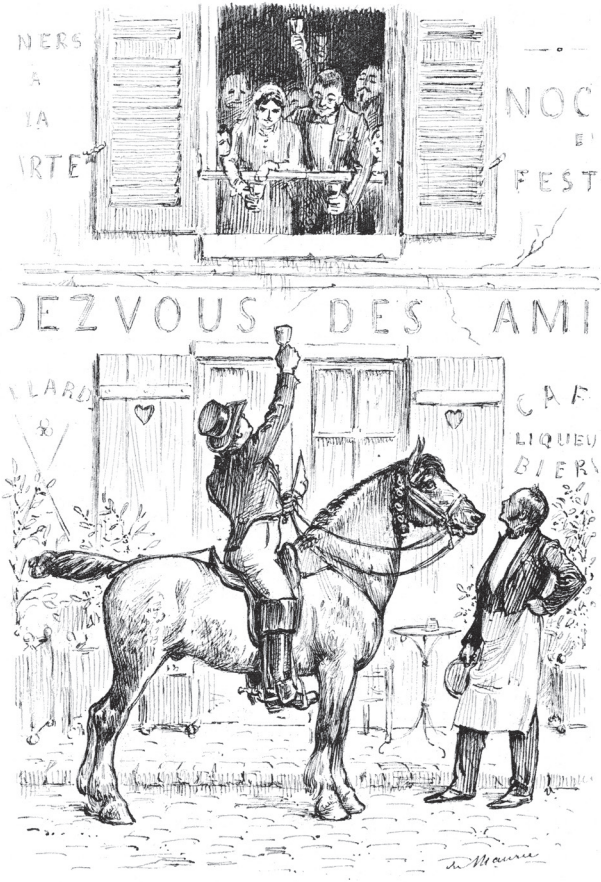
青い上着と銀のボタンの、ラミという名のハンサムな伝書使が、糟毛色（かすげいろ）の馬に乗っ

て、大きく鳴り響く鈴の音と、柄(え)の短い鞭の音とともに、サン＝クルーから早足でやって来た。彼はそのレストランに止まり、白ワインを一杯所望し、鐙の上に立ち上がって、グリゴゥ夫妻に大声で陽気に呼びかけた。彼らは二階の窓に現れたが、とても幸せそうに見えた。そして彼は二人の健康を祝して乾杯し、二人は彼にそれをした。私は、彼らの背後の群衆の中にいるゴーゴーとミムジーを見ることができた。私は、以前もかなり頻繁に思ったのだが、自分はどうして外からこのすべてが見えるようになったのだろう――どうすればゴーゴーとは別の視点から見えるのだろう――と、また少し疑問に思った。

その後、伝書使は慇懃(いんぎん)にお辞儀をして「お幸せに！」と言ってからチュイルリーに行く途中の大通りを駆け下りていき、結婚式の客たちは歌い始めた。彼らは、次のように始まる歌を歌った――

"Il était un petit navire,
Qui n'avait jamais navigué…."

「小さな船がありました、



"À VOT' SANTÉ!"「[乾杯！]」

一度も航海したことのない……」

私はそれをすっかり忘れていて、最後まで聴いて、とてもきれいだと思った。そして、単調で機械的な様式に興味を持ち、その点から、サッカレーの有名な『リトル・ビリー』というバラードの原作に違いないことを発見した。後者は、何年も経ってから初めて耳にしたものである。

次の歌詞、すなわち詩の終わりが来ると――

"Si cette histoire vous embête,
Nous allons la recommencer,"

「このお話が気になるなら、
もう一度繰り返そう」

私は先に進んだ。たぶんこれが、夢の国での最後の散歩になるだろう。夢の時間は不確実だし、私はそれを最大限活用して、周囲を見て歩くことにした。

私は、一種のカジノであるラネラの方に歩いた。そこでは、日曜日と木曜日の夜によく舞踏会と芝居が催されていた（それからロッシーニが彼の後半生をそこで過ごし、その後は、洗練されたたくさんの小さな別荘に席を譲るために解体されたと教わった）。

エラール氏の公園の向かいの牧草地では、サンドーの男子生徒たちが*ラウンダーズ――バル・オ・カン――をプレイしていた。そこから私は、木曜日の午後、半休日であろうと結論づけた。もし彼らがきれいなシャツを着ていたなら（今の彼らはそうではない）日曜日で、全休日であっただろう。

私は彼ら全員と、二人の舎監あるいは門番であるラルティーグ氏およびle petit Cazal［カザールの息子］を知っていた。しかし、もはや彼らを気にかけたり面白いと思ったり興味を抱いたりすることは、露ほどもなかった。

ラネラの向かいで、四輪馬車の昔の御者たち数人が、*ブションで平和に時間を潰していた――スー硬貨を別のスー硬貨でコルクから叩き落としていた――大きくて厚いスー硬貨とダブルのスー硬貨はかなり時代遅れだった。かなり良い試合で、私はそれをしばらく見て、ずっと前に死んだその遊び手たちを羨ましく思った。

近くには小さな木造小屋やバラックがあり、きれいに塗装され、ガラスをはめられ、屋根は小さな三色旗で飾られていた。それは二人組の老婦人、マネットおばさん

とマネット婆さん――それまで見た中でいちばん年寄りの女性二人だ――のものだった。彼女たちは商売に非常に熱心で、一サンチームもツケで売ることはなかったものだ――イギリスの少年たちにさえしなかった。二人は莫大な金持ちで、まったく身寄りがないと言われていた。ああ、彼女たちはもう亡くなったに違いない！　そう思った。そして、私は二人をじっと見つめ、その生き生きとした様子や生きていく中で手に入れた喜びを訝しんだ。二人はたくさんの物を売っていた。ヌガー、*パン・デピス、ミルリトン、フープ、ドラム、やかましいバトルドア、シャトルコック。小さな十スーの手鏡は亜鉛できれいに装丁され、開閉することができた。

私は、外にぶら下がっていたそれらの一つで自分の姿を見た。年老いて、やつれて、青白く――顔は下手くそにひげを剃っていた――、髪はほとんど白くなっていた。以前の夢では年を取ったことなどなかったのに。

*ラウンダーズ……野球に似たゲーム。バル・オ・カンはそのフランスでの呼び方。

*ブション……コルク倒し遊び。

*パン・デピス……「パン・デピス」はライ麦粉・蜂蜜・香辛料で作られるケーキ。「ミルリトン」は二七〇ページに既出。『くるみ割り人形』の「葦笛」であるが、実際はあの曲のフルートのようなきれいな音は出ない。「フープ」は、おそらくフラフープのことだろう。「バトルドア」は、バドミントン・ラケットの前身のようなもの。

私は城壁の門を通って外側の斜堤（しゃてい）（当時は草木一本なかった）の上まで歩き、オートゥイユの池の方向を目指した。その場所は、木曜日のためまったく人けがなく、単調に見えた。悲しくて地味な散歩だった。私の憂鬱は耐えがたいものだった――心は完全に壊れ、体はあまりにも疲れていて、自分を引きずっていくことがかろうじてできるというくらいだった。以前の私は、疲れるとはどういうものなのか、夢の中では知らなかったのだ。

私は、そのすべてが真新しいピンク色の有名な城壁を見つめた。足場はほとんど外されておらず――そのいくつかはまだ、城壁と斜堤の間の乾いた溝の中にあった――、この小さなレンガと花崗岩の壁が、三十年後*（二十年前）、ドイツ人をパリから遠ざけるのにどれくらい役に立ったのだろうかと考えて、私は微笑んだ。狭い部分に石を投げようとしたところ、もう石が投げられないことに気づいた。それで私は座って休んだ。私の脚は何て細いのだろう！　それに、何て惨めな服装か――油で汚れ、染みが付き、すり減って、粗悪に膝が繕われた、古い囚人ズボン――そして、何というブーツ！

これまで夢の中で、私はみすぼらしい身なりになったことはなかった。

これを限りと反対側へぶらついていき、そびえ立つ堡塁（ほうるい）からà la hussarde［軽騎兵

流に」真っ逆さまに落ちて永遠に自分を殺すことが、なぜ私にできなかったのだろう？　ああ！　私は夢を曇らせ、たぶん惨めな拘束衣に身を包んで目を覚ますしかないのだ。そして私はもう一度、猛烈に mare［池］が見たかった。

私は考え込んだ。ポケットを石でいっぱいにし、最後にオートゥイユの池と周囲をよく見た後、身投げしてみたらどうか。おそらく、今の弱った状態での感情的ショックが、本当に睡眠中の自分を殺すかもしれない。結果が

＊三十年後（二十年前）……プロイセンによるパリ包囲が一八七〇年なので、夢の中は一八四〇年、外界は一八九〇年ということになるか？

「私は座って休んだ」

どうなるか、誰に分かる？　とにかく、やってみる価値はあった。

私は立ち上がり、池まで重い足を引きずって歩いた。そこには人けがなかった。たった一人の女性の姿を除いては。その人影は、黒と灰色の地味な服を着て、古い柳のそばのベンチに動かずに座っていた。

私は彼女の方へぶらぶらとゆっくり歩きつつ、石を拾ってはポケットに入れた。白髪交じりで中年の、とても色の濃い眉を持つ並外れた長身の女性で、その素晴らしく美しい目が私を追っていた。

それから私が近づくと、彼女は微笑んでキラリと光る白い歯を見せ、それと同時に目は皺になってほとんど閉じられた。

「おお、神よ！」私は悲鳴のような声で叫んだ。「メアリー・セラスキアだ！」

・　・　・　・　・　・

私は彼女の方へ走り――彼女の足元にひざまずき、彼女の膝に顔を埋め、ヒステリックな子供のようにすすり泣き、その間、彼女は子供をなだめるように私をなだめようとした。

しばらくしてから、私は彼女の顔を見上げた。それは年老い、やつれ、青白く、ほとんど白髪、私の顔と同じようだった。それまでそんな彼女を見たことはなかった。彼女は常に二十八歳だったのだ。しかし、年齢は彼女によく合っていて——彼女はかなり慈悲深げな美しさと平静さと崇高さを漂わせていたため、私は畏怖を感じた——、素早く冷たい波が私の背骨を走り下りた。

彼女のドレスとボンネッ

「メアリー・セラスキアだ！」

ト帽は古くくたびれて、手袋は繕ってあった――手首の周囲に毛皮の付いた仔山羊革(こやぎがわ)の手袋である。彼女はそれを脱いでから私の手を取り、自分のそばに私を座らせ、しばらくの間、黙って懸命に私を見ていた。

とうとう彼女は言った。「ゴーゴー、mio［あなた］。私は手の感触を通じてあなたのことが全部分かるわ。私の手の感触はあなたに何も伝えない？」

それは彼女の莫大な愛のほかは何も私に伝えなかった。それは私が欲したすべてであり、私はそう言った。

彼女はため息をついて、言った。「こういうことになるんじゃないかと心配していたの。古い回路は壊れて、直すことはできない――もうだめなの！」

私たちはもう一度頑張ってみた。しかし、無駄だった。

彼女は周囲を見回したり木のてっぺんを見上げたり、あらゆる場所を見た。それから再び私を、かなりもの憂げに、震えながら見て、ついに話し始めた。最初はためらいがちで、いつもの彼女とは異なるやり方だった。しかし、見たところすぐに彼女は彼女らしくなり、昔の素早い微笑みと笑い、幸福そうなわずかな肩のすくめ方と仕草、数か国語が入り混じった風変わりな会話表現（これについては、私はいつも綴ることができないので省略している）を取り戻した。飾らないシンプルな話し方、流暢で磁

力あるエネルギー、愛嬌のある共感的な声の抑揚、その厳粛さから陽気さへの素早くユーモラスな変化――こういうこと全部が、彼女が言ったことすべてに、言いたかった以上のあらゆることをかなり暗示させることになった。

「ゴーゴー、あなたが来ることは分かっていたの。私はそれを**望んでいた**！　あなたはどんなにひどく苦しんだことでしょう！　そんなに痩せてしまって！　あなたを見るのは衝撃だったわ！　でも、それももうないでしょう。私たちはこのすべてをすっかり変えることになるわ。

ゴーゴー、ほんの数時間程度でも、戻ってくるのが私にとってどれくらい難しいか、あなたには分からないでしょうね。私、あまり長い時間は頑張れないからなの。手首で窓枠にぶら下がっているようなものなのよ。この時間は、ヘーローがレアンドロスに向かって泳いでいるとか、ジュリエットがロミオの所によじ登っているとか、そんな感じなのよ。

これまで誰も戻った人はいなかった。

この私は、以前の私の哀れな抜け殻。それを通して私を知覚してもらうために、たいへんな苦労をして組み上げたもの。私がいつもあなたに対してそうあったものに、もう一度自分を作り上げることはできなかった。私はこれで満足しなければならない

し、あなたもそう。これは私が死んだときの服なの。でも、あなたはすぐに私だと分かってくれたわね、愛するゴーゴー。

私は長い道をやって来た――それはもう長い道を――あなたとabboccamento［会談］するために。言いたことがすごくたくさんあった。それで、私たちがここに二人ともいて、以前のように手を取り合っている今、それが何だったのか、私には理解することさえできない。私が理解できたとしても、**あなたに**理解させることはできないかもしれない。でも、あなたはいつか知ることになるでしょう。何も急ぐ必要はないの。

私が死んでからあなたが考えたことは、もう全部知ってるの。少なくとも、あの回路のあなたの共有部分は壊れていない。あなたが石を拾ってポケットに入れた理由も、もう私には分かっている。**そんなことを**二度と考えてはだめ――決して考えないで。もっと言えば、そんなことをしても無駄なのよ、かわいそうなゴーゴー！」

そのとき、彼女は空を見上げ、もう一度辺り一帯を見渡し、以前の幸福そうなやり方で微笑み、両手の甲で両目をこすり、ずいぶん長い話に取りかかろうとしているように見えた――abboccamento［会談］に！

・

・

・

・

・

・

彼女が言ったすべての中で、私はわずかな断片しか書くことができない――覚醒時に思い出して理解できるものは、何であれそうなってしまう。私が忘れている箇所には、小さな点の線を置くことにする。眠って夢を見ているときにだけ、私は残りを思い出し、理解することができる。そのときは、それは皆非常に単純なものに思える。私はよく心の中で考える。「心の中にしっかり焼き付けて、よく選ばれた言葉――**彼女の言葉**――で表し、それを暗記しよう。次に、注意深く目を覚ましてそれらを思い出し、本の中に全部書き留めよう。それらが私にしたことのすべてをほかの全員のために行い、疑念を幸福な確信に変え、絶望を忍耐と希望と高揚感に変えるために」

しかし、ベルが鳴って目が覚めると、記憶は私を裏切る。「すべてのことが私たち全員にとって良くなるだろう」という知識、また「月が欲しくてため息をつくような人でなければ、十分満足するような」知識以外は、何も残っていないのだ。

ああ、この知識。私はそれを他人に分け与えることができない。私以前に生きていた多くの人同様、私には証明できない――断言することだけはできるのだが……。

・　・　・　・　・　・

「何て奇妙で古めかしい感じなのかしら」彼女は始めた。「目と耳と、こういうすべてのもの――私たちの近くにあるものに対して開かれた小さな窓――を再び持つことは。それらはとても不器用な装置なの！　私はもうそれらを忘れてしまっているのよ。

・　・　・　・　・　・

見て、古いお友達のウォーターラットが土手の下を行くわ。私たち、彼をよく太っちょ親父――le bon gros père――って呼んでいたわよね。彼は、私の眼底を横切って逆方向に上下に動いている小さな平面的な絵でしかない。彼が遠くに行けば行くほど小さく見える。二、三百ヤード離れたら、私たちは彼がまったく見えなくなるでしょう。現状では、私たちは彼の外側、一度に一側面だけを見ることができる。それでも彼は、作るのに何百万年もかかった重要で素晴らしいものでいっぱいなの――私たちと同じように！　そして、彼をしっかり見るためには、私たちは彼をまっすぐ見つめなければならない――その場合、私たちは自分の背後や周囲にある物を見ることができない――もし暗ければ、私たちは何も見ることはできないでしょう。

何て貧弱な目！　水でいっぱいの小さな袋、中には小さな虫眼鏡、後ろにはキンレンカの葉――光を捕らえて感じるためのもの！

ある高名なドイツの眼科医が以前パパに言っていたのだけれど、もし自分の器具製作者が人間の目のような性能の低い機械を送ってきたとしたら、自分はそれを送り返して請求書の支払いを拒否するだろうって。私も、今ならそれが理解できる。それでも、目がなければ、私たちはこの地上のどこにいることになったのでしょう？　私たちの誰かがかつてこの地上でそれを持たなくなっていたとしたら、その後の私たちはどこにいたんでしょうね？

・　・　・　・　・　・

私はあなたの愛しい声を聞くことができるわ、ゴーゴー、この両耳で。なぜ二つ？　なぜたった二つなの？　自分が欲しいもの、あるいは考えていることや感じていることを、あなたは自分が教わった音声で私に伝えようとする――英語とフランス語で。もし私が英語もフランス語も知らなかったら、それは何の役にも立たないでしょう。言葉なんて貧弱なものよ。あなたは自分の肺を息で満たして、喉の小さなスリットを

震わせて、発言をして、それが空気を震わせる。その空気は、私の頭の中の一組の小さな鼓膜を震わせる――とても複雑な装置で、後ろにたくさんの骨がある――それで、私の脳はあなたが言いたいことを大まかにつかむ。何という回りくどい方法、何という時間の無駄なんでしょう！

・　・　・　・　・

残りのこともみんなそう。私たちは直接匂いを嗅ぐことさえできない！　犬は私たちを笑うでしょう――犬だって多くを知っているわけではないけれど！

そして、感覚！　私たちは暑すぎたり寒すぎたりを感じることができ、それが時々体調を悪化させ、死に至らしめることさえある。でも、嵐の到来、北と南、新月や真夜中の太陽や真昼の星がどこにあるのか、あるいは自分たちの測定力では今が何時なのかさえ、私たちは感じることができない。目隠しされたら家に帰ることさえできないわ――それは鳩であっても無理で、燕でも梟でもできない！　できるのはモグラか、たぶん杖で弱々しく探りながら歩く盲目の人くらいでしょう。その人も、それ以前にその道をすでに歩いたことがあった、という条件づきでね。

それに、味！　これについては、蓼食う虫も好き好きってよく言われるわね。さらには、これ全部を維持するためには、食べて、飲んで、眠って、その他もろもろをする必要がある。何という重荷でしょう！

・　・　・　・　・　・

そして、あなたと私は、これまでに手を触れることでお互いの内的存在への道を見つけ出した、私が知っているただ二人だけの人間。そのときは、私たちはまず眠る必要があった。肉体は何マイルも離れていた。**そのことは**問題ではなかった。覚醒しながらそれをすることはできなかったから――決して。死ぬまで抱き合っても！

・　・　・　・　・　・

ゴーゴー、私、あなたに話すべき言葉を見つけることが**どうやっても**できないの。**私**がこれまでに知ったどの言語にも、それを伝えられるものは一つもないから。でも、私がいる場所は、耳や目やその他のものがみんな**一つ**になっていてね、おお、その一

つの中には、さらにほかにもどんなにたくさんのことがあることか！　伝書鳩が知っていたこと、蟻やモグラや水生甲虫やミミズや、葉や根や、磁石や――白亜の塊さえ、さらにたくさんのものが知っていたこと。音を、聞くことと同じように、見たり、嗅いだり、触れたり、味わったりできるし、その逆もできる。これはとても単純なのだけれど、今のあなたにはそう思えないかもしれない。

音！　ああ、何という音！　地上の厚い大気は**その音**のようなものの伝導体にはなれず、地上の鼓膜では受け手になれない。音がすべて。音と光は一つなの。

・

・

・

・

・

・

で、それは一体何を意味しているか？

私は、自分がそちらにいたときにはそれが何を意味するかを知っていたし――少なくともその一部は――、数時間以内にもう一度知ることになるでしょう。でも、今の私の哀れな古い地上の脳は、お婆さんがナイトキャップをかぶるように、私がもう一度身に着けなければいけなかったものなのだけれど、目や耳と同じようなものなの。今だけは地上のものを理解できる――ゴーゴー、まだ地上にいるあなたが理解できる

ことを。私は忘れている、人が普通の夢を忘れるように、時々なぞなぞの答えや歌の最後の節を忘れるように。それは舌の先まで来ている。でも、そこにくっついてしまって、それ以上出てきてくれないの。

覚えておいて。私が今生きているのはあなたの脳の中だけ――あなたの地上の脳は、幸福だった何年もの間、たった一つの私の家だった。私の脳があなたに対してそうであったように。

私たち、何て快適な場所にいたのでしょう！

・　・　・　・　・

でも、これは分かっている。人は、そういうもの全部を、一度は持たなければならない――脳、耳、目、その他のものを――地上では、ね。Il faut avoir passé par là!［そこを通り抜けねばならない！］、そうでなければ、人間や獣にとっての来世はあり得ないか、考えられさえしないでしょう。

生まれつき耳が聞こえない人に楽譜をどう理解すればいいか、生まれつき目が見えない人にどう色を感じればいいか、教えることはできないわ。かつて耳が聞こえてい

たベートーヴェンにとっては、聴覚障害などそれほど大きな問題ではなかったし、ホーマーやミルトンにとっての視覚障害も同じことでしょう。

私のささやかな例え話、理解できるかしら？

・　・　・　・　・　・

音と光と熱、電気と運動、意志と思考と記憶、愛と憎しみと憐れみ、生まれて生きたいという願望、生きているものと死んでいるものすべての、互いに近づきたい、またさっと離れたいという切望――そのほかのたくさんのこと！　帰するところはみんな同じなの――『C'est comme qui dirait bonnet blanc et blanc bonnet［白い帽子と言うか、帽子の白いのと言うか、みたいなもんだ］』って少佐殿がよく言っていたわ。『C'est simple comme bonjour!［簡単なことなんだよ！］』ってね。

私がいる場所ではね、ゴーゴー、地上で輝く太陽を聞くことが、それが花を咲かせ、鳥を歌わせ、誕生と結婚と死のための鐘を鳴り響かせるのを聞くことができる――その死も、幸せな幸せな死なの、それをあなたに理解してもらえればいいのだけれど――『C'est la clef des champs!［それは自由への鍵！］』。

太陽は月と惑星を照らし、私はそれを聞くことができ、それらが返してよこす谺を聞くことができる。まさにその星々が歌っているの。すごく遠くで！　それでもそれは、私たちとそれらの間にいるような聴衆ともども、聞く価値が十分ある。そしてそれらは、その歌を聞かせる術は持たない……。

私、ここではそれを聞くことができないの――少しも――今は耳を付けているから。そのうえ、地上の風の音が大きすぎるし……。

ああ、言ってみれば、それは音楽**なのよ**。でも、人類にはそれが全然聞こえていない――耳が邪魔しているから！……

深い海底の暗闇と泥の中に棲んでいる、あの哀れな、目に見えない平たい魚たちは、地上で人類が作る出す音楽を捉えることはできない――貧弱な音楽だけれども！　でもね、太陽光線の翼やひれに載って運ばれるすごくかすかなざわめきが、真昼に数分間で彼らまで届き、彼らが自分の棘にそれを感じるための微小な髄を持っていて、その間に入るべき耳も目もないというのであれば、彼らは誰よりも幸福なのよ、ゴーゴー。彼らのあんな冴えない生活でも、人のそれよりは恵まれているの。

でも、残念ながら、今のところは！　彼らは目と耳の記憶を持っていないし、それがなければ小さな棘の髄も役に立たないでしょう。彼らは待つことに甘んじなければ

ならない、あなたと同じように。

目が見えない人や耳が聞こえない人はどうかって？

おお、そうね。地上のかわいそうな聾唖者や生まれつき目が見えない人にとって、là bas［あちら］は何の問題もないわ。彼らは過去の目や耳や残りの部分すべてで思い出すことができる。しかも、それはもはや**それら**じゃない。**それら**はないの！　それは些細なことでしかない。

・　・　・　・　・

あなたも、私たちと太陽や星々の間にある全宇宙が、まるで、あんまり小さすぎてどんな顕微鏡でも見ることができない――この世の何よりも小さい――小さな棘の髄でいっぱいになっているようなものだって、ぜひ理解するよう努めてほしい。全宇宙はそれで満ちていて、肩を寄せ合って――ほとんど箱の中の鰯と同じくらい密接して――いて、まだ余地がある！　それでも、一滴の水でも、透明性を損うことなくそのすべてを保持するでしょう。それらは皆、地球やその他の場所で何らかの形で生きていたことを覚えていて、それぞれがほかのものたちが覚えていることを知っている。

私には、こういう例え話しかできない。

かつて、その宇宙全体は石でいっぱいなだけで、それらが突進し、ぐるぐる回り、互いにぶつかって砕けて、自分自身の速さによる白熱で溶けて蒸発していたのね。でも今は、石よりも良いものが大量に存在している。それは保証できるわ！　それは集まって、蓄えられ、混ぜ合わされ、ふるいにかけられ、選別され続けている――何百万年もの生の、貴重な、不滅の作物が！

・　・　・　・　・　・

それと、私が知っているのは、人がこの地上で、自分の人生を長く精力的に完全に生きれば生きるほど、すべてがいっそう良くなるってこと。それがあらゆることの基礎なの。けれど、もし人がそれを知ることなく、死んだとき自分に何が待ち受けているのかを推測できてしまったら、その人は生きるための忍耐なんか持たないでしょう――待つことをしなくなるでしょう！　だって、一体誰が進んで人生の重荷を背負(せお)うとするかしら？　彼らは、あなたがしたように、すぐにポケットに石を入れて、いちばん近い池に向かって突進することでしょう。

それをやったらおしまいよ！

・　・　・　・　・　・

失われるものは何もない――何も！　シェイクスピアみたいな人でも表現する言葉を見つけられなかったような、言語に絶した高度で儚い思考から、ミミズのごく小さな感覚に至るまで――何も失われていない！　光を感じる葉の感覚も、鉄鉱石が極を示す感度も、母なる地球の火山や電気の振動たった一つさえも、何も。

私たちにとって、あらゆる知識は地球上で始めざるを得ない。それは、私たちのこの貧弱なシステムにおいてはいちばん好ましい惑星で、今現在と今後わずか数百万年の間はそうでしょう。ほかには二つか、たぶん三つくらいしかない。でもそれらにしても、あまり重要ではない。『Il y fait trop chaud — ou pas assez! [暑すぎるか――あるいは熱が足りないか！]』というわけで、地球に比べて不出来なのね。

太陽、父なる太陽、le bon gros père [善き大いなる父] は、母なる地球に生命を降らせる。あなたも知るように、それは最初、貧弱な小さい生命だった――草や苔（こけ）や、わずかに身をくねらせる透明なもの――消化器官だけの。これは完全に真実なの！　それが私

たちの出所なのよ――シェイクスピアも、あなたも、私も！

・　・　・　・　・　・

個人個人が死んだ後、地球は、繰り返し使用できるよう個人個人それぞれの土を保持している。私が知る限りでは、太陽に個々人のエッセンスが降って戻る――あるいはその近くのどこかに――貴重な水滴が海に戻るように、それが混ざる場所に。世の中の何かに関わったりそれを見たりして、五つの小さな心の働きの使い方を学んだ後で――そのすべてを覚えたままで！　そう、あなたのお父様がよく歌っていたかわいい歌の中の、追放されてさまよっているかわいそうなあの小さい水滴みたいに。それはいつも、最後にはどうにか家を見つけ出すことができる――

'Va passaggier' in fiume,
Va prigionier' in fonte,
Ma sempre ritorn' al mar.'

『川を行く、
泉に捕まる、
けれどもいつでも海に戻る』

・　・　・　・　・　・

あるいは、小さな塩粒がオートゥイユの池に注がれ、水で溶けてそれと混ざり、オートゥイユの池自体が限りなく塩になるまで、互いに溶け合い混ざり合うようなもの。
太陽というオートゥイユの池が、地球という塩、地上の生命と知識という塩で飽和するまでは目的は成就しないでしょうし、成就した場合、古い母なる地球は、月のように燃え殻になるほどからからに乾いているかもしれない。月のように、その任務は終わるでしょう――『adieu, panier, les vendanges sont faites! ［さらば、籠よ、葡萄の収穫はなされた！］』
そして、太陽とその周囲の命の大洋については――ああ、それは**私**の理解を超えている！　でも、太陽もまた乾くでしょうし、そうしたら、その命の大洋はきっと別のもっと大きな太陽たちに引き寄せられるのでしょう。何もかもが多かれ少なかれ同じ

道をたどるように見えるから。クレッシェンドしかない、どこでも、いつまでも。

・　・　・　・　・　・

あなたは、それが大洋には少しも似ていないこと、水滴や塩粒や小さな棘の髄にもまったく似ていないことを理解しておく必要がある。でも、私が言いたいことの片鱗を示すには、こんな貧弱な比喩によるしかない。地上の物事でよくやっていたような、ただ手を触れるというやり方では、あなたはもう私の言うことが理解できないから。

・　・　・　・　・　・

ゴーゴー、私はただの小さな水滴で、まだその宇宙の海に分解して溶けきることができない塩の一粒でしかないの。私は例外なのよ。

それは、まるで長くて見えない鎖が私をいまだに地上に縛り付けているようなもので、私はその反対側でぶら下げられた、一種の檻のような小さくて透明なロケットの中にいて、それは私に周囲のことを見たり聞いたりはさせてくれるけれども、溶けき

ることからは私を防いでいる。

そして私はすぐ、このロケットがまだ私の中にいるあなたの半分でできているのに気づいた。それで私は分解することができなかった。私の半分がまったく死んでいなかったから。その鎖が私を、私があなたの中に残している私の半分と結び付けていて、そのため私の半分は実際に分解されるためにそこにいることがなかった……私はかなり紛れてしまっているの！

でも、おお、私の心の真実の愛、私は自分の鎖を、そのもう一方の端のあなたともどもどんなに抱き締めたことか！

あなたには想像もつかないような苦痛と努力を払って、私は鎖に沿ってあなたの所に這うようにやって来た。自分が紡いだ果てしない糸の上の蜘蛛のように。私が持っているような愛は死よりも強いの、本当に！

・　・　・　・　・　・

私は、私たちが永遠に離れられないことをあなたに伝えに来たの。二重の小さな棘の髄が一つになったもの――『フィリップシェン』ね！――小さな塩の一粒、水滴の

一滴。**私たち**が離れることはないでしょう――私にはそれが見える。でもね、こんなに並外れた幸運は、今まであなたと私の二人だけにしか運命づけられていないみたい。それは完全に私たちの行いが招いたことね。

でも、あなたが私と一緒になるまでは、あなたと私は完全にはなれないし、あの宇宙の大洋に溶けきることも自由にできないし、一つになって、あるべき全体で役目を果たすこともない。

その時期は――一瞬たりとも慌てることはないわ。時間というものはない。そんなものはないと私も信じ始めている。la-bas［そこでは］、年と日の間にほとんど違いがないの。そして、空間に関しては――ねえあなた、一インチは一エル*と同じようなものなのよ！

物をそんなふうに測定することはできない。

小さな虫の生涯は、人間のそれと同じくらい長い。だって、彼らも自分の務めを学んで、自分にできるあらゆる悪事を働き、戦い、愛の営みをし、結婚し、自分の種（しゅ）を繁殖させ、次第に幻滅や退屈を覚え、病気になり、死に甘んじる――ある夏の午後の間にこれ全部を経験するんだから。平均的な人間は、これより多くのことを特にする

＊エル……一エルは四五インチ、約一一四センチメートル。

こともなく、七十歳まで生きることができるわよね。

それから、その虫の中にも背の高いのや、賢くて見栄えのいいのや、その個体特有の強い力と狡猾さを持つのがいる。そういう個体は、ほかの仲間よりも少しだけ速く遠くまで飛ぶことができ、一時間長く生きてほかの生き物の血をもう一滴丸飲みすることができる。でも、それだってそんなに大きな違いはないわ！

・　・　・　・　・　・

そう、時間と空間は、『何もない』とちょうど同じ意味なの。

でもあなたにとっては、やるべきことがたくさんあるのだから、多くの意味を持つ。私たちの共同生活は打ち明けられる必要があるわ――現実よりもはるかに現実的だった、見かけは長くて甘い生活は。ああ！　そのとき私たちにとって、時間や空間はどこにあって、何だったのでしょう？

・　・　・　・　・　・

だから、あなたは私たちが見つけ出したものとその方法を、全部伝えなければならない。その方法は、**私たち**よりも優れた脳を持ち、優れた訓練を受けたほかの人たちに示されなければならない。人類にとっての価値――この世とあの世の人類ね――は、計り知れないものになるかもしれない。

・　・　・　・　・

いつの日か、地球上で見つけられるものが全部見つかって、すべての人の共有財産になったとき（あるいはそれ以前でさえ）、たぶん偉大な人が立ち上がり、私たち、この世とあの世のすべての人を解放することになる大いなる推測をするでしょう。どうなるかは分からないけれど。

その素晴らしい推測者は、音の力についての知識以外は何もかもが小さな子供と同じくらい単純な、かなり霊感を受けやすい未来の音楽家になるような気がするわ。でも、小さな子供たちでさえ、その時代はたくさんのことを学んでいるでしょう。彼は新しい音を求め、それを発見する――黒鍵と白鍵の間にある新しい音を。彼はミルトンやホーマーのように目が見えなくなり、ベートーヴェンのように耳が聞こえなく

なる。その後は、すべて静寂と暗闇の中で、また彼のわびしく孤独な魂の深淵の中で、彼は自分にできる最高の音楽を作り、私たちが『Chant du Triste Commensal［悲しき共生者の歌］』からそうしたように、彼はその対旋律の果てしない迷路から秘密を導き出すけれど、それは私たちのものよりもずっと大きな秘密になっているでしょう。ほかの人たちは、この隠された宝物のすぐ近くまで来ていた。でも彼は、それにたまたまびたりと遭遇し、それを掘り返し、光の中に持ち出すでしょう。

私は、彼が鍵盤楽器に向かって座っているのが見えるような気がするの。彼の熟達した指の感覚にとって、昔からとても慣れ親しんだ楽器に。この上なく忍耐強く献身的な友人――母親、姉妹、娘、妻――に、自分の楽譜を苦しそうに口述しながら。彼が見ることも聞くこともないだろう、その楽譜を。

何という言語障害者！　目と耳が不自由なだけでなく、気が狂ってもいる――世間の目には狂っているように見え続ける、五十年も、百年も、千年もの間。時間というものはない。でも、その楽譜は生き残る……。

もちろん、彼はそれが元で死ぬでしょう。彼が死んで私たちの所に来るとき、ここからシリウスまでも、またその向こうまでも喜びがあるでしょう。

そしていつの日か、人は、彼がただ耳が聞こえず目が見えないだけだったことを、

地上で発見することでしょう――少しも狂人ではなかったことも。人は、聞いて**理解する**ことでしょう――彼が、それまで誰も聞いたり見たりしなかったように見たり聞いたりしていたことを知るでしょう！

・　・　・　・　・　・

『播いた種は自分で刈り取る』。これは真実を言い当てたことわざで、種播きはすべてこの地上で行われ、収穫は向こうで行われる。人間は幼虫。お墓で棺（ひつぎ）に入って横たわっているときの死んだ肉体は、地上の生活の間に自分で紡いだ脱ぎ捨てられた繭で、自分についてのあらゆる記憶、失われた分さえも含んだ記憶とともに、パッと張り裂けて舞い上がるためのもの。トンボや蝶や蛾みたいに……**それら**が死ぬときも同じ、草の葉でも同じなの。私たち*は皆、tous tant que nous sommes［私たちは皆］、決して死ぬことのない小さな記憶の袋。それが私たちの存在**理由**。でも、私たちが共有財に持ち込めるのは、自分が得たものだけ。フランソワおじさんがよく言っていたように。『La plus belle fille au monde ne peut donner que ce qu'elle a.［世界でいちばん美しい娘でも、自

＊私たちは皆……原文 We are all, tous tant que nous sommes,。英・仏語で繰り返している。

分が持っているものしか与えられない』

・　・　・　・　・　・

何よりも、私はあなたの地上の妻です、ゴーゴー――愛情ある忠実で献身的なあなたの妻で、私はそれが知られることを望んでいます。

・　・　・　・　・　・

それからついに、時が満ちて――ほんのわずかの年月でしょう――ああ、そのときは、もう一度、ヌーハはトーキルの手を取って導くことになるでしょう」

・　・　・　・　・　・

「おお、メアリー！」私は叫んだ。「僕たちはもう一度、超越的に幸福になれるのだろうか？　僕らがそうであったのと同じくらい幸福に――**より以上に幸福**に？」

「ああ、ゴーゴー、人は鼠よりも幸福で、鼠は燕より幸福で、燕は白亜の塊よりも幸福なのかしら？　でも、どんな人間が鼠や燕になったり、あるいはその逆になったりできるというの？　どんな燕が白亜の塊になったり――自分自身以外の何かになったりできるのかしら？　二人の人間は一人よりも幸福？　あなたと私は、そうよね。私たちは一つ**なの**だから。でもほかには誰が幸せに？　それは、誰も彼もみんなよ。幸福は、時間と空間のようなもの――私たちはそれを、自分たちで作って測定している――大きいも小さいも、お好みのままに。それは対比と比較の問題にすぎないの。健康や力や美やその他の良いものと同じ――それとは逆の悲しい個人的な経験がなかったら、気づかれることさえなかったでしょう！――あるいはそれよりもっと大きい幸福がなかったら！

私はこのこと、あなたと私についてのこと以外、知っていることを全部忘れてしまった。私たちは永遠に離れられない。私たちは、一瞬も立ち返ることを望まなくなるだろうということを信じてほしい。

罰や報酬はないのかって？

おお、そこで再びそんなもの！　何て些細なことでしょう！　哀れでちっぽけでいたずら好きな小虫――そういうふうに**生まれついた**者――それに、いつも正直でいら

れない者ね！――と、やってみても間違ったことができなかった哀れでちっぽけで模範的な小虫！　そんなものたちに罪だの報酬だのと、手間をかける価値があると思う？　すべての小虫の心の秘密が明らかにされて、ほかのすべての小虫に見られることは、罪あるいは報酬にとって十分ではないかしら？　考えてみて！

・　・　・　・　・　・

戦うべき戦いと、勝つための競争があるけれど、**お互い**に対してのはもうない。それに、それらに勝つための力と速さがあるけれど、どんな力も速さももうない。弱さと臆病さがあるけれど、弱虫や臆病者はもういない。善も悪も、最悪も最善も――全部が一緒くたになっている。でもね、善は上に来て、悪は底に行く――沈殿するのよ、パパがよく言っていたように。気持ちのいい沈殿物じゃない。あらゆるもののいちばん底――視界の外、心の外――で、かつては有用だった残酷さとともに、忘れられたも同然の状態で。C'est déjà le ciel.［それはすでに天国ね］。

・　・　・　・　・　・

そして、ゴールは？　原因、行く先、そのすべての理由は？　ああ！　ゴーゴー――ずっと不可解で、想像もできないでしょう、偉大なる推測者が出現するまでは！　愚か者として言わせてもらうと、それは少なくとも、惨めなほど無知な私の理解を超えたもののように思える。だって、私は新参者だし、鎖とロケットを持ってあなたを待っている完全な部外者だから。

私はその海の海岸でわずかな砂粒を拾っただけ――わずかな貝殻も。私はそれらがどんなふうなのか、あなたに示すことさえできない。ああ！　それについて話すことすら無駄なことだって分かっているのよ。そして、私は固く決心した。

おお！　私の地上での教育がどれほど無視されたことか！　あなたのもそう。そして、今の私がそれをどう感じているか、言葉で、言葉にすぎないもので話すべきことがたくさんある私が！　もう、私が理解できるわずかなことを言葉であなたに伝えるためには、ごくわずかなことでも――あなたが理解できるように話すためには――、私たちそれぞれが、かつて存在した最高の詩人と最高の数学者を合わせて一つにした者になることを要求するのよ！　私があなたにどんなに同情していることか、ゴーゴー――あなたの訓練も熟練もしていない無垢なペンで、このすべてを書き留めなけ

ればならないなんて――あなたは**やらなければならない**から――、それに、私があなたに伝えるときにしたように、いくら尽くしても足りないような小さな最善を尽くなければならないなんて！　何て気の毒な筆記者なのかしら！　文体も手法も気にせず、心に語らせなければいけないわ！　**何とかして**書いて！　最も必要とされていることと最大多数のために書くの。

でも、これだけは努めて理解しておいて、最善を尽くしてでも。**私**が認識できる限りでは、あらゆるものとあらゆる場所は、常に深くなり、常に広がっていく流れであって、想像も及ばない速さでそれ自身の適正な水準に向かっているように思える。《完全な場所》に！……常にどんどん近づきつつあるけれど、その場所は見つからないし、幸いこれからも見つかることはないでしょう！

それだけでもう地上の流れとは違っていて、（もし想像できるなら）果てがなく広大で岸のない小川を逆流する新鮮な流れにより近く、それが探し求める水準は源流よりも計り知れないくらい高い所にある。そして、その至る所にあるのは、命、命、命！それは自らを更新し、倍加させ、その土手のない巨大な川を膨張させ続けている。

そして、その至る所で似たものが似たものを生み出し、少しだけ良くなったり悪くなったりが加わる。少し悪くなったものは、淀みにたどり着いてそこに居座り、最終

的には底に行って、それを誰も気にしない。そして、少し良くなったものは、どんどん改善が進んでいく――人の愚かさや邪悪さが**それ**を妨げることはできず、その激しい急流をとどめることも、衰えさせることも、後退させることも、一瞬もできない――c'est plus fort que nous!［それは私たちよりも強い！］……。記録はどんどん破られ続け、最高水位線は、地球で到達され得るいちばん高い所までどんどん上がっていく――その後、地球は寒くなり、太陽は消えると思う――かけらにまで分解されるのだけれど、繰り返し使用されるためでしょうね、たぶん！　そして、良いものはより暖かい気候とより高いシステムへと飛翔していく。それ自身がもっと良くなるために！　そうやって、より良いものからより良いものへ、より高いものからより高いものへ、より暖かいものからより暖かいものへ、より大きなものからより大きなものへ――いつまでも、いつまでも、いつまでも！

でもね、あらゆるものの究極的な最高点、絶対的な善や高み、絶対的な知恵、絶対的な全能性、そこを超えるとそれ以上は何も存在せず、何も存在できないような地点には、決して到達されないでしょう――そんなものはないのだから。それらは抽象概念ね。さらに言えば、成就は休息を意味し、休息は停滞を、停滞はすべての終わりを意味する！　終わりはないし、あり得ない――時間に終わりはなく、その中で行われ

るすべてのことにも終わりはない――空間に終わりはなく、それを満たすすべてのものにも終わりはない。でなければ、すべてが山をなして集まってきて、途中で潰れてしまうでしょう――途中が**ない**のよ！――終わりはなく、始まりもなく、途中もない！ **途中はない**のよ、ゴーゴー！　**それ**を考えて！　それはすべての中でもいちばん想像も及ばないことだわ!!!

だから、シェイクスピアとあなたと私の存在意義なんか、誰が言うでしょう――無限の鎖の小さな輪、それはあんまり小さすぎて、シェイクスピアでさえ私たちより大きいわけじゃない！　私たちのほんのちょっと後ろは、私たちが祖先とする全身消化器官のあの小さなくねくねした透明なものなの。私たち自身よりもはるかに先だけれど、**私たち**から続く長い血縁の直系に、絶えず成長している、意識を持った『力』があって、それはあまりに強く、喜ばしく、単純で、賢く、優しく、恵み深いために、私たちができることは、今でさえ、恥ずかしさを感じて膝を屈して額を下げ、驚異、希望、愛、柔らかくおののく畏怖などで心をいっぱいにすることくらいしかない。そして、まだ生まれていない、想像しにくい、めったにもうけられない『**子**』として崇める――私たちが『**父**』として崇めるよういつも教えられてきたものを――今ではなく、これからそうなるはずの『それ』を――曖昧な未来において私たち全員が共有し、本質的な

部分となるだろう『それ』を――無限の宇宙の至る所で、ゆっくりと、確実に、苦労して、私たちと私たちに似たものから『それ自身』を編んでいる『それ』を。そして『それ』の到来は、私たち自身のゆっくりと、確実に、苦労して覚醒する魂の上にその影が差すことによって、私たちはかすかに予言することしかできない！」

・　・　・　・　・　・

それから彼女は地上の物事について話し、以前の実用的なやり方での質問に進んだ。私の肉体的健康の話の最初には、この上ない優しい心配と賢明な助言――母親が息子にするような――を伴った。彼女は医者のように、私の心音を聞くことさえ主張した。

その後、彼女は関心を持っていた複数の慈善団体について長々と話し、彼女が最善の注意を払って私に印象づけた名前と住所を持つ特定の人々に対し、私が手紙を、私自身が思いついたかのように書けるよう多くの指示を与えた。

私は彼女の望みどおりにして、その指示のほとんどを忠実に守ったが、そのような賢明で有用な改革が犯罪者用精神病院の囚人に端を発するということに、（世間がよく知っている）その世界の方では少なからず驚きがあった。

とうとう別れの時が来た。彼女は、私が数分以内に目覚めなければならないと予測し、立ち上がりながら言った——

「それじゃ、ゴーゴー、この世での最愛の人、あなたの懐かしい腕にもう一度私を抱いて、しばらくの間のお別れのキスをして——アウフ・ヴィーダーゼーエン。あなたの体が眠るときは、休息し、考え、思い出すためにここに来て。私の心はい

「さようなら！」

つもあなたとともにここにある。私自身もまた戻ってくることができるかもしれない――この貧弱な抜け殻だけ――古い衣類の束以上に見るべきものはないでしょうけれど。それでも、世界は**あなた**への愛でできている。さようなら、さようなら、最愛の、最高の人。時間というものはない、でも、私は時間を数えるでしょう。さようなら……」

彼女が私を自分の胸に抱き締めると同時に、私は目覚めた。

・　・　・　・　・　・

私は覚醒し、憂鬱の恐ろしい黒い影が、忌まわしい悪夢のように――長く恐ろしい冬のように――自分から消え去っているのを知った。私の心は春の陽光で満ちていた――新しい人生に目覚めた喜びで。

私は夜の付添人に微笑みかけ、彼はびっくりして私を見つめ返し、こう叫んだ――。

「何と、サー、完全に新しい人間になったとしか思えません。今そこで！」

私は彼の手を握り締め、彼のこれまでの忍耐、優しさ、彼を泣かせてしまったほどひどかった感情の暴発に対する寛容ぶりに感謝した。私は何週間も話をしていなかっ

たので、彼は私の声をここで初めて聞いたのだった。

その日はまた、私はどんな前置きも釈明もせず、二度と自殺しようとしたり他人を殺そうとしたりしないことを医者と教誨師と院長に誓い、すぐにその場で信じられ、信用された。そして拘束具が外された。

生涯でこれほど感動したことはなかった。

一週間で体力のほとんどは回復した。しかし、私は老人になっていた。それは大きな変化であった。

大半の人は徐々に、気づかれないほどかすかに年を取るものだ。私には、老いが突然やって来たのだった――いわば、一夜のうちに、である。しかしそれとともに、従順で快活な黙諾（もくだく）、穏やかな静けさなどが、これも突然に訪れ、それが代償となり、またそれ以上のものとなった。

いつの日かメアリーと一つになるという私の希望と確信――それは、私の避難所、私の天国――それ以上は望むべきものも想像すべきものもない、完全性の成就である。ほかに何が起ころうと、それは確実で、私が大事に思うのはそれだけだ。彼女は私と、さらにほかの多くのことも大事にすることができたが、私はそのためにいっそう彼女を愛している。しかし、私の方は**彼女**しか大事に思うことができない。

遅かれ早かれ――一年か――十年か。それはあまり問題ではない。私もまた、時間の存在が信用できなくなり始めている。

あの覚醒は、生涯で最もうれしい出来事だった――死刑判決後の朝、死刑囚監房で目覚め、別の黒い影――断頭台のそれである――が去ったときよりも、はるかにうれしかった。

おお、メアリー！　彼女が私のためにしなかったことがあろうか――彼女が払いのけなかった雲があっただろうか！

夜が再びやって来たとき、私はもう一度、ラ・ミュエット門からオートゥイユの池までの行程を、一歩一歩、何もかも同じようにして、もう一度歩いてみた――陽気な結婚披露宴、青と銀を身に着けた伝書使、愉快な客たちの歌。

"Il était un petit navire."

「小さな船がありました」

変わったものは何もなく、鈍い灰色の空模様さえそのままだった。だが、おお、私に

とっては違っていたのだ！

私は、貸馬車の御者たちとブションで、昔の級友たちとバル・オ・カンで遊びたかった。ラルティーグ氏およびカザールの息子とワルツを踊ることさえできただろう。

私はマネットおばさんの店の小さな鏡をのぞき込み、やつれて、青白く、目や頬が落ちくぼんだ、年老いた顔をもう一度見た。私はそれを好ましく感じ、かなり見た目がよいと思った。私はやはり疲れていたが、この上なく快い疲労だった。以前のあの夜にしたように、私は城壁のそばに座って休息した。自分のひどいみすぼらしさを受け入れることができた――pauvre, mais honnête［貧しいけれども正直な］。囚人で狂人だけれども男の中の男――まだメアリーの恋人！

そして、子供の頃に初めて見て以来、地上でいつも最高に愛していた地点についに到達したとき、私はひざまずき、純然たる歓喜過剰のために涙を流した。それは確かに私のものだった。地面や水が以前は誰のものでもなかったように、それは私のものだった。

当然、メアリーはそこにはいなかった。私は彼女を期待していなかった。

しかし、奇妙で理解しがたいように思われたことだが、彼女は自分の手袋を忘れていたのだ。彼女は自分の後ろにそれを置いていった。一つはベンチの上に、もう一つ

は地面の上にあった。繕われた粗末な古手袋で、それらには彼女の親愛なる手のよく知っている形が残っていた。いずれも、折り目と皺が型の中にあったように保たれていた――まさに彼女の指爪（ゆびづめ）の型だ。彼女とその母親がとても愛した白檀の香りも。

私はそれらを、前の夜に二人で座ったベンチの上に、手のひらを上にして並べて置いた。夢の風がそれらを吹き飛ばすことはなかったし、夢の泥棒が盗んでいくこともなかった。それはまだそこにあり、私に大きな変化が訪れ、それの持ち主と私が一つになるまでは、そのまま置かれていることだろう。

・　・　・　・　・

私は毎晩そこに行く――快い春か秋の陽光の中――瞑想し、回想し、メモを取る――暗記されるための夢の記録で、翌日、本当の目的のために使うのだ。

私はぶらぶらと歩き回ったり、ベンチに座ったり、水辺の草地で横になったりして、果てしなくタバコを吸い、半世紀前にすごく魅力的であることに気づいた懐かしい両生類を見て、それが相変わらず魅力的だと気づく。

時には森に突入したりもする（今の森は徹底的に切り開かれている。一八七〇年以

来ずっと、オートゥイユの池全周囲に空き地がある。そのとき以来、私はメアリーとの夢の中でそれを見てきた。彼女は*終戦後のパリに行き、昼間、二人の心にとって非常に大切なすべての場所への巡礼に夢中になったが、それらはひどく変わっていた。夜が来ると、巡礼仲間の私とともにもう一度巡った。それは私たち両者にとって悲しい幻滅となった)。

私が非常に多くの時間を過ごした**私の**オートゥイユの池は、ルイ＝フィリップのオートゥイユの池であり、時々、一八三九年と一八四六年の間に起こってくる**であろう**わずかな変化を除いては、不変である。壊れて修理されたベンチ、幹線道路沿いに築かれた新しい障壁、縁が崩れた小さな木の堤。

そして、その横と後ろの茂みは何マイルにもわ

「私は毎晩そこに行く」

たって暗く濃く、たくさんの高い木々と、絡み合った豊かな下生えがある。

その迷宮には、見つけにくい巨大なオークがある（現在のそれは、世界から見えるよう開けた所に一本だけで立っており、オートゥイユ競馬場の飾りとなっている）。子供の頃、ミムジーやほかの子たちと一緒に、よくその木によじ登ったものだった。今の私では登れないが、その陰の草に寝そべり、そこで自分の夢を見て、全周囲を香りや見通せないほどの緑に取り囲まれるのは大好きだ。付き合う仲間として、鳥、蜂、蝶、トンボ、奇妙な甲虫、明るい目をした小さな野ネズミ、しなやかなまだら模様の蛇、かわいらしい茶色のリス、美しい緑の蜥蜴。時々、穏やかなノロジカの雄がやって来て、怖がりもせずに私のそばで食事をし、モグラが小さな土の山を投げ上げ、戸外運動をする。

実に魅力的な独居である。

日中、悲しいイギリス刑務所内の、狂った我が同僚たちの間ですっかり目を覚ましたとき、何マイルも何年も離れた私の夜ごとの陰の多いフランスの独居生活が、今ではありきたりの、何の装飾もない、広く草深い平原以外、旗で飾られた特別観覧席からいかに見落とされているかを考えることは、私を楽しませた。例えば日曜日――た

＊終戦後……普仏戦争（1870―1871）後であろう。

ぶん大きな競馬が行われているだろう――、パリじゅうの人間がそこに来る、金持ちも貧乏人も。赤ズボンの小さな兵士たちや、青ズボンの大きな憲兵たちが、道を通れるように保つ。太陽が輝き、三色旗がはためき、陽気で親しみある言語が夏のそよ風を音楽的なものにする。あえて言えば、それは皆とても明るく活発なのだが、至る所で馬券業者の下品な騒音が響きわたり、空気は、ほこりと、臭いのきついタバコおよびもみ合っているフランス人の強い体臭が混ざった悪臭とで満ちている。荒涼としたエッフェル塔が、宴会を見下ろす骸骨のように、空からパリのすべてを見下ろしている（少なくとも、私*はそのように聞いている）。

その後、夕暮れが来ると、群衆は離れてしまう。徒歩で、馬で、自転車や三輪自転車で、あらゆる種類の馬車で。近くのオートゥイユ駅から chemin de fer de ceinture［鉄道環状線］を利用する者はたくさんいる……すべてが静かになり、ガランとして、活気がなくなる。

それから、静かな夜がとばりのように下りてきて、その友好的な覆いの下、奇妙な変容現象がそれ自身にも素早く効果をもたらし、**私**のための準備がすべて整う。特別観覧席は蒸発し、鉄道駅は薄い空気に溶け込んでなくなる。電飾付きのエッフェル塔はもはやない！　五十年前の美しい森が突然地面から立ち上り、かつてそこに住んで

いた野生の生き物すべてが、その快活な生命を再び目覚めさせる。

過去のフランスの森にある静かで深い古池が、そのような思い出で清められる！何がこれより魅力的で**あり得る**だろう？　おお、たちまちのうちに安堵をもたらす、柔らかく甘美なる郷愁よ！

まろやかな太陽が、過ぎし日々の光が、天の定められた場所――注文に応じて、天頂、あるいは東か西――に現れ、南から弱い風が吹いてくる――何もかもが適切に消毒され、暖かく明るく快適なものにされる――そして、見よ！　昔のピーター・イベットスンがその場面に現れる、続く八時間に彼が調査するものすべての絶対君主が――論争する権利を持つ者は誰もいない、文字どおりの絶対君主が。

私は、通常そこでの騒々しい集まりは促さないし、池のそばも同じである。甘美な場所をほぼ独り占めしたいのだ。このことに利己主義はない。私は実際には誰からも奪っていないからである。今そこに来る人は皆、五十年近く昔のそこを訪れているの

＊私はそのように聞いている……エッフェル塔は一八八七年着工一八八九年完成なので、一八六〇年頃からずっと投獄中であるピーターは実物を見ていない。また、メアリーの生没年ははっきしりないが、一八三四年生まれと推定できるピーターと同い年だとすると、五十三歳での死亡は一八八七年となるので、彼女の目を通しても見ていないことになる。

であり、そのことを知らない。彼らは全員、ずっと昔に死んでいるに違いない。

時にそれは、ルイ＝フィリップの青と銀の制服を着て、黒いパイプ、ゲートル、昔のフリントロック式の銃、刺繍のある獲物袋を持った garde champêtre［田園監視員］だ。彼は風景の中でうまくやっている。

時にそれは、見た目がよく行儀がよいならば、一組の恋人たちであり、そうでなければ、サンドー校から――la raie［縞模様の］――ガーター飛ばし遊びをしに来た少年たちである。

時にそれは、自分の『聖務日課書』を穏やかに調べつつ、ゆっくりとした思慮深い歩みでぐるぐる歩き回っている司祭様だ。今の私は、半世紀分の人生経験の観点から、彼の落ち着いた情け深い顔を読むことができ、小さな少年だった頃に強い反感を覚えた、静かで黒くて瞑想的な側面を、愛する

「この世界は私たち両者にとって十分大きい」

ことを身に付けた――**彼**は小さな異端者を焼き殺すような人間ではない！　この世界は私たち両者にとって十分大きい――来世もそうだ！　そして、彼はそれを知っている。いずれにしても、今は！

時には、プレンダーガスト家の二人ないし三人さえ認められた。結局のところ、彼らはそれほど悪くはないのである。そうは思えないかもしれないが、彼らには欠点という美点があったのだ。

しかし、かなり多くの場合、昔の愛する影たちが、漁網（ぎょもう）と不屈の精神を持ち、彼らの英仏言葉を響かせながら到着する――チャーリー、アルフレッド、マッジ、残りの者、それから歯を見せて吠えながら旋回するメドール。彼は石を追って水に飛び込む。おお、彼らを見たり聞いたりすることは、私の心に何と良い効果をもたらすことだろう！

彼らは私をして祖父のように感じさせる。少佐殿でさえ私より若い――彼の口ひげは私のよりも白くないのだ。彼は私の顎くらいの高さしかない。それでも私は彼のことは相変わらず見上げるし、小さな子供の頃同様彼を愛し、崇拝しているのだ。

それに、セラスキア医師！　私は、彼と彼が見ているものの間に自分の身を置く。そうすると、彼は私をまっすぐ見ているように思える。しかし、当然のことながら、

彼はずっと遠くを見るまなざしだった。今は、何かが彼を楽しませ、彼は微笑み、その目は皺になっていたが、それは彼の娘が一人前の女性になったときよくそうなっていたのと同じで、またその顔は天使のように威厳のある顔になっているが、これも娘のそれと同じである。

L'ange du sourire!［微笑みの天使！］

そして、活発さとはしゃぐような笑いと絶えることのない上機嫌さを備えた、陽気で若くて快活な我が父！　彼、かの美男子パスキエは、今の私にとっては少年のようなものだ！　彼は自分の発明である新しい投石器を持っていた。それをポケットから引っ張り出すと、石を高々と木のてっぺんまで飛ばし、また見えないくらい遠くまで飛ばし――自分自身とほかの全員の楽しみのために――、そして石が落ちる場所についてはあまり気にしないのである。

私の母は、今は私の娘にしてもいいくらい若い。私が今の彼女を愛しているのは、娘として、魅力的で優しくて美しい娘として――神々しくヨーデルを歌い、石を投石器で飛ばし、――beau comme le jour［輝くばかりに美しい］――孫を私に贈ってくれた、長身でハンサムな夫と幸福な結婚をした娘として、なのである。ピーター・イベットスンがその人生でどんなふうになっていようと、小さなゴーゴー・パスキエの稀に見

る容姿の良さを否定するものは何もないのだから。

そして、ミムジーはまさに子供の天使だ！　少佐殿はまったく間違っていない。「Elle a toutes les intelligences de la tête et du coeur! Vous verrez un jour, quand ça ira mieux; vous verrez.［この子は、頭も心もすっかり知性でいっぱいです！　いつか健康になる日が来ます！　見ててごらんなさい！］」

その日はずっと前に来て、そして去っていった。今ではそのすべてを簡単に見ることができる――少佐殿の目を持つことも。

ああ、かわいそうな小さなミムジー、髪を短く刈り込んだ頭、青白い顔、長く細い腕と脚、真面目で優しそうで輝く目を持ち、まだ笑い方を知らなかった。彼女は**私**にとって何という存在なのか!!!

それに、若さの盛り、神々しい美の輝き、そのすべてのさ中にいるセラスキア夫人！女性の中の、選ばれた百合――メアリーの母君！

柳のそばの古いベンチに座り、近くに彼女の娘の手袋がある。時々（些細な、ほとんど喜劇的な詳細！）、彼女は本当にそれらの上に座っているように見え、私につかの間悲しみを感じさせる。しかし、彼女が去るとき、それらは変わらずそこにあり、少しも潰されていない――私が今世（こんせ）と来世であらゆるものを負っている寛大な手

の、その美しい貴重な型は。

・　・　・　・　・　・

私は自分の旧家には二度と行かなかった。大通りの光景が怖いのだ。「パルワ・セド・アプタ」も直視できない。

・　・　・　・　・　・

しかし、メアリーとはその後も会った――七回。

来るたびに彼女は本を持ってきた。私たちが子供の頃に読んだバイロンのように、緑のモロッコ革で装丁された金縁のもの、グレイの『哀歌』『ホーエンリンデンの戦い』やカニンガムの『田園詩』をフランス語に訳すのに使った『雅文抜粋集』のような赤いモロッコ革のもの。

そういう装丁が、彼女のお気に入りなのだ！

しかし、これらの本の中身は非常に違っている。それらは暗号で印刷されており、

その言語は夢の中でしか理解することができない。興味深さや重要性という点で、夢の中で私が読んだものに迫る現行の本は、私は、あるいはほかの者も、かつて読んだことがなかった。それは七冊ある。

それを読むとき、私は自問する。目覚めたとき、これを覚えていないのは、結局はたぶん良いことなのだろう！　と。

というのも、私は軽率で思慮が足りないし、言い過ぎるか言葉が足りないかのどちらかになるだろうからだ。それに、世界は私を通じて静止してしまうかもしれない。メアリーが言ったように、生きる重荷に耐えられそうにないからだ！　それはだめだ！　世界は、偉大な推測者を待つことに満足しなければならない！

こういうわけで、私の唇は封印されている。

私が知っているのはこれだけだ。**すべてのことが私たち全員にとって良くなるだろう、そして、月が欲しくてため息をつくような人でなければ、十分満足するだろう。**

・　・　・　・　・　・

このように、私は自分の能力の最善を尽くして、私の二つの人生とメアリーのそれ

を説明するよう奮闘してきた。私たちは、私たちの間で三つの人生を生きたのだ――一体となった三つの人生を。

出来映えは貧弱なものの、これは幸福な仕事であったし、その出来映えの状態もひっくるめて非常に満足のいくものであった。

犯罪者用精神病院の独房！　それは至福の地（エリュシオン）の木陰のようには聞こえない！　それは私のためにあり、あったものである。

私の内面的生活を照らし、温めてくれた太陽以外にも、私は、所長以下ここにいるすべての人に親切と同情と思いやりをもって接してもらい、言い表せないような感謝で溢れている。

私の良き友人である医者、教誨師、司祭――最も善良で親切な人々だ――には、とりわけ感謝している。それぞれが天国・地上・その下の世界のすべてのものについてはっきりした考えを持っていて、それぞれがほかの二人とはまったく相容れない考え方なのだ！

そんな彼らが、あまり確信を持てないでいることが一つだけあって、それは私が狂っているのか正気なのかということである。

そして、一つだけ――彼らが同意することが一つだけある。それはすなわち、狂人

だろうが正気だろうが、私は見いだされていない偉大な天才だということだ！

私の小さなスケッチは、無彩色でも彩色でも、彼らを称賛と陶酔でいっぱいにする。その大胆さ、すらすらと描く容易さ、出来映え。その主題選びに対する圧倒的な豊富さ。その過去の、歴史上の、その他の情景の構想と描写における並外れた現実性。その建築、人物、服装、その他についての驚異的な知識。その地方色――全部、まるで本当にそこに行って見てきたかのようだ！

自分の名声が刑務所の壁を超えて広がらないようにしておくのに、私は極めて困難な思いをしている。私の謙虚さは、私の才能と同じくらい大きいのだ！

そう、私はこの偉大な天才が、今すぐに見いだされることは望んでいない。これはすべて、さらに偉大な天才たちの作品の助けとなり、それを説明し、引き立てる目的に当てられるべきである。私の作品がかつて得たインスピレーションはすべて、彼らの作品から引き出してきたのだ。

目の前にある素晴らしくて楽しい仕事。それは、あのおびただしい量の、急いで書かれたメアリーの回想録を、解明し、翻訳し、整理することだ。それはすべて夢の中で私たちが一緒に発明した暗号で書かれている――一旦鍵を手に入れてしまえば、あなたでも実に解きやすい暗号なのだ！

少なくとも五年はかかりそうだが、推測なしで思うのは、私が自分で感じるとおりに強壮かつ活発で、詩篇作者の年齢からはまだまだ遠いことが期待できるということだ。

まず第一にしようと思うのは

・

・

・

・

・

・

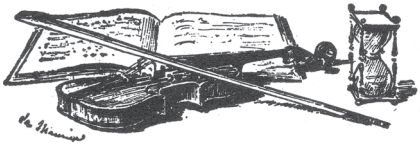
＊注――私の哀れないとこの回想録はここで終わっています。まだペンを持ったまま、未完成の原稿の上に頭を垂れ、脳溢血（のういっけつ）で死んでいるのが発見されました。原稿の余白に、石をいっぱいに積載したおもちゃの手押し車を開いたドアから別のドアへと転がしている小さな少年を、ちょうどスケッチしたところでした。一方のドアにはPassé［過去］、もう一方にはAvenir［未来］という貼り紙が付いています。

長い海外生活を過ごした後、私は彼の死亡が発生した頃にイギリスに着いたのでしたが、生きている彼を見るには遅すぎました。私は、彼とその晩年についてのことをたくさん聞きました。職務で彼と接することになった人々は皆、崇敬に似た敬意の念で彼を見ていたようでした。

棺の中の彼を見て、私はもの悲しい満足感に打たれました。彼が十二歳のとき以来、私は彼と会っていなかったのです。

そこに横たわっていたとき、その静止した身長と横幅から、彼は巨人のように見えました――かつて私が見た中で最も壮大な人間のように。そして、彼の死に顔の輝きは、生涯私の脳裏を去ることはあるまいと思われました。

マッジ・プランケット。



解説に代えて

ダフニ・デュ・モリエイによる『ピーター・イベットスン』への序文

家族や友人に「キッキー」と呼ばれたジョージ・デュ・モリエイは、一八三四年三月六日にパリで生まれた。父親のルイ＝マチュラン・ビュッソン・デュ・モリエイは、ガラス彫刻師ロベール・マチュラン・ビュッソンの息子で、そのロベールはフランス革命のごく初期にパリを離れていた。アンシャン・レジームを重んじていたからではない。彼は債権者たちに追われており、未知の地であるロンドンで新たに人生を始めることを望んでいたからであった。彼は「デュ・モリエイ」のという接尾辞が、イギリス人の間での地位を与えてくれると信じていた――これは家のガラス工場の近く、彼が生まれたトゥレーヌの農家の名前であった。ところが、ロンドンの職人仲間は感銘を受けないままで、その émigré［移民］は、気づけば一七九八年、ロング・エーカーの倉庫に侵入した罪により、キングス・ベンチ刑務所で八か月の刑期を務めていた。彼は一八〇二年、ロンドンに若い妻と家族を残し、アミアンの和約後のフランスに戻っ

た。しかし、あっという間にフランスとイギリスの間で新たに戦争が勃発し、ロベール・ビュッソンは妻や子供たちと再び会うことも、連絡を取り合うこともなく終わった。彼は一八一一年に亡くなったが、そのときはもうガラス彫刻師ではなく、兄弟のピエールとトゥールに設立したmaison d'instruction［寄宿学校］の学校長であった。

彼の息子、ルイ＝マチュランは、ロンドンで育ち、ほかのémigrés［移民］の息子たちと一緒にかの有名なアッベ・カロンの教育を受け、フランス復古王政に際し同胞の後を追って祖国に赴いた。父親同様、ルイ＝マチュランも、天才的ひらめき、と言っても残念ながらひらめき以上のものにはならなかったが、そのような才を持った魅力的な無責任人間の一人であった。彼は天使のように歌ったが、その声は舞台やオペラのためには強靱（きょうじん）さが不足していた。彼は独創的で奇妙な機械を発明したが、何らかの欠陥やその他の理由のために機能しなかった。彼は投機についての魔術師的な能力を持っていたが、いわば髪の毛一本の差で富を蓄え損なった。彼は、あまりにプライドが高く、あまりに愉快な無能者だったため生計を立てることができず、お金を貸してくれるくらいは彼のことが好きな者から借金をすることで満足していた。友人たちが難しいと分かったときでも、常に彼の妻の年金、ある王子からの口止め料があったのである。

一八三三年、パリで彼と結婚したエレン・クラークは、一時期ヨーク公爵の愛人で、庶民院の証人喚問席で自分の王族の恋人に不利な証言をし、彼に不名誉をもたらしたことで悪名高いメアリー・アン・クラークの娘であった。捜査は、ルイ＝マチュランがエレンと結婚した頃にはとっくに片付いていた。世間の注目を浴びていた当時、彼女は子供だったが、その経験は彼女に腐食性の小さな酸味を残していた。自分の母親がロンドンの路上で嘲られているのを聞いたり、数年後、キングス・ベンチ刑務所に連行されたりするのを見たりするのは、あまり気持ちのよいものではなかったのであろう。このようにして、中年期に『ピーター・イベットスン』を書くことになるジョージ・デュ・モリエイは、祖父母については、フランス男性とイギリス女性の二人の人間が、異なる時期に何か月も同じ刑務所に留置されるということになっていたのである――彼はほぼ確実に知らなかった事実なのだが、それでも何らかの奇妙で無意識的な影響力が働いていたに違いない。彼をして終身刑を宣告された男を主人公に選ばしめたのは、単なる偶然ではなかった。

キッキーは、幸福な少年だった――あるいは、自分ではそう信じていた。五十年後、『ピーター・イベットスン』において、自分の子供時代のこと、また前帝国時代のパリの香りと音のこと、すなわち丸石の上の車輪のガラガラいう音、鞭の鋭い音、ポン

プ通りの隅の白いほこり、満開の栗の木――暖かな春の空気中に漂う焼けたパンやブラックコーヒーやタバコの匂いさえ――などのことを、書いたときには。彼の小説のページから立ち上ってくるこれらは、我々とその先祖たちが知り、経験し、見たことで、忘れられたものは何もなく、ただすべてのイメージは、写真のように、我々の潜在意識に永遠に印刷されているのだということを証明している。

長男のキッキーと弟のユージン（ジギー）は、二人ともパリで教育を受けた。その期間、彼らの無一文の父ルイ＝マチュランは、発明したランプの特許を取得しようと努めていたが、それはあるとき爆発してほとんど粉々になった。その冒険的事業が失敗したため、彼は妻の兄弟ジョージ・クラークを、ロンドンで彼と共同事業をするよう説得した。それは世界中の港から海藻を除去するというアイディアだった。当然のことながら、この企ては無に帰したが、ルイ＝マチュランは、いつか自分と家族に幸運をもたらすという幸福な期待のうちにペントンヴィル近くの実験室で身を立てた。彼は、学士号を取得し損なったばかりの長男を呼び寄せた。不承不承のキッキーは愛するパリから重い足取りでそちらに向かい、父親のもとで化学を学び始めた。それはキッキーには少しも素質のない学科だった。屈託のない子供は、痩せた、かなり物思いに沈んだ若者に成長し、封筒の裏に美しい女性の頭部を絶えず描いていたが、一八五六年

の夏に父親が急死したときには、彼は父親とちょうど同じような、もう一人の不運な夢想家になっていたのかもしれない。そのとき二十二歳のキッキーは、未亡人となった母と弟・妹たちの唯一の希望であった。彼らのたった一つの衣食の道は、とっくに亡くなっているヨーク公爵の管財人から依然として定期的に支払われている年金だけだった。

キッキーは、母親を説得して芸術を学ぶためにパリに行く許可をもらい、続く十八か月の間、線画に長時間熱心に取り組みもしたが、カルチェ・ラタンの一学生としてのんきな生活を送り、彼が後に第二の小説『トリルビー』で描いたような楽しい日々を過ごした。この楽しい生活は、彼が偉大な画家に成長するのに十分なほど長く続く可能性もあったけれども、一八五八年に人生の悲劇が起こった。左目の視力を失ったのである。しばらくの間、彼はそれが両目とも視力を失わせてしまうのではないかと恐れた。それに続く苦悶と悲嘆の数か月間は、三番目の小説『火星人』に描かれている。

彼は、友人とアトリエを共有していたアントワープから、マリーヌの小さな町に引っ越した。しばらくの間、彼は自分を襲った打撃から立ち直れないと感じ、自殺の暗い考えさえ抱いた。彼と一緒になるために出てきた母親も、慰めを与えることはできなかった。お金もない。当時フランス軍の伍長であった弟のジギーは、常に心配の

種であった――父親と同じく、またその前のémigré［移民］の祖父もそうだったのだが、いつも借金を抱えていたのである。妹のイソベルは十九歳の美しい娘になっていたが、夫を自分で見つけられるまでは彼女にも支援が必要だった。家族の支柱になることを望んでいたキッキーは、そのとき自分が家族の最大の負担になったように思われた。その後、奇跡のように彼の運は好転した。デュッセルドルフ近くのグラーフラートの眼科医が、何百人もの失明に近い人々を治療したと伝えられ、キッキーと母親は湧き上がる希望を胸にドイツへと赴いた。

眼科医は、左目の視力を回復させることはできなかったものの、用心すれば右目は一生正常なままでいられることを請け合った。キッキーの生来の楽天主義が甦り、――さらには――当のデュッセルドルフに線画の学校が存在したのである。彼と母親は、すぐにデュッセルドルフの快活な社会に飛び込み、イソベルも彼らに加わるためにやって来た。

一八六〇年の春、彼らはカルチェ・ラタンからの友人、現在はロンドンで働いているトム・アームストロングの訪問を受けた。トム・アームストロングは、キッキーに対してまったく遠慮がなかった。彼は、君は漂流に身を任せているが、ドイツの地方都市では二流の芸術家で終わるだろう、と告げた。彼はキッキーに、『パンチ』やそ

の他の週刊新聞の編集者を紹介するからロンドンに行くよう熱心に促した。もし君が鉛筆で生計を立てたいのなら、ロンドンはその出発点になる、と。

キッキーは同意した。母に養われるのではなく、母を養うときだった。一八六〇年五月、彼は母の年金から十ポンドを借りて、トム・アームストロングとワイトウィック氏ならびにワイトウィック嬢の同行で、ロンドンに向けて出発した――後者はイソベルの元学友で、彼がすでに半ば恋していた女性であった。彼は、ニューマン・ストリートの下宿を自分で見つけた。そこは（彼は気づいていなかったが）、彼のガラス彫刻師の祖父、ロベール・ビュッソン・デュ・モリエイが約六十年前にémigré［移民］として住んでいたクリーヴランド・ロウの家の、ほとんど隣家も同然であった。

その若い芸術家は、程なく、広く読まれている『パンチ』の編集者マーク・レモンに紹介してもらうことに成功した。その後すぐに、左下隅に「D・M」、後には「D U・M」というサインを伴う彼のスケッチが定期的に掲載され始めた。キッキーに、名声を得る時期が到来していた。待っている時間は終わったのだ。成功への疑惑、財政や不健康さや孤独への懸念は過去のものだった。続く数年間、依然としてストレスやフラストレーションの時期を思い知ることにはなったものの、彼は自分への自信と、一八六三年一月三日にエマ・ワイトウィックを妻とする将来とを十分に確信していた。

彼らは申し分なく幸福で、全結婚生活を通じてそうであった。ある共通の友人は、後年、この夫婦についてこう語っている。

「デュ・モリエイは決して強健な人ではなかったけれども、計り知れない力強さのようなものを持っていて、接触するすべての人に希望、活力、楽しさを発散する魅力ある人々のうちの一人でした。彼を一語で要約するなら――喜びに溢れた人、となります。私が彼を知っていた当時、彼は少しも裕福ではなく、家族も増えつつありましたが、彼はあの時代の妻たち、家族や夫のために生きる女性たちの一人と結婚していました。彼女は、彼女の時代としては最も美しい人の一人でした。その彫像のような美しさから、夫は霊感を引き出し、『パンチ』の絵において何度も繰り返し彼女を不朽のものにしたのです。彼女は豊かできれいな黒髪の持ち主で、当時、よく黄色いリボンを髪の中に巻いて魅惑的な効果を出していました。デュ・モリエイ夫人が座って縫い物をし、子供たちが押さえつけられることなく床で遊んでいる間、デュ・モリエイが絵を描いているのを見ることは、私にとって常に変わらぬ喜びでした」

キッキーの優美な線画は『パンチ』内ですぐに最もよく知られたページになり、彼はほかの人気のある大衆向け刊行物にも寄稿し――『ワンス・ア・ウィーク』や『コーンヒル』のような――、さらには、当時の人気作家たちから、特にギャスケル夫人の

作品の挿絵画家として、引く手あまたになった。デュ・モリエイ一家はあらゆる場所に行き、ロンドンの芸術的・社会的に重要なすべての人物と会った。フレデリック・レイトン、ミレー、ウィリアム・モリス、バーン＝ジョーンズ、ホイッスラー。（キッキーは、もともとパリの芸術を学ぶ学生時代のホイッスラーを知っており、ロンドンでの初期の日々には彼とアトリエをシェアしていた）

一八七四年、キッキーはハムステッドのニュー・グローヴ・ハウスを長期契約で借り、そこは続く二十年間にわたって彼の家となり、彼と、成長期の五人の子供たちに大いに愛された。彼は友人たちによく言っていた。ハムステッド・ヒースはパッシーと自分の子供時代を思い出させると、またその木々はブローニュの森の木々と同じように密集して生えていると、さらにレグ・オ・マトンの池は小さい頃にオタマジャクシを釣ったオートゥイユの池と同じ形であると。彼は、子供たちや巨大なセントバーナード犬チャンを連れ、荒れ地を長時間散策し、その後アトリエに戻って彼らにモデルとしてポーズを取らせたが、子供たちはいつでもかなり快くモデルを務めてくれた。夏季休暇はウィットビーか、海峡を渡ってディエップで過ごされ、その小旅行の結果はすぐに『パンチ』のページで見られることになった。常に妻に付き添われる、充実した、非常に幸福な生活で、唯一の不安は右目の視力を失うのではないかということ

だけだった。もしそうなったら、家族をどう養えばいいのか？　盲人に何ができるのだろう？

キッキーは、時々文字での執筆を試みていたが、真剣なものではなかった。たまに走り書きをしたが、それは自分で楽しむためのもので、たいていは昔のパリでの日々についての断片であった。当時の彼にはこんなことが頭に浮かんでいた――自分は五十六歳で、長男は軍隊に入り、二人の娘は結婚した――自分の思い出から物語を編み上げ、挿絵を入れることができるのではないか――ひょっとしたら――それを出版したいと思うような気前のいい出版社があるかもしれない。彼は練習帳を見つけて考えを書き留め始めた。物語のためのアイディアは絶えず心に浮かんでいたが、いざそれを実際に紙の上に書きつけてみると、彼にはそれが簡単なものに、ほとんど簡単すぎるもののように思われた。実際、後に誰かがそれを表現したように、彼は危険なほどすらすらと書いた。言葉が彼のペンから溢れ出たのだ。

ニュー・グローヴ・ハウスのアトリエの机に向かい、足元にはチャンがいて、妻のエマ（ペム）が向かいの椅子で縫い物をし、末娘のメイがピアノを弾いている。まるで突然ポンプ通りの家にまた戻ってきたかのようだった。生きている父母。母の、悲しげでとても美しい姉妹メアリーが彼らを訪ねてやって来る。小さな男の子の手を引

いて。そして彼らは、全員で森に散歩に行くことを表明し、彼、キッキーは、小さないとこと一緒に前を走る。奇妙だった――目を閉じさえすれば、その人々の姿は、ペムやメイと同じくらい生き生きとした現実味を帯びるのだ。彼はパッシーの懐かしい香りを嗅ぐことができ、ずっと前に死んだ人々の声を聞くことができ、古くからの理想や笑い声や涙を魔法のように呼び出すことができた。彼は、忘れられていた子供時代の華やかさを思い出し、それは新たな花を付けてもう一度彼の前に生き生きと甦った。ややロの悪い母親は、実際の彼女が持ち合わせなかったような優しい光で輝き、少年時代のありとあらゆる人々の姿が理想化され、深く愛せるようになった。自分自身の影、少年キッキーさえ、ゴーゴーと改名され、立派なひげを生やした広い肩の若い巨人へと成長した。友人のトム・アームストロングは、カルチェ・ラタンでの昔の学生時代の彼を「青白く、ほとんど血色が悪く、小さな口ひげ以外、顔には毛がなかった」と描写したが、その小さくて痩せた芸術家は、より大きな実体を持った夢の英雄へと成長したのである。

こうして小説『ピーター・イベットスン』が誕生し、fin de siècle［世紀末］ヴィクトリア時代のイギリスの人々に、また大西洋を越え、ロマンティックなヤンキーたちに、大いに愛されることになる。詩人のジョン・メイスフィールドがこう言ったように。「そ

の世代への影響は甚大だった……これほど驚かされ、探究心を楽しませてくれた本を、私はほかに考えることができない」

着想は独特で、物語はもちろん架空のものだった。挑発されておじを殺したことにより終身刑に服している若くて穏やかな主人公兼語り手は、キッキーの想像の産物であった。しかし、その囚人とタワーズ公爵夫人との夢の邂逅（かいこう）、彼らの過去や未来への放浪――そこには、中年芸術家自身の無意識の思慕があった。幸福で満足のいく外面的生活にもかかわらず、彼の中には、まず幼い頃に断ち切られ、次に青年時代に再び結ばれたが、最後には永遠に離れてしまったフランスとの縁、そのような縁を持つ国外移住者としての激しい郷愁が、いっぱいに詰まっていたのである。書きながら、自分の隠された思慕の念だけでなく、どちらの国にも定住せず、パリ・ロンドン間の放浪者であった不運な亡父のフラストレーションや、外国の首都で実刑判決に服したémigré［移民］の祖父の苦悩をも、自分の前の紙の上にこぼし散らしていたことに、彼は気づいていなかった。より美しく知的になったエマである、ロマンティックに描かれたタワーズ公爵夫人さえ、ピーター・イベットスンの子供時代の遊び仲間かつ血縁者へと変換される必要があり、そうすることで、作家キッキーの、かなり何度も思いを馳（は）せ、ほんのわずかしか知らなかったフランスの親類縁者たちへの心からの強い

憧憬は、やっとのことで満たされたのであった。

「私の作風を認めてくださって、うれしく思います」キッキーはトム・アームストロングに語った。「苦労はしました、もちろん――極めて楽しい苦労でしたが――そして、今の私は、もっと苦労すればよかったと思っています。すべてがあまりにも易々と実現され、私は文字で書くよりも絵で描く方がはるかに難しいことに気づきました！これがイギリス国民に受け入れられるかどうかは別の問題です。私としては、『パンチ』の線画家である哀れな人間が、新しい進路（ライン）でどのように振る舞うかを見たいという人々の好奇心に、大いに期待したいところです！」

イギリスとアメリカの大衆は、受け入れたのみならずさらなるものを求め、数か月後、キッキーは第二の小説『トリルビー』に熱心に取り組んだ。その人気たるや、作者は一夜にして有名人になった自分に気がついたといったほどのものであった。『トリルビー』は現代的な「ベストセラー」の最初のものであり、センセーショナルな文学的事件であったが、キッキーは内心では、最初に生まれた『ピーター・イベットスン』の方が良い作品だと感じていた。

今日、『ピーター・イベットスン』に初めて出会った無頓着な読者は、囚人とメアリーすなわちタワーズ公爵夫人との異様なラヴ・ストーリーを、感傷的で、馬鹿馬鹿しい

とさえ思うかもしれない。男と女が、夢の中で逢うだけでどうすれば満足できるというのか？　ピーター自身はほとんど愚かしいまでの「ロマンティスト」に、公爵夫人はまずあり得そうにないほど利他的な「善人」になってやしないか？　だがおそらく、作者は理想主義者だったのであり、人生を、自分が知っていたとおりに書いたのではなく、そうなればよかったと思うことを書いたのであろう。現代の読者が「本当の夢見」を嘲笑する必要もない。本人は知らなかったにしても、キッキーは時代を先取りしていたのだ。一八九二年当時は、催眠術はまだ曖昧な用語であったし、テレパシーは未知の言葉だった。今日の訓練を受けた心理学者なら、『ピーター・イベットスン』を単なるファンタジーとして片づけたりはしないだろう。

キッキーの三番目で最後の小説『火星人』は、その主人公とともに、未知への探求にもう一段階踏み込んでいる。彼は、――作者はうっすらとバーティ・ジョスランに姿を変えている――火星から来た霊によって幼年期から保護され、導かれている。しかし、キッキー自身は、この本が出版されるのを生きて目にすることはなかった。

彼は、疲労させられる咳と心臓下部の痛みで、数か月間健康が衰えた状態が続いた後、一八九六年十月八日、六十二歳で亡くなった。墓碑銘として、ハムステッドの彼の墓には彼がかつて書いた『トリルビー』からの次の二行

我らが死ぬとき、播いた種を刈り取る望みが
わずかにある――だから、さようなら

――があるにもかかわらず、私は彼の孫娘として、『ピーター・イベットスン』の終わりの方の言葉から文を付け加えたいと思う。同じ思考の模倣である。

「私が知っているのはこれだけだ。すべてのことが私たち全員にとって良くなるだろう、そして、月が欲しくてため息をつくような人でなければ、十分満足するだろう」

ダフニ・デュ・モリエイ

コーンウォールのパーにあるメナビリー邸にて